

# 古チベット語占い文書の研究 : 銅銭・鴉鳴・骰子 占卜文書の比較研究を中心に

著者	西田 愛
学位名	博士(文学)
学位記番号	甲第32号
学位授与年月日	2012-08-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000748/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000748/</a>



# 古チベット語占い文書の研究

- 銅銭・<sup>あめい</sup>鴉鳴・<sup>さいころ</sup>骰子占卜文書の比較研究を中心に -

西田 愛

平成24年度（2012年）





## 謝辞

本研究の遂行にあたっては、指導教授である武内紹人教授から多くの資料の提供いただき、終始適切な助言を賜りました。筆者が本研究を継続し、学位論文にまとめることができたのも、偏に武内教授の熱心なご指導のおかげであると思います。ここに心からの感謝の意を表します。また、今枝由郎教授には、古代チベット語文書の読解や考察の方法など、多岐にわたるご指導を賜り、多くの貴重な資料も頂きました。ここに深謝致します。

さらに、チベット語文献や先行研究に関して、惜しめない助言と協力を下さった岩尾一史氏には深く感謝しております。古チベット語研究会のメンバーである坂尻彰宏氏、赤木嵩敏氏、旗手瞳氏にも研究資料の蒐集や、研究方法について多くのご支援を賜りました。本当にありがとうございました。また、神戸市外国語大学の太田斎教授、林範彦准教授からもご教授いただきました。ここに深謝致します。

そして、本研究は、小林節太郎基金 (Fuji Xerox)、日本学術振興会 育志賞に助成頂いたおかげで、今日まで継続することができました。本当にありがとうございました。

最後に、終始温かく見守り応援してくださった友人や家族に対して、心からの感謝の意を表して謝辞と致します。



## 目次

はじめに	1
第1章：銅銭占ト	9
第1節：古チベット語銅銭占ト文書読解	
1.1 概観と先行研究	10
1.2. 文書概説	11
1.3. ITJ 742 翻字テキストと試訳	15
1.4. 内容構成	31
第2節：漢語文書との比較研究	
2.1. 文書概説	40
2.2. 漢語銅銭占ト文書の内容と構成	44
まとめ	47
【付録 流通本対照翻字テキスト】	49
【図版】	
ITJ 741_2	69
ITJ 742	72
ITJ 744	74
P.t.1055	75
P.t.1056	77
Or.8210/S.813	78
Or.8210/S.1468	80
Or.8210/S.3724 + S.11415	81
Or.8210/S.3724	82
Or.8210/S.5686	85

第2章：鴉鳴占ト	86
第1節：古チベット語鴉鳴占ト文書読解	
1.1. 概観と先行研究	89
1.2. 文書概説	90
1.3. ITJ 747 翻字テキストと試訳	93
1.4. 内容構成	106
第2節：他言語文書との比較研究	
2.1. 先行研究	111
2.2. 漢語鴉鳴占ト文書の内容と構成	113
2.3. チベット語文書と漢語文書の関係からみる一覧表の起源	119
2.4. Kākajariti 翻字テキストと試訳	123
2.5. Kākajariti の内容と構成	140
まとめ	142
【付録 古チベット語・漢語鴉鳴占ト書対照翻字テキスト】	144
【図版】	
ITJ 746	179
ITJ 747	180
Pt.1045	181
Pt.1048	182
Pt.1049	183
P.c.3896_verso	184
P.c.3479	185
P.c.3888	186
P.c.3988	187
Dx.6133	188

第3章：骰子占ト	189
第1節：古チベット語骰子占ト文書読解	
1.1. 概観と先行研究	191
1.2. 文書概説	192
1.3. Pt.1046B・ITJ 740 翻字テキストと試訳	207
1.4. 内容構成	221
1.5. 古代チベットにおける骰子占トの性格	243
第2節：他言語文書との比較研究	248
まとめ	255
【付録 Pt.1047、Pt.1046B + ITJ 740名称表】	256
【付録 骰子占ト文書吉凶対照表】	257
【図版】	
ITJ 738	259
ITJ 739	260
ITJ 743	261
ITJ 745	262
Or.8210/S.155	263
Or.15000/67, Or.15000/76	264
Pt.1043	265
Pt.1051	269
Pt.1052	272
Tu 8 + Tu 12, Tu 11, Tu 55	279
Tu 56	280
SI O 145, SI P 56a	281
Otani 6004, 羽田	282
Bower Manuscript_IV, Bower Manuscript_V	285
Or.8212/166 (irq bitiq)	286
Or.8210/S.5614	287

おわりに	288
略号	291
参考文献	293
【巻末付録】 ブータン王国における骰子占ト文書 翻字テキスト	304
Khyi med lha khang	305
Lcang sgang kha lha khang	312
Sri mo rdo kha rdzong	315
Dbang ‘dus pho brang rdzong (text 1)	317
Dbang ‘dus pho brang rdzong (text 2)	319

【本文】





## はじめに

20世紀初頭に敦煌石窟をはじめとしたシルクロードの各地から数万点に及ぶ古文書が発見された。これらは、漢語、サンスクリット語、チベット語、古代トルコ語などの様々な言語で記されており、アジア学にとって20世紀最大の発見と言える。この内、1万点近くにのぼる古チベット語文書（8-10世紀）には、大多数を占める仏教文献以外に、手紙・契約・裁判・法律・医学・占い・寺院会計といった、当時の社会状況を反映する世俗文書が多数含まれている。仏教文献の大部分がサンスクリット語からの翻訳であるのに対して、これらの世俗文書はごく一部を除いてチベット語本来の著作であり、古代チベットに関する歴史資料としても言語学資料としても高い価値を持つ。

その中で、筆者の研究対象である古い文献は、骨、さいころ 骰子（骰子）、銅銭、からす（烏）の声、夢、星、日時による占いなど、方法・記述内容ともに多種多様である。ゆえに、当時の社会状況や民間信仰を知る上で、有益な研究対象のひとつであると言える。これらの占ト文書は、J. Bacot、B. Laufer、R.A. Stein、A. Macdonald、A.H. Francke、F.W. Thomas、山口瑞鳳、王堯といった名だたる先達の研究対象となってきた。その中でも、BacotとLauferの研究は、古チベット語占ト文書に対する先駆的な研究であり、これらによって古代チベット研究に対する新境地が開かれたと言えるだろう。また、Franckeは、乏しい資料状況にあったにもかかわらず、骰子占ト文書に対する多くの新発見をもたらした。彼の論考中に言及されている資料や見解を、現代の資料状況下で改めて検討する価値は十分にあると言えるだろう。つづくThomasの研究では、複数の古チベット語占ト書に対する豊富な情報が提示され、その後の研究の礎となっている。また、Macdonaldの革新的な見地からなされた研究は、古代社会における占いの重要性を示すものであり、彼女の所論を再検討することは、占トの諸相解明に寄与するものであると期待できる。これらの先行研究によって、古チベット語占ト文書の大凡を概観することができると言えるだろう。さらに、今年に入って、これまでに中国で発表された占ト文書研究を集成した論文集が出版された<sup>1</sup>。中国国内で発表された研究論文を基に、12点の占ト文書

---

<sup>1</sup> 鄭・黄 2011。

に関する翻字テキストと中国語訳を収録しており、古チベット語占ト文書を総覧するのに有益な一冊であると言える。

しかしながら、いずれの研究も、ある特定の占ト法に関する1点あるいは数点の文書を翻訳するという研究に留まっており、同一占法を記述した占ト文書を横断的に検証し、相互関係や全体像を解明しようという研究はなされていない。一方で、古チベット語文書には手紙や契約といったジャンルにより、それぞれに特有の書式やフレーズが厳格に規定されていたことが判明してきている。その上、同ジャンルに属する文書を内容と書式的特徴に基づいて分類することにより、各文書のもつ機能を解明することができるだけでなく、文書の作成された社会背景や言語環境を見いだすことも可能であることが証明されている。従って、古チベット語占ト文書のもつ役割や、成立背景を明らかにしようという筆者の研究においても、内容と書式的特徴に基づく分類は必須であると言える。

ところで、これらの古文書が将来されてから100年以上が経過し、研究環境も大きく変化している。第一に、大英図書館のInternational Dunhuang Projectとフランス国立図書館の協力体制のもと、古文書のデジタルイメージがウェブサイト上で確認できるようになってきた (<http://idp.bl.uk/>、以降IDPと呼ぶ)。これにより、未発表の文書にもアクセスが可能になった。また、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が中心となって進めているOld Tibetan Documents Onlineプロジェクトの成果により、古チベット語文書の翻字テキストがオンラインデータベースとして蓄積されつつある。これを公開するサイト (<http://otdo.aa.tufs.ac.jp/>) では、語彙検索が可能であり、辞書には記載の無い古チベット語の語彙やフレーズの出現状況を、複数の文書において検証できるようになった。

このような環境の変化と上記の研究動向をふまえて、本論文では、同一占法に基づく文書の記述内容をできる限り照査し、各々のプロトタイプとなる書式を解明することを第一の課題とする。それにより、難解な語彙や表現の理解が可能となるほか、古チベット語占ト文書に特有の語彙や言い回しが同定できる。この成果は、古チベット語で書かれた他ジャンルの文書内容を解読する際にも役立つことは間違いない。また、占ト文書に発現する多数の神格や悪鬼、不吉を払う対処法などの描写からは、当時の社会に浸透していた民間信仰の一端について新たな知見を得ることが期待できる。さらに、本論文で取りあげる占ト文書には、同種の占法を収録

した他言語文書が存在する。これらとの対照を通じて、各文書の成立背景や、社会状況などを考察することも本論文の目的の一つである。そこで、以下の各章では、占ト文書中においてそれぞれに一団を形成する銅銭占い（第1章）、鳥の声による占い（第2章）、骰子占い（第3章）について、(1)全文書の概説、(2)翻字テキストと翻訳の提示、(3)書式の解明、(4)他言語文書との比較、(5)文書の成立背景、という観点から、各々に属する文書の関係性をまとめる。最後に、内容や書式の相違点、共通点から古代チベットの社会状況を検証し、占いの全体像についての現段階の見解を述べることにする。また、各章の章末には、できる限りの文書図版を掲載した。これらは、イギリス大英図書館IDP（International Dunhuang Project）のウェブサイトより落手したものである。掲載許可を下さったSam Van Schaik博士に感謝の意を表したい。

なお、占いは現代のチベット社会でも一定の地位を保持し続けている。筆者は、文書には記されない占いの具体相を理解することを目的として、現代チベット文化圏における占トの実態調査を行ってきた。具体的には、ブータン王国の寺院が保有する骰子占ト文書の読解と比較研究に取り組んでいる。本論文には、巻末付録として3つの寺院に保存される文書の翻字テキストを収録する。

ここで、各論に入る前に、筆者がこれまでに原典調査ないしデジタルイメージ、カタログ、写真等で確認した古チベット語占卜文書の所蔵先<sup>2</sup>、文献番号<sup>3</sup>、出土地を一覧で示したい。古チベット語占卜文書の輪郭を把握できるよう、リストには、本論文では研究に至らなかった占卜法に関する文書も列挙した。また、文書の写真や翻字テキスト、翻訳、文献学的情報などが提示されたウェブサイト、カタログ、主な先行研究も併記するので、巻末の略号および参考文献を参照されたい。

---

<sup>2</sup> 各文書の所蔵機関は次の通りである。

ロンドン：大英図書館

パリ：フランス国立図書館

ベルリン：ベルリン国立図書館 東洋部

サンクトペテルブルク：ロシア科学アカデミー東方文献研究所サンクトペテルブルク支部

京都：龍谷大学

新疆：新疆ウイグル自治区博物館

なお、杏雨書屋に所蔵されると考えられる1点の骰子占卜文書（本論文では「羽田」と呼ぶ）について、筆者は京都大学所蔵の写真にて調査を行った。本文献には李盛鐸印が見えることから、京都大学教授・総長であった羽田亨氏による西域出土文献コレクション『敦煌秘笈』に属する文献である可能性が高い（李盛鐸氏による敦煌写本の収集活動や所蔵写本の真偽については【栄 1997】を、それらが羽田亨氏にわたった経緯については【高田 2007】を参照されたい。また、羽田氏の収集した西域出土文献写真に関しては張娜麗氏による詳細な論考が発表されている【張 2006】）。本論文ではこれを杏雨書屋所蔵の羽田文書であると仮定して、収録することにした。現在、同コレクションは、武田科学振興財団・杏雨書屋に所蔵されており、文献写真を掲載したカタログが順次出版されている。本文献も、カタログシリーズへの掲載が待たれるところである。

<sup>3</sup> 大英図書館所蔵スタイン蒐集敦煌出土チベット語文書コレクションには、IOL Tib J という所蔵番号が付されているが、本論文では「ITJ」で表す。同様に、フランス国立図書館所蔵ペリオ蒐集敦煌出土チベット語文書コレクションに属する文献は「Pt.」、同漢語文書コレクション中の文献は「Pc.」と略記する。また、サンクトペテルブルク所蔵文書の内、「SI O」はオルデンブルグが、「SI P」はペトロフスキーが将来したチベット語文書であることを示す。Or.8210、Or.8211 という所蔵番号が付されたものは、スタイン蒐集漢語文書コレクション中に属する文献である。

古チベット語占ト文書リスト

ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
銅銭	ロンドン	ITJ 741	<i>Poussin</i> , <i>AFL</i>	敦煌
		ITJ 742	<i>Poussin</i> , <i>AFL</i> , 【山口 1987】、 【陳 2007】、【Nishida 2011】、IDP	
		ITJ 744 (= P.t.1055)	<i>Poussin</i> , <i>AFL</i> , IDP	
		ITJ 1239		
	パリ	P.t.1055 (ITJ 744)	<i>IMT</i> 2, <i>Choix</i> 2, 【山口 1985】、 【山口 1987】、【王・陳 1987】、 IDP	敦煌
		P.t.1056	<i>IMT</i> 2, IDP	

ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
鴉鳴 (鳥の声)	ロンドン	ITJ 746	<i>Poussin</i> , IDP	敦煌
		ITJ 747	<i>Poussin</i> , IDP	
	パリ	P.t.1045	【Bacot 1913】、【Laufer 1914】、 <i>IMT</i> 2, <i>Choix</i> 2, 【山口 1985】、 【山口 1987】、【Morgan 1987】、 【王・陳 1987】、【陳楠 2007】、 【趙 2010】、IDP	
		P.t.1048	<i>IMT</i> 2, IDP	
		P.t.1049_recto	<i>IMT</i> 2, IDP	
		P.c.3896_verso	【黄 2001】、 <i>DSCM</i>	

ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
骰子	ロンドン	ITJ 738	<i>Poussin</i> , <i>AFL</i> , 【王・陳 1988】、 <i>IDP</i> , <i>OTDO</i>	敦煌
		ITJ 739	<i>Poussin</i> , <i>AFL</i> , <i>OTDO</i>	
		ITJ 740	<i>Poussin</i> , <i>AFL</i> , 【格桑 2005】、 <i>OTDO</i>	
		ITJ 743	<i>Poussin</i>	
		ITJ 745	<i>Poussin</i>	
		Or.8210/S.155	<i>Giles</i> , <i>Or.8210</i>	
		Or.15000/67	【Francke 1924】、 <i>OTM</i>	マザルターグ
		Or.15000/76	<i>OTM</i>	
	パリ	P.t.1043	<i>IMT 2</i> , <i>Choix 2</i> , <i>IDP</i>	敦煌
		P.t.1046B	<i>IMT 2</i> , <i>Choix 2</i> , 【王・陳 1987】、【陳 2011a】	
		P.t.1049_verso	<i>IMT 2</i> , <i>IDP</i>	
		P.t.1051	<i>IMT 2</i> , <i>Choix 2</i> , 【山口 1987】、【陳 2011b】、 <i>IDP</i>	
		P.t.1052	<i>IMT 2</i>	
	ベルリン	Tu 8	<i>BTT</i> , 【Francke 1928】	トルファン
		Tu 11	<i>BTT</i> , 【Francke 1924】	
		T u 12	<i>BTT</i> , 【Francke 1924】	
		Tu 55	<i>BTT</i> , 【Francke 1928】	
		Tu 56	<i>BTT</i> , 【Francke 1928】	
	サンクトペテルブルク	SI O 145		敦煌
		SI P 56a		
	京都（龍谷大学）	Otani 6004	【Takeuchi 1990b】	トルファン
	杏雨書屋	羽田		敦煌（？）

ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
日・星	ロンドン	ITJ 506 (Il.16-30)	<i>Poussin</i> 、IDP	敦煌
		ITJ 725	<i>Poussin</i> 、IDP	
		ITJ 748	<i>Poussin</i> 、 【Dalton and van Schaik 2006】	
		Or.8210/S.3991	<i>Giles</i>	
		Or.8210/S.6878	<i>Giles</i> 、IDP	
		Or.15000/302	OTM	ミーラーン
	パリ	P.t.39	<i>IMT</i> 1、 <i>Choix</i> 1、IDP	敦煌
		P.t.55 (Il.1-182)	<i>IMT</i> 1、 <i>Choix</i> 1、【格桑 1998】、 【黄 1998】、IDP	
		P.t.76	<i>IMT</i> 1、 <i>Choix</i> 1、IDP	
		P.t.127_recto (Il.1-77)	<i>IMT</i> 1、 <i>Choix</i> 1、【羅・劉 2006】、 【陳 2008】、【陳 2009】、IDP	
		P.t.127_verso (Il. 29-77)	<i>IMT</i> 1、 <i>Choix</i> 1、【陳 2011c】、IDP	
		P.t.1050	<i>IMT</i> 2、IDP	
		P.t.1054	<i>IMT</i> 2、IDP	

ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
夢	ロンドン	Or.8211/959+960	<i>OTM</i>	マザルターグ
	パリ	P.t.55 (Il.192-210)	<i>IMT</i> 、【Crescenzi・Torricelli 1995】、 <i>IDP</i>	敦煌

ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
骨	新疆	73 RMF 25:16	【王・陳1986】、『シルクロード』	ミーラーン
	ロンドン	ITN 137	TLTD 2、【王・陳1986】	
		ITN 161		
		ITN 189		
		ITN 225		
		ITN 744		



ジャンル	所蔵先	文献番号	カタログ・写真・テキスト	出土地
その他	ロンドン	ITN 210	TLTD 2、【王・陳1986】	ミーラーン
		ITN 255		
	パリ	P.t.351	IMT、【Uray 1983】、 【格桑 2011】、IDP	敦煌
		P.t.1047	IMT、【Macdonald 1971】、 <i>Choix</i> 2、 【山口 1985】、【山口 1987】、 【王・陳 1987】、IDP	

次章より、銅銭、烏（からす）の声、骰子（さいころ）という占法ごとに占ト文書を検証していく。なお、本論文で作成したチベット語翻字テキストはWylie方式（Wylie 1959）に拠ったが、下記のいくつかの記号と翻字規則を補足した。

[ ]	読みが不確定な箇所
[a (b)]	読みが不確定で、いくつかの候補がある箇所
[---]	判読不能で文字数も不明な箇所
[+3]	判読不能だがおよその文字数が判読できる箇所（数字は文字数）
< >	原文において削除されている箇所
{ }	筆者が、不要と判断して削除した箇所
<i>lac</i>	料紙の欠損により記述が失われている箇所
<i>om</i>	記述が省略あるいは脱落している箇所
I	逆向きの <i>gi-gu</i>
M	<i>anusvāra</i>
^a	ཨ་
@	文書中に小円で表された骰子の目、あるいは銅銭の表数

なお、和訳中の [ ] は筆者による補足箇所をしめす。

## 第1章：銅銭占ト<sup>4</sup>

古チベット語銅銭占ト文書は、大英図書館所蔵スタイン蒐集文書中に4点、フランス国立図書館所蔵ペリオ蒐集文書中に2点の計6点の存在が確認できる。しかし、後述するように、その内の2点については、内容や筆跡、文書の形状から、相互に接合できることが確認できた。従って、現在までに入手し得た古チベット語銅銭占ト文書の総数は5点となる。また、敦煌出土漢語文書中にも、これと類似した内容を持つ6点の文書が存在している。

そこで、第1節では、古チベット語銅銭占ト文書の概況を一覧で示す。次に、チベット語文書の各々について概説し、完本であるITJ 742については、翻字テキストと全訳を提示する。そこから得られた知見をもとに、古チベット語銅銭占ト文書の書式を解明する。また、全5文書の特徴を検証することで、これらの相互関係を明らかにしたい。

第2節では、5点の漢語銅銭占ト文書について情報を一覧で提示し、書式を検証する。これらと、チベット語文書との異同を照査することによって、古チベット語銅銭占ト文書の成立背景について考察する。

章末には、筆者が「流通本」と呼ぶ3点の古チベット語銅銭占ト文書を対照させた翻字テキストと、IDPウェブサイトの文書図版を添付する。

---

<sup>4</sup> 本章は、【Nishida 2011】に大幅な加筆・修正を加えて和訳したものである。

## 古チベット語銅銭占ト文書リスト

文書番号	形状	サイズ (cm)	テキスト	残存行数 (行)	背面
ITJ 741.1	卷子?	26 × 135	首尾欠	22	漢語經典 (『妙法蓮華經』卷三、 『藥草喻品』第五、『授記品』第六)
ITJ 741.2			首欠	56	
ITJ 742	卷子	27 × 95	完本	49	漢語經典 (『大般若波羅密多經卷』二百二、 『初分難信解品』第三十四之二十一)
ITJ 1239	断片	15.1 × 45.5	首尾欠	32 + 9	表面の続き
ITJ 744	卷子	14 × 48	首欠	29	なし
P.t.1055		14 × 137	首尾欠	94	
P.t.1056	卷子	14.5 × 30.5	首尾欠	24	なし

## 第1節：古チベット語銅銭占ト文書読解

### 1.1 概観と先行研究

古チベット語銅銭占ト文書は、12枚の銅銭を投げた時に現れる表の枚数によって卦辞を導き出す占法を記したものである。従って、完本であれば、1枚が表の場合から全てが裏の場合までの最大13通りの卦辞が順に並ぶことになる。しかし、大半の文書では、料紙の欠損により複数の卦辞を失っている。また、唯一の完本であるITJ742には、これらの卦辞に加えて、短い序文と奥書が発見できる。

さて、各文書の内容を吟味したところ、3点の文書(ITJ 741、P.t.1055+ITJ 744、P.t.1056)において記述内容に符合がみられた。しかし、ITJ 742とITJ 1239は、これらとは異なる内容を保持しているため<sup>5</sup>、古チベット語銅銭占ト文書は3系統に大別できることが分かった。また、これらは文書サイズからも2つのグループに峻別できる。つまり、14～15cm幅の細幅文書と、

<sup>5</sup> 後述するように、ITJ 1239は文書状態が非常に悪いので、卦辞の内容を他と対照させることができないが、他文書には見当たらない独自の記述が認められる。

26～27cm幅の太幅文書である。前者は敦煌出土チベット語文書中でもとりわけ細型の文書であるが、占ト文書として随時参照するために、持ち運びに便利な大きさに作成されたのかもしれない。ただし、後述するように文書幅の差異は記述内容には影響しないようである。

ところで、古チベット語銅銭占ト文書に関していち早く研究発表をおこなったのは、F.W. Thomasである。AFLでは、大英図書館所蔵の銅銭占ト文書4点を紹介し、ITJ 741.2とITJ 742、Pt.1055の部分訳を提示している<sup>6</sup>。他にも、いくつかの文書に対する翻訳が出版されている<sup>7</sup>。

## 1.2. 文書概説

### 【ITJ 741】

ITJ 741文書には、ITJ 741.1と741.2という2つの文書が帰属している<sup>8</sup>。残念ながらIDPには未だ写真が公開されておらず、筆者が2008年と2012年に大英図書館を訪れた際にも実見は叶わなかった。741.1に至っては、マイクロフィルムにも発見することができなかったために、現在までに内容を確認できていない。しかし、*Poussin*では、両者のサイズや残存行数が合算されて表記されていることから、両者の接合が確認できていたのかもしれない。AFLでも、ITJ 741.1は、“Perhaps first part of 80 IV g”とされていることから、これを741.2に先行する記述を留めた文書であると考えてもよいだろう<sup>9</sup>。さて、741.2について、写真にて調査を行ったところ、銅銭3

---

<sup>6</sup> AFL pp.150-152.

<sup>7</sup> たとえば、Pt.1055は王・陳によって、ITJ 742は陳によって翻字テキストと中国語訳が発表されているし（王・陳 1988, 134-148頁、陳 2007）、Pt.1055とITJ 742に対しては部分和訳がある（山口 1987, 174-175頁）。また、ITJ 742中のいくつかの語彙についても研究がなされている（Macdonald 1971 pp.282-283、*Choix 2* note pp.12-15、Stein 1992）。

<sup>8</sup> *Poussin*によれば、以前の所蔵番号はCh.80.IVとCh.80.IV.gである。

<sup>9</sup> AFL, p.150.

枚が表の場合を記した卦辞の途中から、全てが裏の場合<sup>10</sup>までの11通りの卦辞が記されている。巻末の余白からは、奥書が存在しないことも確認できる。従って、先行すると考えられる741.1には、銅銭の表が1枚の場合から表3枚の前半部が記されていることになる。741.2の行数に鑑みれば、3つの卦辞に22行を要するとは考え難く、序文が存在したと推測できる。また、全ての卦辞の始まりには、銅銭の表の枚数を示した円が見出しとして描かれている。

<sup>10</sup> ITJ 741.2文書中には、「全てが裏ならば」(*dong tse ril bub na*)という見出しが見当たらないが、51行目の *srog 'phya la btab* 以降は、ITJ 744文書の全てが裏の卦辞に対する記述(17行目～)と一致する。したがってITJ 741.2の51行目以降は、全てが裏の場合の卦辞を記したものであると理解できる。そうすると、ITJ 741.2の *srog 'phya la btab* と、それに先行する *srid 'phya la btab bzang //* の間に数行が脱落していることになる。換言すれば、ITJ 741.2の51行目では、12枚が表の場合の卦辞の後半一部と、全てが裏の場合の卦辞前半一部が脱落している。ITJ 744の当該箇所(12行目～17行目)を対照すれば、下記の太枠中の卦辞がITJ 741.2では抜け落ちていていると考えられる。

ITJ 741.2	ITJ 744
<p><i>dong tse bcu gnyis gan te</i>  <i>the 'u ngo kong gin go byung ste //</i>  <i>khyim 'phya dang /</i>  <i>srog pya la btab na bzang bar //</i>  <i>grog 'phya la btab na grog che //</i>  <i>gnyen 'phyal btab na bkra shis ba'i ngo //</i>  <i>dgra pya la btab na gra myed //</i>  <i>pho srid 'bya pa la btab na / nye zho myi 'byung //</i>  <i>khang khyim byas // gdon myi ldang ngo /</i>  <i>ngo phral dang la gsol ba na [nang ngo ] thod //</i>  <i>srid 'phya la btab bzang //</i></p>	<p><i>\$ // dong tse bcu gnyis ril gan na</i>  <i>the'u kong gi ngo byung ste //</i>  <i>khyim pya dang</i>  <i>srog pya la btab na bzang rab //</i>  <i>grog pya la btab na grog che //</i>  <i>gnyen byas na bkra shis ba'i ngo //</i>  <i>dgra pya la btab na dgra myed //</i>  <i>'pho skyas byas na nyes pa myi 'byung //</i>  <i>khang khyim byas na gdon myi ldang //</i>  <i>ngo 'phral dang las gsolna thob //</i>  <i>srid pya la btab na</i></p>
<p>脱落</p>	<p><i>nad pa la btab na sos pa'i ngo //</i>  <i>mo 'di ci la btab kyang bzang rab bo</i>  <i>/:/ dong tse ril bub na //</i>  <i>srin zha mo 'i sgo //</i>  <i>lha thams cad gyis zhabs kyis</i>  <i>mnan ba'i ngo byung ste //</i>  <i>khyim pya dang srid pya la btab na</i>  <i>bzang rab //</i></p>
<p><i>srog 'phya la btab / myi shI //</i>  <i>shagsyed na bdag rgyal ba'i ngo //</i>  <i>gnyen phyas na 'phrod //</i>  <i>'dron po la btab na re shi 'myi 'ong //</i>  (以下省略)</p>	<p><i>srog pya la btab na myi shi //</i>  <i>shags bkye na bdag rgyal ba'i ngo //</i>  <i>gnyen byas na 'phrod //</i>  <i>'don po la btab na re shig myi 'ong //</i>  (以下省略)</p>

## 【ITJ 742】

本文書は、46cm、46cm、3cmの3枚の料紙を接いだ卷子本である。古チベット語銅銭占卜文書の中で、唯一の完本であり、卦辞の記述以外に5行の序文と2行の奥書が記されている点でも独自性を有している。また、各卦辞に与えられた名称や、記述内容も他とは符合しない。27行目の冒頭部余白には、おそらく本文とは関係のない*dar ma*という注意書きが挿入され、そこから書写人が変わっている。つまり、ITJ 742の作成には少なくとも2人以上の人物が携わっていたことがわかる。記述内容に関しては、以下の4項で詳しく考察することにする。

## 【Pt.1055 + ITJ 744】

ITJ 744文書は28cm、20cmという2枚の料紙からなり、Pt.1055は5cm + 39cm + 79cm + 14cmの4枚の料紙が接がれた卷子本である。実見調査から得た情報と記述内容を検証した結果から、ITJ 744とPt.1055は同一写本の異断片であり、相互に接合できることが分かった。まず、両文書は細型文書タイプに属しており、両者の筆跡は酷似している。そして、記述内容は、Pt.1055の末尾からITJ 744の冒頭へと続いていることが他文書との照合によって同定できる。Pt.1055は銅銭11枚が表の卦辞を記した途中で文書が切れている。その末尾の記述は‘ong ngam myi ‘ong ba la btab na myi ‘ong // grog pya la btab na（現れるか現れないかについて占えば、現れない。友人運について占えば、）である。ITJ 744の冒頭はgrog myed // dgra pya la btab na dgra dang phrad pa’i ngo //（友人はいない。戦運について占えば、敵と出会う相。）で始まる。この3行下からは、12枚が表の卦辞が始まることが認められるので、ITJ 744の冒頭3行は、表11枚の卦辞を記した後半部であることがわかる。Pt.1055の末尾とITJ 744の冒頭部を結合すれば、grog pya la btab na grog myed（友人運について占えば、友人はいない。）と読める。ITJ 741.2の表11枚の対応箇所（46-47行目）を参照すれば、‘ong ngam myi ‘ong ba la btab na / myi ‘ong ngo // grog ‘phyi la btab na grog ‘myed // dgra ‘phyi la btab na dgra dang phrad pha’i ngo //（現れるか現れないかについて占えば、現れない。友人運について占えば、友人はいない。戦運について占えば、敵と出会う相。）とあり、前後の記述ともに一致する。以上より、両文書は接合できると判断し、本論文では接合の順に従って、Pt.1055 + ITJ 744と呼ぶことにする。結果として、本書は、表3枚の卦辞半ばから全てが裏の卦辞までの11通りを保存していることになる。

本文書は、細型タイプに属する文書である。表面には、銅銭占トに関する32行の記述があり、背面にも9行の記述が認められるが、料紙の状態が悪く、内容を確定できる箇所は少ない。筆跡からは、両面が同一人物によって書されたことが想定できる。表面は、7行目と13行目、23行目は朱書きされていたため、現在では退色してほとんどの文字が消失している。しかし、23行目にみえる記述が、*gsum [---] // dgu [bas?] bub na' //*（3枚が・・・9枚が裏ならば）であると、かろうじて判読できた。従って、朱書きされている行には、銅銭の枚数を記した見出しが存在していたと考えられる。改めて、13行目を見直してみると、*bcu*「10枚」という単語が読み取れたので、これらはやはり見出し箇所にあたるだろう。また、1行目～6行目は、銅銭占トの序文を記した箇所であると考えられる。

同様に、背面の9行の記述についても検証してみたところ、1～5行目には表面の序文と同じ語彙やフレーズを複数確認できた。6行目には、*gcig*「一枚」や*gnas pa'i khang khyim la*「住まいについて」という語が見えるので、6～9行目には、表1枚の場合の卦辞が記されていると思われる<sup>12</sup>。従って、文書の記述内容は以下のように整理できる。

#### 表面

- II.1～6： 序文
- II.7～12： 卦辞（表1枚、裏11枚）
- II.13～22： 卦辞（表2枚、裏10枚）
- II.23～32： 卦辞（表3枚、裏9枚）

#### 背面

- II.1～5： 序文
- II.6～9： 卦辞（表1枚、裏11枚）

<sup>11</sup> ITJ 1239文書は、今枝由郎先生がその存在をご教示下さった文献である。これは、カタログや先行研究では言及されていないが、古チベット語銅銭占ト文書の全体像を把握する上で、重要な資料であると考えられる。ここに、改めて今枝先生への感謝の意を表したい。

<sup>12</sup> 表面の銅銭1枚の卦辞を記した箇所（1.8）にも *[---] 'i khang khyim la [---] na bzang*「住まいについて・・・ば、良い」というパラレルな文章が発見できる。

ところで、ここに収録されている序文は、明らかにITJ 742の序文とは異なる記述である。内容と特徴については、1.4項で紹介したい。なお、本書に収録される卦辞については、ほとんど内容を抽出できないので、以降の検証対象からは除外することにする。

#### 【Pt.1056】

Pt.1056は、9.7cm、20.8cmの2枚の料紙からなる卷子本で、細型タイプに属する文書である。卦辞内容は、ITJ 741.2、Pt.1055 + ITJ 744とほぼ一致するが、本文書では、いくつかの記述が脱落している。また、ITJ 741.2と同様に、各卦辞の冒頭には表の枚数を示す円が描かれており、表3枚の半ばから表7枚の冒頭までが残存している。本書は、小さな文字で記されており、薄い料紙が使用されている。また、銅銭を指す*dong tse*が*dotse*、*myur du*（すぐに）が*nyur du*と記されるなどの特徴もみられる。

### 1.3. ITJ 742 翻字テキストと試訳

以下に、完本であるITJ 742の翻字テキストと試訳を提示する。閲覧の便宜をはかって、序文、本文、奥書に峻別して記したい。なお、テキスト中の改行は筆者によるものであり、文書中の行数は（ ）に示す。



【序文】

(1) [flower shape] / [flower shape] / gnam dang po kong tshe 'phrul kyI bu //  
gtsug lag dang / gtsug lag mang po zhig mdor (2) bstus ste / gtan la phab ba /  
'phrul kyI rgyal po li bsam blang gIs chib gong nas thugs ring nas  
mo 'di (3) gtan la phab pa lags so /  
mo 'di phugs brtan la 'phral rno /  
mo 'di 'debs pa'i yo byad la /  
spos <sup>13</sup> (4) gIs nI mchod / g.yu mchod 'phrugs gcIg dang / mda' bya drgod ma cIg dang /  
rme'u bre gang dang / (5) dpags bu dkar thod gcig myed de myi rung /  
mo cha tshang na rab du rno 'o / [flower shape] /

【本文】

(6) \$ // dong tshe gcIg gan na /  
nyI ma khud par shar pa'I ngo ste /  
khyIm phyang dang srId phyar btab na bzang /  
(7) bor rlag byung na rnyed /  
nad pa la btab na sos /  
'dron po la btab na nye bar 'ong /  
mo 'di ci la btab (8) kyang rab bo /  
  
\$ // don tshe gnyIs gan na /  
myI'i ngo la bab ste /  
khyIm bdag gza' bran nang (9) mthun te / lus la gdon myed /  
khyIm phyang dang srog phyar btab na bzang /  
skyes bu ngo mtho /  
grog che /  
(10) khang khIm brtan por gzugs /  
nad pa gso na nye bar sos /  
gnam pa 'I ngo zhes bya /  
snang gsal cIg gIs (11) cIg bsus te /

---

<sup>13</sup> Nishida 2011では、*smos*と書写していたが*spos*の誤りであったので、ここに改めたい。従って、訳も「香を献上する」と訂正した。

mo 'dI la btab kyang rab bo / [flower shape] / [flower shape] /

(12) \$ // dong tshe gsum gan na /

sa dang lcags kyI ngo la bab ste /

khyIm phyas dang srog phyar btab na bzang /

(13) nad pa la btab na yul gdon dang / drI mo 'I ngo yod de gnod /

cho ga byas na bzang ngo / ma byas na ngan /

nyon tsong dang / (14) don gnyer na bzang /

'dron po la btab na myI bzang / myI 'ong // [flower shape] //

(15) \$ // dong tshe bzhI gan na /

gnam gru bzhI pa sde brgyad gI ngo la bab ste /

khyIm phyas dang srog phyar (16) btab na bzang /

gdon phyar btab na zas ngan dang slo thab dang mkhon las byung ste

yul don dang // drI mor (17) bsdongs ste gnod /

nad pa la btab na nad gzhi che / cho ga bya bar bzang /

dgra phyar btab na dgra ngo mtho /

gnyen (18) byed pa dang khang khyIm byed pa dang / [dur?] chad byed par btab na bzang ngo /

[two flower shapes] /

(19) \$ / [flower shape] / dong tshes lnga gan na /

bshum ba'I ngo la bab ste /

khyIm gnyIs gcig du 'dus pa'I ngo la bab ste /

(20) lho ba bkres la zis gi sri langste /

khyIm phyas srog phyar btab na ngan /

lha nI sngangs myI ni skrag pa'I ngo ste /

(21) dgra sdang ba nI phrad /

gnyen byams pa dang nI snol /

gdon phyar btab na / phung srIn dang btsan drI dmar po dang / (22) rta shu bo zhon ba[r?] gcIg gnod /

nad pa la btab na glud btang na rung /

mo 'dI ci la btab kyang ngan no / [flower shape] /

(23) \$ // dong tshe drug gan na /

chu dang gser gI ngo la bab ste /

khyIm phyas srId phyas srog phyar btab na bzang /

(24) dgra phyar btab na dgra myed /  
 btson du bzung na thar /  
 yus brtsod / na thob /  
 gyod rmas na 'byang /  
 nad (25) pa gsos na so /  
 dog gnyer na grub /  
 gnam la skar ma smyIn drug gI ngo ste / skar ma mang pos bskor (26) ba'I ngo /  
 mo 'di ci la btab kyang rab bo / [flower shape] / [flower shape] / [flower shape] /

(27) \$ / / / <sup>14</sup> dong tshe bdun gan na //  
 mye dang sa 'i ngo la bab ste //  
 gshin ba kren dang // pa dur langs (28) pa'i ngo la bab ste //  
 khyim gnyis cig du sus pa'I ngo la bab ste //  
 khyim phyas dang srog phyar btab (29) na ngan // //  
 nang myi mthun khal lce mang //  
 skyes bu snying tsher ba'i ngo //  
 dgra phyar btab na dgra' (30) ngo mtho // myi kha za' //  
 gnod dam myi gnod pa la btab na gnod do //  
 mo 'di ci la btab kyang (31) ngan // [flower shape] //

dong tshe brgyad gan na //  
 chu dang shing skyes pa'i ngo la bab ste //  
 ci la btab kyang bzang //  
 (32) gnam myi g.yo pa myi ldag //  
 phyi dal ched por bca'd //  
 'dron po myi 'ongs //  
 gsol ba (33) myi gnang //  
 stor ba myi snyed //  
 gzhan ci la btab kyang bzang //

(34) [flower shape] // dong tshe dgu gan na //  
 rgyal po 'i ngo la bab ste //

---

<sup>14</sup> ここに *dar ma* という語彙が挿入されているが、明らかに本文の一部ではない。27行目以下では、筆跡がそれまでとは異なり、*gcig shad* に代わって *gnyis shad* が使用されるようになったことを考えると、27行目からを担当した書写人の名前を記したものかもしれない。

dga' ba'I rtam snyan pa ni thos //

(35) bsam pa'i don ni grub //

'dod pa'i nor ni snyed //

mo 'di ci la btab kyang bzang ngo //

(36) [flower shape] // dong tshe bcu gan na //

nyis zla 'phrug dus cig du shar pa'i ngo //

rgyal po gser gyi (37) khra'u thog na bzhugs ste //

kun la lung snyan pa 'bogs pa'i ngo pa //

nad pa gso' (38) na sos //

don nyer na 'grub //

bor glag byung ba la btab na snyed //

'dron po la btab na (39) grog che //

mo 'di ci la btab kyang bzang ngo // //

(40) [flower shape] // dong tshe bcu cig gan na myi 'i ngo la bab ste // //

da // kong rtse myi dgyes ste //

(41) ci bya 'o chog myi 'grubs //

khyim phyas dang srog phyar btab na ngan //

mkhon dang ngon (42) gzan yod de //

lha ni sngangs myi ni skrag ste //

mo 'di ci la btab kyang ngan no //

(43) [flower shape] // dong tshe bcu gnyis gan na //

nyi ma stong dus cig du shar pa'i ngo la bab ste //

(44) tshe rabs gar 'gro na yang //

gnam grog ched po 'ongs ste bzang //

(45) nad pa tshab che na ngan //

mo 'di gzhan ci la btab kyang bzang //

[flower shape] // dong tshe kun (46) bub na //

nyi ma nub pa'i ngo la bab ste //

sa 'gam ba'i ngo //

rgyal ni gdung chad pa'i (47) ngo //

bse' ni myig bol ba'I ngo // cho ga byas kyang myi zlogs //

mo 'di ci la (48) btab kyang ngan no / : /

【奥書】

dkong tse 'phrul gyis mdzad pa'i dong tse bcu gnyis kyi mo // (49) brdzogs so // /// //

【序文】

1-5 かつて、神変子である孔子は知識と様々な知恵を集約し、確立した。神変王であるLi Bsamblang（李三郎）は、馬上から広い御心（*thugs ring*）を持ってこの占いを確立した。この占いは、確固としていて、迅速かつ的確である。

この占いを行う道具としては、香を献上し、奉献用の良い布で「包んだ」トルコ石一つ、禿鷲の羽のついた矢一つ、大麦1デー、表面の白いレンガが一つが無くてはならない。それぞれの卦が終われば、「卦辞は」大变的確である。

【本文】

6-8 銅銭1枚が表ならば、太陽が窪地に昇る相。

家運と繁栄運について占えば、良い。

失せものについては、戻る。

病気について占えば、治癒する。

待ち人（／客）について占えば、近いうちに現れる。

この卦は何について占っても大「吉」。

8-11 銅銭2枚が表ならば、人の相にあたる。家内で主と家婦と使用人が調和して身体には *gdon*（悪鬼）がいない。

家運と命運について占えば、良い。

子供は活発である（*ngo mtho*）。

友人は偉大である。

家屋は堅固に建てる。

病人を看病すれば、近いうちに治癒する。

天（／天上人）の相という「相で」、光明が次々と合流する。

この卦は「何について」占っても大吉。

12-14 銅銭3枚が表ならば、土と鉄の相にあたる。

家運と命運について占えば、良い。

病気について占えば、*yul gdon*と*drI mo*（＝悪鬼）の相があって、[それらの悪鬼が] 害を為す。

[魔よけの] 儀式をすれば良い。しなければ、悪い。

商売[をすること]と、事柄[の成就]を求める[ことは]、良い。

待ち人（／客）について占えば、良くない、現れない。

15-18 銅銭4枚が表ならば、四天王八部衆の卦（*gnam gru bzhi pa sde brgyad*）にあたる。

家運と命運について占えば、良い。

悪鬼の運について占えば、有毒な食物と、ぶつぶつ言う竈、悪意のある行為が起こって、*yul gdon*と*drI mo*（＝悪鬼）が結束して害を為す。

病人について占えば、病原は大きい。

[魔よけの] 儀式をすれば、良い。

戦運について占えば、敵は士気が高い（*ngo mtho*）。

結婚すること、家屋を建てること、葬式をすること？（*dur chad*=死体を切断する）について占えば、良い。

19-22 銅銭5枚が表ならば、嘆き（*bshum ba*）の相にあたる。2つの家が1つになる卦にあたって、空腹の蛮人に*zis*の悪鬼（*zis gi sri*）がわき起こる。

家運と命運のついて占えば、悪い。

神が[人を] 脅かし、人は怯える相。

怒れる敵と出くわす。

親愛なる縁者と争う。

悪鬼の運について占えば、*phung srIn*、*btsan drI dmar po*、*rta shu bo zhon ba*（などの悪鬼）が害を為す。

病人について占えば、身代わりを差し出せば〔それで〕足りる。

この卦は何について占っても凶。

23-26 銅銭6枚が表ならば、水と金の相にあたる。

家運と繁栄運、命運について占えば、良い。

戦運について占えば、敵はいない。

捕虜として捕われても、解放される。

責任〔について〕争えば、勝つ。

〔お上からの〕咎めについては、解決する。

病人を看病すれば、治癒する。

事柄〔の成就〕を求めれば、成就する。

空に昴〔がある〕相で、多数の星が〔昴を〕取り巻く相。

この卦は何について占っても大〔吉〕。

27-31 銅銭7枚が表ならば、火と土の相にあたる。空腹の死人と父親の死体が起こる卦にあ  
たって、2つの家が1つになる相

にあたる。

家運と命運について占えば、悪い。

家族は合意せず、争いが多い。

子供が悲しむ相。

戦運について占えば、敵は士気が高い（*ngo mtho*）。

非難をうける。（*myi kha za'*=非難を食らう）

〔悪鬼が〕害を為すか為さないかについて占えば、害を為す。

この卦は何について占っても、凶。

31-33 銅銭8枚が表ならば、水と木が生まれる相にあたる。何について占っても、良い。不動  
明王（*gnam myi g.yo pa*）は対抗しない。



遅れは大きい (lit. 大きいと決まった)。

待ち人 (／客) は現れない。

願い事は、叶わない。

失せものは戻らない。

他は何について占っても吉。

34-35 銅銭 9 枚が表ならば、王の卦にあたつて、喜ばしい知らせを聞く。

心に思う事柄は成就する。

欲する財は手に入れる。

この卦は何について占っても吉。

36-39 銅銭 10 枚が表ならば、太陽と月が一日の〔朝と晩の〕同じ時間に昇る相。王が金のハヤブサの上にいらっしゃって、全ての〔人に〕喜ばしいお言葉を与える相。

病人を看病すれば、治癒する。

事柄〔の成就〕を求めれば、成就する。

失せものについて占えば、戻る。

待ち人 (／客) について占えば、偉大な友人〔が来る〕。

この卦は、何について占っても吉。

40-42 銅銭 11 枚が表ならば、人の相にあたる。孔子が喜ばず、何を為しても成就しない。

家運と命運について占えば、悪い。

悪意と軽蔑があつて、神が〔人を〕脅かし、人は怯える。

この卦は、何について占っても凶。

43-45 銅銭 12 枚が表ならば、千の太陽が一度に昇る相にあたる。子孫はどの代になっても、いつも偉大な友人が現れて、良い。

病人は、熱が高ければ悪い。

この卦は、他は何について占っても吉。

45-48 全ての銅銭が裏ならば、太陽が沈む相にあたる。大地が〔太陽を〕飲み込む相。王は、家系が絶える相。*bse'*（悪鬼）は、目が柔らかい（？）相（*myig bol*）。

〔魔よけの〕儀式をしても、祓えない。

この卦は、何について占っても凶。

#### 【奥書】

48-49 神変者である孔子がお作りになった銅銭12枚の占いは終わり。

1 *gnam dang por* : Pt.126やPt.1287に登場する*gna'dang po* (昔、古い時代に)に類似する表現であると考え、「かつて」と訳した。

1 *kong tshe 'phrul kyi bu* : *kong tse / kong tshe* は、漢語の孔子 (*kongzi*) を音写した語である。この語が古チベット語内に流通していたことは、他文書の用例からも傍証される<sup>16</sup>。また、古チベット語の語彙に見られる *'phrul kyi lha* が、ツェンポに対する修飾辞 (*'phrul kyi lha btsan po*) であることから、*kong tshe 'phrul kyi bu* が孔子 (*kong tshe*) の賛称であることは間違いない。日本語訳としては「大神変者」 (*'phrul chen*)<sup>17</sup>を参考に、「神変子」 (*'phrul kyi bu*)、「神変王」 (*'phrul kyi rgyal po*) をあてた。

2 *'phrul kyi rgyal po li bsam blang* : 上記の語注 1 より、*'phrul kyi rgyal po* は、Li Bsam-blang に対する賛辞であると考えられる。Li Bsam-blang は漢語の「李三郎」の音写であり、唐蕃会盟碑 (821-822) の東面にも同じ名称が見つかることから、A. Macdonald は、彼を唐の皇帝「玄宗」 (713-756) であると比定した<sup>18</sup>。R. A. Stein もこれに賛成して、唐の皇帝が占トを援助していたために、時には孔子と関連づけられたり、同一視されていたと述べた。さらに、バシエーによれば、皇帝たちは *kong tshe 'phrul chung*、*kong tshe 'phrul rgyal* という称号も持っていた<sup>19</sup>。また、Shen は、Pt.1429やTaipei no.7521には、文書の書写人として *kong tse*、*de'u kong tshe*、*kong tshe* の名がみられることを挙げ、チベット語文献中の *kong tse* が、必ずしも孔子を指し示さないことを指摘している<sup>20</sup>。

---

<sup>15</sup> 冒頭の数字は、各語彙が登場する行番号に対応する。

<sup>16</sup> ITJ 729はPoussinによれば、*kong tse*と子供の問答である。Karmay 1998, pp.169-189に詳しい。

<sup>17</sup> 今枝 2006, 103-104頁。

<sup>18</sup> A. Macdonald 1971, p.283。また、Macdonald は、Bsam lang という名称が、韻文の一節として (*rgya rje ni bsam lang zhig*) 年代記にも登場することを指摘している。

<sup>19</sup> Stein 1992。

<sup>20</sup> Shen 2007, p.114。

2 *chib gong nas* : 漢文占ト文書中には、「孔子馬頭卜法」という名の占ト書が数点存在する (Or.8210/S.813、S.1339\_r、S.2578、S.9501\_v+9502、S.11419\_v、S.13002\_v) <sup>21</sup>。この中で、孔子は9本の算木（筮竹のようなもの）を馬上から投げて占いを行う<sup>22</sup>。「*chib gong nas*」という表現は、ITJ 742の作者が「孔子馬頭卜法」についての知識を有していたことを傍証しているだろう。

4 *g.yu mchod 'phrugs gcig* : このフレーズの文法構造は理解し難いが、文脈から *g.yu*（トルコ石）が *mchod 'phrugs gcig* によって修飾されていると考え、「奉獻用の良い布で〔包んだ〕トルコ石一つ」と訳した。同様に、*mda' bya drgod ma cIg* も、*bya drgod ma cIg* が名詞 *mda'*（矢）にかかっているものと考え、つづく *rme'u*（大麦）、*dpags*（レンガ）も同じ構造を持つと理解した。従って、この占いに必要な物品は、それぞれのフレーズの先頭にたつ5つの名詞、すなわち、香、トルコ石、矢、大麦、レンガであると考えられる。

5 *'dron po* : TLTD 3によれば、*'dron po* は、*'gron po* = traveler と同義である。本文献中では、*'dron po* が来ることは吉兆であることから、これが占いの施主にとって好ましく、かつ道中にある人物と考えた。日本語では、「待ち人（／客）」としておく。

6 *dong tse* : 漢語の「銅子」*dongzi*の音写であり、銅錢を意味する。*dong tse* は、銅錢占ト文書中にもみ現れる語彙ではない。例えば、吐蕃期の手紙文書や契約文書にもいくつか貨幣としての用例がある<sup>23</sup>。つまり、*dong tse* という語彙が、古チベット語として通用していたと考えられる。

---

<sup>21</sup> 黄 2001, 25-27頁、*DSCM*, pp.318-319、pp.347-351、p.359、p.361、p.362。

<sup>22</sup> Kalinowski 1991, pp.140-141、黄 2001, 25-27頁、*DSCM* pp.347-351。

<sup>23</sup> *OTC*, pp.25-26, pp.297-298, pp.320-323。 *dmar* もまた、吐蕃期の手紙や契約文書中に登場する銅貨を表す名称である。

7      *ngo mtho* : *ngo mtho*は、*go mtho*、*mgo mtho*という綴り字のバリエーションをもって古チベット語文献中に登場する。いくつか例を挙げてみたい。

(IOL Tib J 739)

*bsam bar ni 'gyod pa las / gtam snyan pa ni thos te / ngo mtho' ba'i ltas te bzang rab bo*

(後悔していたのが、喜ばしい知らせを聞くようになって、*ngo mtho ba*の相で、大吉。)

(IOL Tib J 740)

*rgyal po lhas mdzad na zhal mtho / rgyal 'bangs rjes mdzad na go mtho,*

(王を神がなされば、*zhal mtho*。王を君主がなされば、*go mtho*。)

*lhas bkur na srog sra rje bkur na go mtho*

(神が讃えれば、生命は確固とした[ものになり]、君主が讃えれば、*go mtho*。)

(Pt. 1085)

*rje blon 'phrul gyI // bka drin la / bdag cag lho bal mgo mtho mthos kyang / sgo sgor ldum re re tsam*

*bskrungs pa'I thog /*

(お上のお役人の神聖な恩義のお蔭で、我等口ベル (*lho bal*) も*mgo mtho*で、個々の家に菜園を一つづつ作られる時には<sup>24</sup>、)

【藏漢】によると、*ngo mtho ba*は「比較的良い」、*mgo mtho po*は「勢力が強大である」ことを意味する。ITJ 742では、*ngo mtho* が子供に対して用いられた場合には良い卦だが、敵を描写する場合には、卦は悪くなる。そこで、元来の「頭 (*ngo/mgo*) を高くしている (*mtho*) 様子」をそれぞれの文脈に合わせて、「活発」「士気が高い」と訳した。

13      *nyon tsong* : '*nyo tshong*の誤記、あるいは異綴りと考えた。

15      *gnam gru bzhl pa sde brgyad* : 一般に、*gnam*は「空」「天」を表す語彙であるが、本文書では、「神」「神格」を意味する漢語の「天」の翻訳借用語彙として*gnam*が用いられている。

---

<sup>24</sup> 訳文は、山口 1985, 492頁より引用した。ただし、訳文中の太字箇所は、原文では「IHo balも立って行けるのであっても」と訳されている。

*gnam gru bzhi pa sde brgyad* は、*gnam*（神）*gru bzhi pa*（四方の<sup>25</sup>）*sde brgyad*（八部）と考えることができ、神格「四天王八部衆」であると考えられる。32行目に登場する*gnam myi g.yo pa*もまた、*gnam*（神）*myi g.yo pa*（動かない、不動の）、つまり「不動尊」「不動明王」であると解した。

16 *gdon phyas* : *gdon*は、辞書によれば、‘evil spirit, demon, causing disease etc.’<sup>26</sup>、「魑魅」「人に危害を及ぼす鬼<sup>27</sup>」とある。現代では*gdon*は、*gdon phal pa bzhi*（4つの*gdon*）、*gdon chen bco lnga*（15の強大な*gdon*）、*gdon chen bco brgyad*（18の強大な*gdon*）といった一団を形成し、あるものは子供に危害を加える存在であると考えられている<sup>28</sup>。本文献中には、*gdon phyas*について占いをたてた場面が2度あるが、いずれも数種類の悪鬼が結束して害を為すという結果が示されている。したがって、古代においても*gdon*という語が悪鬼の一団を指している、あるいは悪鬼を総称していると考え、「悪鬼の運について」と訳した。*gdon*は古チベット語占ト文書中では、*nad pa*（病気）や、*khyim phyas*（家運）、*srog phyas*（命運）について占いをたてた場合にも、*gdon ched po yod*（強大な*gdon*がいる）、*gdon che ste*（*gdon*が強大で）という理由によって凶卦に帰結している卦辞がある<sup>29</sup>。「悪鬼」の存在が、人々の日常や運勢に大きな影響をもつため、悪鬼についても占いをたてたのであろう<sup>30</sup>。

24 *gyod rmas na* : Pt.1055の42行目には、*bla nas gyod rmas sam myi rmas la btab na rmas pa'i ngo*（お上からお咎めがあるかどうかについて占えば、咎めがある相）とある。本文書でも*gyod rmas na*に先行する*bla nas*を補い、「[お上からの] 咎めについては」と訳した。

---

<sup>25</sup> *gru bzhi*は【蔵漢】によれば「正方形」を意味するが、*gru*の意味として(1)船、(2)角、隅とあるので、*gru bzhi*が「四隅」、「四方」を示すと考えた。

<sup>26</sup> Jäschke p.267。

<sup>27</sup> 【蔵漢】1353頁。

<sup>28</sup> Nebesky-Wojkowitz 1993 pp.310-311。

<sup>29</sup> *gdon myed*、*gdon ma mchis*（*gdon*がない）という場合には吉に帰結している（ITJ 738 1v68）。

<sup>30</sup> 【蔵漢】によれば、チベット医学には*gdon phyas*と呼ばれる「脈を診ることによって悪鬼に遭遇するか否かを占う方法」があるという（【蔵漢】1354頁）。

28 *khyim gnyis cig du sus* : 19行目のパラレルな表現から *khyim gnyis cig du 'dus* (2つの家が1つになる) と訳した。

32 *ldag* : *ldag*は「舐める」という意味だが、ここでは*ldog*「反対する」「対抗する」として理解した。

32 *phyi dal ched* : AFLによれば、*phyi dal*は‘dilatatoriness’「遅延」を意味するので<sup>31</sup>、ここでは「遅れが大きい」と訳した。この語彙は骰子占卜文書にも度々登場するが、常に対象に不利益をもたらす<sup>32</sup>。

36 *'phrug* : *phrugs*であると考え、‘one day with the night, a period of 24 hours’という意味を採用した<sup>33</sup>。つまり、日出のちょうど12時間後に月が昇ることを描写していると理解した。

38 *bor glag* : *bor rlag*の誤記、或いは異綴りと考えた。ITJ 741.2やPt.1056では*stor lag*と表記されるが、*bor*と*stor*は同意であり、*stor lag*と*bor rlag*とは同義語である。従って、「失せもの」を意味する語彙として、*bor rlag*、*bor glag*、*stor lag*という3つのバリエーションが共存していたことになる。

40 *da // kong rtse* : 48行目の表記から考えて、*dkong tse*の誤記であると考えた。

44 *gnam* : *nam* (いつも、いつでも) であると考えた。

---

<sup>31</sup> AFL, p.156。

<sup>32</sup> IOL Tib J 738

*phyi dal yod gis don myi grub* (遅れが大きいので、事柄は成就しない)

IOL Tib J 740

*dgra phyva' la btab na dgra phyl dalte mo bzango* (戦運について占えば、敵は遅れて吉)

<sup>33</sup> Jäschke p.354

## 1.4. 内容構成

1.1. でも触れたように、ITJ 741.2と、Pt.1055 + ITJ 744、Pt.1056の3文書は、記述内容がほぼ符合する<sup>34</sup>。しかし、これらの間には綴り字の差異や、いくつかの描写が脱落あるいは補填されているといった内容の相違がみられる。従って、これら三文書は、同一典籍の異写本であると理解できる。そこで、本論文ではこれらを流通本と呼んで弁別することにする。

ところで、古チベット語銅銭占ト文書の記述内容は次のような共通した構成をもっている。

<sup>34</sup> 詳しくみれば、ITJ 741.2とPt.1055 + ITJ 744の両者はより近いと言える。例として、銅銭6枚が表の場合の記述を抜き出してみる。その他の卦辞については、章末の対照翻字テキストを参照されたい。

ITJ 741.2 II.15-19	Pt.1055 + ITJ 744 II.31-39	Pt.1056 II.17-23
@@@@@ /	om	@@@@@ /
dong tse drug gan de gzhan bub na	\$ // dong tse drug gan te gzhan bub na /	dotse drug gan te gzhan bub na /
se'i ngo 'byung ngo //	sa 'I ngo byung ste //	sa'I ngo ste
khyIm phyang dang srog phyal btab na bza //	khyIm pya dang srog pya la btab na bzang / rab	khyIm phyang dang srog phyang la btab na bzang //
gsol ba dang shags btab na / bdag rgya [l]'i ngo //	gsol pa dang shags bkye na gnang nas bdag rgyal ba'I ngo //	gsol ba dang shags 'gyed na bdag rgyal snyIng dga' //
gnyen byas na 'phrod de bu tsha gzhin /	gnyen bya na 'phrod de bu tsa gzhin //	gnyen byed na 'brod bu tsa gzhin /
khang khyIm 'bus na [dab?] [nga?] dang skye // 'phyug btsan ba'i ngo /	khang khyIm bya na / dbang dang skye phyug btsan ba'I ngo /	khang khyIm byed na kha dro // dbang tang che // btsan phyag du 'gyur //
don nyer grub //	don gnyer na grub //	don gnyer na don grub /
nad pa la btab na nad sos pa'i ngo'o /	nad pa la btab na sos /	nad pa la btab na za thab cig gdon / cho ga byas na kha dro //
stor lag byung na rnyed bar 'ong ngo //	bor rlag byung na rnyed pa'I ngo //	om
pho skyabs byas na bzango //	pho skyas bya na bzang //	
dron phol btab na myu du myI phyin de	dron po la btab na myur du phyin te /	
mo bzang ngo /	mo 'di ci la btab kyang bzang rab bo : /	ci la btab kyang bzang rab 'o //



- (a) 銅錢の表／裏の枚数<sup>35</sup>
- (b) 卦の名称
- (c) 事象ごとの吉凶
- (d) 卦の総合的吉凶

流通本と、それに属さない文書中の記述の差異を明示するために、Pt.1055と、ITJ 742から銅錢4枚が表の場合と5枚が表の場合の卦辞を取りあげ、比較してみる。

#### 【銅錢4枚が表】

流通本 (Pt.1055 5-17行目)

#### 翻字テキスト

- (a) \$ // dong tse bzhI gan te gzhan bub na /
- (b) chu 'i ngo byung ste //
- (c) lus la gdon myed //
- khyim pya dang srog pya la btab na bzang //
- snying la 'tsher ba yod kyang nyes pa myi 'byung // bya 'o cog grub //
- gnyen bya na bu tsa gzhin //
- khang khyim bya na kha dro //
- nad pa la btab na sos pa'i ngo //
- gdon pya la btab na / drI mo dang thab rgod che //
- don gnyer na grub //
- dgra pya la btab na / dgra myed //
- bor rlag byung na rnyed pa'I ngo //
- 'pho skyas bya na bzang //
- nad pa la btab na sos pa'i ngo //
- 'dron po la btab na / myur du phyin te
- (d) mo 'di ci la btab kyang bzang rab bo / : /

#### 試訳

- (a) 銅錢4枚が表で他が裏ならば、

<sup>35</sup> ITJ 741.2, Pt.1056では、(a)の前に、銅錢の表の枚数分の円が描かれている。これは、各卦辞を取り出しやすくするために工夫されたインデックスの役割を果たしているのだろう。

(b) 水の相が出て

(c) 身体には*gdon* (=悪鬼) がいない。

家運と命運について占えば、良い。

心に恐れ (／悲しみ) があっても、悪いことは起こらない。万事成就する。

結婚すれば、子供ができる？<sup>36</sup>

家屋を建てれば、福を招く。

病人について占えば、治癒する相。

悪鬼の運について占えば、*drI mo* と *thab rgod* が大きい<sup>37</sup>。

事柄 [の成就] を求めれば、成就する。

戦運について占えば、敵はいない。

失せものは、戻る相。

人を守れば<sup>38</sup>、よい。

病人について占えば、治癒する相。

待ち人 (／客) について占えば、すぐに来る。

(d) この卦は、何について占っても大吉。

---

<sup>36</sup> 【山口1987】では、「媒酌すれば、〔された者たちが〕子、孫のようになる」と訳す。

<sup>37</sup> 【山口1987】では、*gdon pya*を「障害運」とし、*drI mo*、*thab rgod*を名詞とは捉えずに「障害運についてみれば、悪くとも激しくともすぐ衰える〔から心配ない〕」と訳す。

<sup>38</sup> *pho skyas*は、ITJ 741.2では、*pho skyabs*とも書かれている(18、41、53行目)。ここでは、*skyabs*の「保護する」「守る」の意味を採用した。【山口1987】では「移動についてみれば、吉」と訳される。

翻字テキスト

- (a) \$ // dong tshe bzhi gan na /
- (b) gnam gru bzhi pa sde brgyad gi ngo la bab ste /
- (c) khyim phyas dang srog phyar btab na bzang /  
 gdon phyar btab na zas ngan dang slo thab dang mkhon las byung ste yul don dang //  
 dri mor bsdongs ste gnod /  
 nad pa la btab na nad gzhi che / cho ga bya bar bzang /  
 dgra phyar btab na dgra ngo mtho /  
 gnyen byed pa dang khang khyim byed pa dang / [dur?] chad byed par btab na bzang ngo /

【銅錢 5 枚が表】

流通本 (Pt.1055 18-30行目)

翻字テキスト

- (a) \$ // dong tse lnga gan te gzhan bub na /
- (b) gser gi ngo byung ste //
- (c) khyim phyas dang srog pya la btab na // nor rdzas shig la gdon che ste / bya 'o cog myi grub //  
 srog pya la btab na shi ba'i ngo //  
 nad pa la btab na // myur du sa ma spos na shi ba'i ngo  
 gsol ba dang shags bkye na myi gnang ste pham ba'i ngo //  
 gnyen bya na khyim tab shi ba'i ngo //  
 dgra pya la btab na / dgra dang phrad pa'i ngo //  
 zhal ces btab na re shig myi 'byang //  
 srid pya la btab na / srid myed pa'i ngo //  
 'dron po la btab na nye zho byung ste / re shig myi 'ong //  
 bor rlag la btab na myi rnyed //
- (d) mo 'di ci la btab kyang ngan rab bo :/

試訳

- (a) 銅錢 5 枚が表で、他が裏ならば、
- (b) 金の相が出て、

<sup>39</sup> 訳文は、1.3.を参照。

- (c) 家運と命運について占えば、財産に [ついた] *gdon* が大きく、万事成就しない。  
 命運について占えば、死ぬ相。  
 病人について占えば、すぐに場所を変えなければ、死ぬ相。  
 願い事と弁明<sup>40</sup>をすれば、叶わずに負ける相。  
 結婚すれば、夫婦は死ぬ相。  
 戦運について占えば、敵と出会う相。  
 裁判 [について] 占えば、しばらくかたづかない。  
 繁栄運について占えば、繁栄しない相。  
 待ち人 (／客) について占えば、災いが起こって、しばらくは現れない。  
 失せものについて占えば、戻らない。
- (d) この卦は、何について占っても大凶。

ITJ 742 19-22行目

翻字テキスト

- (a) \$ / [flower shape] / *dong thse lnga gan na* /
- (b) *bshum ba'I ngo la bab ste* /  
*khyIm gnyIs gcig du 'dus pa'I ngo la bab ste* /  
*lho ba bkres la zis gi sri langs te* / <sup>41</sup>
- (c) *khyIm phyas srog phyar btab na ngan* /  
*lha nI sngangs myI ni skrag pa'I ngo ste / dgra sdang ba nI phrad* /  
*gnyen byams pa dang nI snol* /  
*gdon phyar btab na / phung srIn dang btsan drI dmar po dang* /  
*rta shu bo zhon ba[r?] gcIg gnod* /  
*nad pa la btab na glud btang na rung* /
- (d) *mo 'dI ci la btab kyang ngan no* /

<sup>40</sup> *shags bkye na* : *shags 'gyed pa* (【藏漢】2832 : 辯訴) の意をあてた。

<sup>41</sup> 卦の名称の後に、このような卦の概説がつく場合がある。時には、名称に代わって、概説のみが記されていることもある。

ところで、(a)～(d)の各項目の書式は以下のように明示できる。

- (a) 銅銭の表の数： *dong tse* [表の枚数] *gan na* (／*gan te gzhan bub na*)  
 (b) 卦の名称： [卦の名称] *gi ngo la bab ste* (／*byung ste*)  
 (c) 項目ごとの吉凶： [占う項目] *phyi la btab na* [吉凶]  
 (d) 総合的吉凶： *mo 'di ci la btab kyang* [吉凶]

このように、卦辞の内容構成について比較してみると、(c)事象ごとの吉凶については、家運や命運、戦運、病人などの項目に共通性が見られる一方で、流通本とITJ 742の間には、(b)卦の名称や(d)総合的吉凶といった占ト書の要を為す箇所には大きな隔たりがあることがわかる。そこで、両者から(a)、(b)、(d)を取り出して比較してみると、以下のように概観できる。

古チベット語銅銭占ト文書吉凶対照表

	流通本 (Pt.1055 + ITJ744)		ITJ 742	
(a) 表の数	(b) 卦の名称	(d) 吉凶	(b) 卦の名称	(d) 吉凶
1			nyI ma khud par shar pa'I ngo	[bzang] rab
2			myI'i ngo	[bzang] rab
3			sa dang lcags kyI ngo	無表記
4	chu'i ngo	bzang rab	gnam gru bzhI pa sde brgyad gI ngo	無表記
5	gser gi ngo	ngan rab	bshum ba'I ngo	ngan
6	sa'I ngo	bzang rab	chu dang gser gI ngo	[bzang] rab
7	ll'i ngo	ngan rab	mye dang sa'i ngo	ngan
8	sa dang chu'i ngo	gzhi	chu dang shing skyes pa'i ngo	bzang
9	kong tse'i ngo	bzang rab	rgyal po'i ngo	bzang
10	mye dang sa'i ngo	gzhi	nyis zla 'phrug dus cig du shar pa'I ngo	bzang
11	ki wang gi ngo	ngan	myi'i ngo	ngan
12	the'u kong gi ngo	bzang rab	nyi ma stong dus cig du shar pa'i ngo	bzang
0	srin zha mgo 'i ngo	bzang rab	nyi ma nub pa'i ngo	ngan

上記の対照表から明らかなように、流通本とITJ 742では表6枚と表11枚の卦辞においては完全に一致する総合的吉凶がみられたが、太棒で囲った3つの卦辞では吉凶が異なっており、全てが裏の場合には大きくかけ離れた結果を示している<sup>42</sup>。また、卦の名称は一度も符合しないことがわかる。つまり、これらは同一典籍に由来しているとは考え難い。また、流通本に採用されている卦の名称には、「水の相」(*chu'i ngo*)、「火と土の相」(*mye dang sa'i ngo*)といった五行思想にまつわると思われるものや、「離の相」(*ll'i ngo*)といった八卦に関わる名称に加えて、「孔子の相」(*kong tse'i ngo*)「太公の相」(*the'u kong gi ngo*)といった名称も登場する<sup>43</sup>。従って、流通本に用いられている卦の名称の大部分は、中国、あるいは漢文占ト文書に由来すると考えられる。一方、ITJ 742中の名称には、「土と鉄の相」(*sa dang lcags kyI ngo*)や、「水と木が生まれる相」(*chu dang shing skyes pa'i ngo*)といった五行からは逸脱した名称があてられているほか、「王の相」(*rgyal po'i ngo*)「人の相」(*myi'i ngo*)といった簡潔な名称や、「千の太陽が一度に昇る相」(*nyi ma stong dus cig du shar pa'i ngo*)のような説明的な名称がみられる。これらの名称には、中国の伝統や漢文占ト文書との関連が見いだせない。したがって、ITJ 742中の卦の名称はおそらくチベット語本来の記述であると想定できる。

さて、ここでITJ 1239の序文について言及したい。先述の通り、本書は記述が確定できる箇所が非常に少ないため、序文の全貌を把握することは難しい<sup>44</sup>。しかし、1行目の冒頭には、*cu yag dong tse*、すなわち「周易 [の] 銅銭」という語がみつけられる。つまり、銅銭占トは

<sup>42</sup> 表の枚数が8枚と10枚のときには、流通本では*gzhi*、ITJ 742では*bzang* (吉) という異なる結果に帰結している。*gzhi*は、本来「土地」「地面」「基盤」などの意味を持つ語である。しかし、骰子占トを扱ったある写本中 (ITJ 740) では*mo gzhl*と記されている吉凶が、それと同一典籍に基づく別の写本 (Pt. 1046B) では*mo 'bring* (中) と書かれていることから、*gzhi*と*'bring*とは同等の吉凶を表す語であると考えられる (第3章 1.3項参照)。そこで本論文では、*gzhi*を「平」と訳し、吉凶の度合いは*'bring* (中) と同等であると定義する。

<sup>43</sup> 「離卦」「孔子卦」「太公卦」は、別の占いを扱った漢文文書 (Pc.3398.2) にも見られる卦の名称であるが、こちらは算木による占いを記したものであり、銅銭占トとは占いの方法が異なる。

<sup>44</sup> 背面の1～5行目にみえる序文には、以下のように記されている。

(1) \$ // cu yag dong tse [+5] la 'debs na rab du rno 'o //  
 (2) [+1] 'I sgo don gdon [+5] yag rIn po che lags //  
 (3) bzang po bzang ngan dang // [cho] [ga] la mo bzang ngan 'tsal /  
 lan (4) cIg ngan na / lan gnyIs bzang [+1] gang la btab na /  
 don tse (5) [bcu?] gnyIs [shlB] [shu] dang / 'gver tseng gIs bye brag dbye'o //

「周易」の占いの一種だと解釈されていたのかもしれない<sup>45</sup>。ここでも、チベット語で書かれた占ト書が周易と結びつけられているのである。しかし、これらが実際に周易の規範に則った占術であるという可能性は低いだろう。中国に由来する占術に対してこの名を冠することで、占術の由縁や効果を高めることが意図されたのかもしれない。

ところで、後述するように銅銭占ト文書の構成と書式は、骰子占ト文書とも概ね符合するのである<sup>46</sup>。骰子占ト文書は、出土地の多様性などから、チベット帝国支配期（8世紀後半～9世紀前半）から帰義軍期にかけて作成されたと考えられる。一方、銅銭占ト文書は出土地が敦煌に限られており、帰義軍期に特有の書体によって記されているという特徴をもっている。これらの文献学的情報からは、銅銭占ト文書が10世紀に属する文書であることが想定できる。従って、銅銭占ト文書の書式は先行する骰子文書の書式の上に立脚している可能性が高いだろう。換言すれば、銅銭占ト文書は、語彙や記述内容に中国の影響を多分に含んでいるが、書式の上ではチベットの特徴を継承した文献であると考えられるのである。

まとめると、古チベット語銅銭占ト文書には、ITJ 741、Pt.1055 + ITJ 744、Pt.1056が属する流通本と、それ以外の2文書（ITJ 742、ITJ 1239）の3系統が存在する。各卦辞は、同じ書式に則って記されているものの、記述内容は全く異なっていた。このうち、流通本中の卦の名称

---

<sup>45</sup> 同様に、星占いに関する古チベット語文書の巻末（ITJ 748 1.53）にも、*cu yag gi yi ge rdzogs s+ho //* 「周易の書物は終わり」という奥書が見える。一方、ITJ 748とパラレルな内容をもつPt.127の序文には、以下のような記述がある。

sngon 'phrul gyI myis / gtsug lag [g] [+2] g[I] /  
phyI rabs la dpa bzhag pa'I gtsug lag [ gyI] y[o]g / stan [---]  
dbang btang che chung dang / lo srog mthun myI [+4] / bzang ngan du lta ba /

Macdonaldは、筆者が*gtsug lag* [ gyI] y[o]g / stanと判読した箇所を、*gtsug lag rgya yig ste*と読み、「占ト（あるいは占星）の書物」と訳している（下記参照）。ツクラクを占トと考えることには、検討を要するであろうが、ここで注目すべきなのは、Pt.127では「周易」と関連づけられていないかわりに、「ツクラク」に言及されているのである。占ト書に登場する「ツクラク」の意味範疇を考える上で、今後の参考にしたい。また、第3章で扱う骰子占ト文書（羽田）の奥書にも、*gtsug lag gi mo rdzogso* 「ツクラクの占いは終わり」と記されていることを補足しておく。

MacdonaldによるPt.127の序文に対する翻訳を引用しておく。

Jadis, l'homme doué de facultés magiques a établi ce texte de divination (ou d'astrologie) comme modèle pour les générations futures ; il concerne la richesse grande ou petite, ce qui est compatible ou in compatible avec les années (de naissance) et la vie [de ceux qui naissent en chacune des années], et ce qui est faste ou néfaste (pour eux).

(Macdonald 1971 p.284)

<sup>46</sup> 本論文第3章の1.4項を参照されたい。

は大部分が中国に由来するものであったが、ITJ 742にみえる卦の名称の多くは叙事的であり、チベット語に立脚した記述であると考えられる。ただし、後者にも「四天王八部衆」や「不動明王」を指す漢語からの翻訳借用語が用いられていることに加えて、「孔子」や唐の皇帝であろうと思われる「李三郎」に占いの起源を寄せている序文が残されていることから、この占法が中国のものであることが確認できる。また、ITJ 1239の序文において、「周易の銅銭」と称されていることもこれを傍証する資料であるだろう。そもそも、占いの道具である銅銭自体がチベットの産物ではない上、それを表すのに*dong tse*という漢語名称を使用していることも、占いの起源が中国にあることを示唆していると言える。しかし一方で、銅銭占ト文書はチベット語占ト文書の書式的特徴を継承していた。では、これらの文書はチベット語本来の著作なのか、それとも漢語文書からの翻訳本や翻案本なのだろうか。次節では、漢語文書の内容と書式を吟味して、チベット語文書との関係を検討する。

## 第2節：漢語銅銭占ト文書との比較研究

スタイン蒐集敦煌出土漢語文書コレクション中には、銅銭占トを扱った文献が5点存在する<sup>47</sup>。そのうち、S.11415\_vは、S.3724\_rに接合するので文書数は4点に集約できる<sup>48</sup>。本節では、これらの漢語文書について概説し、記述内容と構成を精査する。さらに、チベット語文書との相違について検証し、古チベット語銅銭占ト文書の成立背景について論じたい。

---

47 一覧に挙げる漢語文書には、一写本中にいくつかの異なる占ト法に関する記事が含まれているものがある。しかし、本論文では、銅銭占ト記事のみを対象とし、一覧表中でテキストの状態を記した欄には、写本自体の状態や概観ではなく、銅銭占ト記事の残存状態を注記した。同様に、「残存行数」も銅銭占ト記事の行数を記した。また、S.3724の銅銭占ト卦辞は、練習書きの類いであると思われる記述で、同一内容が繰り返し登場する上、表面にも同じ練習書きが6行みえる。そこで、表中には、それらを合算した残存行数を記した。

48 *DSCM*, p.361。



## 漢語銅錢占ト占ト文書リスト

文書番号	形状	サイズ (cm)	テキスト	残存行数 (行)	背面
Or.8210/S.813	卷子	30.5 × 101	首尾欠	33	なし
Or.8210/S.1468	卷子	27 × 122	尾欠	23	なし
Or.8210/S.3724	卷子	30.5 × 173	尾欠	58	漢語經典 (無量寿宗要經)
Or.8210/S.11415_r (= S.3724_r)	断片	10.2 × 14.8	首尾欠	5	六十甲子納音?
Or.8210/S.5686	冊子	14.7 × 9.7	首尾欠	24	表面の続き

### 2.1. 文書概説<sup>49</sup>

#### 【S.813】<sup>50</sup>

30.5×101cmからなる卷子本形式の文書であり、*Giles*によれば10世紀に属する<sup>51</sup>。文書の大部分を銅錢占トの記事が占めているが、文書の冒頭4行及び巻末の9行は別占法に関する記述である。後者は、『立成孔子馬坐ト占法』と題される占トを扱ったもので、S.1339\_r、S.2578、S.9501\_v + S.9502、S.11419\_v、S.13002\_vと同様の内容を持つ<sup>52</sup>。

本文書の銅錢占ト記事は、5～37行目までの33行から構成されているが、前半部では大きく料紙を欠損しているため、17行目までの卦辞内容は確定できない。しかし、残存する記述などからは、これが元来完結した占ト書であったことがわかる。内容は、次のように整理できる<sup>53</sup>。

<sup>49</sup> これらの漢語文書について、筆者は実見しておらず、先行研究やIDPウェブサイトのデジタルイメージなどを通して、調査を行ったことを注記しておく。

<sup>50</sup> 本論文で提示するS.813釋文は郝の研究に拠った（郝 2006, 354-356頁）。

<sup>51</sup> *Giles*, p.224。

<sup>52</sup> 黄 2001, 25-27頁、*DSCM* pp.347-350。

<sup>53</sup> *DSCM*, p.347。

5行目	：序文	6-8行目	：1枚が表	9-10行目	：2枚が表
11-12行目	：3枚が表	13-14行目	：4枚が表	15-17行目	：5枚が表
18-19行目	：6枚が表	20-22行目	：7枚が表	23-25行目	：8枚が表
26-28行目	：9枚が表	29-31行目	：11枚が表 <sup>54</sup>	32-34行目	：11枚が表
35-37行目	：12枚が表				

12枚表の卦辞で終了していることから考えて、全てが裏の場合の記述や、奥書は記されなかったようである。なお、6枚表～12枚表までに料紙の欠損はなく、テキストは、ほぼ完存している。

ところで、本文書には、他の文書にはない内容が含まれている。それは、各卦辞の冒頭に六十四卦の卦名と図象が描かれていることである。例えば、8枚が表の場合は「家人 ䷤」という見出しから始まる<sup>55</sup>。六十四卦とは、八卦を二つ重ねたものである。「家人」は、外卦（上）が「巽」で、内卦（下）が「離」で構成されている。他文書では、図象や卦名は用いられていないため、「坎上離下」のように卦象で記されている<sup>56</sup>。ところで、後述のS.3724では、このト法に『李老君周易十二銭ト法一本』というタイトルがつけられている。従って、本文書でも、周易との関連を持たせようという意図によって、この様な図象や卦名、卦象を採用したことが想像できる。しかし、黄によればこれらの卦辞内容は周易とは無関係である<sup>57</sup>。

#### 【S.1468】<sup>58</sup>

S.1468文書は、27×122cmからなる卷子本形式の文書であるが、全78行のうち、前半55行目ま

<sup>54</sup> ここには、32-34行目と同一の記述が重複しているが、配列から考えても、10枚表の場合の卦辞が存在するべきである。

<sup>55</sup> 図象「䷤」は、「家人」を指している。

<sup>56</sup> 「坎上離下」を卦名と図象で示せば、「需 ䷄」となる。また、反対に「家人」は、「巽上離下」と記されるはずだが、残念ながらこれらの対応を確かめられる記述は見当たらない。

<sup>57</sup> 黄 2001, 23-25頁。

<sup>58</sup> 本論文で提示するS.1468釋文は【郝 2010】から引用した。

では病気に関わる記述であり<sup>59</sup>、56行目以降に銅銭占トの記述がみえる。収録内容は以下のよう  
に整理できる<sup>60</sup>。

56-62行目：序文

63-70行目：表1枚

71-75行目：表5枚

76-78行目：表6枚の前半部

各卦辞内容に、必ず「占病」の項目がたてられているのは、55行目までの記述内容の影響であ  
らう<sup>61</sup>。なお、この写本では、表2枚～表4枚までの記述が省略されているようである。

#### 【S.3724 + S.11415】

S.3724とS.11415は相互に接合可能な文書であった。本論文では、これらを合わせてS.3724 +  
S.11415と呼ぶことにする。これは、30.5×173cmからなる卷子本形式の文書で、表面の23行目ま  
では『無量寿宗要経』を収録し<sup>62</sup>、23行目～巻末にかけては、明らかに経典とは別の筆跡で、  
十銅銭占トの序文6行が記されている。また、背面の15行目までには、別の占いに関連すると思  
われる練習書きがみえ、16行目以降に銅銭占トが収められている。しかし、こちらも練習書  
きの類いと思われる内容で、同じ記事が何度も繰り返されているため、本書には、序文と表  
1～4枚の4つの卦辞が収録されていることになる。なお、表面の6行の占ト記事の筆跡は、  
背面の両記述と一致する。

さて、背面の銅銭占ト卦辞の内容は下記のように整理できる。

---

<sup>59</sup> *DSCM*, pp.504-505。

<sup>60</sup> *DSCM*, p.349。

<sup>61</sup> 黄 2001, 23頁。

<sup>62</sup> 25行目には、経典タイトルが記されている。

16-18行目：序文の冒頭部	19-20行目：序文の冒頭部	21-24行目：序文の冒頭部
25行目：序文の冒頭部	26-32行目：序文	32-37行目：表1枚
37-39行目：表2枚	48-53行目：序文	53-57行目：表1枚
57-61行目：表2枚	61-66行目：表3枚	66-69行目：表4枚 <sup>63</sup>

本文書の序文は、いずれも『李老君周易十二銭ト法一本』というタイトルから始まっており、それ故、これらの漢語文書は、十二銭ト法、或いは李老君十二銭ト法などと称されている。おそらくは、占トの起源を周易によせることで、占いの正当性や効力を高めることが意図されたのではないだろうか。

#### 【S.5686】

S.5686は、二葉だけが残る冊子文形式の文書である。一頁には、6行が記されており、内容は以下のように整理できる。

1a 1行目-1b 2行目	：（表3枚の？）卦辞後半
1b 3行目-2b 2行目	：表4枚
2b 2行目-6行目	：表5枚の冒頭部

この文書には、各卦辞の先頭に朱で鉤型の印がつけられ、事象ごとの吉凶も、項目が朱の点で区切られている。つまり、卦辞を参照するのに便利な工夫がなされているのである。冊子本という形式自体も、占いの手引書としては非常に利便性に長けており、このような発達した形式と工夫がみられる文書の存在によって、銅銭占トが当時流行していたであろうことが想像できる。

<sup>63</sup> 40～48行目には、背面の15行目までにみえる占ト卦辞の練習書きが繰り返され、47行目には護符のような図が描かれている。70～71行目、72～73行目、74行目には同じ文章が繰り返されているが、これが、銅銭占ト卦辞に属するのかどうかは不明である。また、73行目と75行目には、表10枚と表1枚の卦象のみが記されている。

## 2.2. 漢語銅錢占ト文書の内容と構成

2.1項でみたように、漢語銅錢占ト文書の記述内容は、序文 + 表1枚～表12枚の卦辞（12通り）という構成で成り立っていた。そこでまず、序文について検証してみるために、S.3724とS.1468の釋文を比較してみる。なお、論述の便宜上、各釋文の左に番号を付しておく。

### S.3724

- (1) 李老君周易十二錢卜法一本 縵為陰文為陽 陰□陽覆老子易卜之法
- (2) 用錢十二文擲着盤中 看文縵即知之吉凶 万不失一
- (3) 来卜者人捉錢如呪之日為 某年某月某日某乙
- (4) 即卜某事 吉時作吉利作相生之卦 凶時言凶即道凶相尅之卦
- (5) 神錢合里即□知之卜者情高任作卦□

### S.1468

- (1) □□錢十二文觀其卦文漫（曼）吉凶 [萬不] 失一
- (2) 周公輔成王 管蔡臣言 欲隱身□避
- (3) 用錢十二文決吉凶 定狐疑
- (4) 後學禺（愚） 不敢遂落 取姑（蠱）終姤易解 唯求在意
- (5) 凶（循）心擲錢 隨其文漫（曼）多少占卦
- (6) 滿三擲 所求下言 或無分時
- (7) 隨問者遠其錢 口屢之心 □□□言求
- (8) □□錢 隨其漫（曼）多少占卦
- (9) 滿三擲 所求 意終不達
- (10) 以□□□須更擲以□卦 無□進出入
- (11) 占病 鬼祟 辭訟 繫獄 嫁娶 逃亡 □□為事 一與□□□□言易文

上記より、記述内容が全く異なることがわかるだろう。占ト法の起源についても、S.3724では、李老君すなわち老子に寄せていることが（1）の記述からわかる。一方、S.1468では、周

公の故事に由来を求めているようである。他にも、これらの序文には、興味深い情報が記されている。たとえば、S.1468の（6）（9）には「満三擲」という内容がみえる。これは、銅錢を投げるのが3回であった、あるいは、3回まで許されたことを示しているのかもしれない。また、S.3724の（3）で述べられているように、漢文銅錢占卜文書の各卦辞では、忌月や忌日も示されているのである。S.813の表9枚（22-24行目）の記述をとりあげて、確かめてみる。

#### S.813（表9枚）

筮（噬）嗑 ䷔<sup>64</sup>

- (a) (易) 曰 九文五曼
- (b) 震火木之卦 宜合相生身
- (c) 吉 憂患差 所求如意 訴訟得通 占病不死 崇（崇）犯竈君 丈人 求之得差  
繫者得出 行人來至 [宅舍] 可居 宜子孫 田蠶大得
- (d) 月忌六月 八月大吉利

このように、(d)は卦辞の最後に記され、そこでは、忌月や忌日、時には吉日が示されているのである。また、(a)には、「易曰 [表の枚数] 文 [裏の枚数] 曼」<sup>65</sup>、という定型の書式に従って、銅錢の枚数が記されている。(b)には、「坎上離下」や「震上離火」、あるいは「乾艮之卦」（＝乾上艮下）といった卦象によって卦の名称が記されている。(c)は、行人、病者（／病）、嫁娶、失物、入舎、宅舎、逃亡、口舌、辭訟、崇、など、事象ごとの吉凶を留めた箇所である。従って、漢語銅錢占卜文書の構成は、下記のように整理できる。

<sup>64</sup> 先述のように、S.813では(a)の前に、このような図象と卦名が示されている。これが、他文書の(b)の内容と一致するのである。

<sup>65</sup> 「文」は表、「曼／漫」は裏を表す。

- (a) 銅銭の表と裏の枚数
- (b) 卦の名称
- (c) 事象ごとの吉凶
- (d) 忌日<sup>66</sup>

次に、(b)卦の名称について対照可能な箇所を抜き出して、異同について検証してみたい<sup>67</sup>。

表1枚 : 坎上離下 水火相尅之卦 (S.3724) / 坎(上)離下 水火相滅 (S.1468)

表4枚 : 巽上艮下 金土之卦 (S.3724) / 巽艮之卦 土木之神合相 (S.5686)

表5枚 : 震光(兌)之卦 水木之卦神百事相尅 (S.5686) / 震兌之卦 (S.1468)

表6枚 : ䷀乾上艮下 (S.813) <sup>68</sup> / 乾艮之卦 金水神 (S.1468)

このように、(b)の前半部に記された卦象は全文書に符合が確認できた。しかし、後半部にみえる「金土之卦」といった名称には、文書間に相違がみえる。後半部は、八卦の自然要素に対応させているようであるが、文書によって記述が異なっており、銅銭の枚数との関係に規則性は見いだし難い。いずれにせよ、上記の対照例から、銅銭占卜文書における卦辞中の(a)と(b)の卦象は固定的な関係にあると同定できる。一方、(c)、(d)の記述内容は、文書ごとに異なることがわかった。つまり、漢語銅銭占卜文書では、銅銭の表の枚数と卦象との関係は、定式化されているが、その卦に付された事象ごとの吉凶は、任意な記述に委ねられていたのかもしれない。参考までに、(c)(d)の対照例を以下に示しておく。

<sup>66</sup> S.813の3つの卦に対しては、最後に「大吉」等の吉凶が示されているようだが、これは吉月あるいは吉日を記した前半部が脱落しているのかもしれない。

<sup>67</sup> 黄 2001, 24頁にも言及されている。

<sup>68</sup> S.813の6枚表の場合の(b)には、「陰陽相割 共相和合」と書かれているが、(a)に先行する卦象は「乾上艮下」を示している。その他の卦辞でも、他文書の(b)と符合しているのは、S.813の卦象と卦名であり、(b)箇所の記述とは合わない。

表 5 枚

S.5686

S.1468

(c) 學問不成 辭訟不通

(c) 學道不成 辭訟不通 所求難得

卜求官自返□來

若欲求官 反自來殃

卜嫁娶相離合有恠

嫁娶三年 夫妻必亡 有憂怪

卜病死 (以下欠落)

占病 [ ] 子□葬之鬼

繫者罪重 逃亡即被捉得

失物□□□□□色婢良

移徙 葬埋相害 遠行人不利 恐有病疾

表 6 枚

S.813

S.1468

(c) 占宅舍 宜子孫 田蠶 有□鬼

(c) 學者成就 辭訟 (通) 達 求所如意

來人卦 官事和求 與生有利

若欲求王相得之 嫁娶多宜子孫 占病不□

逃亡自還 有人送來 大吉利

崇在□帝 門神 竈君 繫者 (以下欠落)

表 1 枚

S.1468

S.3724

(d) 月忌 三月九月

(d) 月忌 八月十一月

日忌 戌亥丑未日

日忌 子丑

## まとめ

チベット語銅錢占卜文書は、ITJ 741、Pt.1055 + ITJ 744、Pt.1056の3文書が属す流通本と、それ以外の2文書 (ITJ 742、ITJ 1239) に大別できた。流通本は、卦の名称や事象ごとの吉凶、総合的な吉凶に至るすべての内容が相互に符合する。一方、そこに属さない文書は、それらとは全く異なる内容を持っていた。また、流通本の卦の名称が、五行思想や八卦、漢文占卜文書中に現れる名称と符合するのに対して、ITJ 742のそれは、チベット語本来の記述である可能性が高い。しかし、チベット語占卜文書の書式的特徴を継承している点では、両者に共通性がみられた。



また、チベット語文書と漢語文書には、占法や卦辞の構成要素に共通性がみられた。漢語文書の卦の名称（後半部）に示された「金土之卦」などと、チベットの「水の相」（*chu'i ngo*）、「火と土の相」（*mye dang sa'i ngo*）などには通ずる要素が見てとれ、実際、「火土の相」（*mye dang sa'i ngo*<sup>69</sup>、火土之卦<sup>70</sup>）や、「水木の相」（*chu dang shing skyes pa'i ngo*<sup>71</sup>、水木之卦<sup>72</sup>）は両文書に登場する<sup>73</sup>。一方、(c)事象ごとの吉凶に対する記述は、漢語文書内でも統一性がみられず、チベットのものとも一致しない。また、チベット語文書では不可欠である総合的吉凶が、漢語文書では必ずしも必要とされず、代わりに忌月や忌日が示されていた。

まとめると、チベット語銅銭占ト文書と漢語銅銭占ト文書の間には、占法と内容構成にある程度の符合はみられるものの、それぞれが独自の書式を有していた。つまり、両者には共通する祖本の存在を想定できない。しかしながら、銅銭占トは、中国に起源を持つ占いであり、チベット語文書には漢語文書や中国文化からの影響が多分にみられた。さらに、両者は、占ト法の淵源を周易に求めるというアイデアを共有していた。その際、チベット文書では、孔子や中国の皇帝を占トの始祖とし、漢語文書では、老子や周公がその役を担っていた。これらの占ト来歴は、事実を伝えたものであるというよりは、銅銭占トの正当性や効果を訴えるための由緒として提示されたものである可能性が高い。しかし、そこにみられる着想の一致こそ、両文書の成立背景を傍証するものであると考えられる。つまり、古チベット語銅銭占ト文書は、漢語占ト文書や中国占術に精通した人物によって書かれた可能性が高いと考えられる。そして、これらの書体的特徴からは、10世紀の文書であることが推測されるのである。

以上より、チベット語銅銭占ト文書は、吐蕃期から伝わるチベット語占ト文書の書式によって中国由来の占術を記した文献であり、おそらく10世紀の敦煌漢人社会の中で作成され、流行していた占ト書であったと考えられる。

以上が、筆者の考えるチベット語銅銭占ト文書の成立背景である。

---

<sup>69</sup> 流通本の表10枚、ITJ 742の表7枚。

<sup>70</sup> S.3724の表2枚。

<sup>71</sup> ITJ 742の表8枚。「水と木が生まれる相」である。

<sup>72</sup> S.5686の表5枚。

<sup>73</sup> このとき、銅銭の枚数は異なっていた。

【付録 流通本対照翻字テキスト】

参照の便宜をはかって、銅銭の表枚数を【 】に補った。また、下記の記号も適宜採用している。

@	： 文書中に描かれた円（銅銭の表枚数を示す）
<i>lac</i>	： 料紙の欠損により記述が失われている箇所
<i>om</i>	： 記述が省略、あるいは脱落している箇所
無表記箇所	： 文書の欠損によりテキストが存在しない箇所
(数字)	： 文書中の行番号

【表3】

ITJ 741.2	(1) klu[i] [dbya?] [ste] / srog phyā la btab na bzang //
Pt.1055 + ITJ 744	
Pt.1056	
ITJ 741.2	zla ba tshas pa dang 'da ba [gar?] shis pha'i [---]
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gsol [ba] btab na (2) shags 'gyod na bdag rgyal [ba'i?] ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	(1) 'gyed na / bdag rkyal ste bzang //
ITJ 741.2	rje blas dang [do-l] zhig gsol na kha nas ['phog] pa yod ba'i ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	[rje] blas gsol na kha nas (2) 'phrog pa zhig yod //
ITJ 741.2	(3) gnyen byas na 'phrod /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	gnyen byed na 'brIng //

ITJ 741.2	khang gyim byas na 'nor [du] /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	khang khIm byed (3) pa la btab na nor 'du //
ITJ 741.2	[stor] la btab na / res shig [---]
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	gdon phyas la (4) btab na // phas myes gI sri gdod ba'i ngo / nad phal btab na nad tshaps che yang myi gi 'o //
Pt.1055 + ITJ 744	<i>lac</i>
Pt.1056	nad pa la btab na tshabs chI na yang (4) [myI] [--] [cIg] // pha gyes khI srI gdon te / co ga byas na phan //
ITJ 741.2	don [---] la (5) btab na don myi 'grub //
Pt.1055 + ITJ 744	(1) ba la btab na don myi 'grub //
Pt.1056	(5) [don?] gnyer na myI 'grub //
ITJ 741.2	dgra 'phyas la btab na / dgra dang 'phrad pa'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	dgra pya la (2) btab na dgras myi tshugs //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	<i>om</i>
Pt.1055 + ITJ 744	'pho skyas bya (3) na ngan //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	'dron po la re shi[g] [myId?] (6) de res shig myi 'od de
Pt.1055 + ITJ 744	'dron po la btab na nye zho myed de (4) re shig myi 'ong //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	mo dI gzhi /
Pt.1055 + ITJ 744	mo gzhi : /
Pt.1056	[mo] [ci] btab kyang ['bring ngo] /

【表4】

ITJ 741.2	@@@@ /
Pt.1055 + ITJ 744	om
Pt.1056	@@@@ /
ITJ 741.2	dong tse bzhi gan de gzhan phub na / gzhan pub na /
Pt.1055 + ITJ 744	(5)\$ // dong tse bzhI gan te gzhan bub na /
Pt.1056	(6) dotse bzhI gan te gzhan bub na /
ITJ 741.2	chu ngo 'byung ste
Pt.1055 + ITJ 744	chu 'i (6) ngo byung ste //
Pt.1056	chu'I ngo ste /
ITJ 741.2	lus la (7) gdon myed /
Pt.1055 + ITJ 744	lus la gdon myed //
Pt.1056	om
ITJ 741.2	srog phyas dang khyIm phyal btab na bza[ng]
Pt.1055 + ITJ 744	khyim (7) pya dang srog pya la btab na bzang //
Pt.1056	khyIm phyas dang srog (7) phyas la btab na bzang //
ITJ 741.2	snying la 'tser ba yod kyang nyes pa myi 'byung / bya'o chog (8) 'gru //
Pt.1055 + ITJ 744	snying la (8) 'tsher ba yod kyang nyes pa myi 'byung // bya 'o (9) cog grub //
Pt.1056	snyIng 'tsher ba zhIg yod na yang de'u [re] (8) 'byang // bya 'o chog phams [shad] 'grub ste / bdag dga' /
ITJ 741.2	gnyen 'phyas na bu tsha gzhin //
Pt.1055 + ITJ 744	gnyen bya na bu tsa gzhin //
Pt.1056	gnyen (9) byed na / gnyen ['byor]
ITJ 741.2	khang khyIm phyas na kha dro //
Pt.1055 + ITJ 744	khang (10) khyim bya na kha dro //
Pt.1056	khang khyim bya na nor 'du //

ITJ 741.2	<i>om</i>
P.t.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na sos (11) pa'i ngo //
P.t.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	<i>om</i>
P.t.1055 + ITJ 744	gdon pya la btab na / drI mo dang (12)thab rgod che //
P.t.1056	gdon phya la (10) btab na thab rgod dang drI mor gdon // cho ga byas na phan 'o //
ITJ 741.2	<i>om</i>
P.t.1055 + ITJ 744	don gnyer na grub //
P.t.1056	(11) don gnyer na nyur du 'grub //
ITJ 741.2	<i>om</i>
P.t.1055 + ITJ 744	dgra pya la (13) btab na / dgra myed //
P.t.1056	dgra bya la btab na bzang //
ITJ 741.2	<i>om</i>
P.t.1055 + ITJ 744	bor rlag byung na rnyed pa'I (14) ngo //
P.t.1056	(12) stor lag byung rnyed /
ITJ 741.2	<i>om</i>
P.t.1055 + ITJ 744	'pho skyas bya na bzang //
P.t.1056	pho skyas byas na bzang //
ITJ 741.2	nad pal btab na nad sos pa'i ngo //
P.t.1055 + ITJ 744	nad pa la btab (15) na sos pa'i ngo //
P.t.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	(9) 'dron pal btab na nyur du phyIn //
P.t.1055 + ITJ 744	'dron po la btab na / (16) myur du phyin te
P.t.1056	'dron po la btab (13) na nyur du phyIn te

ITJ 741.2	mo 'dI ci la btab khya bzang ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	mo 'di ci la btab kyang bzang (17) rab bo / : /
Pt.1056	mo 'dI ci la btab kyang bzang rab 'o /

【表5】

ITJ 741.2	@ @ @ @ @ /
Pt.1055 + ITJ 744	om
Pt.1056	@ @ @ @ @ /

ITJ 741.2	dong tse lnga gan [de] gzhan bub na //
Pt.1055 + ITJ 744	(18) \$ // dong tse lnga gan te gzhan bub na /
Pt.1056	dotse (14) lnga gan te gzhan bub na /

ITJ 741.2	(10) gser gyi ngo byung ste //
Pt.1055 + ITJ 744	gser (19) gi ngo byung ste //
Pt.1056	gser kyI ngo 'byung ste /

ITJ 741.2	srog 'phya dang 'khyIm bya la btab na // nor rdzas shIg rgod che'o // bya'o cog (11) myi 'grub //
Pt.1055 + ITJ 744	khyim phyang dang srog pya la btab (20) na // nor rdzas shig la gdon che ste / bya 'o cog (21) myi grub //
Pt.1056	khyIm phyang la btab (15) na / nor rdzas cig gdon ste // bya 'o chog myi 'grub

ITJ 741.2	srog 'phyang la btab na shi ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	srog pya la btab na shi ba'i ngo //
Pt.1056	om

ITJ 741.2	nad pal btab na myur du sa ma spos na shi ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	nad (22) pa la btab na // myur du sa ma spos na shI ba'I ngo
Pt.1056	nad pa la (16) btab na 'chI ba'I ngo //

ITJ 741.2	(12) gsol pal btab dang shags 'debs na 'pham pha'I ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(23) gsol ba dang shags bkye na myi gnang ste pham (24) ba'i ngo //
Pt.1056	om

ITJ 741.2	gnyen byas na [gim?] [dab] shi ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	gnyen bya na khyim tab shi ba'i ngo //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	dra' phyä (13) la btab na dra dang phrad ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(25) dgra pya la btab na / dgra dang phrad pa'i ngo //
Pt.1056	dgra phyä la btab na dgra phrad pa'I ngo //
ITJ 741.2	zhal ce la btab na [zhal] ce re shig myi 'byang //
Pt.1055 + ITJ 744	zhal (26) ces btab na re shig myi 'byang //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	srid 'bya la btab na (14) sri mya ba'I ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	srid pya la (27) btab na / srid myed pa'i ngo //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	'dron po la btab na nye zho [pyang] [mang] res shig myi 'ong
Pt.1055 + ITJ 744	'dron po la btab (28) na nye zho byung ste / re shig myi 'ong //
Pt.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	stor lag 'phyung na re shi myi (15) rnyed //
Pt.1055 + ITJ 744	bor rlag la (29) btab na myi rnyed //
Pt.1056	(17) stor lag byung myI rnyed //
ITJ 741.2	mo di ci la btab na yang ngan pha'o ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	mo 'di ci la btab kyang (30) ngan rab bo :/
Pt.1056	mo 'dI cI la btab kyang ngan /

【表6】

ITJ 741.2	@@@@@@ /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>om</i>
Pt.1056	@@@@@@ /

ITJ 741.2	dong tse drug gan de gzhan bub na
Pt.1055 + ITJ 744	\$ // dong tse drug gan te gzhan bub na /
Pt.1056	(18) dotse drug gan te gzhan bub na /
ITJ 741.2	se'i ngo 'byung ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	sa 'I ngo byung (32) ste //
Pt.1056	sa'I ngo ste
ITJ 741.2	(16) khyIm phyas dang srog phyal btab na bza //
Pt.1055 + ITJ 744	khyIm pya dang srog pya la btab na bzang / rab
Pt.1056	khyIm phyas dang srog phyas(19) la btab na bzang //
ITJ 741.2	gsol ba dang shags btab na / bdag rgya[l]'i ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	(33) gsol pa dang shags bkye na gnang nas bdag rgyal (34) ba'I ngo //
Pt.1056	gsol ba dang shags 'gyed na bdag rgyal (20) snyIng dga' //
ITJ 741.2	gnyen byas (17) na 'phrod de bu tsha gzhin /
Pt.1055 + ITJ 744	gnyen bya na 'phrod de bu tsa gzhin //
Pt.1056	gnyen byed na 'brod bu tsa gzhIn /
ITJ 741.2	khang khyIm 'bus na[dab?] [nga?] dang skye // 'phyug btsan ba'i ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	(35) kang khyIm bya na / dbang dang skye phyug btsan ba'I ngo /
Pt.1056	khang khyIm byed (21) na kha dro // dbang tang che // btsan phyag du 'gyur //
ITJ 741.2	don nyer grub //
Pt.1055 + ITJ 744	(36) don gnyer na grub //
Pt.1056	don gnyer na (22) don grub /
ITJ 741.2	(18) nad pa la btab na nad sos pa'i ngo'o /
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na sos /
Pt.1056	nad pa la btab na za thab cig gdon / cho ga byas na (23) kha dro //
ITJ 741.2	stor lag byung na rnyed bar 'ong ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(37) bor rlag byung na rnyed pa'I ngo //
Pt.1056	om



ITJ 741.2	pho skyabs byas na bzango //
P.t.1055 + ITJ 744	‘pho skyas bya na (38) bzang //
P.t.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	(19) 'dron phol btab na myu du myI phyin de
P.t.1055 + ITJ 744	‘dron po la btab na myur du phyin te /
P.t.1056	<i>om</i>
ITJ 741.2	mo bzang ngo /
P.t.1055 + ITJ 744	(39) mo ‘di ci la btab kyang bzang rab bo / : /
P.t.1056	ci la btab kyang bzang rab 'o //
【表7】	
ITJ 741.2	@ @ @ @ @ @ @ /
P.t.1055 + ITJ 744	<i>om</i>
P.t.1056	@ @ @ @ @ @ @
ITJ 741.2	dong tse bdun kan de gzhan phub na //
P.t.1055 + ITJ 744	(40) \$ // dong tse bdung gan te gzhan bub na /
P.t.1056	dotse bdun gan te
ITJ 741.2	ri ngo byung ste //
P.t.1055 + ITJ 744	ll'i (41) ngo byung ste //
P.t.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	(20) srog phya dang dgra phya la bthab na ngan //
P.t.1055 + ITJ 744	srog pya dang khyim pya la btab na (42) ngan //
P.t.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	bla nas gyod rmas 'am rmI rma pal btab na rma ba'I ngo //
P.t.1055 + ITJ 744	bla nas gyod rmas saM myi rmas pa la btab na (43) rmas pa'i ngo //
P.t.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	nad pa la (21) btab na cho ga ma byas na 'shi ba'i ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na cho ga ma byas (44) na shI ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	lam ring por song ngam myi sa bal btab na song te / nye zhe bya [nga?] (22) ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	lam ring por 'gro 'am myi 'gro ba(45) la btab na / 'gro ste ne zho 'byung ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	dgra 'phya la btab na gra dang phrad pa'i ngo'o /
Pt.1055 + ITJ 744	dgra (46) pya la btab na / dgra dang phrad pa'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gsol pa la btab na myI gnang //
Pt.1055 + ITJ 744	gsol ba (47) la btab na myi gnang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gdan phyal (23) btab na rtsog dang thab yod pa'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	gdon pya la btab na / rtsog (48) dang thab che ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	grog 'phya la btab na grog myed pa'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	grog pya la btab na grog myed /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	'dron po la btab (24) na de sa shi myi 'o //
Pt.1055 + ITJ 744	(49) 'dron po la btab na / re shIg myi 'ong //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	mo di cil btab yang ngan tho /
Pt.1055 + ITJ 744	mo 'di (50) ci la btab kyang ngan rab bo / : /
Pt.1056	<i>lac</i>

【表8】

ITJ 741.2	@@@@@@@@ /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>om</i>
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	dong tse brgyad bub nas kan de gzhan bub na
Pt.1055 + ITJ 744	(51) \$ // don tse brgyad gan te gzhan bub na //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	(25) sa dang chu'i ngo 'byung ste //
Pt.1055 + ITJ 744	sa dang (52) chu 'i ngo byung ste /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gsog phyal btab na bzang //
Pt.1055 + ITJ 744	lus ki srog pya la btab na bzang (53) rab //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	khyIm 'phya la btab na // snying 'tsor pa yod (26) kyang / nyes pa yod ya[ng] myi 'byung de bzang //
Pt.1055 + ITJ 744	khyim pya dang srid pya la btab na / snyIng la 'tsher (54) ba yod kyang nyes pa myi 'byung ste bzang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	dgra 'phya la btab na // dgras myi tshugs /
Pt.1055 + ITJ 744	dgra pya (55) la btab na / dgras myi tshugs //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	da / ngo 'phyal (27) dang gsol pa la btab na myi gnang //
Pt.1055 + ITJ 744	ngo 'phral dang las (56) gsol na myi gnang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	don gnyer na myi 'grub //
Pt.1055 + ITJ 744	don gnyer na myi grub /
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	gnyen bya na 'byor //
Pt.1055 + ITJ 744	gnyen (57) bya na 'byor //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	nad pa la (28) btab na nyur du 'phyang //
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na myur du ['byang?] //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	stor lag 'byung na res shig myi rnyed de gzhan gIs zin ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(58) bor rlag byung na re shlg myi rnyed de gzhan gis brin [pa'i ngo]
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	po spyabs (29) na nyes pa myi 'byung //
Pt.1055 + ITJ 744	(59) 'pho skyas byas na nyes pa myi 'byung //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	khang khyIm 'byas na gdon myi ldang //
Pt.1055 + ITJ 744	khang khyim byas (60) na gdon myi ldang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	'dron pol btab na / re shig myi (30) 'ong nye zhe 'myed //
Pt.1055 + ITJ 744	'dron po la btab na nye zho myed de (61) re shig myi 'ong //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	grog 'phyal btab na grog myi ldang //
Pt.1055 + ITJ 744	grog pya la btab na grog phyi dal //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gdon phyal btab na / myi lha dang 'gong (31) po mchis pa'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(62) gdon pya la btab na myi lha dang gdon ngo mchis pa'i ngo /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	phar song ngam ma song ba la btab na 'myi 'song ba'i ngo'o //
Pt.1055 + ITJ 744	(63) phar 'gro 'am myi 'gro ba la btab na myi 'gro ste
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	mo gzhi /
Pt.1055 + ITJ 744	mo (64) gzhi /:/
Pt.1056	lac

【表9】

ITJ 741.2	@@@@@@@@ /
Pt.1055 + ITJ 744	om
Pt.1056	lac

ITJ 741.2	dong tse (32) dgu gan de gzhan bub na /
Pt.1055 + ITJ 744	(65) \$ // dong tse dgu gan de gzhan bub na //
Pt.1056	lac

ITJ 741.2	kong tse ngo 'byung ste /
Pt.1055 + ITJ 744	kong tse 'i (66) ngo 'byung ste //
Pt.1056	lac

ITJ 741.2	khyIm 'phyang dang srog 'phyal btab na (33) bzang ngo // zla ba nya ba bzhin yar yar skya 'o bzang rab /
Pt.1055 + ITJ 744	khyim pya dang srid pya la btab na / (67) zla ba tshes pa bzhin ste / yar yar skye zhing bzang (68) rab //
Pt.1056	lac

ITJ 741.2	nad ba la btab na / nad sos pha'i (34) 'ngo'o //
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na sos pa'i ngo //
Pt.1056	lac

ITJ 741.2	'ong myi 'ong ba la btab na nye zho myed bnyur thu 'ong ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	'ong ngam (69) myi 'ong ba la btab na / nye zho myed de myur du 'ong (70) ba'i ngo //
Pt.1056	lac

ITJ 741.2	grog 'phya la btab na grog (35) che pa'i ngo 'o //
Pt.1055 + ITJ 744	grog pya la btab na / grog ched po thob (71) pa'I ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gsol ba dang shags 'gyed na bdag rgyal ba'I ngo 'o /
Pt.1055 + ITJ 744	gsol ba dang shags 'gyed na / bdag (72) rgyal nas snying dga' ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	srid 'byal btab (36) na / srid yod ba'I ngo'o /
Pt.1055 + ITJ 744	srid pya la btab (73) na bzang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	nad pa la dbad na nad sos ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na myur du sos pa'i (74) ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	srog 'phya la btab na bzang rab ba'o //
Pt.1055 + ITJ 744	srog pya la btab na bzang /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	(37) 'dron pho la btab na bla nas skyab ba'i ngo 'o //
Pt.1055 + ITJ 744	'dron po lam (75) du zhugs te 'gro ba la btab na // bla mas bskyabs (76) mdzad pa'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	mo 'di chI la btab na yang bzang ngo /
Pt.1055 + ITJ 744	mo 'di ci la btab kyang bzang rab bo
Pt.1056	<i>lac</i>

【表10】

ITJ 741.2	@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>om</i>
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	dong tse (38) bcu kan te gzhan bub na //
Pt.1055 + ITJ 744	(77) /:/ \$ /:/ dong tse bcu gan te gzhang bub (78) na //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	mye dang sa'i ngo 'byung ste //
Pt.1055 + ITJ 744	mye dang sa'i ngo byung ste //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	lus la nad myed //
Pt.1055 + ITJ 744	lus la nad myed /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	srog 'phya la btab na (39) bzang ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(79) srog pya la btab na bzang /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	don gnyed na don 'grub //
Pt.1055 + ITJ 744	don gnyer na don grub /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	ngo 'phral dang gsol ba btab na / gnang ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(80) ngo 'phral dang las gsol na gnang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	khang 'khyIm (40) dang gnyen byas na bkra shis //
Pt.1055 + ITJ 744	khang (81) khyim dang gnyen byed na bkra shis //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	nad ba la btab na sman 'byad dang myi skos //
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la (82) btab na / rtsI sman bya myi dgos par sos //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	zhal ce 'bab na (41) nyur du 'byang /
Pt.1055 + ITJ 744	(83) zhal ces btab na myur du 'byang //
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2 stor lag 'pyung na nye //  
 Pt.1055 + ITJ 744 bor rlag byung (84) na myed dka' //  
 Pt.1056 lac

ITJ 741.2 'pho skyabs byas na nye zho myi [dang?] 'byung //  
 Pt.1055 + ITJ 744 'pho skyas byas na nye zho myi 'byung //  
 Pt.1056 lac

ITJ 741.2 dron pol (42) btab na re shig myi 'ong //  
 Pt.1055 + ITJ 744 (85) 'dron po la btab na re shig myi 'ong ste  
 Pt.1056 lac

ITJ 741.2 mo di gzhi 'o //  
 Pt.1055 + ITJ 744 mo (86) gzhi  
 Pt.1056 lac

【表11】

ITJ 741.2 @@@@ /  
 Pt.1055 + ITJ 744 om  
 Pt.1056 lac

ITJ 741.2 dong tse bcu kchig gan de gzhan bub na  
 Pt.1055 + ITJ 744 /:/\$ // dong tse bcu gcig (87) gan te gzhan bub na //  
 Pt.1056 lac

ITJ 741.2 bcu gong (43) gyi ngo 'byung ste //  
 Pt.1055 + ITJ 744 ki wang gi ngo byung ste  
 Pt.1056 lac

ITJ 741.2 bla nas gyod rma 'am myi rma[s] la btab na rma ba'i ngo //  
 Pt.1055 + ITJ 744 (88) bla nas gyod rmas saM myi rmas pa la btab na / (89) rmas pa'i ngo //  
 Pt.1056 lac



ITJ 741.2	khyim 'phya dang [srid srog?] phyal(44) btab na // don myi 'grub ba'I / ngo / gdon phugs su zhugs te chi 'byas yang myi 'grub //
Pt.1055 + ITJ 744	khyim pya dang srog pya la btab (90) na / gdon phugs su zhugs te bya dgur myI rung
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gdon 'phya (45) la la btab na // rgya 'byin dang // the <'u> 'u rang che 'o //
Pt.1055 + ITJ 744	(91) gdon pya la btab na / rgyal byin dang the'u rang che (92) ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	nad pal btab na nad pa shi be'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na shI ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	shags (46) 'gyed na 'pham pa'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	shags (93) bkye na pham ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	'ong ngam myi 'ong bal btab na / myi 'ong ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	'ong ngam myi 'ong (94) ba la btab na myi 'ong //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	grog 'phya la btab na (47) grog 'myed //
Pt.1055 + ITJ 744	grog pya la btab na (1) grog myed //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	dgra 'phya la btab na gra dang phrad pha'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	dgra pya la btab na dgra dang phrad (2) pa'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	don gnyer pa la btab na don myi grub /
Pt.1055 + ITJ 744	don gnyer ba la btab na don (3) myi 'grub ste
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	(48) mo ti ngan /
Pt.1055 + ITJ 744	ngan no / : /
Pt.1056	<i>lac</i>

【表12】

ITJ 741.2	@ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ @ /
Pt.1055 + ITJ 744	<i>om</i>
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	dong tse bcu gnyis gan te
Pt.1055 + ITJ 744	(4) \$ // dong tse bcu gnyis ril gan na
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	the 'u ngo kong gi ngo byung ste //
Pt.1055 + ITJ 744	the'u (5) kong gi ngo byung ste //
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	khyIm 'phyas dang / srog phya la (49) btab na bzang bar //
Pt.1055 + ITJ 744	khyim pya dang srog pya (6) la btab na bzang rab //
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	grog 'phyas la btab na grog che //
Pt.1055 + ITJ 744	grog pya la btab (7) na grog che //
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	gnyen 'phyal btab na bkra shis ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	gnyen byas na bkra shis ba'i (8) ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2	dgra (50) phya la btab na gra myed //
Pt.1055 + ITJ 744	dgra pya la btab na dgra myed //
Pt.1056	<i>lac</i>

ITJ 741.2 pho srid 'bya pa la btab na / nye zho myI 'byung //

P.t.1055 + ITJ 744 'pho (9) skyas byas na nyes pa myi 'byung //

P.t.1056 lac

ITJ 741.2 khang khyim byas // gdon myi (51) ldang ngo /

P.t.1055 + ITJ 744 khang (10) khyim byas na gdon myi ldang //

P.t.1056 lac

ITJ 741.2 ngo phral dang la gsol ba na [nang ngo] thod //

P.t.1055 + ITJ 744 ngo 'phral (11) dang las gsol na thob //

P.t.1056 lac

ITJ 741.2 srid 'phya la btab bzang //

P.t.1055 + ITJ 744 srid pya la btab na (12) bzang /

P.t.1056 lac

ITJ 741.2 om

P.t.1055 + ITJ 744 nad pa la btab na sos pa'I ngo //

P.t.1056 lac

ITJ 741.2 om

P.t.1055 + ITJ 744 (13) mo 'di ci la btab kyang bzang rab bo / : /

P.t.1056 lac

#### 【表0】

ITJ 741.2 om

P.t.1055 + ITJ 744 (14) dong tse ril bub na // srin zha mo 'i sgo //

P.t.1056 lac

ITJ 741.2 om

P.t.1055 + ITJ 744 (15) lha thams cad gyis zhabs kyis mnan ba'i (16) ngo byung ste //

P.t.1056 lac

ITJ 741.2	<i>om</i>
Pt.1055 + ITJ 744	khyim pya dang srid pya la btab na (17) bzang rab //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	srog 'phya la btab / myi shI //
Pt.1055 + ITJ 744	srog pya la btab na myi shi //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	shags (52) gyed na bdag rgyal ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	(18) shags bkye na bdag rgyal ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gnyen phyas na 'phrod //
Pt.1055 + ITJ 744	gnyen (19) byas na 'phrod //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	'dron po la btab na re shi 'myi 'ong //
Pt.1055 + ITJ 744	'don po la btab na re (20) shig myi 'ong //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	gdon (53) phyal btab na the 'u rang dri mo sdong ba'i ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	gdon pya la btab na // (21) the'u rang dang dri mo sdong ba'i ngo //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	dgra 'phya la btab na dgra myed //
Pt.1055 + ITJ 744	dgra (22) pya la btab na dgra myed //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	pho skyabs bya na bzang /
Pt.1055 + ITJ 744	'pho skyas byas (23) na bzang / nyes pa myi 'byung /
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	(54) don 'phyal btab na don grub //
Pt.1055 + ITJ 744	don pya la btab (24) na don grub //
Pt.1056	<i>lac</i>

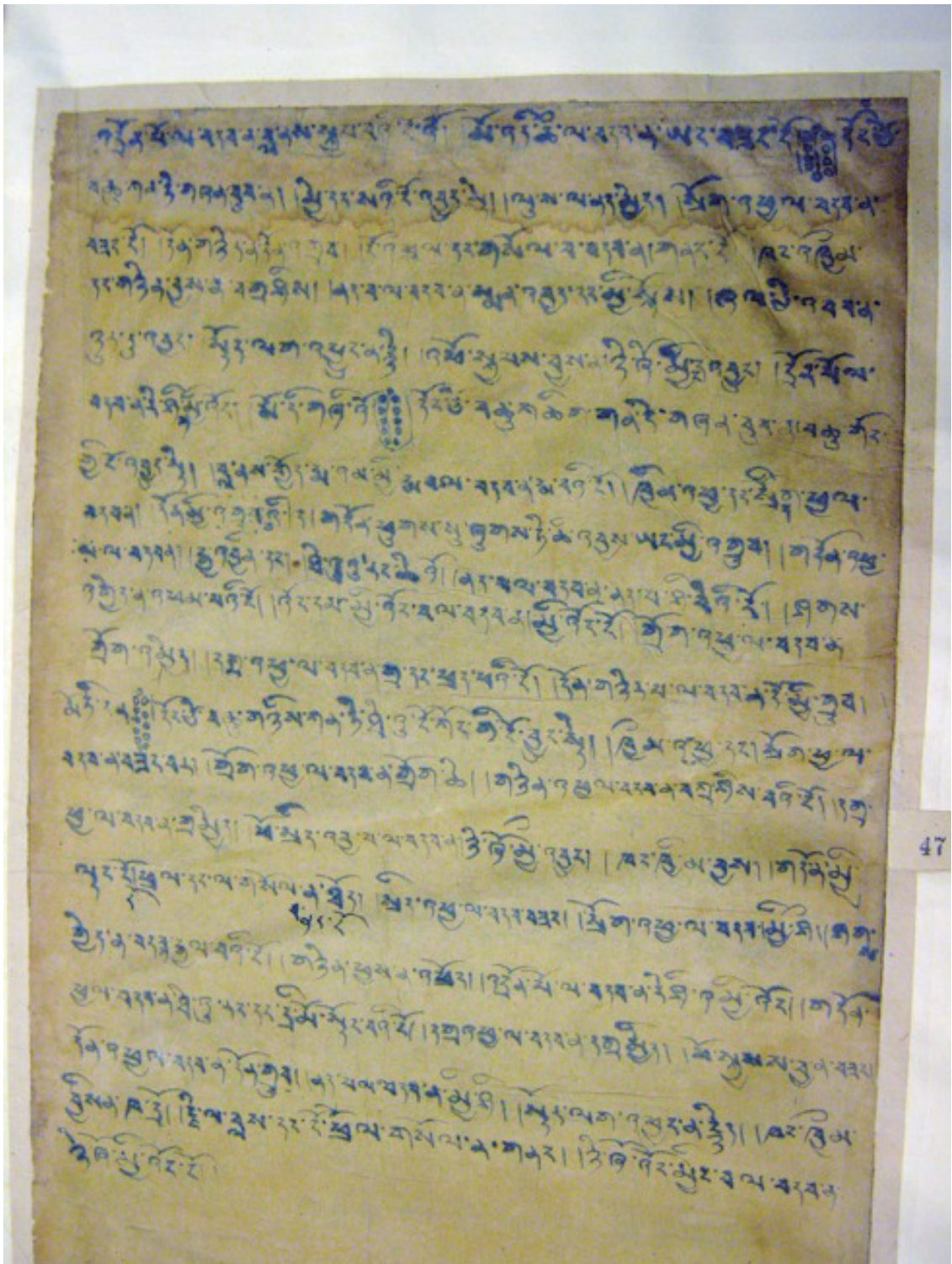
ITJ 741.2	nad pal btab na myi shi //
Pt.1055 + ITJ 744	nad pa la btab na myi shi //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	stor lag 'phyung na rnyed //
Pt.1055 + ITJ 744	(25) bor rlag byung na rnyed dka' //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	khang khyIm (55) byas na kha dro //
Pt.1055 + ITJ 744	khang khyim (26) byas na kha dro //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	rje <la> blas dang ngo phral gsol gsol na gnang //
Pt.1055 + ITJ 744	<rja> / rje blas dang ngo 'phral (27) gsol na gnang //
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	nye zho 'ong mying bal btab na (56) nye zho myi 'ong ngo //
Pt.1055 + ITJ 744	<ne zha> / nye zho 'ong (28) ngam myi 'ong ba la btab na / nye zho myi (29) 'ong ste
Pt.1056	<i>lac</i>
ITJ 741.2	<i>om</i>
Pt.1055 + ITJ 744	bzang rab bo / : / : /
Pt.1056	<i>lac</i>











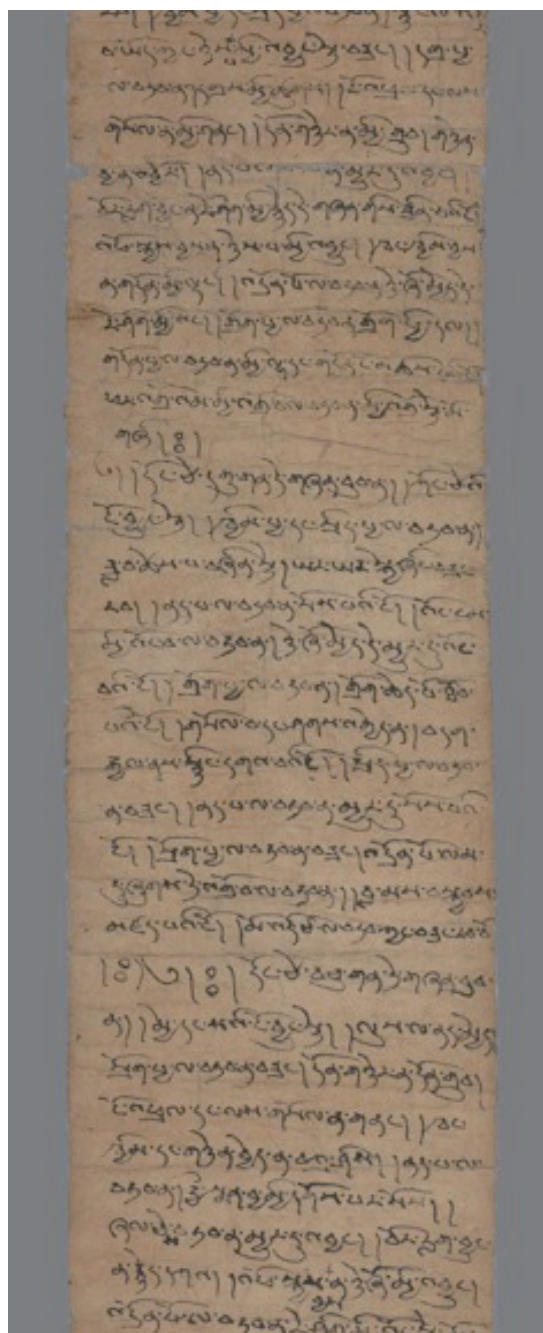
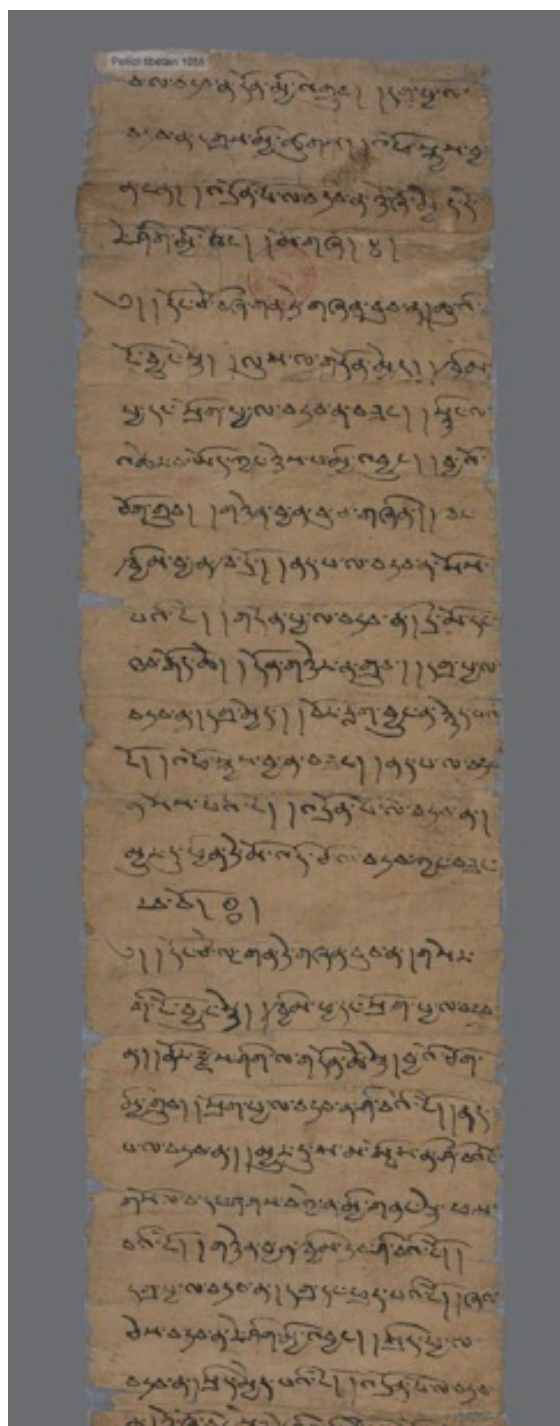


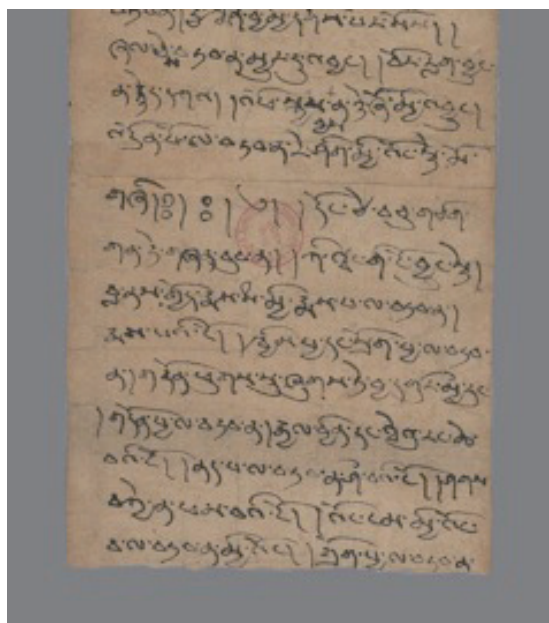
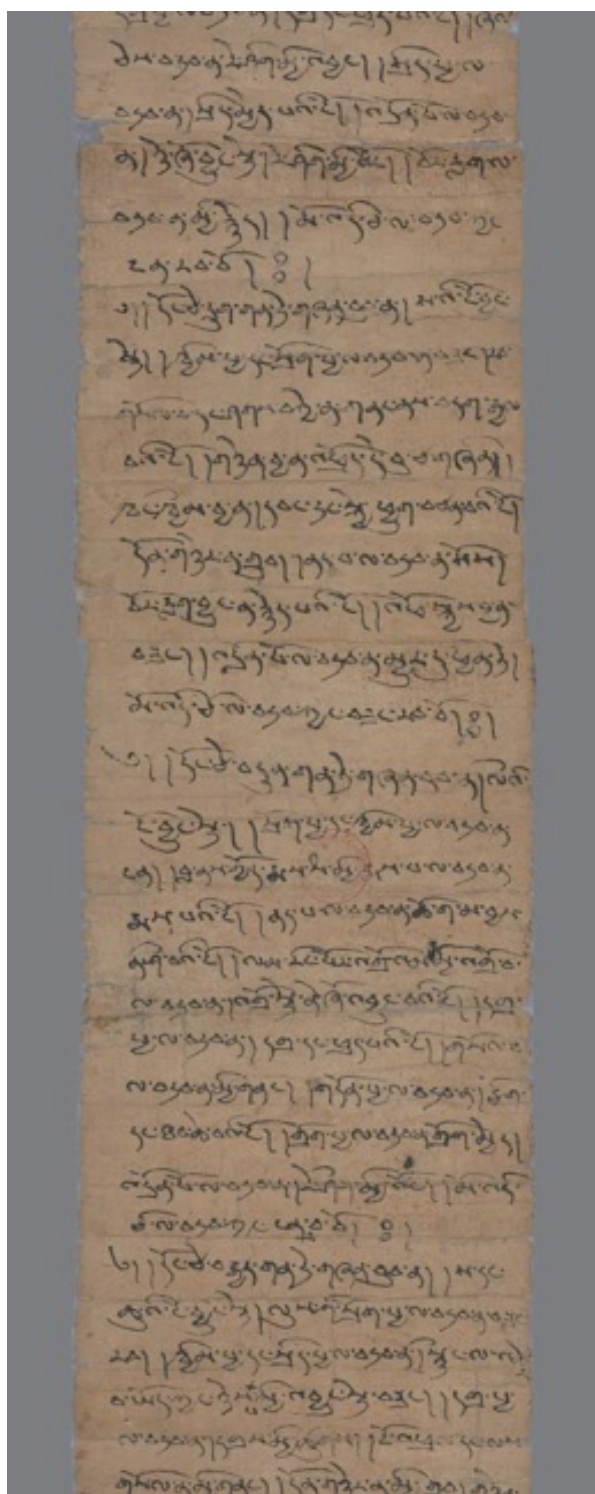
[illegible]

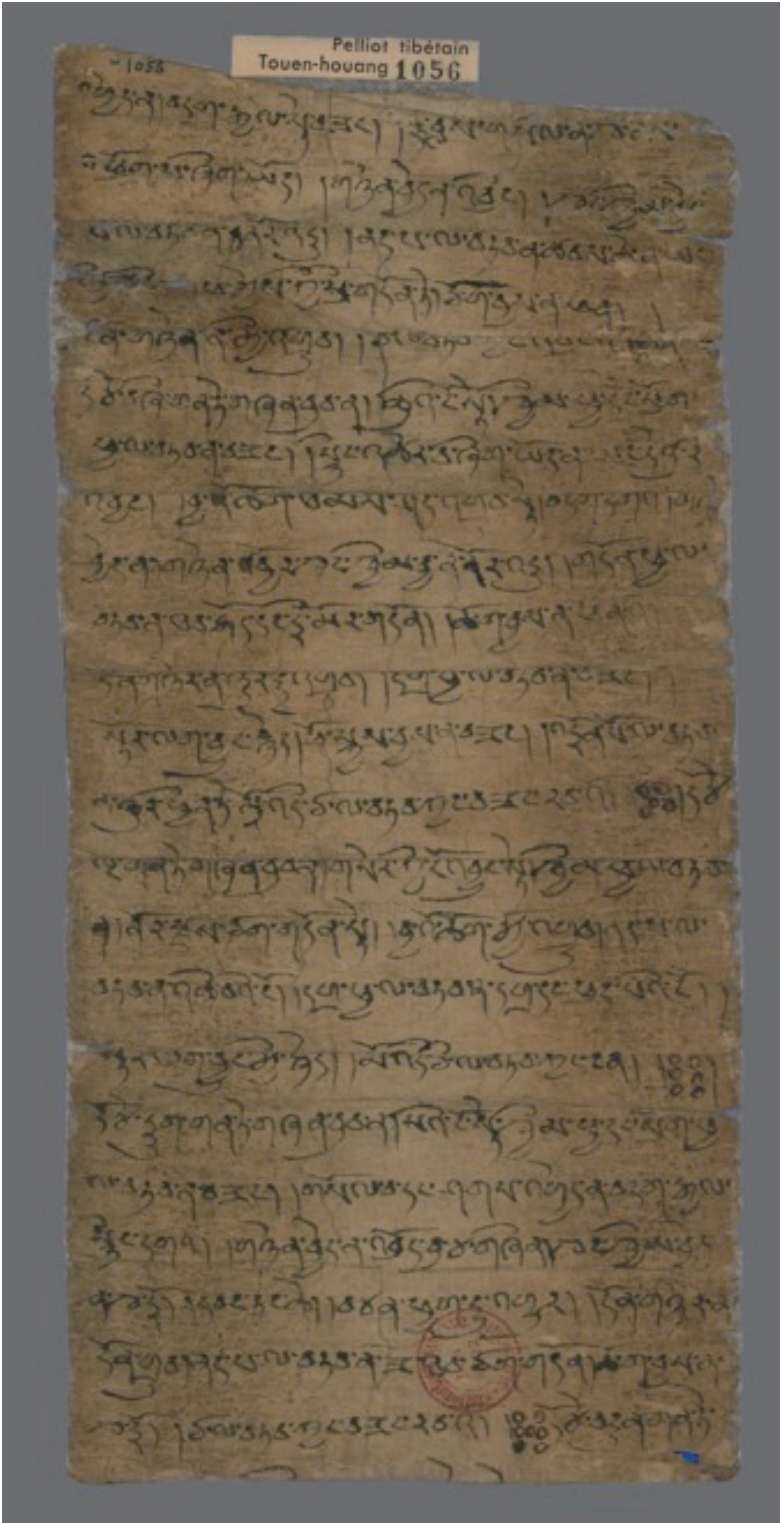
[illegible]













有者即知吉否  
水火之卦指時太昌禍處出行者惡巧求  
死出亦在比君靈神變者罪重退亡不來  
難通之全不言子孫不利口舌凶  
之卦宜合相主身大吉利憂患難免  
為之請解訟不通累友為難  
之卦宜合相主身大吉利憂患難免  
行者吉利求家今日至大吉  
合相主福祿欲至事處差操者其罪  
至禍害家神求之得是  
占病不死出亦在神樹靈君有頃頃急求  
丁未時難得以得起亡為之請解訟去不  
月念三日九月辰戌去生死  
三三 易曰六爻六陽爻陽相剋其相和合占宅舍宜子孫回祿有  
舉求合卦在事和弗興生有利退亡自選有父送其求大吉利  
三三 易曰七爻七陽爻宅舍不宜有欠債不齊貴示大吉之可  
以石摘者自是四影大得難者罪重先彌不選求之請出解訟以去

石痛者自是四時大得瘳者罪重災禍不星求之得辟訟時可  
 物難得會相和合行之却逆  
 參之三易日八文三陽震火木之卦宜合相生身吉高求如意詳訟得通  
 病退之消差至在損神耗氣屋主公移有出行全利宅中有快月忌七  
 月亥有嘔吐急解者  
 參之三易日九文三陽震火木之卦宜合相生身吉高求如意詳  
 訟得通上病不死家耗害是君父之求之得瘳者有得出行入本在二  
 可居宜子孫田園大得月忌六月八月大不利  
 晉之三易日十文離二陽坎水火之卦相剋傷身禍害交至高求不得禍有卒  
 重事在井處急求得瘳者難了逃亡不得出者凶家入在  
 可久在忌五月十月忌子午人  
 不濟之三易日十文離二陽坎水火之卦相剋傷身禍害交至高求不得禍  
 有外求宗在井處急求得瘳者難了逃亡不得出者凶家入在  
 有定金不可久在忌五月十月忌子午人  
 否之三易日十二文無陽相對大富吉昌時求如意詳訟  
 得理有瘳者無罪逃亡難得出行大吉求人在道興生有利宅舍可以  
 親求以解六開稱心宜在二堂散朱衣  
 辛亥年馬壁上占法  
 在此上盤者得吉有不從重之問不從大急事問卦即心昔孔子馬  
 駒上壁見神卜零之知死知生知敗知成知吉知凶知行知往某入某事  
 吉之與凶惟卦所從上有謂清意誠心定意事無虛中所謂崇玉龍  
 有九枚一利有利數說說想抱之令之課也華者得二剝三剝及九剝  
 其隨筆後經對之立即驗





如提果海求可加滿數在空無後得生果報不可說也施舍白 南不傳勿底何  
阿婆鉢多阿翁兒娜頂懸老抱羅能呪他邪龍取 聖徒卷普與去忍娜  
囉波利輸登達唐店仙都茲新特越慶薩歐歐底摩阿娜耶脫刺與樂茲前  
看自者住金罵莫先事壽經車各樣持供養既知恭敬度刀才佛土如夫有朝果  
陸羅召日 南諒薄伽梵三阿耨訶囉城三泥祿老陀囉虎死三恩福地  
咒坦佬電亡隆安末臨眾收別將底亡達度度伽娜一沙新特越上蓮曼  
毗輪盧王座新娜取品法明要應訖古  
布施力能成區覺 悟布施力人師子 布施力能聲普聞 慈悲階漸最能入  
持戒力能成區覺 悟持戒力人師子 持戒力能聲普聞 慈悲階漸最能入  
忍辱力能成區覺 悟忍辱力人師子 忍辱力能聲普聞 慈悲階漸最能入  
精進力能成區覺 悟精進力人師子 精進力能聲普聞 慈悲階漸最能入  
禪定力能成區覺 悟禪定力人師子 禪定力能聲普聞 慈悲階漸最能入  
智慧力能成區覺 悟智慧力人師子 智慧力能聲普聞 慈悲階漸最能入  
念時以來就起疑已一切世間天人阿脩羅建閻婁等開建兩設皆大赦  
言信受奉行盡信受奉行來老居同易十鐵上法爭  
毛綿為陳之為陽作陽覆走火場上之法用鐵十二  
佛發其善惡業難  
之機老中署文繼示去云字不安未下者旋  
鉢如兎之日耳年耳其目耳年耳二十廿寺寺去時作委  
係相生之孫以時之為即道釋是并六神鏡舍利所七教上吉  
情高任作升堪



[illegible]

其事時作老作相生之卦凶時言凶即  
道凶相剋之卦神鑒舍利師上云卜者情  
高任作卦批易曰文子繹坎上陽下水火相剋  
之卦行人稽顙病者困出宗在北辰電神田縣  
有罪亡失者速有人見先有大鼠為難誣訟未了田墾不稱月忌八月十月日忌子午妊身生  
女宅舍不安盜犯土公急解之去吉有大縮自  
返耳急宜解之無凶大衰易曰文子繹坤上陰  
下柔之卦母子相生禍害不起卜身吉病者差  
索是寢電火被青四者得出失物自得先  
角帝年乙巳庚寅丁丑戊辰庚午申木子壬午癸酉金甲戌  
來丙辛壬子癸卯火信發其五庚辰前已全雄任午癸未甲申己未  
周本原成王戊子己亥庚寅  
戊子己亥庚寅辛卯木壬辰癸巳水甲午乙未金  
丙申丁酉戊戌己亥木庚辰辛巳土壬午乙未金  
直金中戊亥於丙子丁丑未九宿癸亥外土庚辰辛  
己金壬午癸未木甲申乙酉丙戌丁亥未少不已豈天  
理然則美惡事主且付休看藝百鬼者多矣  
李老君周易李老君周易十籤卜滾不得為陰  
之為陽陰律陽覆老子易卜之求用鏡十二支鄭  
者觀中者之綺郎之意乃不失乘卜有人捉錢如  
咒之中約某年某甲明事于某甲所吉時作吉作相生  
之卦凶時言之凶即道呂相剋之卦神鑒舍利師上云  
之下有情高任作卦批易曰文子繹坎上陽下水火相  
剋之卦行人稽顙病者困出宗在北辰電神田縣案有  
罪亡失者速有人見先有大鼠為難誣訟未了田墾  
不稱月忌六月日忌子午妊身生女宅舍不安盜犯土公  
有大縮自返耳急宜解之無凶大衰易曰文子繹坤上  
陰下柔之卦母子相生禍害不起卜身吉病者差  
索是寢電火被青四者得出失物自得先有犬鼠為  
垢行求釋訟得利昌五月月犯情龍法目忌  
中午壬子身湯定去金夫去易曰文子繹震上雷下木相生  
有喜田墾大得卜身吉訴未絕意日較未無  
離訴訟得財家風欣嘉病者不死朱在廣  
電晨火被擒失物自得行人馬至否者言自己  
年日任身生男壬午亥吉忘既犯青龍去六  
急前名去易曰文子繹巽上風下木之卦宜相生富  
疎至更連除卜身志輕案者罪安領得通家  
凡營養所求如意病者不死宗在本神電晨行



急前之吉易曰日之繼星上良下金上之卦定相生富  
 保至見速陰下上身去較安者罪解領得通象  
 凡欲望者所求如意病者不死安在木神靈電展行  
 人破王居過月十日居已得日  
 高屋頂云月夢黃濟家種居不見生（鳥為酒）字甚身居  
 不見生鳥為酒  
 郎居頂全身莫共酒亦親居不見生（鳥為酒）  
 字其月易月十日之繼坎上為下亦生之卦戊  
 高屋頂云身夢共酒親居不見生（鳥為酒）送其男  
 易日云十日繼坎上為下水火相起之推九天行年虎居壽主  
 陰歲十年飛柱平通未十式重寶貞六子退土子十  
 作未十太食九十六清後赤產至亥清周而後始  
 年至赤產百事不似男不似婦女不宜夫赤赤赤  
 良辭除年至起歲六神不寧淨必無捏百事不  
 成權

憂未得日。卜櫬安。小吉。卜  
 病。祟在山神。并祀太公之神。  
 憂家有病。作怪。卜禁者。無罪。  
 卜此言難得。卜失物。家奴。埋  
 人死之。卜入舍。小吉。卜禁埋大  
 吉。卜移徙。有凶。宜後世。卜

行人三日。勿至忌。二月。四月。卯。平日  
 不得。吊死。陷。病。慎之。即吉。  
 易曰。四文。八易。巽。艮。之卦。去木  
 之神。合相生。憂自除。晴。道  
 成。詭。辭。通。達。所求。如意。六  
 官。事。自。散。有人。相。為。所。卜。燈  
 自如。夫妻。相生。卜。病。者。不。相  
 宜。祟。在。家。電。君。神。口。許。不  
 實。卜。禁。埋。不得。哭。聲。出。  
 卜。禁。者。罪。重。卜。此。亡。者。殺  
 人。樂。物。者。道。難。得。卜。移。徙。  
 舍。吉。卜。行。人。在。路。未。忌。三。月

九月。丑。未。之。日。不。宜。遠。行。及  
 死。陷。病。慎。之。大。吉。易。曰。五  
 文。七。易。震。光。之。卦。水。木。之。禍  
 百。事。相。冠。已。不。學。問。不。成。辭。詭  
 不。通。卜。水。官。自。安。候。來。卜。嫁  
 娶。相。離。合。有。怪。卜。病。死

## 第2章：鵲鳴占ト

鳥の鳴き声や仕草から予兆を読み取る鳥占トは、文化史的にみてもかなり普遍的な行為のひとつであると言える。その中でも特に著名なものは、ローマの鳥ト官（augur アウグル）であろう。「共和制時代のローマでは、すべての主要な国務の遂行、たとえば民会の開催、軍隊の出勤などにさいして占トによる神の承認を必要とし、この占トを公式に担当したのが占ト官」<sup>74</sup>であり、彼らには、「鳥の観察」を意味するアウスピキウム（auspicium）権が与えられ、国家行為のために特定数種の大型の鳥の飛翔や鳴き声を特定の位置から観察する権限を託されていた<sup>75</sup>。一方、古代メソポタミアでも鳥占トが行われていた記録がある。アッカド語で記された占ト文書の中には天体や内蔵の観察による占いと共に、鳥占トに関する資料があり、猛禽類、鳥、鷺、鴨、鳩、燕などのしぐさや行為を観察して、様々な事象に対する吉凶を占っていたことがわかっている<sup>76</sup>。また、インドのリグ・ヴェーダにも「鳥占の歌」が収録されている<sup>77</sup>。リグ・ヴェーダは、インド最古の宗教文献中であるヴェーダの中でも特に古層に属するものであり、鳥占トが古い伝統に根ざしていることがわかる。その他、伝統的な中国典籍には鳥に関連した記載が豊富にあり、鳥が「孝行の鳥」であると同時に「瑞兆の鳥」でもあったことがわかる。特に、特殊な形状や色を持つ鳥が瑞兆の印であったことを記録するものが少なくない<sup>78</sup>。

---

<sup>74</sup> 平田 2001, 288頁。

また、平田によれば、鳥占トの方法は次のようであった。「先のほうが湾曲した杖をもった占ト官が、南を向いて北から南への線（カルドー）と東から西への線（デクマーヌス）を引き、天と地を四つに区分し、そこからこれら二本の線にそれぞれ二本の平行線を引いて四角形を画定した。この場所の中心に四角い小部屋（タベルナクルム）が建てられた。その入り口は南側にあり、したがって、「前の部分」が南に、「後の部分」が北になる。この部屋から鳥の飛ぶ方向を観察し、「左の鳥」すなわち東側の鳥は吉兆とされ、「右の鳥」すなわち西側の鳥は凶兆とみなされた。」（平田 2001, pp.288-289）。

<sup>75</sup> 鈴木 1978, 100頁。

<sup>76</sup> 月本 1981, 36-38頁。

<sup>77</sup> 辻 1970, 381-382頁。

<sup>78</sup> 例えば、『史記』『周本紀』には、武王が河を渡ったときに赤い鳥が現れたといい、これは殷討伐の瑞兆であったという。三本足鳥もまた瑞兆のしるしとされたことが『春秋元命紀』などにみえる（趙 2010, 74-75頁）。

隋書の女国伝や旧唐書の東女国伝には、これらの国では、鳥（雉）の内蔵を割いて中の穀物を観察することによって作物の収穫を占っていたことが伝えられている<sup>79</sup>。鳥に関連したこれらの予兆記述を比較し、そこにまたがる異同を詳らかにしていくことは、鳥占卜の起源を辿ることにつながる壮大な研究テーマであり、大変興味深い。他の地域同様、チベットにおいても、この種の占卜は最古層の文化に属するだろう。しかし、資料の制約上、チベットの文化史的最古層を解明することは難しいと言える。そこで、本論文では古チベット語で記された鳥の声による占卜書（以降、鴉鳴占卜書と呼ぶ）の文献的起源を辿ることを目的とし、占い自体の起源については論じないことにする。

さて、古チベット語鴉鳴占卜文書は、イギリス大英図書館所蔵スタイン蒐集文書中に2点、フランス国立図書館所蔵ペリオ蒐集文書中に4点の存在が確認できる<sup>80</sup>。筆者はこれまでに全文書について実見調査を行い、校訂テキストを作成している。そこで、まず各文書の文献学的情報を一覧で示す。構成については、各構成要素を持つ場合は「○」で示し、文書の欠損により有無を確認できない場合は、「不明」と記す。

---

<sup>79</sup> 『隋書』卷八十三 列伝第四十八 西域、『旧唐書』卷一百九十七 列伝第一百四十七 南蛮 西南蛮。

<sup>80</sup> 先行研究では言及されていないPt.1048文書を追加した。



## 古チベット語鴉鳴占ト文書リスト

文書番号	形状	サイズ(cm)	構成			背面
			序文	一覧表	第二部	
ITJ 746	卷子	31× 83	○	○	なし	1 行のチベット文
ITJ 747	卷子	29.5 × 104	○	○	○	チベット語手紙文
P.t.1045	卷子	32 × 88	○	○	なし	なし
P.t.1048	断片	30 × 6.5	不明	○	不明	なし
P.t.1049	卷子	27 × 65	○	○	なし	密教に関する27行のチベット文 と 8行のチベット語占ト文
P.c.3896_verso	卷子	26 × 62	なし	○		漢語『五兆占ト文』

以下、第1節では、古チベット語鴉鳴占ト文書の検証を行う。まず、先行研究について概説し、その問題点を提示した上で全6文書を紹介する。次に、先行研究には収録されていないITJ 747文書の翻字テキストと試訳を提示し、内容を吟味する。また、6点の文書にみえる相違点を比較検証することを通して、それらの相互関係について考察する。

第2節では、漢語鴉鳴占ト文書の内容と書式を精査し、チベット語文書との比較から得られた知見をもとに文書の成立背景について論ずる。さらに、チベット大蔵経テンギュル部に収録されているKākajariti（『鴉鳴観察』）と呼ばれるサンスクリット語からの翻訳典籍についても翻字テキストと試訳を提示し、古チベット語文書との関係を検証する。そして、古チベット語、漢語、サンスクリット語（からの翻訳チベット語）の三者の相関関係についてまとめる。章末には、全ての古チベット語文書と漢語文書を対照させた翻字テキストと、文書図版を掲載する。

## 第1節：古チベット語鴉鳴占ト文書読解

### 1.1. 概観と先行研究

はじめに、チベット語鴉鳴占ト文書について概説する。これらは、29節の韻文で構成された序文と（以下、序文）、横に10列、縦に11～13段に区切られた表（以下、一覧表）の二部から構成されている<sup>81</sup>。一覧表は鴉鳴を聞いた時間と方位によって予兆を知るものである。表の左端第一列には鴉鳴を聞いた夜明け前～黄昏に至る10の時間帯が示され、上段の第二段目には八方に天頂を加えた9つの方角が記されている。それらの交わる枠には「馬が1頭手に入る」などの予兆卦辞が記されている（章末の図版参照）。また、上段第一段目には、各方位で凶兆と出た場合の布施供物*gtor ma*が示されてある。この布施供物は、序文にあるように鳥に供されるものである。

ところで、古チベット語鴉鳴占ト文書の研究は、Jaques BacotによってPt.1045の序文と一覧表の翻字及び仏訳が紹介されたことに始まる<sup>82</sup>。氏はこの一覧表を、「稲妻が見えた時間と9つの方向による前兆を記した占いの一覧表である」と考え<sup>83</sup>、序文については、鳥を題材にした判じ物の類いと位置づけて紹介した<sup>84</sup>。しかし、その翌年に発表されたBerthold Lauferの論文により、これが鴉鳴占トを記したものであることが判明した<sup>85</sup>。Lauferは、一覧表の翻訳については概ねBacotの研究に従い、序文のみ新たな英訳を提示した。その後も、Bacotの仏訳を改訂した部分訳や<sup>86</sup>、いくつかの中国語訳が発表された<sup>87</sup>。また、同文書の部分和訳もある<sup>88</sup>。以上の

---

<sup>81</sup> 後述するように、ITJ 747にはさらに第二部が存在し、P.c.3896\_versoには序文が存在しない。

<sup>82</sup> Bacot 1913.

<sup>83</sup> “C’est une table de divination donnant les présages signifiés par l’éclair aperçu dans chacune des huit directions et pour chaque moment de la journée.” (同, p.445)。

<sup>84</sup> “Un préambule assez obscur est lui-même une série de rébus qui semblent avoir le corbeau pour sujet, et il se termine par la signification des différents cris de l’oiseau sacré.” (同, p.445)。

<sup>85</sup> Laufer 1914.

<sup>86</sup> Morgan 1987.

<sup>87</sup> 王・陳 1987や、それを改訂した陳楠 2007、趙貞 2010。

<sup>88</sup> 山口 1985 534-535頁、同 1987, 176-177頁。

ように、古チベット語鴉鳴占ト文書に関しては、Pt.1045以外の文書には研究の視野が及んでいないのが現状である。従って、ここで全文書の概説と比較研究を行う意義は十分にあると言える。

## 1.2. 文書概説

### 【ITJ 746】

右上部が一部欠損している卷子本形式の文書である。現在は、紙の継ぎ目で切り離され、31×42cmと31cm×41cmの2葉に分かれて保存されている。裏面には紙の欠損により5～6文字が欠落しているのに続いて、*pha 'o //*というチベット文字2文字がみえ、以下は白紙である。料紙の左から4～5cmに焼け跡とおぼしき12の穴が縦並しているため、表面のテキストも一部欠落している。上方ほど穴が大きいことから、巻いた状態で外側から火による損傷を受けた様子がうかがえる。紙の上端及び左右端に合わせて薄墨で枠がとられており、上から17cm程までの紙域には10行の横罫線が、その下には横10列×縦11段の表枠が同じく薄墨で描かれている<sup>89</sup>。罫線の8行目までに鴉鳴占トの序文とされる韻文が記され、残り2行を空白として残し、一覧表が始まる。

### 【ITJ 747】

29.5×104cmの卷子本形式文書である<sup>90</sup>。上端の余白はかなり狭いが、内容からみて完本である。背面には、14行のチベット文が異なる書写人により記されている。これは、武内によると帰義軍期に書かれた手紙文の草稿である<sup>91</sup>。表面は左右端に沿って朱枠が描かれており、9行

---

<sup>89</sup> この文書では、夜明け前の卦辞を記した第二段目に、方位が書き込まれている。

<sup>90</sup> Poussinでは、27cm+35cm+42cmに三分割されているようだが、現在は3葉が接合されている(Poussin, p.234)。また、実見調査の際、同一文書番号に29.5×8.5cmの断片文書が保管されていることに気づいたが、左端にわずかに朱色の縦罫が見える以外、記述は見当たらない。

<sup>91</sup> 武内 2002, 123頁。文書番号がCh.85.IX.(VP 1077)とされているが、内容及びCh.番号からみてITJ 747、すなわちVP 747であることに間違いない。司空宛の手紙の草稿であり、Type3と分類されている。

の序文にも僅かに朱の横罫が見える。その下には横10列×縦13段<sup>92</sup>の一覧表が朱書きされている。表中の予兆卦辞は、ほぼITJ 746中の記述と一致するが、日没、黄昏の2段には異なる内容が多々認められる<sup>93</sup>。

一覧表の下部には、朱書きされた20行の横罫中に8行のチベット文が書されている。この8行は、一覧表の内容からは独立した内容をもつので、本論文ではこれをITJ 747の第二部と呼ぶことにする。第二部では、シェー (*shad*) や日月点などの句読記号が朱書きされている。

#### 【Pt.1045】

32×88cmの卷子本形式文書で、背面は白紙である<sup>94</sup>。料紙の右上部を15×9.5cmほど欠損しているが、上下に18cmと7cm程度の余白がとられているため、テキスト自体は完本であると言える。左右端には薄墨で枠が描かれ、序文を記した8行と空白1行分の横罫線が引かれた下に、横10列×縦12段に区切られた一覧表が描かれている<sup>95</sup>。一覧表の内容は、ITJ 746と一致するため、ITJ 747とも大部分が一致する。

#### 【Pt.1048】

30×6.5cmの断片文書である。先攻研究では言及されていないが、テキストの内容から一覧表の一部であると確認できる<sup>96</sup>。しかしながら、判読できた18の前兆のうちの14は他文書の記述とは一致しない。表枠はテキストと同じ濃さの墨で書かれており、背面は白紙である。

---

<sup>92</sup> 布施供物に続く第二段目には、方角を記す枠がとられている。また、第三段目は空白であるため、縦の枠数がITJ 746よりも2段多くなっている。

<sup>93</sup> Poussin, pp.234-235。

<sup>94</sup> 上から42cmのところに紙の接合箇所が確認できる。

<sup>95</sup> ITJ 747と同じく、横2段目に方角が独記されているため、縦12段の表になっている。

<sup>96</sup> 料紙の欠損により、下段の時間名称は確認できないが、上段が *nam nangs* (夜明け) であることから、それに後続する *nyi ma shar* (日の出) であると推測できる。

【Pt.1049】

27×65cmの卷子本形式文書で、上端及び左端が欠損している<sup>97</sup>。下端にも余白は無いが、横10列<sup>98</sup>×縦11段の一覧表が確認できる<sup>99</sup>。一覧表の枠線は細く、序文9行の横罫も微かに確認できる程度である。また、序文と表の間に余白はとられていない。

背面には、27行のダラニと思われるチベット文が書かれている。下端より天地を反転させて17行の罫線が引かれており、上から8行にチベット文が記されている。こちらは、テキストの内容から、おそらく骰子占ト文書の一部ではないかと推測できるが、骰子の目は確認できない。また、背面の2つの記述の書写人は異なり、おそらく表面のそれとも一致しない。

【Pc.3896】

26×62cmからなる卷子本様式の漢語文書である<sup>100</sup>。首尾ともに消失しており、下端も大きく欠損している箇所がある。表面は五兆ト法を留めたものであり<sup>101</sup>、背面には5行の記述が2種類確認できる。第一は収獲祈願文であり第二は儀式に用いる物品・食料品のリストである<sup>102</sup>。

裏面の中央あたりから、料紙を90度左へ回転させてチベット語鴉鳴占ト一覧表が書されている。一覧表は料紙の最左端（漢語文書の上端にあたる）から始まり、右端には一枠分ほどの余白を残している。左端及び中心を欠損しているが、Pt.1045、Pt.1049と同じ横10列×縦12段の一覧表である。枠罫の取り方はやや雑で、中央の欠損部の左には書き損じた罫線の跡もみえる。

---

<sup>97</sup> 上から23cm程のところで紙が接合されている。

<sup>98</sup> 第七段目以降の左端枠は、ほぼ見えない。

<sup>99</sup> ITJ 746と同じく、夜明け前の卦辞枠内に方位が書き込まれている。

<sup>100</sup> 長さ20cm、37cm、5cmの料紙から成る。また、星占いに関する漢語文書断片がPc.3896 Pièceとして保存されている。

<sup>101</sup> 五兆ト法を留めた写本は全部で15点存在する。Pc.3896表面の五兆占トに関する記述は、その原理ではなく実際の実行例である（黄 2001, 17頁）。このうち、五兆要決略と称される五兆ト法の原理と方法の要約書であるPc.2859には、904年という記年と呂弁均という書写人の名前が記されている（DSCM pp. 308-309）。ここから、五兆ト法文書がその10世紀の初頭に頻繁に記されたと仮定すると、その背面に記されたチベット語鴉鳴占ト書の書写年代も10世紀の初頭を遡ることはないと考えられるだろう。

<sup>102</sup> なお、両面の記述は天地が反転している。なお、DSCMによれば、表面の13行目と36行目の後にとられた空白は、この文書がアコーディオン様式の小冊子に折り畳まれていたことを暗示しているそうである（DSCM, p.343）。

なお、布施供物段の右から2枠は空白である<sup>103</sup>。また、一覧表は前述の漢文食料品リストに重なるように書き始められており、序文は無い。一覧表の下には、2～3行のチベット文と表枠らしきものが部分的に見えるが、文脈は不明である。確認できるいくつかの語彙からは、ITJ 747の第二部とは一致しない記述であることが分かる<sup>104</sup>。以降、本論文中でP.c.3896と言う場合、このチベット語鴉鳴占ト一覧表だけを指すものとする。

### 1.3. ITJ 747 翻字テキストと試訳

以下では、ITJ 747文書の序文、一覧表、第二部に分けて、それぞれの翻字テキストと試訳を提示する。その際、序文と第二部におけるテキスト中の改行は筆者によるものである。さらに、序文には試訳との対照の便宜をはかり、韻文1節ごとに通し番号を付した。原典中の行番号は（ ）内に示すが、一覧表を行番号の総計には含まない都合上、第二部も（1）から開始する。また、一覧表のテキストと訳には原典の表形式をそのまま再現したが、訳注を参照可能にするために、方角と時間帯にローマ数字とアラビア数字による番号を配した。訳注中で、III-2と言う場合には、「夜明け前-東方」の卦辞を参照されたい。なお、脚注及び訳注では必要に応じて先行研究の翻訳を以下の略号で注記する。

(B) : Bacot 1913

(L) : Laufer 1914

(Y) : 山口 1985, 1987

(M) : Morgan 1987<sup>105</sup>。

---

<sup>103</sup> *byang shar*（北東）と *tshangs pa'*（天頂）の方位にあたる。

<sup>104</sup> *rlung dang char*（風雨）、*dgra ched po*（大いなる敵）などが判別できる。表形式で記された占ト書かもしれない。

<sup>105</sup> ここで示された訳は概ねBacot訳に依拠しているが、未発表であるR. A. Stein氏と今枝由郎氏の新訳も取り入れている（Morgan 1987, pp.66-69）。

## 【序文】

- 翻字テキスト -

- 1 (1) \$ // pho rog ni myi'i ngon //
- 2 drang srong ni lha'i bka' //
- 3 byang 'brog ni 'brong sha' rkyan //
- 4 yul (2) gi ni dbus mthil du //
- 5 lha btsun ni bda' skad skyel //
- 6 phyogs brgyad ni lding dang dgu' //
- 7 ^ang (3) tong ni thabs gsum gsungs //
- 8 gtor ma ni bya la gtor //
- 9 tsho tsho ni yongs su gyis //
- 10 lha'i ni (4) phyag du 'bul //
- 11 grags dgur ni lhas myi blta' //
- 12 bzang ngan ni ltas su gsung //
- 13 drang srong (5) ni lha 'dzin la //
- 14 lha ston ni gnyen ba'i bya' //
- 15 mu sman ni gnyen gyis gsungs //
- 16 drang zhin (6) ni brtan por ston //
- 17 pho rog ni dgu gi bya //
- 18 'dab drug ni gshog drug pa' //
- 19 lha yul ni mtho ru phyin //
- 20 (7) dmyig rno ni snyan gsang bas //
- 21 lha'i ni man ngag ston //
- 22 myi rtog ni gcig ma mchis //
- 23 yid ches (8) ni sems rton cig //
- 24 phyogs brgyad ni lding dang dgu //
- 25 lhong lhong ni bzang por ston //
- 26 thag thag (9) ni 'bring du ston //
- 27 krag krag ni rings par ston //
- 28 krog krog ni grog yod smra //
- 29 ^i'u ^i'u ni bar ston yin //

- 1 鳥は人の保護者〔であり〕、
- 2 〔鳥の声を聞き分ける〕仙人〔の言葉〕は、神のお言葉〔である〕。
- 3 野ヤクの肉の源である<sup>106</sup>北の牧地〔から〕
- 4 国の中心に
- 5 崇高な神は〔鳥の〕声の言葉を送る。
- 6 八方に天頂 (*lit.* 旋回する) で九〔方〕、
- 7 鳴き声を発して、3つの手段をお説きになる。
- 8 布施供物を鳥に撒き、
- 9 〔鳥を〕養うことは、全て〔の鳥〕になせ。
- 10 〔そうすることで供物を〕神の御手に捧げる。
- 11 9つの声を神が見ることはなく、
- 12 吉凶を相としてお説きになる。
- 13 仙人は神〔の意思〕をとらえて
- 14 神〔の意思〕を示すのは、伴侶である鳥である。
- 15 ム・メン (= 神格) は伴侶 (= 鳥) を通して (*lit.* によって) お説きになり、
- 16 正直に<sup>107</sup>しっかりと示す。
- 17 鳥は、天の<sup>108</sup> (*lit.* 9つの) 鳥であり、
- 18 6つの羽〔つまり〕6つの翼をもつものは
- 19 神の国の頂きに至る。
- 20 目は鋭く、耳は敏感であるもの (= 鳥) が
- 21 神の教誡を顕示する。

---

<sup>106</sup> 'brong sha rkyan : P.t.1045の記述から、'brong sha'i rkyenと解釈した。

<sup>107</sup> zhin : zhingと解釈した。

<sup>108</sup> dgu : dgungと解釈した。しかし、第11節にも9つの声 (grags dgur) というフレーズがあることから、9と鳥の間に何らかの関係があるのかもしれない。



- 22 考察できないことは一つもないので (*lit.* 考察しないことは一つもなく)
- 23 信じて、心を依せよ。
- 24 八方に天頂 (*lit.* 旋回する) で九 [方] 。
- 25 ロンロンは良いことを示し、
- 26 タクタクは中ほどを示し、
- 27 ダクダクは [何事も] 素早いことを示し、
- 28 ロクロクは仲間が来る (*lit.* ある) ことを告げ、
- 29 イウイウは間 (／障害) を示すのである<sup>109</sup>。

---

<sup>109</sup>(B) *Iou iou* est signe d'intermédiaire.

(L) The sound ,*iu* ,*iu* is an augury of future event (as indicated in the Table). Lauferは、一覧表中の予兆卦辞の大半が *bar ston* というフレーズで終わることに着目し、*bar ston* が一覧表の卦辞を指す用語であると考えている (Laufer前掲, p.51) 。

(Y) イウイウは障りを示す。

	I	2	3	4	5	6	7	8	9	10
I	gtor ma'i cho ga la //	shar phyogs na ngan zer na 'o ma gtor //	shar lho na ngan zer na yungs kar gtor //	lho na ngan zer na chu gtor //	lho nub na ngan zer na yungs kar gtor //	nub na ngan zer na sha gtor //	nub bayng na ngan zer na men tog gtor //	byang na ngan zer na gu kul gtor //	byang shar na ngan zer na 'bras gtor //	nam ka lding zhing ngan zer na khre gtor //
II	\$ //	shar /	lho shar /	lho /	lho nub /	nub /	nub byang /	byang /	byang shar /	nam ka lding /
III	nam ka phan phun	lha bisum 'ong bar ston //	lam ring por 'gro dgos par ston /	spyang 'dren 'ong bar ston /	rkun po zhiig 'ong bar ston /	song yang don myed par ston /	zhal lee rgol ba zhiig 'ong bar ston /	don yod par ston /	g.yag sod par ston /	dgra' zhiig g.yo bar ston /
IV	nam nangs	myi zhiig shi bar ston /	myi zhiig snra bar ston /	ra zhiig myed par ston /	ri dags zhiig sod par ston /	zhang lon 'ong bar ston /	pho nya zhiig 'ong bar ston /	la gor 'ong na rung bar ston /	phrin byang zhiig 'ong bar ston /	brel ba zhiig 'ong bar ston /
V	nyi ma shar	rings pa zhiig 'ong bar ston /	rgyal po'i bka' 'ong bar ston /	zhang lon gi mchid 'ong bar ston /	dgra' bla dang dpal 'ong bar ston /	gcan zan zhiig 'ong bar ston /	'phags par dga' ba zhiig 'ong bar ston /	rkun po zhiig 'ong bar ston /	myi rgod cig 'ong bar ston /	pho phyogs gi gnam 'ong bar ston /
VI	snga dro dang po /	'dod pa phun gsum 'shogs par ston /	dgra' zhiig g.yo bar ston /	gnyen lha skyes po la tshe ba zhiig 'ong bar ston /	rlung zhiig ldang bar ston /	kha char 'ong bar ston /	'jigs pa zhiig 'ong bar ston /	thab mo ched po zhiig 'ong bar ston /	nad pa 'chi bar ston /	sngon ma byung ba'i bram ze zhiig 'ong bar ston /
VII	snga dro tha ma	char pa bab par ston	ri dags zhiig sod par ston /	bud myed gi phyir thab mo zhiig 'ong bar ston /	gnyen zhiig 'ong bar ston /	rgyal po 'khor na 'tsher ba zhiig 'ong bar ston /	yul ngan zhiig 'ong bar ston /	mye ngan zhiig 'ong bar ston /	myi bags byed dgos par ston /	rgang pa la phyag byed pa zhiig 'ong bar ston /
VIII	nyi ma gung /	bdag gi nor la gyod ka 'ong bar ston /	su la yang gnam myi bya bar ston /	rlung dang char pa 'ong bar ston /	rkun po dang bu yug 'ong bar ston /	bud myed kyi phyir bde ba zhiig 'ong bar ston /	bisun ba'i gnyen 'ong bar ston /	skye bo kun la gnam zhiig 'ong bar ston /	bud myed dkar mo zhiig 'ong bar ston /	myi dga' ba'i gnam zhiig 'ong bar ston /
IX	phyi dro dang po /	rgyal po 'jigs par ston /	shi ba'i gnam thos par ston /	sngangs pa zhiig 'ong bar ston /	kha ba ched po 'bab par ston /	g.yar g'zigs zhiig khyer te 'ong bar ston /	grog ched po dang 'phrad par ston /	bdag ma tshor bar byed par ston /	bdag gi dgra' shi ste bdag dga' bar ston /	bza' bca'i sder myed par ston /
X	phyi dro tha ma /	'jigs pa zhiig 'ong bar ston /	nad pa sos par ston /	lam ring por 'gro dgos par ston /	shar phyogs nas myi zhiig 'ong bar ston /	myi zhiig bud myed khririd te 'ong bar ston /	za ba myed par ston /	[spags] par dga' bar ston	thams cad dga' ba zhiig 'ong	thams cad dga' ba'i zan chang
XI	nyi ma nub /	dre gdon 'ong bar ston /	nor dang grog 'ong bar ston /	dnyig mia chung la chu la bag bya bar ston /	khyim tshol zhiig 'ong bar ston /	phu nu pho dang bu tsha zhiig 'ong bar ston /	dga' ba'i gnam 'ong bar ston /	gtam zhiig 'ong bar ston /	phu nu dang phrad bar ston /	dga' ba thos par ston /
XII	nam sros /	bu sring dmag pa 'ong bar ston	shar phyogs nas myi zhiig 'ong bar ston /	'sham zhing dnyigs par ston /	lho phyogs nas myi zhiig 'ong bar ston /	nub phyogs nas bdag la zhang lon sko ba 'ong /	bdag stag thob par ston /	char pa 'ong bar ston /	phyis chad pa 'ong bar ston /	bdag stag thob par ston /

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
I	トルマ (= 供物) の儀式について	東方で「卦辭が」悪ければ、ミルクを施す	東南で「卦辭が」悪ければ、白辛子を施す	南で「卦辭が」悪ければ、水を施す	南西で「卦辭が」悪ければ、白辛子を施す	西で「卦辭が」悪ければ、肉を施す	西北で「卦辭が」悪ければ、花を施す	北で「卦辭が」悪ければ、香を施す	北東で「卦辭が」悪ければ、米を施す	天頂で「卦辭が」悪ければ、粟を施す
II	\$ //	東	南東	南	南西	西	西北	北	北東	天頂
III	夜明け前	聖なる神が現れることを示す	長旅に行かなくてはならないことを示す	お導きがあることを示す	泥棒が現れることを示す	出かけても益はないことを示す	法廷の争い (ノ訴訟) が起こることを示す	益があることを示す	ヤクを仕留める (ノ殺す) ことを示す	敵が動くことを示す
IV	夜明け	人が一人死ぬことを示す	人が一人話すことを示す	馬を一人頭手に入れることを示す	【鼎】の獲物を一人頭仕留める (ノ殺す) ことを示す	大臣が現れることを示す	使者が現れることを示す	すばやく来れば (ノ起これば) 通していることを示す	書簡が届くことを示す	忙事が起こることを示す
V	日の出	急事が起こる	王のご命令が発せられることを示す	大臣の手紙が届くことを示す	軍神と吉祥が起こることを示す	猛獸が一人頭現れることを示す	特別に喜ばしいことが起こることを示す	泥棒が一人現れることを示す	兇濫が一人現れることを示す	男の人に関する知らせが届くことを示す
VI	午前前半	欲望が完璧である (ノ満たされる) ことを示す	敵が動くことを示す	gnyen lha skyes po に害が起こることを示す	風が起こることを示す	雪と雨が起こることを示す	恐れ (ノ不安) が起こることを示す	大きな争いが起こることを示す	病人が死ぬことを示す	昔のパラモンが現れることを示す
VII	午前後半	雨が降ることを示す	【鼎】の獲物を一人頭仕留めることを示す	女性が原因で争い事が起こることを示す	親族が一人現れることを示す	王の眷属に悲しみが起こることを示す	災害が起こることを示す	悪火 (= 火事?) が起こることを示す	人に用心しなくてはならないことを示す	足下に跪く者が現れることを示す
VIII	正午	自身の財産に損失が出ることを示す	誰にも知らせないことを示す	風雨が起こることを示す	盗賊と吹雪が起こることを示す	女性が原因で幸福が起こることを示す	貴い親族が現れることを示す	全てのの人に知らせが届くことを示す	白い女性が現れることを示す	喜ばしくない知らせが起こることを示す
IX	午後前半	王が恐れることを示す	死の知らせを聞くことを示す	恐れることが起こることを示す	大雪が降ることを示す	食物を持って来ることを示す	偉大な友人と出会うことを示す	自身は気づかずに行動することを示す	自身の敵が死んで、喜ばしいことを示す	食事を得ることを示す
X	午後後半	恐れが起こることを示す	病人は癒されることを示す	長旅に行かなくてはならないことを示す	東方より人が来ることを示す	人が一人妻 (ノ女性) と一緒に来ることを示す	食糧を得ることを示す	特別に喜ばしいことが起こることを示す	全て [の人] が喜ぶことが起こることを示す	全て [の人] が喜ぶ酒食を得ることを示す
XI	日没	'dre と gdon (= 悪鬼) が現れることを示す	財と友人が現れることを示す	十分に警戒して、水に用心することを示す	家を求める [者] が一人現れることを示す	兄弟と子が現れることを示す	喜ばしい知らせが届くことを示す	知らせが届くことを示す	兄弟と会うことを示す	敵びを聞くことを示す
XII	黄昏	兄弟姉妹、婿が現れることを示す	東方から人が一人来ることを示す	境界の畑・・・することを示す	南方から人が来ることを示す	西方から自身を大に任命すること (ノ者) が来る	自身は虎を手に入れることを示す	雨が降ることを示す	後に間が起こることを示す	自身は虎を手に入れることを示す

- 訳注 -

I-8 *gu kul (gu gul)* : (B) du bois d'aigle (L) a gum resin obtained from a tree and utilized as incense. 辞書では、‘a costly incense, one kind of which is white, another black.’ (*Jäschke* p. 69) 、 ‘It is used in medicine and its smell drives away evil spirits’ (*Das* p.219) と説明されている。また、Lauferは、*gugula (gu gul)* という語自体がサンスクリットのものであることを指摘している<sup>110</sup>。

III-1 *nam ka phan phun* : 『尚書』のチベット語訳であるPt.986では、*nam ka phan phun* は漢語原文の「味爽」に相当する語句として使用されている<sup>111</sup>。Coblinの説明によると、「明るくも暗くもない時間」を指す語である<sup>112</sup>。また、古チベット語内には、これの同義語として*dgung ka phan phun*という語も発見できる<sup>113</sup>。*phan phun*は*phang phung*とも書かれたのかもしれない<sup>114</sup>。

IV-6 (B) Indique que des nouvelles arrivent.

IV-9 *phrin byang* : = message tablet (*TLTD* 3 p.157)

IV-10 *brel ba* : *Jäschke* では①to be busy、②to be poor、③business, affairとある<sup>115</sup>。後述する漢文書において「急忙事」とあることを考慮して①を採用した。

V-2 (B) Indique qu'une persone vient en hâte.

V-5 *dgra bla* : (B) *dgra zla*と翻字し、‘rival’と訳す。*AFL*でも‘a superior enemy’とあり、*dgra*

<sup>110</sup> Laufer 前掲, pp.5-6.

<sup>111</sup> Pt. 986 ll.70-71 : *dpyid sla 'bring po tshes bzhi ste / shing po byi ba'i nam ka phan phun na* / 「春の中の月の四月、甲子の早旦に」 (今枝 1985, 560頁)。漢語の原文は「時甲子味爽」となっている (池田 1976, 236頁)。

<sup>112</sup> ‘*Nam-ka phan-phun* corresponds to 味爽 “Twilight or dawn” in the Chinese version. The usual meaning of *phan-phun* is “disagreement.” Here it seems to refer to the time when it is neither really light nor really dark.’ (Coblin 1991, p.319) .

<sup>113</sup> *de'i rjes la dgung ka phan phun na* 「その後、夜明け前になって」 (Pt.1042 l.65) 、*de nas dgung ka phan phun na* 「それから、夜明け前になって」 (同 l.121) 。

<sup>114</sup> *dgung la nl phang ma phung* (ITJ 738 1v-1.12)

<sup>115</sup> *Jäschke* p.382.

に重点をおいた解釈となっている<sup>116</sup>。しかし、この場合の*bla*は*lha*（神）と同義であり、*dgra bla*、つまり「軍神」「戦神」と理解すべきである<sup>117</sup>。後代では、*dgra lha*は人の誕生とともに生まれ、ひとの右肩についてその人を敵から守ってくれる存在であり、財産を殖やすことも助けると考えられている。同様に左肩には*pho lha*という守護神が宿るのである<sup>118</sup>。

V-7 *phags par* : Pt.1045の'*phags par*を採用し、「抜群に、特別に」という意味に解した<sup>119</sup>。

(B) Indique qu'un favori arrive, (M) Quelqu'un qui aime à être élevé arrive.

V-10 (B) Indique qu'une parole du côté de l'homme arrive, (M) Une nouvelle du côté de l'homme arrive.

VI-4 *tshe ba* : Pt.1045の'*tshe ba*を採用した。

(B) Indique l'injure à dieu protecteur.

VI-7 *jigs pa* : 他文書の'*jigs pa*を採用した。

VI-8 *thab mo* : '*thab mo*であると解釈した。

VI-10 (B) Indique qu'un brahmane sans précédent arrive, (M) Un brahman qui n'existe pas arrive (?).

VII-4 *phyir* : *phyir du* / *phyir na* という形で'on account of = by or through,'を意味するので、ここでは「原因で」と訳した<sup>120</sup>。

*thab mo* : VI-8に同じ。

VII-6 Pt.1045では*rgyal po*'i '*khos nas* '*tshe ba* *zhig* '*ong bar ston*とあり、訳が異なる。

(B) Indique qu'une nuisance viendra de la cour du roi.

VII-8 (M) Un chagrin arrivera.

VII-9 *myi bags* : P.c.3896の'*myi la bag*を採用した。*bag*は'to take care of<sup>121</sup>、'care<sup>122</sup>を意味し、

---

<sup>116</sup> *AFL* p.129.

<sup>117</sup> 骰子占いを扱ったITJ 738やPt.1043、Pt.1051にも、*dgra bla*は登場する (ITJ 738 3v 1.6、Pt.1043 1.59、Pt.1051 1.30, 48, 64)。

<sup>118</sup> Nebesky 1957, p.318、R. A. スタン 1993, pp.276-277.

<sup>119</sup> *Jäschke* p.355, 'sublime, exalted, raised above.' *phal las* '*phags par bzang ba* 'a more than ordinary beauty.'

<sup>120</sup> *ci*'i *phyir khyod di ltar gyur*, whereby or through what have you got into this plight? (*Jäschke* p.351.)

<sup>121</sup> *Jäschke* p.364.

<sup>122</sup> *TLTD* 3 p.158.

XI-4や他文書のXI-6にも登場する。また、骰子占ト文書中에서도凶兆が出た場合に*bag gyis*

「用心しろ」「注意しろ」という指示がみられる<sup>123</sup>。

(B) Indique qu'il faut agir sans retard.

VIII-6 *phyir* : VII-4参照。

VIII-9 *bud myed dkar mo* : *dkar mo* = 1. the goddess Durga. 2. white rice とあるので<sup>124</sup>、全体で神格を表すのかもしれない。骰子占ト書には、*yul sa dkar mo*<sup>125</sup>や*gnam sman*と関わる*dkar mo*<sup>126</sup>がみえる。また、王家の葬儀を扱ったPt.1042文書では、生け贄の羊を*dkar mo*と称している<sup>127</sup>。

IX-8 Pt.1045では*bdag la ma tshor ba byed pa 'ong bar ston*とあり、*ma tshor ba*が*byed pa*の目的語となっている。

(B) Indique l'arrivée de quelqu'un qui fera quelque chose sans que vous vous en aperceviez.

(M) On viendra faire quelque chose dont je ne m'apercevrai pas.

IX-10 *sder* : = *sder ma*

*bza' bca'i sder* : lit. 食べ物と飲み物の皿。

X-8 *spags par* : Pt.1045の'*phags par* を採用した。V-7参照。

---

<sup>123</sup> *gdon 'di ltar za bas sems kyang khyugs phyva dang bros shing 'dug ste / / / bag gyis shig / /*

*gdon*が\*このように食べることで、心も・・・ているので、用心せよ (Pt.1051 l.62)。

*dgra phyva la btab na ngan gyis bag gyis shig //*

戦運について占えば悪いので、用心せよ (Pt.1051 ll.64-65)。

*mo 'dI nI khyIm phyva dang srog phyva la btab na / / sdug cIng sngangs pa 'am / / myI bde ba zhlg 'ong bas / bag legs pa / gIs zhlg / /*

この卦は家運と命運について占えば、悲惨なことか喜ばしくないことが起こるので、十分用心せよ (ITJ 738 1v-II.35-36)。

*myI khyod la sdug sngangs cIg 'ong gyIs bag gyis la / / rIm gro cung zhig / /*

汝に悲惨なことが起こるので、用心した上、小さな儀式をせよ (ITJ 738 1v-51)。

*don cig gnyer sem na rogs po zhlg gIs ngan par sems zhIng 'dug pas / bag gyIs /*

益を成したいと思うなら、友人一人が悪く思っているので用心せよ (ITJ 738 3v-II.141-142)。

<sup>124</sup> Jäschke p.9.

<sup>125</sup> ITJ 738 2v-1.30.

<sup>126</sup> ITJ 739 2v-1.8.

<sup>127</sup> Bacot 1952, pp.350, 352, 358, 359.

X-10 紙の接合部にあたるため、*zan chang*に続く最終行が料紙の重なりにより確認できていないか、欠損している可能性があるので<sup>128</sup>、他文書の内容を補って訳した。また、Pt.1045では*thams cad dga' ba'i zan chang ston mo 'thung bar ston*とあり、訳が異なる。

(B) Indique qu'on va manger et boire un festin où tout le monde se réjouira.

XI-4 *dmyig ma chung la* : 他文書のXI-5には*ye myig cher bya dgos par ston* 「十分に警戒しなくてはならない<sup>129</sup>」とあるのを参考に、*ye dmyig ma chung bya la*として解釈した。また、他文書の卦辞内容はこれとは全く異なる<sup>130</sup>。ITJ 747のXI-4は他のXI-6に類似する。

XI-5 他文書とは内容が全く異なる<sup>131</sup>。ITJ 747 XI-5は他のXI-7に類似する。

XI-6 他文書とは内容が全く異なる<sup>132</sup>。ITJ 747 XI-6は他のXI-8に類似する。

XI-7 他文書とは内容が全く異なる<sup>133</sup>。ITJ 747 XI-7は他のXI-9に類似する。

XI-8 他文書とは内容が全く異なる<sup>134</sup>。

XI-9 他文書とは内容が全く異なる<sup>135</sup>。

XI-10 他文書とは内容が全く異なる<sup>136</sup>。ITJ 747 XI-10は他のXI-9に類似する。

XII-4 他文書とは内容が全く異なる<sup>137</sup>。

---

<sup>128</sup> *ston*で終わるのが当該文書における卦辞の特徴であることを考量すれば、*zan chang*で終わるとは考え難い。そうすると、X-9の'*ong*'の後にも*bar ston*があったと考えるべきかもしれない。

<sup>129</sup> (B) Indique le besoin d'agir très libéralement.

*ye dmyig che* : *de phan chad snga ra dang phyi ra ye myig cher bgyis nas* 'Thence onwards be very alert in front and behind.' (TLTD 2, 157 B1)

<sup>130</sup> 他文書では、*grog ched po dang phrad par ston* 「偉大な友人（／深い友情）と出会うことを示す」。

<sup>131</sup> 訳注XI-4参照。

<sup>132</sup> 他文書では、*chu la bags (ched po) bya dgos par ston* 「水に非常に注意しなければならないことを示す」。

<sup>133</sup> 他文書では、*khyim tshol du 'ong bar ston* 「家を求めるようになることを示す」。

<sup>134</sup> 他文書では、*phu nu po dang bu 'ong bar ston* 「兄弟と息子が来ることを示す」。

<sup>135</sup> 他文書では、*dga' ba'i gtaM thos bar ston* 「喜ばしい知らせを聞くことを示す」。

<sup>136</sup> 他文書では、*bzang por 'ong bar ston* 「良くなることを示す」。

<sup>137</sup> 他文書では、*gcan zan gis myi zhig gsod par ston* 「野獣によって人がひとり殺されることを示す」。

XII-6 *bdag la zhang lon sko ba : bdag zhang lon la sko ba*と解釈した。他文書とは内容が全く異なる<sup>138</sup>。

XII-7 他文書とは内容が全く異なる<sup>139</sup>。

XII-8 他文書とは内容が全く異なる<sup>140</sup>。

XII-10 他文書とは内容が全く異なる<sup>141</sup>。

---

<sup>138</sup> 他文書では、*bdag zhang lon du 'ong bar ston* 「自身が大臣になることを示す」。

<sup>139</sup> 他文書では、*nub nas myi 'ong bar ston* 「西から人が来ることを示す」。

<sup>140</sup> 他文書では、*bdag pha tshan thob par ston* 「自身は父系を継ぐことを示す」。

<sup>141</sup> 他文書では、*bu lon ded pa 'ong bar ston* 「借金の取り立てがあることを示す」。



## 【第二部】

### -翻字テキスト-

- 1 (1) \$ // // lam ring por song na //
- 2 // pho rog mdun nas 'ongs te //
- 3 // rgyab du zer zhing song la //
- 4 (2) slar log na bzang ngo //
- 5 // chom rkun dgra dang myi phrad //
- 6 // byang nas 'ongs te zer zhing song na // //
- 7 (3) la mar mgyogs par song na //
- 8 // ci bsams pa 'grub //
- 9 // zan chang dang phrad par 'gyur ro // //
- 10 (4) mdun nas lan cig bdag la bskor nas song na //
- 11 // bdag gar 'gro na yang // //
- 12 // la mar song (5) na dga' ba 'ong //
- 13 // bya pho rog 'o byed na //
- 14 // bdag so la lan gsum brtsams te //
- 15 'kra shis (6) lan gsum brjod na bzang ngo //
- 16 // bya shing ngam shing rtsa 'am /
- 17 thang la 'dug cing gcig la gcig thab (7) pa mthong na //
- 18 // bdag la dgra yod de //
- 19 // sha gnyer na thub par 'ong ngo //
- 20 // bya sa la 'dun ma (8) 'dus te thab pa mthong na //
- 21 // rgyal khams ched por 'khrug pa 'ong bar 'gyur ro //// / ///

- 1 長旅に行ったなら
- 2 鳥が前方から現れて
- 3 後方で鳴いて立ち去ったあと、
- 4 また戻ってくれば、吉。
- 5 泥棒、敵と出会わない。
- 6 [鳥が] 北から現れて、鳴いて立ち去ったり
- 7 上方へ<sup>142</sup>素早く立ち去ったならば、
- 8 思ったことは何でも成就する。
- 9 酒食と出会うようになる。
- 10 前方から[現れて]、一度自身[の周り]を旋回して立ち去ったなら
- 11 自身は何処へ行こうとも
- 12 [鳥が] 上方へ立ち去ったなら、歡びが起こる。
- 13 鳥が嘴を合わせていたら
- 14 自身は齒に三度・・・<sup>143</sup>
- 15 吉祥を三度唱えたならば、吉。
- 16 鳥が<sup>3</sup> (lit. 鳥が<sup>3</sup>) 木か、木の根元か、
- 17 平野に集まって、互いに争っているのを目にすれば、

---

<sup>142</sup> *la mar* : = *bla ma* (*ma*は接辞) であると解釈した。

<sup>143</sup> *so* : 「齒」「端」「見張り」

*brtsams pa* : ① *rtsom pa*の完了形 「著作する」「着手する」

② [古字] 「集まる」 (= *'du ba*) (藏漢 p.2238)

「三度片隅に集まって」と訳すこともできそうだが、ここでは、韻文13の「嘴」、15の「唱える」などから「齒」との関連が窺える。

- 18 自身には敵がいて
- 19 肉を求めれば、[敵を] 制止する。
- 20 鳥が<sup>3</sup> (*lit.* 鳥が<sup>3</sup>) 地面で集まって、争っているのを目にすれば、
- 21 大いなる王土に混乱が起こるであろう。

#### 1.4. 内容構成

ここでは古チベット語鴉鳴占ト文書の書式について考察したい。上述ように、これらは、29節の韻文からなる序文と横10×縦12枠の一覧表のよって構成されている<sup>144</sup>。以下では、序文と一覧表のそれぞれについて照査し、文書間の異同からその成立背景について検討する。また、ITJ 747のみに存在する第二部についても、内容とその特徴を考えたい。

##### 【序文】

序文の韻文は厳格に定式化されており、細かな綴り字の差異を除けば全文書の記述が概ね一致する<sup>145</sup>。ここでは全体を通して、鳥が神の使者として讃えられ、神の教誡が鴉鳴によって知らされる、と占いの出所を明示することで鴉鳴占トの権威付けがなされていると考えられる。この点で、続く一覧表の序文的役割を果たしていると言える。しかし、韻文25-29節には一覧表には含まれない鳥の5つの鳴き方に基づく予兆が記されており、これを鴉鳴占トに関する独立した記述、あるいは補足的記述と考えることもできる<sup>146</sup>。また、別の占いを扱ったチベット語

---

<sup>144</sup> P.c.3896には序文の韻文が収録されていない。

<sup>145</sup> 例えば、他文書では*lhong lhong ni bzang por ston*となっている韻文25節目が、ITJ 746では*lgong lgong ni bzang por ston*と記されている。*lhong lhong*は鳥の鳴き声を表す擬音語であり、若干の差異は考慮される。

<sup>146</sup> Lauferが指摘したように本章の2.4項で扱う*kakajariti*の第五部は鳥の5つ鳴き方に基づく予兆を扱ったものである (Laufer 前掲, pp.25-26)。そこには、散文形式で記された卦辞が記されているものの、我々の記述とは一致しない。しかし、これらが同じ観点に基づく予兆卦辞であることには違いない。

文書の背面には、古チベット語鴉鳴占ト文書序文の韻文第1節と第2節が書されている<sup>147</sup>。残念ながら、以下の料紙が欠落しているため、続く内容を確認できないが、前行までの記述との間に余白がとられていないことからすると、寄せ集めの記述、或いは練習書きの類いであると推測できる。しかし、そのような書写の存在は、この韻文自体が当時の社会で流布していた可能性を示唆するものであると言えるだろう。韻文という形式を採用することによって、鳥の予兆はチベット社会の口承文化へ融合することに成功したのかもしれない。

### 【一覧表】

6点のチベット語鴉鳴占ト文書における一覧表の内容を比較してみたい。まず、時間と方位の名称についてみる。時間名称は、文書の欠損により判読不能なPt.1048とP.c.3896を除いた4文書の記述において一致がみられる<sup>148</sup>。このうち、最初の時間帯にあたる*nam ka phan phun*は、辞書等には現れない名称ではあるが、古チベット語内で通用していたことは先に述べた通

<sup>147</sup> Pt.351文書の表面には、*byang chub sems dpa' dang // sprul pa rnam gi zhal nas gsungs te / mo yig tu bstan nas / yid ches pa'i gzungs dang / rtags gnyen po bzahag pa' //*（菩薩と化身達が仰ったことを占ト書として示して、信服すべきダラニと対治のしるしを留めたのである）という出だしから始まる占ト書が収められている。58行目、75行目には*rigs gi bu khyod*（善男子である汝よ）というフレーズも見えることから、これが仏教の影響をうけた占ト書であるということが想像できるが、その占ト法については不明である。

裏面の大部分は白紙であるものの、下端に3行のチベット文が確認できる。表面と筆跡は似ているが、料紙の使用状況からは、両面の内容は連続しないことが想像できる。裏面の1行目から2行目にかけては、7音節からなる5節の韻文が記されている。一方、3行目には、鴉鳴占ト文書の韻文第1節と第2節が記されているのである。

<sup>148</sup>	<i>nam ka phan phun</i>	(夜明け前)
	<i>nam nangs</i>	(夜明け)
	<i>nyi ma shar</i>	(日の出)
	<i>snga dro dang po</i>	(午前前半)
	<i>snga dro tha ma</i>	(午前後半)
	<i>nyi ma gung</i>	(正午)
	<i>phyi dro dang po</i>	(午後前半) : P.c.3896では、 <i>phyi dro phyed</i> [---]
	<i>phyi dro tha ma</i>	(午後後半) : P.c.3896では、 <i>phyi dro tha</i> [---]
	<i>nyi ma nub</i>	(日没)
	<i>nam sros</i>	(黄昏)

P.c.3896の*phyi dro*はおそらく*phyi dro*と同じであろう。【蔵漢】1759頁にある*nam phyed*「真夜中」や*mtshan phyed*「夜中」から考えると、*phyi dro phyed*は午後の中頃を指すと考えられる。しかし、午後時間帯を二分し、後半を*phyi dro tha ma*で表すならば、前半は*phyi dro dang po*とするのが適切だろう。

りである<sup>149</sup>。また、方位についてもほぼ全ての名称が一致する<sup>150</sup>。しかし、P.c.3896では、第九番目の方位を表す*nam ka lding*「天頂」<sup>151</sup>は、*tshangs pa'*と表記されている。*tshangs pa'*はBrahma「梵天」を表す語であり、方位や位置を直接示す語ではない。一方で、本章の2.4項で詳説するKakajariti中にも、九番目の方位が*tshangs pa'i gnas su*と記されている。それについて、Lauferは‘The place of Brahma’、すなわち‘zenith’であると説明している<sup>152</sup>。P.c.3896の*tshangs pa'*もまた、*tshangs pa'i gnas su*と意味するところは同じであり、「天頂」を指すと考えられる。

次に、一覧表中の卦辞について検討する。ITJ 746、Pt.1045、Pt.1049の3文書は、綴り字や*zhig*、‘ong’の有無といった些細な相違を除いて、ほぼ同じ内容の卦辞を持つことが確認できる。すなわち、これらは同一典籍の異写本とみられるだろう<sup>153</sup>。また、現存する文書の半数がそこへ遡れるという理由から、本論文ではこれらを、当時の社会で最も流布していた流通本と位置づけることにする。しかしながら、ITJ 747とP.c.3896の一部、そしてPt.1048の大部分については卦辞内容が流通本とは異なっている。その内のいくつかは、同じ時間帯の別方位にあてられ

---

<sup>149</sup> ITJ 747 訳注 III-1。

<sup>150</sup> *shar*（東）、*lho shar*（南東）、*lho*（南）、*lho nub*（南西）、*nub*（西）、*nub byang*（西北）、*byang*（北）、*byang shar*（北東）の八方に*nam ka lding*（天頂）を加えた九方である。なお、Pt.1048では該当箇所が欠損しており、記述を確認できない。

<sup>151</sup> *nam ka*は「空」「天」を表し、*lding*は「舞っている」「浮かんでいる」「旋回している」様子を表す（Jäschke p.290、【藏漢】1453頁）。ここでは、鳥が自分の上を旋回しながら鳴いている状況を指すと考えられる。また、チベットの民話の中には、*nam mkha' lding*と呼ばれる「仏教説話の中の一種の神鳥や漢族のいわゆる鳳凰によく似た鳥」に関する話ものもあるようだ（君島 1977, 288-289頁）。

<sup>152</sup> Laufer 前掲 p.10 footnote 2).

<sup>153</sup> 詳細にみれば、ITJ 746とPt.1049は酷似しており、Pt.1045は語彙や綴り字、形容詞の有無において他のそれらとは異なる表記がある。しかし、内容は一致していると見なせる。

た卦辞と一致する一方で、全く独自の記述もみられる<sup>154</sup>。従って、これらは流通本とは異なる系譜に属すると言える。それでも、符合する卦辞の方がより多数を占めるのであるから、これらを流通本のヴァリエントと位置づけてもよいだろう。

最後に布施供物に関して注記しておく。布施供物は、Pc.3896を除く全てのチベット語鴉鳴占ト書の記述において一致が見られる<sup>155</sup>。Pc.3896では、三つの供物に関して他との相違がみられる<sup>156</sup>、そのうちの二つは他には登場しない上<sup>157</sup>、北東と天頂位置での供物は指示されないまま空白になっている。また、先行研究で指摘されているように *yungs kar* 「白辛子」と *gugul* 「香」はインドに影響を受けた供物であり、後者は名称からして明らかにインド起源であることがわかる<sup>158</sup>。このことは、チベット語鴉鳴占ト一覧表の素材となった鴉鳴占トがインドに由来することを指示していると言えるだろう。

では、流通本とヴァリエント本はどのような関係にあるのだろうか。Lauferの論に従えば、我々のチベット語鴉鳴占ト文書が確立する背景には、インドに由来する鳥を題材にした予兆占

---

<sup>154</sup> 例えば、ITJ 747 XI-4～7にあてられた4つの卦辞は、他文書のXI-6～9に符合する。一覧表でみれば、右へ2枠移動させれば他文書の記述と一致するのである。同様に、Pt.1048のV-7～9の3卦辞は右へ1枠ずらせば他の記述と一致するし、Pc.3896のX-5～8までの4卦辞は右へ1枠移動させれば、他と一致あるいは類似した記述になる。従って、記述の違いは書写する際の誤写による可能性が考え得る。しかし、一方で他文書とは明らかに異なる卦辞を留めているものも多数ある。例えば、ITJ 747のXII-7、XII-10の *bdag stag thob par ston*（自分自身は虎を得ることを示す）や、Pt.1048のIV-3にある *myl clg sbran bar ston*（人を一人呼ぶことを示す）や、V-10の *bag ma gclg khyer bar ston*（花嫁一人が流されることを示す）という卦辞は、他文書には認められない。このような独自の記述は、誤写に加えて祖本とした写本が不十分であったために、記述の差異が生じたことを示しているのかもしれない。しかし、Pc.3896中における他文書との記述の不一致は全体の四分の一程度を占める上、断片文書であるPt.1048の大部分は他と異なる記述内容をもつ。これを説明するには、流通本以外の系譜があったと考えるべきであろう。

<sup>155</sup> Pt.1048は料紙の欠損により当該箇所を保持しない。

<sup>156</sup> 南 (I-4) *chur ba dang 'o mas gtor*（凝乳とミルクによって布施する）

西 (I-6) *yungs far gis gtor*（白辛子によって布施する）

西北 (I-7) *chan 'dan dang men tog gis gtord*（粥と花によって布施する）

<sup>157</sup> *chur ba* と *chang 'dan*

<sup>158</sup> Lauferは「米」「花」もインドの習慣に基づくと考えている（Laufer 前掲, pp.5-6）。一方、中国の研究では、*gugul* (*gugula*) と同じものが「安息香」として隋代から中国に存在する供物であることが指摘されている（趙 2010, 75-77頁、陳楠 2007, 368-369頁）。しかし、名称の一致からみて、チベット文書中の *gugul* が *gugula* に由来することは間違いない。

ト書が数多存在していた可能性がある<sup>159</sup>。実際、敦煌出土チベット語文書中には、インドに起源を持つと思われる別系統の鴉鳴占ト記事がある<sup>160</sup>。従って、数多存在したであろう烏を題材とした民間信仰に素材を求めて、時間と方位を軸に一覧表の形に仕立て上げたのが我々の鴉鳴占ト一覧表であり、別の要素は韻文として記述されて口承文学の伝統に組み込まれていったと想像できる。しかし、我々の流通本が他言語文献からの翻訳本でない以上、様々なヴァリエントがあっても不思議は無いのではないだろうか。そのようなヴァリエントの一つであるITJ 747に、流通本には収録されない第二部が存在することは、これらの鴉鳴占ト書の素材となった予兆書の存在を示唆していると言えるだろう。仮説ながら、本論文ではこれらのヴァリエントが、流通本形成までの過程を留めた文書であると位置づけておく。しかし、これを論証するには更なる資料の発現が必要である。

## 【第二部】

ITJ 747文書には一覧表に続く第二部が存在する。第1行目：*lam ring por song na*（長旅に行ったなら）という全体の設定を説明した文章から始まり、以下、旅の道中に会おう烏の様子から読み取る前兆が6種類記されている。この種の記述は、本章の2.4項・2.5項でもみるように、烏を題材にしたインドの予兆占ト書に多くみられる。これによっても、古チベット語鴉鳴占ト一覧表の素材が、インドの占ト書に求められていたことが傍証されと言えるのである。

---

<sup>159</sup> Laufer 前掲, pp.22-23.

<sup>160</sup> Pt.1050は、「家が音をたてる」「犬が哭く」「烏が鳴く」などの事象を、起こる日毎に分け、それぞれに卦辞を記した文書である。日は、*ʼa byid dya*「無名」、*sang ska ra*「行」、*na ma ru pa*「名色」、*sha ta ya ta na*「六入」、*spa ra sha*「触」、*ʼu pa da na*「取」といった十二因縁名称のサンスクリット音写に基づいている。また、Pt.55のll.117-154までには、十二因縁のチベット名称によって日が区別された上、各日に起こる事象についての予兆がしるされている。ここにも烏が鳴いた場合の予兆が含まれており、おそらくPt.1050と同一占トを記したものである。またPt.55は、大正大蔵經（第十六巻845-850頁）に収録される『十二縁生祥瑞經卷』との間に内容の類似がみられる文書である（鄭炳林・黄維忠 主編 2011, 13-132頁）。



## 第2節：他言語文書との比較研究

### 2.1. 先行研究

Bacot以降の研究は、概して、Pt.1045文書を他の鴉鳴占ト文書と比較することによって、その起源を論じたものであると言える。比較対象とされた文献は次の2系統である。（ ）内に代表的な研究を略記する。

【文献①】チベット語大蔵経テンギュル部収録 *kākajariti* <sup>161</sup> (Laufer 1914)

Lauferの研究では、Pt.1045は*kākajariti*のようなサンスクリット本を十分にチベット化させた翻案本であると結論づけられている<sup>162</sup>。その理由の第一として、両者が以下の構成内容を共有していることを挙げている。

- 鴉鳴を聞いた時間と方角から読み取る予兆 (Pt.1045の一覧表、*kākajariti*の第二部)
- 鴉鳴から読み取る予兆 (Pt.1045の序文、*kākajariti*の第五部)
- 布施供物の記述 (Pt.1045の一覧表、*kākajariti*の第六部)

また、Pt.1045中に指示されている供物のいくつかが明らかにインド由来であることを指摘し、翻案本である可能性を証左する重要点とみている。さらに、Lauferは*kākajariti*の奥書に記された訳者を、9世紀初頭の人物であると考えている。そして、*kākajariti*がまだ新鮮さを保っていた時代にそれから刺激を受けて明解な一覧表形式に発展させたものがPt.1045であり、然るにこれも9世紀の著作であろうと比定しているのである<sup>163</sup>。これに対して、筆者は、Pt.1045がおそらく複数のサンスクリット本から着想を得ている点については氏に賛同するものの、*kākajariti*との関係には異なる意見をもつ。詳細は、本章2.5項で論じたい。

---

<sup>161</sup> 北京版とナルタン版に収録されている。詳細は本章2.4項を参照されたい。

<sup>162</sup> Laufer 前掲, pp.24-30.

<sup>163</sup> Laufer 前掲, p.20。一方、山口は、*kākajariti*は11世紀の著作であるとし、Pt.1045の起源を中国に寄せている。(山口 1987, 177頁)

【文献②】敦煌出土漢文鴉鳴占ト文書P.c.3988、P.c.3479<sup>164</sup> (Morgan 1987、陳 2007、趙 2010)

Lauferがkākajaritiとの間に見いだした共通性が構成内容の類似に留まっていたのに対し、漢語文書との間には一覧表という書式の一致もみられる。また、それが10の時間と、9つの方角に基づく表であることに加えて、卦辞にもかなりの符号がみられることが先行研究で論じられている。さらに、陳は、Lauferがインド由来であると指摘する布施供物が中国にも存在していたことや、10の時間区切りが中国の十二辰に基づくこと、そして、中国には隋代から鴉鳴占トが存在していたことなどを以てこの占いが中国からチベットへと伝播したと考え、Pt.1045をはじめとするチベット語鴉鳴占ト文書が、これらの漢語文書からの翻訳であると結論づけている<sup>165</sup>。

以上のように、鴉鳴占トに関する古チベット語文書と他言語文書との比較研究が既にいくつか存在している。とりわけ、漢語文書との関係は、注目をあびていると言える。ところで、これらの先行研究では、漢語文書の釋本に誤写や脱落が多々みられる。そこで、本章では、漢語文書についても先行研究を参考にしながらデジタルイメージで写本を確認し、内容を再吟味したい。その上で、書式や記述内容を他の漢文占ト文書と照査し、両文書の比較研究の材料とする。さらに、kākajaritiについても、原文に照らして我々のチベット語文書とどの程度共通点が見いだせるか再検証したい。

---

<sup>164</sup> フランス国立図書館所蔵のペリオ蒐集漢語文書コレクションに属する文書に付されたPelliot chinois番号を、本論文ではP.c.と略記する。

<sup>165</sup> 陳 2007, 364-369頁。これに対して、趙はPt.1045が敦煌出土の漢語鴉鳴占ト書の翻訳であるとは考えていないものの、これが『隋書・経籍志』に収録される『烏情占』『烏情逆占』『烏情書』『占烏情』をはじめとした中国の典籍から着想を得ていると考えている（趙 2010, 75-77頁）。

## 2.2. 漢語鴉鳴占ト文書の内容と構成

敦煌出土漢語文書には、鴉鳴占トに関する文書が4点ある。以下の一覧で情報を提示したい<sup>166</sup>。このうちP.c.3479、P.c.3988にはチベット語文書と相似性のみられる鴉鳴占ト一覧表が収録されているが、残る2文書（P.c.3888、Dx.6133）には一覧表が採用されていない上、記述内容からみても古チベット語鴉鳴占ト文書やP.c.3479、P.c.3988とは別系統の内容をもつと考えられるため、本論文では比較研究対象としないこととする<sup>167</sup>。

漢語鴉鳴占ト文書リスト

文書番号	形状	サイズ(cm)	構成	背面
P.c.3479	卷子	28.1 × 44.3	一覧表 + 第二部	2～3行の漢語（人名）
P.c.3888	卷子	27 × 44		なし
P.c.3988	卷子	28 × 82	一覧表 + 第二部	なし
Dx.6133	冊子	29.3 × 21.4		なし

さて、次にP.c.3479文書とP.c.3988文書についてみていく。両文書の構成は酷似しており、一覧表の内容も完全に符合する<sup>168</sup>。Morganや陳の研究に釋本が収録され、前者では仏訳が付されている。ここでは改めてP.c.3988文書の構成を検証することにする<sup>169</sup>。

<sup>166</sup> P.c.3479、P.c.3888、P.c.3988、Dx.6133の4文書であり、*DSCM* pp.445-447に詳細な解説がある。このうち、パリ所蔵文書はIDPウェブサイトでもデジタルイメージが閲覧できる。サンクトペテルブルク所蔵文書であるDx.6133については2009年7月に京都国立博物館で開催された「特別展覧会 シルクロードの文字を辿って ロシア探検隊収集の文物」カタログ中にカラー写真と解説が収録されている。

<sup>167</sup> 漢語文書中の一覧表はチベット語一覧表と同じレイアウトで作成されている。ただし、表中の卦辞は、漢語文書の料紙使い及び書写方向に従って記してある。

<sup>168</sup> 唯一、平旦時の西北方の卦辞については、P.c.3988では「官使来」、P.c.3479では「准上官使来」と僅かに異なって記されている。

<sup>169</sup> Morgan 前掲 pp.73-76、陳 前掲, pp.359-360頁。

さて、Pt.3988の内容は、陳によれば次の7部に峻別できる<sup>170</sup>。

第一部：烏鳴占吉凶占卜表<sup>171</sup>

第二部：烏鳴従子地至亥地避凶厭勝訣

第三部：烏鳴従子日至亥日吉凶訣

第四部：烏鳴従不同方位吉凶訣

第五部：烏鳴在一日不同時辰吉凶訣

第六部：烏鳴従子地至亥地吉凶訣

第七部：占卜方法説明

ところで、先行研究の校訂テキスト及びIDPのデジタルイメージでPt.3988の内容を吟味してみたところ、上記第二部は岩本が百恠圖と比定しているP.c.3106及び羽44文書と類似した内容を有していることに気づいた<sup>172</sup>。百恠圖は、岩本の研究を引用すれば下記のような内容から構成されている<sup>173</sup>。

タイトル： 占〔怪奇現象〕第〔巻数〕

内容構成： (a) 日支（日毎の十二支）によって怪奇現象の吉凶を整理し厭法を示した  
箇所

(b) 怪異の内容が箇条書きにされている箇所

---

<sup>170</sup> 陳 前掲, 361-362頁。黄 2001では、第四部をさらに四方占、聚集占の2部に峻別している（黄 2001 163-164頁）。Morgan研究中の分類も黄と同様である。また、Pt.3479も同じ構成を持つが、第二部と第五部の記述を欠いている。

<sup>171</sup> 陳の研究では、一覧表には名称が付けられていない。しかし、当該文献自体をカタログ（敦煌寶藏, 132冊, 440-444頁）の表記に従い「烏鳴占吉凶書殘卷」と称し、一覧表については占卜表と呼んでいるので、ここでは「烏鳴占吉凶占卜表」とした。

<sup>172</sup> 岩本 2011。羽44文書は「京都大学の教授で総長にもなった羽田亨（1882～1955）による敦煌文献主体の西域出土文献コレクションで、現在は蒐集にあたって資金的援助をしていた武田にゆかりのある武田科学振興財団・杏雨書屋が所蔵する」文書中に収録されている（岩本 2011, 65頁）。羽田コレクションの由来については、高田2004、2007に詳しい。

<sup>173</sup> 同, 67頁。

- (c) 日干（日毎の十干）によって怪奇現象の吉凶を整理した箇所
- (d) 冒頭「凡」で書き起こされる怪異の解説箇所
- (e) 厭勝の呪文や具体的な符の形象が記されている箇所

さらに、上記 (a) は、次の (1) ～ (4) から成る。

(a)の構造 「(1) 特定の怪奇現象がみられた日支（十二支によって表記されるその日の割り当て）によって、(2) 「病患」「官事」「少子」「口舌」「索食」などの憂い事（憂事）があることを示し、(3) その厭勝のためには一定の大きさの桐や桃の板を何枚か用意して、そこに「天文符」を書き、特定の場所に埋めたり、焼いたり、また酒や肉を用意して祭れば(4) 吉となる」<sup>174</sup>

では、百恠圖から上記 (a) 構造を持つ羽44の文章を例として取りあげ<sup>175</sup>、我々のP.c.3896の第1行目の構造と比較してみる<sup>176</sup>。

羽44 35～37行目

タイトル： 占狐鳴恠第廿九

内容： 卯日鳴 (1)、北家有死亡官事・婦女口舌、南家有死亡不出七日、西家男子  
死不出三十日 (2)、用桃木長七寸六枚・狗肉二斤・努箭一枚、瓮中着埋於  
酉地 (3) 吉、又作不免刑向之吉 (4)

<sup>174</sup> 同, 68頁。

<sup>175</sup> 同, 68頁。

<sup>176</sup> 以下のP.c.3988釋文は、陳 前掲, 360-361頁のテキストを基に、筆者がデジタルイメージで確認できた文字等を適宜補足し、校正した。

P.c.3988 第二部 1行目、2-3行目

タイトル： 占狐鳴坐地 (中略)

内容： 鳴卯地 (1)、不出三十日、東家長子死 (2)、錢十斤玄五尺杆頭卯地 (3)、  
 𤝵 (4)

P.c.3988のタイトルは羽44の前半部「占〔怪奇現象〕」の構成と一致する。また鳴き声を発する主体は、羽44では「狐」と明示されるが、P.c.3988では「狐」と示されている。「鳥」あるいは「鳥」に対する言及はみられないにもかかわらず、先行研究では第二部は鴉鳴占トであると考えられてきた。しかし、占いの主体を「鳥」であると言うことはできず、むしろ「狐」と「狐」が類似の音を有しており、羽44中に「占狐鳴恠」というパラレルなタイトルが見つかることから、これを「狐」の鳴き声に基づく予兆を記したものと考える方が妥当であろう。従って、P.c.3988第二部タイトルは後半部の卷数記述を失しているものの、構成・内容ともに羽44 35～37行目の記述と共通し、占いの主体が狐の鳴き声である点にも一致がみえる。

また、続く内容を対照してみると、羽44の(1)～(4)のそれぞれに類似する内容がP.c.3988第二部にもみられることがわかる。しかし、(1)では、羽44が日支を問題とする一方で、P.c.3988は子地～未地までの場所を表している。また、後者の(3)厭勝法には動物の頭部が多く関係している点で羽44の内容と大きく異なる<sup>177</sup>。従って、P.c.3988の第二部は、百恠圖に類する、あるいはそれを模して書かれた狐鳴占ト記事であると考えられる。

ところで、鴉鳴占トを記したP.c.3988第三部～第五部の内容も羽44中に類似内容を発見できるので以下に対照させる。ただし、羽44の引用箇所は狐鳴占ト、及び釜鳴占トを扱ったものである。＜ ＞に当該箇所の内容を略記する。

---

<sup>177</sup> 例えば、寅地、巳地、未地での厭勝法として「虎頭玄寅地」「猪頭着巳地」「羊頭一枚玄未地」などがみえる。

<鴉鳴 (P.c.3988) / 狐鳴 (羽44) による日支ごとの予兆>

P.c.3988 第三部

子日舎鳴憂見血盜賊至門<sup>178</sup> 丑日鳴者在屋上女婦口舌事 寅日鳴南舎上憂嫁娶事<sup>179</sup>

辰日鳴樹上必有遠客至 巳時鳴場上女婦口舌<sup>180</sup> 午日鳴在地門戸上必有官事

未日鳴於屋上憂淨十財有口舌<sup>181</sup> 申日鳴舎西樹上憂官<sup>182</sup> 酉日鳴在上憂官事来

戌日鳴北東屋上狐鬼索酒食吉<sup>183</sup> 亥日鳴圈上有分財事六畜亡<sup>184</sup>

(a) 羽44 28～32行目

子日鳴不出三十日東家北家憂小口女患鬪訟官事六畜用桃木長九寸六枚以獨血四升努箭一枚於庭中以二斤懸一竿上着戸左右又以鷄血子桃木柴燒燒埋於門中吉

丑日鳴不出一七日東家男子死西家官事南家死亡用桐木六長八寸四枚肉二斤努箭二枚於未地埋之銅三斤懸一丈竿上庭安向之吉 (後略)

<烏 (P.c.3988) / 狐 (羽44) が来た方角による予兆>

P.c.3988 第四部

烏從東来鳴有使事 烏從南来鳴有酒会 從西来憂 四角季上鳴者憂不安之事<sup>185</sup>

烏無故群隊集人舎上鳴者不而去大吉 主熟不止長来凶 烏從北方来鳴者有人来歡喜相見

烏来近人家舎上鳴必有死亡在下鳴憂長子長婦<sup>186</sup>

<sup>178</sup> P.c.3479では「凡烏子日舎北鳴 憂見血 盜賊至」と記されており、若干記述が異なる。「凡」は岩本の分類では(d)にみられるが、各占トの冒頭部に記されることが多いようである。

<sup>179</sup> 「卯日」の記述が欠けている。料紙の欠損により確認できないが、欠損箇所の大きさから察するとP.c.3479にも「卯日」の記述は無いかもしれない。

<sup>180</sup> 「巳時」とあるが、p.c.3479では「巳日」とあることから「巳日」の誤写であると思われる。

<sup>181</sup> Pt.3479では「未日鳴屋上憂口舌事」とある。

<sup>182</sup> Pt.3479では「申日鳴舎西樹上憂官事」とある。

<sup>183</sup> Pt.3479では「戌日鳴東屋上鬼来索食」とある。

<sup>184</sup> Pt.3479では「亥日鳴倦上有□才六畜亡」とある。

<sup>185</sup> Pt.3479では「從角来有不安之事」とある。

<sup>186</sup> Pt.3479では「烏無故群隊集人舎上」以降の記述はない。



(b) 羽44 26～27行目

(前略) 狐無故從東來鳴而去有驚丘亡之憂 狐鳴舍上泥四辟方九寸 (後略)

<鴉鳴 (P.c.3988) / 釜鳴 (羽44) による十二時辰ごとの予兆><sup>187</sup>

P.c.3988 第五部

日出鳴大吉 旦鳴君子惡人得食 食時鳴有遠人書信來 日中鳴憂盜賊起 日昃鳴憂病起  
脯時鳴有酒宴事 黃昏鳴憂遠行事 人定鳴賊入界 夜半鳴郡賊入界

(a) 羽44 90～93行目

日□憂家長者 食時憂小口<sup>188</sup> 隅中憂文書 日中憂奴婢事 日昃鳴憂財鷄憂表行事  
脯憂時小口 日入大凶 黃昏了吉 人定又吉 夜半凶 鷄鳴客事

この様にP.c.3988の第三～五部にも羽44中に類似性のみられるの書式と内容を確認できた。然るに、P.c.3988は百恠圖に類する構造、内容をもつ写本であると考えられる。岩本によれば、百恠圖が頻用されたのは曹氏帰義軍時代(914～1002)であり、書写年代もその前後である<sup>189</sup>。従って、それと相似性のみられるP.c.3988文書が作成されたのも10世紀を遡るものではないと想像できる。

ところで、P.c.3988の第六部<鴉鳴を聞いた方位による予兆><sup>190</sup>及び第一部の一覧表は、百恠圖中に相当する記述・書式を発見できない。また、P.c.3988の卦辞を眺めてみると、第一部、第五部、第六部の卦辞には必ずしも憂事ではない「書信」「遠人」「酒宴」「得財物」といつ

<sup>187</sup> 十二時辰のうち、Pt.3988は「隅中」「日入」「鷄鳴」を、羽44は「平旦」を欠いている。

<sup>188</sup> 岩本 前掲, 79頁には「會時」とあるが、カタログ(敦煌秘笈影印冊第冊一 291頁)で確認したところ「食時」と読めたので訂正した。

<sup>189</sup> 岩本 前掲, 75頁。

<sup>190</sup> Pt.3988第六部の釋文は以下である。尚、Pt.3479との間に異同がある場合には( )に後者の釋文も記す。

烏鳴坐子地酒宴事(烏鳴坐子地酒食事) 丑地官事 寅地遠人來  
卯地賣々事(卯地賣買事) 辰地客至 巳地得財物 午地有文書事  
未地宅舍事 申地酒宴事 酉地有憂事慎之(酉地有憂事慎之吉)  
戌地病患事 亥地盜賊事

た内容が含まれている。これらは、百恠圖には見受けられない卦辞である。しかし、百恠圖の作成目的が、これを調べて憂事解決のため符を用意し鎮祭を行うことにあることを鑑みれば<sup>191</sup>、厭勝法の記されないP.c.3988中の記述は百恠圖の内容としては不十分であり、やはりこれを模した書式で書かれた文書であると位置づける方が適当であろう。

では、これらの百恠圖には含まれない内容がチベット鴉鳴占ト書から導入されたものであると考えられるかどうか、次項で検証してみたい。

### 2.3. チベット語文書と漢語文書の関係からみる一覧表の起源

2.1項で紹介したように、鴉鳴占ト一覧表の起源についてはインド、中国の両案が先行研究中で提示されている。ここでは、漢語文書との記述内容の比較に焦点を当て、起源比定の根拠となっているいくつかの要素について再検討してみたい。

#### 【時間語彙】

鴉鳴占ト一覧表中の時間帯は10に区切られている。これは中国の十二時辰に近いが<sup>192</sup>、そこから烏が行動しない夜中の2つの時間帯を除いた10区分が表中に採用されている、というのが先行研究の見解である<sup>193</sup>。しかし、前項で示したP.3988第五部には「人定」「夜半」という時間帯に鴉鳴を聞いた場合の予兆が記されており、この見解に矛盾する。また、漢語一覧表中の第一の時間帯「東方晡」は、先行研究で挙げられたどの漢語文献中にも登場しない上<sup>194</sup>、百恠圖中の対応箇所（羽44 90～93行目）にも発現しないのである。一方、同じく第一の時間帯を指す

---

<sup>191</sup> 岩本 前掲, 72頁。

<sup>192</sup> Laufer 1914, p.27.

<sup>193</sup> 王・陳 1988, 100頁。

<sup>194</sup> 例えば、一日の各時間帯における祈願文を記した敦煌出土漢語文書P.c.2918に収められた十二の時間名称は、「夜半」「鷄鳴」「平旦」「日出」「食時」「隅中」「正南」「日昃」「晡時」「日入」「黄昏」「人定」である（敦煌叢刊初集 十五 敦煌掇瑣, 203-204頁）。また、Morganは雲夢秦簡の日書に現れる時間名称と漢語鴉鳴占ト一覧表中のそれとを対照させているが、名称に一致が確認できるのは「日出」「食時」「日中」のみである（Morgan 1987, p.61-62）。

チベット語 *nam ka phan phun* は、古チベット語内に通用していたことは上述の通りである<sup>195</sup>。

「東方暑」という名称が鴉鳴占ト一覧表にのみ見いだすことのできる名称であれば、これがチベットの時間語彙に影響された名称である可能性を考慮できるだろう。しかしながら、一方の時間語彙が他方の音写や翻訳でない以上、これらの比較から文書の成立背景を直接的に証明することは難しいと言える。

### 【卦辞内容】

先行研究でも論じられているようにチベット語、漢語両文書の一覧表卦辞には内容の一致が多々みえる<sup>196</sup>。この時、漢語文書との間に一致や類似性がみられるのはチベット語流通本だけではない。それらに相違のみられる卦辞のいくつかは、ヴァリエント本で補えるのである<sup>197</sup>。

ところで、漢語一覧表中の卦辞を百恠圖やP.c.3988第二～六部にみられる卦辞と対照してみると、後者では代表的な憂事である「病患」「少子」「口舌」「索食」等が、前者には現れないことに気づく。反対に、「暴風雨」「足下拝謁」「貴客至」「野獸来」といった記述は前者にのみみられる。つまり、百恠圖に類する写本の中に収録されているにもかかわらず、漢語一覧表と百恠圖との予兆卦辞には共通する内容や書式を見いだせない。また、一覧表中の記述は、

---

<sup>195</sup> ITJ 747 訳注 III-1参照。

<sup>196</sup> たとえば、Morgan 前掲, pp.67-69や、陳 前掲, 367-368頁。また、章末の対照翻字テキストも参照されたい。

<sup>197</sup> たとえば流通本では、X-8は、*spags par dga' ba zhig 'ong bar ston*となっているが、P.c.3988では「盡皆喜悅」と記されている。この時、P.c.3896には*thams chad dga' ba ngong*(=*'ong*) *bar ston*と記されているのである。

別系統の漢語鴉鳴占ト書であるP.c.3888やDx.6133の卦辞内容や書式からも逸脱していると言える<sup>198</sup>。

一方、チベット語一覧表中の卦辞表現は、全般に平易な文章である上、*ri dags zhig sod*（獵の獲物を仕留める）、*nad pa sos*（病気が治る）、*lam ring por 'gro*（長旅に行く）、*dga' ba'i gtam 'ong*（喜ばしい知らせが届く）、*grog ched po dang phrad*（偉大な友人と出会う）、*bags bya dgo*（用心しなくてはならない）といった他の占ト書にもみられる卦辞や、*g.yag*（ヤク）、*kha ba ched po*（大雪）、*bu yug*（吹雪）といったチベットに特徴的な要素を含んでいる。つまり、チベット語一覧表は、チベット語占ト書の内容や書式の上に立脚し、鴉鳴に関する予兆素材をチベットに適用させながら集約したものであると言える。

以上より、チベット語一覧表が漢語のそれを翻訳したものであると考える先行研究には従いが、それでも両者の卦辞には偶然の域を超えた一致がみられるため、後者が前者から着想を得た、あるいは前者を参照した可能性が考えられるのではないだろうか。その際、二点の漢語一覧表はほぼ完全に一致し<sup>199</sup>、同祖本に基づくと考えられるにも関わらず、それと符合するチベット語一覧表が存在しないことを不思議に思うかもしれない。しかし、チベット語文書の半数がヴァリエント本であることを考慮すれば、漢語文書の基となったチベット語文書も、これらと同時に存在していたことが想像できる。それでも、流通本からではなくヴァリエント本から着想を得て漢文一覧表を作成したとすれば、その原因や年代についてもさらなる検討が必要であろう。

---

<sup>198</sup> P.c.3888とDx.6133はともに一覧表をもたないタイプの烏占ト書である。このうち、P.c.3888は、①方位占、②行路占第五、③軍営占第七という構成からなる烏占トに関する断片文書である（黄 2001, 164-165頁）。①には烏の鳴いた方角からよみとれる予兆が記され、②③は「郊子」「管輅」「子夏」などの烏のふるまいに関する著述を引用しながら拾集した記述である。「郊子」や「管輅」は特に唐代以降の著作に烏占トに関連する人物として出現するそうである（黄 2001, 168-169頁）。さて、P.c.3888の②③には、「もし〔烏が〕Aしていれば、Bである」という簡略な書式で記された卦辞が並んでいる。これは、Dx.6133の卦辞にも共通していると言え、両文書は同じ書式グループに属すと考えられる。また、P.c.3888の末尾には807年（咸通十一年歲次庚寅二月廿八日記）という記年がみえる。然るに、これらの書式を9世紀初頭の漢語烏占ト書を代表する書式と考えることができるかもしれない。

<sup>199</sup> 両者の細かな差異については、章末の対照翻字テキストの注に記した。

## 【布施供物】

先行研究において、チベット語文書中に示された布施供物の来源をもとに文書の起源が論じられていることは先にも述べた<sup>200</sup>。しかし、供物の記述が漢文一覧表中にみられないことについては十分に説明されていないので、この点に着目して文書の成立背景を考えたい。

まず、漢文鴉鳴占ト文書は、その大部分が百恠圖という占ト書の書式、内容に類する記述であった。しかし、時間語彙や卦辞内容を照査してみた結果、おそらく一覧表だけはチベット語文書から着想を得て書かれたと考えられる。つまり、百恠圖の書式に則り鴉鳴占トを記した漢文占ト書に、チベットの鴉鳴占ト一覧表が挿入され、一典籍としてまとめられたのがP.c.3988やP.c.3479文書である。このとき、百恠圖が厭勝の鎮祭を行うための手引書であったことを考慮すれば、その厭勝法と齟齬のある布施供物をあえて省略したと考えることができる。

以上をまとめると、漢文一覧表はおそらくチベット文書から着想を得て作成されたものである。しかし、百恠圖を模した写本に挿入される都合上、その理論に合わない布施供物の記述や、実用性の低い韻文は破棄された<sup>201</sup>。チベット語文書の半数が流通本とは異なる写本であることから、漢文一覧表が参考としたチベット語文書もこれらのヴァリエーション本と共存していたであろうと推測できる。

---

<sup>200</sup> 本章1.4項参照。また、Dx.6133の前半には「郊子」「子夏」「焦貢」などの著述を引用した「祭鳥法」が収録されている。そこに列挙されている餅物、大豆（豆飯）、牛乳、生米、安悉（息）香といった鳥への供物を、チベット語鴉鳴占ト一覧表中の供物と同じであると認め、漢文鳥占トの伝統をチベットが取り入れた可能性を論じた研究もある（趙2010, 75-77頁）。確かに、供物に類似性があることは認められるが、両者の来歴を論じるには、チベットの資料はあまりにも乏しいと言える。

<sup>201</sup> 古チベット語鴉鳴占ト一覧表が収録されているP.c.3896に韻文が存在しない点について、再び言及しておく。P.c.3896のチベット語一覧表は五兆ト法なる漢文占ト書の背面に記されている。管見の限り、漢語占ト文書の背面にチベット語占ト文書が書かれているものは他に無い。また、一覧表の側にも漢文の記述が見えるが、チベット語が書き加えられた後もそれらの記述は紙面から切り離されることがなかった。これらの状況から、チベット語一覧表が書き加えられた後も、表面の漢語占ト書が必要とされていたとすると、漢語占ト文書の知識を有する人物によって、チベット語鴉鳴占ト一覧表が求められたと考えられるのではないだろうか。P.c.3896の一覧表が、漢人社会の占トに通じた人物により書写されたのだとすれば、ここに韻文の記述がないのも、漢語鴉鳴占ト書の場合と同じ理由によると想像できる。

## 2.4. Kākajariti 翻字テキストと試訳

最後に、チベット大藏經に収録されているKākajaritiについて言及したい。これは、北京版 (No.5831, *thun mong ba lugs kyi bstan bcos, go*, 202b7-204b6) とナルタン版 (*go*, 221a1-222b7) に収められており、奥書の情報により、Dānaśīlaなる人物によって翻訳されたことが知られている。そこで、翻訳の年代と祖本となったサンスクリット本について検討してみたい<sup>202</sup>。

まず、翻訳年代に関しては奥書に記された訳者名と訳経地の記述からいくつかの説が提唱されている。なぜなら、チベット史上に訳経者Dānaśīlaという人物は3人存在するとされるからである。すなわち、9世紀初頭のJanamitraと同時代の人物、11世紀のAtīśaの師であるという人物、そして13世紀初頭にバングラデシュのJagaddala寺からŚākyaśrībhadrāと共にチベットに招請された彼の弟子である人物の3人である<sup>203</sup>。このうち、最も早い時代のDānaśīlaをKākajaritiの訳者とするLauferの論<sup>204</sup>を退けて、11世紀のDānaśīlaを採用する理由を山口は次のように説明している。

訳経者Dānaśīlaは三つの時代に一人ずついる。一人は吐蕃期、第二は後期仏教伝播期初頭、第三はシャキャシュリーパドラ（在チベット1204-1214）に同行した人である。九世紀の訳経に見えるDānaśīlaはrGya gar gyi mkhan poとして示され、訳経に従った場所は一般に示されない。問題『鵑鳴觀察』はヤルルンYar klungsのSol nag Thang po cheで訳出されている。この寺は後期仏教伝播期の名刹であることから訳者を第二期の人とすべきであろう<sup>205</sup>。

山口の考える通り、*thang po che*が一般にヤルルンの‘*phyong-po*’に1017年に建立されたSol nag thang po cheを指すことはSørensenの研究でも一致している<sup>206</sup>。また、この寺の建立はヤルルン

---

<sup>202</sup> 以下のKākajaritiに関する考察は、北京版の影印本に依拠している。Lauferの研究は概ねナルタン版に基づくことを注記しておく。

<sup>203</sup> Ruegg 1981, p.117, 378n., 越智 1994, 27頁。

<sup>204</sup> Laufer 前掲, pp.19-20.

<sup>205</sup> 山口 1985, 540頁。

<sup>206</sup> Sørensen and Hazod 2005, p.309, p.320.

地域における後期仏教伝播に重要な役割を果たしており、1047年にはAtiśaが、その後には Śākyaśrībhadrāがこの寺に滞在していたとある<sup>207</sup>。したがって、奥書に書かれた訳経地がSol nag thang po cheである以上、Kākajaritiが9世紀に訳されたとは考え難いという山口説には首肯できる。しかし、Atiśa、Śākyaśrībhadrāが共にSol nag thang po cheに滞在していたことは、残る両 Dānaśīlaを訳者として比定する根拠となり得るため、13世紀に訳出されたという可能性を否定しきれない。ところで、越智はチベット史上に登場する3人のDānaśīlaのうちの第二の人物、すなわち11世紀のDānaśīlaに関して、“Atiśaの師であるDā chen poをDānaśīlaとするのは誤りであり、このDā chen poとは後に論ずるように正しくはDānaśrīとしなければならない”、とRueggの提唱した「3人のDānaśīla説」を否定し、同名異人のDānaśīlaが2人しか存在しないと論じている<sup>208</sup>。この説に従うならば、Kākajaritiの訳者は13世紀初頭の人物と結論づけることができる。しかし、チベット史上における訳経者Dānaśīlaの同定は本論文の主題とするところではない上、筆者自身は山口説を退ける確たる理由を持たない。いずれにせよ、9世紀の可能性が否定された以上、我々の古チベット語鴉鳴占ト文書がKākajaritiに先行する資料であることが証明されたと言える。それは、後述するように、Kākajaritiのもつ内容的特徴からも傍証されるのである。

次に、Kākajaritiの底本とされるサンスクリット本について言及したい。北京版目録<sup>209</sup>によれば、当文献はチベット名をBya-rog-gi skad brtag-par bya-baとし、サンスクリットではKākacaritra、漢語では鴉鳴觀察と記されている<sup>210</sup>。また、東京大学所蔵チベット大蔵経ナルタン版テ

---

<sup>207</sup> 同, p.139, p.309.

<sup>208</sup> 越智 1994, 27頁。

<sup>209</sup> 影印 北京版西藏大蔵経総目録・索引, 826頁。

<sup>210</sup> 北京版に収められたkākajaritiの冒頭部には、

*bya rog gi skad brtag par bya ba bzhugs //*  
*rgya gar skad du / ka'kadzariti /*  
*bod skad du / bya rog gi skad brtag par bya ba 'di lta ste /*

とあり、目録上の名称はここから採用されている。注意すべきは、上記のようにサンスクリット語ではka'kadzaritī (あるいは、ka'kadzaritaかもしれない)と記述されていて、ka'kadzaritraではないのである。筆者は今までのところナルタン版のテキストを確認できていないが、それに拠ったLauferの翻訳でもkākajariti (“On the Sounds of the Crow”)とされている。



ンギュルのカード目録データベースには、Bya-rog-gi spyod-pa、kākacaritra、鳥行とある<sup>211</sup>。

従って、これはKākacaritraという名のサンスクリット典籍を底本としていられる。しかし、このKākacaritraというサンスクリット本自体については先行研究でも詳しくは言及されていない。代わりに、たとえばLauferの研究では、インドの占術を集成した6世紀の書物Bṛihat Samhitaにおいて、既に鳥の吉兆あるいは凶兆を示す行動が記されていることを指摘した上で、Kākajaritiが記された時代には鴉鳴による占ト法を記した著作がいくつか存在した可能性を示唆している<sup>212</sup>。確かに、Bṛihat Samhitaの第94章は「カラスの鳴き声」による前兆占いを扱ったもので、鳥のふるまいから読み取れる62の予兆を収録している<sup>213</sup>。同本の第85章には「鳥獣占い」について10項目がたてられており<sup>214</sup>、第95章までに動物の振舞いや鳴き声に関する前兆がつづけて綴られている<sup>215</sup>。それ故、Bṛihat Samhitaは動物の振舞いを体系的に論じた初期の作品であるとも称されている<sup>216</sup>。そこで、Bṛihat Samhitaの第94章「カラスの鳴き声」で示される予兆とKākajaritiとを比較してみたところ、前者で示された各々の予兆は後者に比して記述が詳細で丁寧であることがわかる。しかし、後掲するようにKākajaritiの予兆はテーマごとに明確に整

---

<sup>211</sup> チベット大蔵経 ナルタン版・テンギュル カード目録データベース <http://tibet.its.u-tokyo.ac.jp/tibet/>。

また、Cordierカタログには、Bya-rog gi skad brtag-par bya ba、Kākajaritamとある（Cordier 1909-1915, vol.2, p.486）。

<sup>212</sup> Laufer 1914, pp.22-23. LauferはKākajaritiの成立は6～7世紀であり、それを遡ることはないと考えている（同 p.23）。

<sup>213</sup> 矢野・杉田 1995b, 129-137頁。

<sup>214</sup> 80の予兆が次の10項目に分かたれて記されている。〈鳥獣占いの著者たち〉、〈方位による吉凶〉、〈結果が現れるまでの時間〉、〈予兆能力の強弱〉、〈前兆を示していない鳥獣〉、〈三十二方位に割り当てられる人間〉、〈声の吉凶〉、〈左右の吉凶〉、〈楽音の吉凶〉、〈鳥獣の種類と吉凶〉、〈鳥獣の場所による吉凶〉。

<sup>215</sup> 第86章「鳥獣占いの三十二方位」、第87章「鳴き声」、第89章「犬の振舞い」、第90章「ジャッカル」の鳴き声」、第91章「けものの振舞い」、第92章「牛の振舞い」、第93章「馬の振舞い」、第94章「象の振舞い」、第95章「カラスの鳴き声」、第96章「鳥獣占い補遺」。

<sup>216</sup> White 1995, p.289.

また、矢野によれば、インドにおける鳥獣占いはヴェーダ時代にまで遡るものであるが、古くは鳥獣の声、行動、その方位による占いであったそれがBṛihat Samhitaの時代には細分された時間、宿星、惑星の要素と組み合わせて考えられるようになったそうである（矢野・杉田 前掲, 232-233頁, n648）。確かに、リグ・ヴェーダの呪法的讃歌の中には鳥占の歌が収録されている。しかしここには鳥に対する言及はない（辻 1970, 381-384頁）。

理されており、特に筆者が第二部と分類した(鴉鳴を聞いた時間帯と方角から読み取る予兆)では、9つの方向における鴉鳴の予兆が時間毎に網羅的に記されている。言い換えれば、ここでは書式が規定されているのである。一方、Bṛihat Saṃhitāの予兆の並びには緩やかなまとまりが見られるものの<sup>217</sup>、それらが何らかの書式に準じているとは判断し難い<sup>218</sup>。しかしながら、鳴き方や巣の様子といった予兆の題材と、個々の記述内容に関しては、両者に類似性を発見できる。以下にいくつか例を挙げたい。その際、Bṛihat Saṃhitāの記述はいずれも【矢野・杉田 1995b】より引用した。Kākajaritiの原文については後掲の翻字テキストを参照されたい。

(B)-18：(前略) 赤い物、焼けたもの、草、木片を家にもってくると、火事が起きる

(K)-204a-6：赤い糸を掴んで、家屋の上に留まって声を発すれば、家屋は燃えるであろう

(B)-39：死体の上に乗って〔旅行者〕の方を向いて鳴くと、死を引き起こす。骨を嘴で割りながら鳴くと骨折を招く。

(K)-204a-6：旅行中に、〔鳥が〕死人の頭蓋骨に留まって声を発すれば、死ぬ印である。

(B)-54：(前略) 「ヴァド」と鳴くと衣服が得られる。

(K)-204b-3：ターターと鳥が声を発すれば、衣服を得るであろう。

他にも、Kākajaritiにみられる‘o ma can gyi shing<sup>219</sup>（ミルクのような〔樹液〕の木）という表現はBṛihat Saṃhitā中の「乳汁の出る木<sup>220</sup>」に比せられるだろう。また、双方に鳴き声に関する予

---

<sup>217</sup> 例えば、予兆の2～7までは巣、8～18までは振舞い、19～24は方角、25～30は旅、31～49は場所と振舞い、50～56は鳴き声と関連した予兆が記されているようだ（矢野・杉田 前掲, 129-137頁）。

<sup>218</sup> 予兆の19～24では、東、東南、南西、西北、北東について言及があるのみである。しかし、第86章の「鳥獸占い三十二方位」では、八方位をそれぞれ四分割した三十二方位で鳥獸が鳴いた場合の予兆が記されている。また、三十二方位が太陽とどのような位置関係にあるかによって予兆能力の強弱が変わるため、より詳細な分類によって予兆が整理されており、ここには一定の書式が規定されていると言えるだろう。

<sup>219</sup> 204a-4.

<sup>220</sup> 矢野・杉田 前掲, 131頁（第94章-16）。

兆がまとまって記されている点にも共通性が見いだせると言える。しかし、それらのもつ記述内容に符合は見当たらない上、Kākajaritiの記述はBṛihat Samhitāに比して簡潔で短く<sup>221</sup>、我々の鴉鳴一覧表との近似性を連想させられる<sup>222</sup>。

ところで、底本となったサンスクリット本が、Lauferのような博覧強記の東洋学者でさえ知るところのものではないとなれば、チベット語のKākajaritiが実際に翻訳本であったのかどうかさえ疑わしい。しかし、インドの鳥に関する研究の中で、RoyはKakacharitraと呼ばれる鳥に関する自然科学的知識が存在すると述べている<sup>223</sup>。氏は、それが不完全で経験主義的ではあるが多くの信望者を持ち、未発表の書物をあわせればかなりの数の資料が存在するものであるにもかかわらず、発表されている書物は味気も面白みもない上、時には理解し難い内容をもつものであると説明する。それでも、古い時代に一般的であった迷信の記録として読む価値のあるものだと評価している。RoyのいうKakacharitraに関する書物について、筆者は今のところ調査をする機会を得ず、チベット大蔵経のKākajaritiとの関連性を明らかにできていない。しかし、それが鳥に関する自然科学的知識を扱ったものであり、名称にも明らかな関連がうかがえる以

---

<sup>221</sup> Bṛihat Samhitāの予兆卦辞（矢野・杉田 前掲）からいくつか引用してみる。（ ）内に引用頁を記す。

「巢が〔木の〕東側の枝にあれば秋に雨が、西側にあれば最初の雨が、南北にあれば〔秋と雨期の〕まん中で、木の頂にあれば雨が降る。」（130頁）

「二羽、三羽、四羽の雛がいれば豊穰をもたらす。五羽なら王の交代がある。卵を放り出したり、卵が一つであれば、あるいは、卵がなければ吉をもたらさない」（130頁）

「乗り物、武器、履物、日傘の影、からだをつついたときは〔持ち主の〕死、それに敬意を表した時は敬意。糞をすると調理品の獲得。」（131頁）

「旅立ちの際、耳と同じ高さにいれば現状維持であるが、仕事の成就是不。鳴きながら出発する人に向かってくると、〔その人を〕旅行から引き戻す。」（132頁）

<sup>222</sup> 他にも、原本の成立が2世紀中葉以前に遡れるというサンスクリット本Śārdūlakarṇāvadāna（以下ŚA）にも他の占ト記事と並んで鳥に関する予兆記事が収録されている。これは、Divyāvadānaの三十三番目の物語として一卷にまとまっており、写本としては単独でも流通していたものである（以上 善波 1952, 171-172頁参照）。その翻訳はチベット語大蔵経カンギュル部にある他（*stag rna'i rtogs pa brjod pa*：北京版 1027, *mdo sna tshogs*, ke 242a2-286b6、デルゲ版 0358, *mngo sde*, a: 232b1-277b5、ナルタン版 a 354b5-420b2）、著名な漢語の翻訳本が数点存在する（摩登伽經：大正大蔵経 第21巻 399-401頁、舎頭諫太子二十八宿經：大正大蔵経 第21巻 410-419頁）。ŚAの中では、鳥の鳴き声に関する9つの予兆と、ふるまいに関する11予兆が示されているが、これらを扱った章は残念ながらチベット語には翻訳されなかった。しかし、英訳をみる限り、ŚAとKākacaritiの間にも内容や予兆を読み取る観点には類似がみられると言える（Sharma 1992, pp.65-66）。

<sup>223</sup> Roy, 1929, pp.526-527.

上、チベット本の底本となったKākacaritraと無関係ではないと推測できる。また、MortensenはKākajaritiにはインドの予兆書との間に内容的な類似性が見てとれると指摘している<sup>224</sup>。例えば、14世紀に書かれた中世インドの百科全集の類いに属するŚāringadhara Paddhatiの83章は、犬の振る舞いや哭き方から読み取る前兆を取り扱っている。その中で、犬は色により各カーストに分類されており、白はバラモン、赤はクシャトリヤ、黄はヴァイシャ、黒はスードラを表している<sup>225</sup>。同様に、Kākajaritiの第一部にもカーストごとの鳥の特徴が述べられており、赤目の鳥はクシャトリヤと関連づけられているのである。従って、Kākajaritiはインドの予兆書の伝統の中に位置すると考えられる。

以上より、チベット大蔵経に収録されるKākajaritiは、Kākacaritra / Kākacharitraと称されるインドの鳥に関連した民間信仰を記した文献、ないし伝承に基づくものであるとまとめておきたい。

なお、Lauferの研究にはKākajaritiの英訳が収録されている。しかし、書式や語彙の相違を確かめるために、ここに改めて翻字テキストを提示したい。その際、参考までに筆者の試訳も掲載する。また、構成を端的に示すために【第一部】～【第七部】の分類を補った。また、試訳には必要に応じてLauferの訳を（L）として脚注に記した<sup>226</sup>。

---

<sup>224</sup> Mortensen 2003, pp.134-135.

<sup>225</sup> White 1995, p.295.

<sup>226</sup> Laufer 1914, pp.7-19.

-翻字テキスト-

【第一部】

(202b-7) // bya rog gi skad brtag par bya ba bzhugs //  
 rgya gar skad du / ka'kadzariti / bod skad du / bya rog gi (202b-8) skad brtag par bya ba 'di lta ste /  
 / bram ze ba / rgyal rigs dang / rje rigs dang / dmangs rigs zhes so /  
 / de la zho la brtsi ba bram ze'o /  
 / mig dmar ba rgyal rigs so /  
 / gshog pa sprug pa rje rigs so /  
 / nya'i (203a-1) \$\$ // gzugs lta bu rmangs rigs so /  
 / mi gtsang ba za ba dang / sha 'dod pa yang de bzhin no /  
 / 'di dag gi skad kyi rnam 'gyur ni /  
 / khyim bdag gis cig car bden par 'gyur ba ni brjod par bya ste /

【第二部】

thun dang (203a-2) po la  
 shar du bya rog skad sgrogs na sems can gyi 'dod pa 'grub par 'gyur ro /  
 / me ru bya rog skad sgrogs na dgra 'ong bar 'gyur ro /  
 / lho ru bya rog skad sgrogs na grogs po 'ong bar 'gyur ro /  
 / bden bral du bya rog (203a-3) skad sgrogs na ma bsams pa'i rnyed pa 'ong bar 'gyur ro /  
 / nub tu bya rog skad sgrogs na rlung chen po 'byung bar 'gyur ro /  
 / rlung gi phyogs su bya rog skad sgrogs na 'gron po 'ong bar 'gyur ro /  
 / byang du bya rog skad sgrogs na (203a-4) nor gtor ba rnyed par 'gyur ro /  
 / dbang ldan du bya rog skad sgrogs na bud med 'ong bar 'gyur ro /  
 / tshangs pa'i gnas su bya rog skad sgrogs na 'gron po 'ong bar 'gyur ro /  
 / thun dang po'i 'khor lo rdzogs so // //

(203a-5) thun gnyis pa la  
 shar du bya rog skad sgrogs na rang gi nye ba 'ong bar 'gyur ro /  
 / lho ru bya rog skad sgrogs na me tog dang go la thob par 'gyur ro /  
 / bden bral du bya rog skad sgrogs na rgyud pa 'phel bar 'gyur ro /  
 / nub tu (203a-6) skad sgrogs na thag rings su 'gro bar 'gyur ro /

/rlung gi mtshams su skad sgrogs na rgyal po gzhan du ‘gyur ba’i rtags so /  
/byang du skad sgrogs na ‘phrin las legs par thos bar ‘gyur ro /  
/dbang ldan du skad sgrogs na (203a-7) ‘khrug pa ‘ong bar ‘gyur ro /  
/tshangs pa’i gnas su skad sgrogs na ‘dod pa’i ‘jug pa rnyed par ‘gyur ro /  
/thun gnyis pa’i ‘khor lo rdzogs so //

// thun gsum pa la

shar du bya rog skad sgrogs na nor rnyed par (203a-8) ‘gyur ro /  
/me ru bya rog skad sgrogs na ‘thab mo ‘ong bar ‘gyur ro /  
/lho ru skad sgrogs na rlung po ‘ong bar ‘gyur ro /  
/bden bral du skad sgrogs na dgra ‘ong bar ‘gyur ro /  
/nub tu skad sgrogs na bud med ‘ong bar ‘gyur (203b-1) ro /  
/rlung phyogs su skad sgrogs na nye ba ‘ong bar ‘gyur ro /  
/byang phyogs su skad sgrogs na grogs po bzang po ‘ong bar ‘gyur ro /  
/dbang ldan du skad sgrogs na mes ‘tshig par ‘gyur ro /  
/tshangs pa’i gnas su skad (203b-2) sgrogs na rgyal pos thugs la brtags pa’i rnyed pa thob par ‘gyur ro /  
/thun gsum pa’i ‘khor lo rdzogs so //

// thun bzhi pa la

shar du bya rog skad sgrogs na ‘jigs pa che ba’i rtags so /  
/me ru skad sgrogs (203b-3) na rnyed pa che ba’i rtags so /  
/lho ru skad sgrogs na ‘gron po ‘ong bar ‘gyur ro /  
/bden bral du skad sgrogs na zhag bdun du rlung po ‘byung bar ‘gyur ro /  
/nub tu skad sgrogs na rlung po’i char ‘ong bar ‘gyur ro /  
/(203b-4) rlung gi mtshams su skad sgrogs na nor gtor ba rnyed par ‘gyur ro /  
/byang du bya rog skad sgrogs na rgyal po ‘ong bar ‘gyur ro /  
/dbang ldan du skad sgrogs na go la rnyed par ‘gyur ro /  
/tshangs pa’i gnas su bya rog (203b-5) skad sgrogs na ltogs pa’i rtags so /  
/thun phyed dang bzhi’i ‘khor lo rdzogs so //

// nyi ma nub pa’i tsha<sup>227</sup>

shar du bya rog skad sgrogs na lam du dgra ‘ong bar ‘gyur ro /  
/me du sgra sgrogs na gter ‘ong bar ‘gyur ro /

---

<sup>227</sup> *tshe*の誤写と考えられる。

(203b-6) / lho ru sgra sgrogs na nad kyis 'chi bar 'gyur ro /  
 / srin po'i mtshams su sgra sgrogs na sems kyi 'dod pa 'grub par 'gyur ro /  
 / nub tu bya rog skad sgrogs na nye ba 'ong bar 'gyur ro /  
 / rlung gi mtshams su skad sgrogs (203b-7) na nor rnyed pa'i rtags so /  
 / byang du skad sgrogs na rgyal po la bkur sti 'ong bar 'gyur ro /  
 / tshangs pa'i gnas su skad sgrogs na bsams pa'i rnyed pa thob par 'gyur ro /  
 / thun bzhi pa'i 'khor lo rdzogs so //

(203b-8) 'di lta bu'i bya rog gi skad kyi rnam 'gyur rdzogs so //

### 【第三部】

// da ni 'gro ba'i mtshan nyid brjod par bya ste /  
 / 'gro ba'i dus su bya rog gi skad kyi mtshan nyid brjod par bya ste /  
 / rags dang chu'i 'gram dag la // shing (204a-1) \$\$ // gcig la ni de bzhin du // grogs stod dang ni lam  
 bzhi la // g.yas su bya rog sgra sgrogs na // 'gro ba di ni legs par shes /  
 / lam la rab tu 'gro ba'i tshe // rgyab tu bya rog sgra sgrogs na // (204a-2) dngos grub rab tu thob par  
 'gyur /  
 / lam du 'gro ba'i tshe gshog pa sprug cing skad 'don na // bar chad chen po 'ong bar 'gyur ro /  
 / lam du zhags<sup>228</sup> pa'i tshe skra mchus gzings shing sgra sgrogs na de'i tshe 'chi ba'i (204a-3) rtags so /  
 / lam du zhugs pa'i tshe mi gtsang ba za zhing sgra sgrogs na bza' dang skam<sup>229</sup> 'ong ba'i rtags so /  
 / lam du zhugs pa'i tshe tsher ma la gnas shing sgra sgrogs na dgra'i 'jigs par shes par bya'o /  
 / lam du (204a-4) zhugs pa'i tsha<sup>230</sup> 'o ma can gyi shing la gnas shing sgra sgrogs na de'i tshe 'o thug gi  
 bza' ba 'ong bar 'gyur ro /

---

<sup>228</sup> = *zhugs*

<sup>229</sup> = *skom*

<sup>230</sup> = *tshe*

/ shing skam po la gnas shing sgra sgrogs na de'i tshe bza' ba dang skom med pa'i rtags so /

/ pho brang la (204a-5) gnas nas gang gi tshe skad sgrogs na de'i tshe sdod sa bzang po rnyed par 'gyur ro /

/ gdan la gnas nas sgra sgrogs na dgra 'ong bar 'gyur ro /

/ sgo lta zhing sgra sgrogs na mtshams kyi 'jigs par shes par bya'o /

/ (204a-6) mchus gos gzings shing bya rog skad sgrogs na gos rnyed bar 'gyur ro /

/ lam la zhugs pa'i tshe thod pa la gnas shing sgra sgrogs na 'chl ba'i rtags so /

/ skud pa dmar po bzung nas khyim phyi thog tu gnas (204a-7) nas sgra sgrogs na khyim 'tshig par 'gyur ro /

/ snga dro'i dus su bya rog mang po 'tshogs na rlung po che bar 'ong bar 'gyur ro /

/ lam la zhugs pa'i tshe shing mchus bzung nas sgra sgrogs na rnyed pa 'ong bar 'gyur ro

(204a-8) lam la zhugs pa'i tshe nyi ma shar dus su bya rog sgra sgrogs na nor rnyed par 'gyur ro /

/ lam du zhugs pa'i tsha<sup>231</sup> sgra sgrogs na 'dod pa 'grub par 'gyur ro /

/ 'di lta bu'i lam gyi mtshan nyid rdzogs so // //

#### 【第四部】

(204b-1) gnas pa'i bya rog gi tshang gi mtshan nyid ni /

/ shing gi shar gyi phyogs kyi yal ga la tshang byad<sup>232</sup> par gyur na / de'i tshe lo bzang ba dang char 'ong bar 'gyur ro /

---

<sup>231</sup> = *tshe*

<sup>232</sup> = *byed*



/ lho phyogs kyi yul ga<sup>233</sup> la tshang byed par ‘gyur na de’i tshe ‘bru ngans (204b-2) par ‘gyur ro /

/ shing gi dbus gyi yal ga la tshang byed na de’i tshe ‘jigs pa chen po ‘ong bar ‘gyur ro /

/ ‘og tu tshang ‘cha’ na pha rol gyi dmag las ‘jigs par ‘gyur ro /

/ rtsig pa’am sa’am chu la tshang byed (204b-3) na rgyal po ‘chi par ‘gyur ro /

#### 【第五部】

/ gzhan yang bshad par bya ste /

/ ka ka zhes bya rog skad sgrogs na nor rnyed par ‘gyur ro /

/ da da zhes bya rog skad sgrogs na sdug bsngal ‘byung bar ‘gyur ro /

/ ta ta zhes (204b-4) skad sgrogs na gos rnyed par ‘gyur ro /

/ gha gha zhes sgra sgrogs na don ‘grub par ‘gyur ro /

/ gha ga zhes bya rog skad sgrogs na nor ‘ong bar ‘gyur ro /

#### 【第六部】

/ ‘jigs pa’i rtags mthong na bya rog la gtor ma (204b-5) dbul bar bya’o /

/ sbal pa’i sha la bya rog dga’ bar byed pas / des gtor ma phul na bar chad med par ‘gyur ro //

// ^oM mi ri mi ri bdzra tu da Ta gi laM gri ha’ gri sva’ ha’ /

‘di lta bu’i bya rog gi spyin pa rdzogs (204b-6) so //

#### 【第七部】

// paNDi ta chen po da’ na shi las / yul dbus kyi yar glung thang po che’i gtsug lag khang du bsgyur  
ba’o // //

---

<sup>233</sup> = yal ga

【第一部】 202b-7～203a-1

鳥の鳴き声の見分け方〔の書〕である。

インドの言葉で「kākajariti」、チベット語で「鳥の鳴き声の見分け方」は以下のようである。

バラモンとクシャトリヤとヴァイシャ、スードラという。

その中で賢い<sup>234</sup>のは、バラモンである。

赤目のものはクシャトリヤである。

羽をバタバタと揺らしているのはヴァイシャである。

魚の形のようなものはスードラである。

不浄なものを食して、肉を欲するのもその様（＝スードラ）である。

これらの鳴き声による啓示は、

家長によってただちに真実となると、説明すべきである<sup>235</sup>。

【第二部】 203a-1～4

最初の時間区切り（／初更）に於いて<sup>236</sup>

東で鳥が声を発すれば、有情の願いは叶うであろう。

東南で<sup>237</sup>鳥が声を発すれば、敵が来るであろう。

南で鳥が声を発すれば、友人が来るであろう。

南西で<sup>238</sup>鳥が声を発すれば、予期しない利益が舞い込む（*lit.* 起こる）であろう。

---

<sup>234</sup> *brtsi ba* : (L) interigent mind

<sup>235</sup> *'di dag gi skad kyi rnam 'gyur ni // khyim bdag gis cig car bden par 'gyur ba ni brjod par bya ste /* : (L) The following holds good for the different kinds of tones emitted by the crow. The layman must pronounce the affair the truth of which he wishes to ascertain simultaneously [with the flight of the crow].

<sup>236</sup> *thun dang po la* : 【翻訳】 8231, Prathame yāme 〔藏〕 Thun dan-po 〔漢〕 初夜、上半 〔和〕 初更に於て  
なお、『更』とは夜の時間を計る単位であり、日没から日の出までを五等分した時間を『初更』～  
『五更』と呼ぶ。

<sup>237</sup> *me ru* : 【翻訳】 8339 Āgneyī 〔藏〕 Me-ḥi phyogs 〔漢〕 火隅 〔和〕 火神の司る隅にして、南東隅なり

<sup>238</sup> *bden bral* : 8340 Nairṛiti 〔藏〕 Bden-bral-gyi phyogs 〔漢〕 離實隅 〔和〕 突伽の女神の司る隅にして南西隅なり

西で鳥が声を発すれば、大風が湧き起こるであろう。

西北の方向で<sup>239</sup>鳥が声を発すれば、待ち人（／客）が来るであろう。

北で鳥が声を発すれば、散り散りになった財を得るであろう。

北東で<sup>240</sup>鳥が声を発すれば、女性が来るであろう。

天頂<sup>241</sup>で鳥が声を発すれば、待ち人（／客）が来るであろう。

最初の時間区切り（／初更）の一巡は終わり。

#### 203a -5〜7

二つ目の時間区切り（／二更）において<sup>242</sup>

東で鳥が声を発すれば、自身の親族が来る（／できる）であろう。

南で鳥が声を発すれば、花とアレカの実を得るであろう。

南西で鳥が声を発すれば、家系を繁栄させるであろう。

西で〔鳥が〕声を発すれば、遠地へ行くことになるであろう。

西北の方角（lit. 隅）で〔鳥が〕声を発すれば、王は別人物に変わる印。

北で〔鳥が〕声を発すれば、知らせによって良いことを聞くであろう。

北東で〔鳥が〕声を発すれば、混乱が起こるであろう。

天頂で〔鳥が〕声を発すれば、願望の実現を得るであろう。

二つ目の時間区切り（／二更）の一巡は終わり。

#### 203a-7〜203b-2

三つ目の時間区切り（／三更）において<sup>243</sup>

東で鳥が声を発すれば、財を得るであろう。

---

<sup>239</sup> *rlung gi phyogs su* : 8341 Vāyavī〔藏〕Rluñ-gi phyogs〔漢〕風隅〔和〕風神即す縛庚の司る隅にして、北西隅なり

<sup>240</sup> *dbang ldan du* : 8338 Āiçānī〔藏〕Dbañ-ldan-gyi phyogs〔漢〕具主隅〔和〕東北隅

<sup>241</sup> *tshangs pa'i gnas su* : lit. 梵天の住まう所。Laufer 1914, pp.10-11参照。

<sup>242</sup> *thun gnyis pa la* : 【翻訳】 8241 Dvitiya-praharaḥ〔藏〕Thun-gñis-pa ḥam mjin〔漢〕二更

<sup>243</sup> *thun gsum pa la* : 【翻訳】 8242 Tṛtiya-paraharaḥ〔藏〕Thun-gsum-pa ḥam lña-tshigs〔漢〕三更

東南で鳥が声を発すれば、争いが起こるであろう。

南で〔鳥が〕声を発すれば、風が起こるであろう。

南西で〔鳥が〕声を発すれば、敵が現れるであろう。

西で〔鳥が〕声を発すれば、女性が来るであろう。

西北の方角で〔鳥が〕声を発すれば親族が来るであろう。

北方で〔鳥が〕声を発すれば、良い友人が来るであろう。

北東で〔鳥が〕声を発すれば、火事が起こる（*lit.* 火で燃える）であろう。

天頂で〔鳥が〕声を発すれば、王が御心に欲するものを得るであろう。

三つ目の時間区切り（／三更）の一巡は終わり。

#### 203b-2～5

四つ目の時間区切り（／四更）において<sup>244</sup>

東で鳥が声を発すれば、脅威が大きい印である。

東南で〔鳥が〕声を発すれば、得るものが大きい印である。

南で〔鳥が〕声を発すれば、待ち人（／客）が来るであろう。

南西で〔鳥が〕声を発すれば、7日のうちに風が起こるであろう。

西で〔鳥が〕声を発すれば、風雨が起こるであろう。

西北の方角（*lit.* 隅）で、〔鳥が〕声を発すれば、散り散りになった財<sup>245</sup>を得るであろう。

北で鳥が声を発すれば、王が来るであろう。

北東で〔鳥が〕声を発すれば、アレカの実を得るであろう。

天頂で鳥が声を発すれば、空腹の印である。

三つ半の時間区切りの一巡は終わり<sup>246</sup>。

#### 203b-5～7

日没時に、

---

<sup>244</sup> *thun bzhi pa la* : 【翻訳】 8243 Caturtha-praharāḥ [藏] Thun-bshi-pa ḥam nam-guñ [漢] 四更

<sup>245</sup> *nor gtor ba* : (L) property which is scattered here and there.

<sup>246</sup> *thun bzhi pa'i 'khor lo rdzogs so* (四つ目の時間区切りの一巡は終わり) とあるべきであろう。

東で鳥が声を発すれば、旅に敵が現れるであろう。

東南で〔鳥が〕声を発すれば、宝が現れるであろう。

南で〔鳥が〕声を発すれば、病によって死ぬであろう。

南西の方角で（*lit.* 羅刹の隅で）<sup>247</sup>〔鳥が〕声を発すれば、心に（*lit.* 心の）願う事が叶うであろう。

西で鳥が声を発すれば、親族が来るであろう。

西北の方角で〔鳥が〕声を発すれば、財を得る印である。

北で〔鳥が〕声を発すれば、王に尊敬が集まる（*lit.* 起こる）であろう。<sup>248</sup>

天頂で〔鳥が〕声を発すれば、心に欲するものを得るであろう。

四つ目の時間区切り（／四更）の一巡は終わり<sup>249</sup>。

このような鳥の鳴き声による啓示は終わり。

### 【第三部】 203b-8～204a-8

さて、旅の〔間に見る鳥の〕印を説明すれば、

旅行中に〔出会う〕鳥の声の印を説明すれば、

ダムや水辺で、木においても同様に〔そして〕谷や交差点で、右で鳥が声を発すればその旅は良いと知る。

順調に旅をすすめている時、後方で鳥が声を発すれば、大いなる成就を得るであろう。

旅行中に、〔鳥が〕羽を動かしながら声を発すれば、大危機が起こるであろう。

旅行中に、〔鳥が〕髪を嘴でかき乱しながら声を発すれば、その時、死ぬ印である。

旅行中に、不浄な〔鳥が〕食べながら声を発すれば、飲食が起こる印である。

旅行中に、〔鳥が〕茂みに留まって声を発すれば、敵の脅威〔があること〕を知るであろう。

---

<sup>247</sup> ここでは、*bden bral* が *srin po'i mtshams* と記されているが、後者は【翻訳】中にも発見できない。

<sup>248</sup> 日没時では、北東の卦辞を欠いている。

<sup>249</sup> *nyi ma nub pa'i tshe'i 'khor lo rdzogs so* とあるべきだろう。

旅行中に、[鳥が] ミルクのような[樹液]の木にとまって声を発すれば、その時乳粥が現れるであろう。

[鳥が] 乾いた木にとまって声を発すれば、その時、飲食がない印である。

[鳥が] 宮殿に留まって声を発すればどんな時[でも]、その時、良い滞在地を得るであろう。

[鳥が] 御座に留まって声を発すれば、敵がくるであろう。

[鳥が] 戸口を見ながら声を発すれば、辺境に危険[があること]を知るであろう<sup>250</sup>。

嘴で衣服をかき乱しながら、鳥が声を発すれば、衣服を得るであろう。

旅行中に、[鳥が] 死人の頭蓋骨に留まって声を発すれば、死ぬ印である。

[鳥が] 赤い糸を掴んで、家屋の上に留まって声を発すれば、家屋が燃えるであろう。

午前に沢山の鳥が集まっていたら、風が強くなるであろう。

旅行中に、[鳥が] 木を嘴で掴んで声を発すれば、得るものがあるだろう。

旅行中に、日の出に鳥が声を発すれば、財を得るであろう。

旅行中に、[鳥が] 声を発すれば、願いが叶うであろう。

この様な旅の印は終わり。

#### 【第四部】 204b-1～3

留まっている鳥の巢の印は、

木の東方の枝に巢を作るようになれば、その時、良い年と雨が起こるであろう。

[木の] 南方の枝に巢を作るようになれば、その時、作物は悪くなるであろう。

木の中央の枝に巢を作れば、その時、大いなる脅威が起こるであろう。

[木の] 下方に巢を作れば、相手の軍から脅威が起こる (*lit.* 恐れるようになる) だろう。

壁か地面か水に巢を作れば、王は死ぬであろう。

#### 【第五部】 204b-3～4

他も説明しよう。

---

<sup>250</sup> *mtshams kyi 'jigs par shes par bya'o* : (L) it should be known that a peril will threaten from the frontier.

カーカーと鳥が声を発すれば、財を得るであろう。

ダーダーと鳥が声を発すれば、悲惨なことが起こるであろう。

ターターと鳥が声を発すれば、衣服を得るであろう。

グァーグァーと〔鳥が〕声を発すれば、利益を成すであろう。

グァーガーと鳥が声を発すれば、財が起こるであろう。

【第六部】 204b-4～6

脅威の印を目にすれば、鳥に布施をする（*lit.* 撒く）のである。

蛙の肉を鳥は好むので、それによって布施をする（*lit.* 撒く）と、危害が無くなるであろう。

オームミリリザトゥダタギラムリハーリスヴァーハー。

このような鳥の布施は終わり。

【第七部】 204b-6

大パンディータダーナシーラが、国の中心のヤルルンタンポチェのツクラクカンにて訳した。

## 2.5. Kākajariti の内容と構成

Kākajaritiは、次の七部から構成されている。

- 第一部 序文
- 第二部 鴉鳴を聞いた時間帯と方角から読み取る43の予兆
- 第三部 鳥のふるまいから読み取る旅行中の18の予兆
- 第四部 鳥の巣から読み取る5つの予兆
- 第五部 鴉鳴から読み取る5つの予兆
- 第六部 凶兆を目にした場合の布施供物について
- 第七部 奥書

このうち、第二部の予兆は我々の一覧表と同じく時間帯と方位に基づいて編纂されたものである。第三部、五部の予兆題材には、我々の序文や第二部との関わりが連想されると言える。また、卦辞が簡潔に記されているという共通性だけではなく、Lauferが指摘するように、Kākajaritiと我々の一覧表中のいくつかの卦辞には、実際に一致するものがある。しかし、それらの対応箇所を比較してみたところ、大半が内容の類似に留まっており、たとえ卦辞の記述が一致する場合でも、それが属する時間帯や方角は異なっていた<sup>251</sup>。さらに、Kākajaritiの第三部は、ITJ 747の第二部と同じテーマを扱っているが、記述内容に合致するものはない上、第六部に言及される布施供物の描写は非常に簡潔で、一つの供物が示されているだけである。従って、Kākajaritiと古チベット語鴉鳴占ト文書との間には、構成概念や予兆の記述内容の一部と、予兆題材に類似性が見られるものの、書式上の確固たる共通点は見いだせず、文献として同一の系譜に属するとは考えられない。

---

<sup>251</sup> Lauferが対照させているKākajariti (K)とPt.1045 (P)の記述例を数点取りだしてみる。

(K) *grogs po 'ong bar 'gyur ro* (最初の時間・南方) (P) *grog ched po dang phrad par ston* (午後前半・西北方)

(K) *rang gi nye ba 'ong bar 'gyur ro* (2つ目の時間・東方) (P) *gnyen zhig 'ong bar ston* (午前後半・南西方)

(K) *rlung po 'ong bar 'gyur ro* (3つ目の時間・南方) (P) *rlung zhig ldang bar ston* (午前前半・南西)

(K) *mes 'tshig par 'gyur ro* (3つめの時間・北東方) (P) *mye ngan zhig 'ong bar ston* (午前後半・北方)



また、Kākajaritiの第一部は表の形式では記されていない点で我々の一覧表とは大きく異なる。5つに区切られた時間帯の大部分も古チベット語鴉鳴占ト一覧表とは異なる名称をもつ上、方位の呼び名にも差異が見られる<sup>252</sup>。しかし、Kākajaritiにのみ登場するこれらの時間と方位に関する名称は、いずれも仏教用語を収録した【飜訳】中に見いだせる<sup>253</sup>。つまり、Kākajaritiには仏教の要素が看取できるのである。これは、Kākajaritiが後期仏教伝播期に訳されたという成立状況と符合すると言える。

以上より、チベット語大蔵經に収録されるKākajaritiは、インドの鳥にまつわる予兆を記した文献あるいは伝承に基づいた11世紀ないし13世紀の典籍であり、仏教の影響が示唆される文献であると言える。

最後に、現代チベットにおける鴉鳴占ト書について補足したい。この占法は現代にも伝えられており、チベットの占トを紹介した書物などに登場する<sup>254</sup>。出自について明記されていないものの、紹介されている内容は大蔵經のKākajaritiに基づくものであることがわかる。また、ロンドルラマ<sup>255</sup>全集からの抄録であるという『前兆占い』を記した数点の文献を検証してみた

---

<sup>252</sup> 時間帯：thun dang po、thun gnyis pa、thun gsum pa、thun bzhi pa、nyi ma nub pa'i tshe

方位：shar、me、lho、bden brel、nub、rlung、byang、dbang ldan、tshangs pa

<sup>253</sup> 前項試訳の脚注参照。また、【飜訳】によれば、Kākajaritiの一つ目の時間帯thung dang poはsrodと同義であり、初更つまり午後の7時または8時からの2時間を指す。従って、我々の鴉鳴占ト一覧では最後の時間帯nam srosと一致すると考えられる。以上より、Kākajaritiでは、初更（午後7時か8時からの2時間）、二更（午後9時か10時からの2時間）、三更（午後11時か12時からの2時間）、四更（午前1時か2時からの2時間）、日没という時間帯にきく鴉鳴の予兆が示されており、日中に関しては言及されていないことになる。

<sup>254</sup> Norbu 1983, pp.67-71や Michael Loewe & Carmen Blacker ed. 1981, pp.21-24など。

<sup>255</sup> Klong rdol bla ma ngag dbang blo bzang (1719-1794) (Martin 1997) .

ころ、同一の内容が確認できた<sup>256</sup>。これらの文献では、方角や時間に関する語彙などが、数カ所改訂されているが、おそらく理解を容易にするためにロンドルラマによって行われた改訂であろう。斯くして、大蔵經に収録された鴉鳴占ト書は18世紀のラマの手を経て現代まで存続することに成功したが、古チベット語鴉鳴占ト書に収録される便利な一覧表は継承されることはなかったのである。

## まとめ

鳥の鳴き声や仕草、行動から前兆を読み取る占ト法は、世界の各地で古い伝統をもち、時代的・地域的な普遍性をもっていると言える。それらのうちの一部分が、Bṛihat Samhitāや中国典籍などに記録されている。古代チベットでは、集積した鳥の予兆に関する知識をより便宜性の高い一覧表の書式に発展させ、定式化した韻文を付して我々のテキストのような文献へと形成し

---

<sup>256</sup> 筆者は、ロンドルラマの抄録であるという文献に関して、2点の版本と1点のマイクロフィッシュをこれまでに確認している。マイクロフィッシュは、アメリカ合衆国によるインド、ネパール、ブータンなどで復刻出版されたチベット語文献を収集するプロジェクト (PL480) によるものである。数種類の予兆占いを収録したこれら3文献は、同じ内容をもつものである。以下に、覚え書きとして情報を書き留めておく。

### 版本-1 (洋装本)

klong rdol bla ma rin po che'i gsung 'bum las phyung ba'i ltas sna tshogs brtag thabs bzhugs so

1989年, ダラムサラ, Sherig Parkhang (*bod gzhung shes rig dpar khang* / Tibetan Cultural Printing Press)

### 版本-2 (貝葉本)

klong rdol bla ma rin po che'i gsung 'bum las phyung ba rmi lam dang / 'chi ltas / 'ja' tshon / sgra byung ba'i ltas la brtag pa byed tshul / skyes pa dang / bud med kyi mi dpyad brtag pa / bya rog skad brtag ba bya tshul rnam par gsal ba'i me long bcas bzhugs so //

出版年不明, ラサ, 印刷者: Dpal ldan と Brag g.yab blo bzang brtson 'grus。

### マイクロフィッシュ (LMpj 010, 782 1/2 & 2/2, R-962)

klong rdol bla ma rin po che'i gsung 'bum las phyung ba rmi lam dang; 'chi ltas; 'ja' tshon; sgra byung ba'i ltas bcas la brtag pa byed tshul; skyes pa dang; bud med mi dpyad brtag pa; bya rog skad bcas la brtag pa bya tshul rnam par gsal ba'i me long

1968年, ダラムサラ

ところで、これらが依拠するロンドルラマ全集を確認したところ、1991年に出版された全集の予兆を扱った章 (sa : rmi ltas sna tshogs brtag thabs) には鴉鳴占トが収録されていなかった (恰白・次旦平措 主編 1991, 685-703頁)。おそらく、より古い時代に出版された全集には記載があるのだろう。

た。これが、やがて漢語占ト文書中にも取り入れられるようになり、百恠圖に類する構成を持つ占ト記事とともに収録されたのが漢語鴉鳴占ト文書である。また一方で、後期仏教伝播時期のチベットでは、インドのある種の鴉鳴占トを記した民間信仰ないし伝承に基づいたKakajaritiがチベット語に翻訳されて大蔵經に収められた。こうして、仏教にうまく合流したKakajaritiは、18世紀のラマの手を経て現代へと継承されるに至ったのである。

以上が、筆者の考えるチベット語及び漢語鴉鳴占ト書の成立背景である。

古チベット語・漢語鴉鳴占ト文書対照翻字テキスト

【序文】<sup>257</sup>

- |   |          |                                       |
|---|----------|---------------------------------------|
| 1 | ITJ 746  | \$ // // pho rog ni myi 'i mgon //    |
|   | ITJ 747  | \$ // pho rog ni myi' i mgon //       |
|   | P.t.1045 | \$ // // pho rog ni myi i mgon //     |
|   | P.t.1048 | <i>lac</i>                            |
|   | P.t.1049 | <i>lac</i>                            |
| 2 | ITJ 746  | drang srong ni lha 'i bka' //         |
|   | ITJ 747  | drang srong ni lha' i bka' //         |
|   | P.t.1045 | drang srong ni lha' i bka' //         |
|   | P.t.1048 | <i>lac</i>                            |
|   | P.t.1049 | <i>lac</i>                            |
| 3 | ITJ 746  | byang 'phrog ni 'brong sha' rkyen //  |
|   | ITJ 747  | byang 'brog ni 'brong sha' rkyan //   |
|   | P.t.1045 | byang 'brog ni 'brong sha' i rkyen // |
|   | P.t.1048 | <i>lac</i>                            |
|   | P.t.1049 | [---] byang 'brog ni ['brang ?] [---] |
| 4 | ITJ 746  | yul [+10]                             |
|   | ITJ 747  | yul gi ni dbus mthil du //            |
|   | P.t.1045 | yul gi ni dbus mthil du //            |
|   | P.t.1048 | <i>lac</i>                            |
|   | P.t.1049 | [y]ul gi ni dbus mthil du //          |

<sup>257</sup> P.c.3896と漢語文書には対応する序文を発見できない。しかし、P.c.3479には一覽表の前に占法に関わると思われる記述が一部残存しているので、これを序文と見ることができるかもしれない。この記述内容は、P.c.3988の第七部に記されているものと同一である可能性が高いので、後者の記述をここに引用する。

烏占臨決 [凡]所人鳴者從來處刑候吉凶法 若看八方上下數之看時出傍通占

- 5      ITJ 746      lha btsun ni bda' skad skyel //  
          ITJ 747      lha btsun ni bda' skad skyel //  
          Pt.1045      lha btsun ni bda' skad skyel //  
          Pt.1048      *lac*  
          Pt.1049      lha btsun ni bda' skad skyal //
- 6      ITJ 746      phyogs brgyad ni lding dang dgu' //  
          ITJ 747      phyogs brgyad ni lding dang dgu' //  
          Pt.1045      phyogs brgyad ni lting dang dgu' //  
          Pt.1048      *lac*  
          Pt.1049      phyogs brgyad ni lding[---]
- 7      ITJ 746      ^ang tong ni thabs gsum gsungs //  
          ITJ 747      ^ang tong ni thabs gsum gsungs //  
          Pt.1045      ^ang tong ni thabs gsum gsungs //  
          Pt.1048      *lac*  
          Pt.1049      ]ng tong ni thabs gsum gsungs //
- 8      ITJ 746      gtor ma ni [bya la] gtor //  
          ITJ 747      gtor ma ni bya la gtor //  
          Pt.1045      gtor ma ni bya la gtor //  
          Pt.1048      *lac*  
          Pt.1049      gtor ma ni bya la gtor //
- 9      ITJ 746      tsho tsho [+6] jis //  
          ITJ 747      tsho tsho ni yongs su gyis //  
          Pt.1045      tsho tsho ni yongs su gyis //  
          Pt.1048      *lac*  
          Pt.1049      'tsho 'tsho ni yongs su gyis //
- 10     ITJ 746      lha'i ni phyag du 'bul //  
          ITJ 747      lha'i ni phyag du 'bul //  
          Pt.1045      lha'i ni phyag du 'bul //  
          Pt.1048      *lac*  
          Pt.1049      lha'i phyag du 'bul //

- 11 ITJ 746 grags dgur ni lhas [myi] [b]lta' / /  
 ITJ 747 grags dgur ni lhas myi blta' / /  
 Pt.1045 grags dgur ni lhas myi blta' / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 grags <ni> dgu ni lhas myi lta' / /
- 12 ITJ 746 bzang ngan [ni] [---] su gsung / /  
 ITJ 747 bzang ngan ni lhas su gsung / /  
 Pt.1045 bzang ngan ni lhas su gsung / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 bzang ngan ni lhas su gsung / /
- 13 ITJ 746 drang srong ni lha [+5]  
 ITJ 747 drang srong ni lha 'dzin la / /  
 Pt.1045 drang srong ni lha 'dzin la / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 drang srong ni [+1][']dzin la / /
- 14 ITJ 746 [lha] ston ni gnyen ba'i bya' / /  
 ITJ 747 lha ston ni gnyen ba'i bya' / /  
 Pt.1045 lha s[t]on ni gnyen ba'i bya' / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 lha ston ni gnyen ba'i bya' / /
- 15 ITJ 746 mu sman ni gnyen gyis gsungs / /  
 ITJ 747 mu sman ni gnyen gyis gsungs / /  
 Pt.1045 mu sman ni gnyen gis gsungs / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 mu sman ni gnyen kyis gsungs / /
- 16 ITJ 746 drang zhi[ng] [ni] [b]rtan por ston / /  
 ITJ 747 drang zhin ni brtan por ston / /  
 Pt.1045 drang zhing ni brtan por ston / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 drang zhing ni brtan po[+-2]n / /

- 17 ITJ 746 pho rog ni dgung kyi bya' //  
ITJ 747 pho rog ni dgu gi bya //  
Pt.1045 pho rog ni dgung gi bya //  
Pt.1048 *lac*  
Pt.1049 pho rog ni dgung gi bya //
- 18 ITJ 746 bdab drug ni shog drug pa' //  
ITJ 747 'dab drug ni gshog drug pa' //  
Pt.1045 'dab [dr]ug ni gshog drug pa' //  
Pt.1048 *lac*  
Pt.1049 'dab drug ni shog drug pa' //
- 19 ITJ 746 lha yul ni mtho ru phyin //  
ITJ 747 lha yul ni mtho ru phyin //  
Pt.1045 lha yul ni mtho [ru / du] phyin //  
Pt.1048 *lac*  
Pt.1049 lha yul ni mtho [ru] phyin //
- 20 ITJ 746 dmyig rno ni snyan gsang bas //  
ITJ 747 dmyig rno ni snyan gsang bas //  
Pt.1045 dmyig rno ni snyan gsang bas //  
Pt.1048 *lac*  
Pt.1049 [dmyi-] [+1] ni snyan gsang bas //
- 21 ITJ 746 lha'i ni man ngag ston //  
ITJ 747 lha'i ni man ngag ston //  
Pt.1045 lha'i ni man ngag ston //  
Pt.1048 *lac*  
Pt.1049 lha'i ni man ngag ston //
- 22 ITJ 746 myi rtog ni gcig ma mchis //  
ITJ 747 myi rtog ni gcig ma mchis //  
Pt.1045 myi rtog ni gcig ma mchis //  
Pt.1048 *lac*  
Pt.1049 myi rtog ni gcig ma mchis //

- 23      ITJ 746      yid ches ni sems rton cig //  
           ITJ 747      yid ches ni sems rton cig //  
           Pt.1045      yid ches ni sems rton cig //  
           Pt.1048      *lac*  
           Pt.1049      yid ches ni [-ms] rton cig //
- 24      ITJ 746      phyogs brgyad ni ldang dang dgu' //  
           ITJ 747      phyogs brgyad ni lding dang dgu //  
           Pt.1045      phyogs brgyad ni lding dang dgu //  
           Pt.1048      *lac*  
           Pt.1049      phyogs brgyad ni ldings dang dgu //
- 25      ITJ 746      [lgong?] lgong ni bzang por ston //  
           ITJ 747      lhong lhong ni bzang por ston //  
           Pt.1045      lhong lhong ni bzang por ston //  
           Pt.1048      *lac*  
           Pt.1049      lhong lhong ni bzang por ston //
- 26      ITJ 746      thag thag ni 'bring du ston //  
           ITJ 747      thag thag ni 'bring du ston //  
           Pt.1045      thag thag ni 'bring du ston //  
           Pt.1048      *lac*  
           Pt.1049      thag thag ni [+1]ng du ston //
- 27      ITJ 746      krag krag ni rings par ston //  
           ITJ 747      krag krag ni rings par ston //  
           Pt.1045      krag krag ni rings par ston //  
           Pt.1048      *lac*  
           Pt.1049      krag krag ni rings par ston //
- 28      ITJ 746      krog krog ni grog yod smra' /  
           ITJ 747      krog krog ni grog yod smra //  
           Pt.1045      krog krog ni <bar ston> grog yod smra //  
           Pt.1048      *lac*  
           Pt.1049      grog krog ni grog yod smra //



29	ITJ 746	<sup>h</sup> i'u [+5] ston yin / /
	ITJ 747	<sup>h</sup> i'u <sup>h</sup> i'u ni bar ston yin / /
	P.t.1045	<sup>h</sup> i'u <sup>h</sup> i'u ni bar ston yin //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	<sup>h</sup> i'u <sup>h</sup> i'u ni bar ston yin /

I-1	ITJ746	gtor ma'i cho ga la[
	ITJ747	gtor ma'i cho ga la //
	P.t.1045	gtor ma'i cho ga la //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[-]tor ma [+3] cho ga [+3]
	P.c.3896	[---]
I-2	ITJ746	shar phyogs [+2] zer [+2]m tor /
	ITJ747	shar phyogs na ngan zer na 'o ma gtor //
	P.t.1045	shar phyogs na ngan zer na 'o ma gtor //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	shar phyogs na ngan zer na 'o ma gtor
	P.c.3896	'o ma dang shas gthor
I-3	ITJ746	shar lho na ngan zer na yungs kar gtor /
	ITJ747	shar lho na ngan zer na yungs kar gtor //
	P.t.1045	shar lho na ngan zer na yungs kar gtor //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	shar lho na ngan zer na yungs kar gtor / /
	P.c.3896	yungs kar gyis gthor
I-4	ITJ746	lho na ngan zer na chu gtor //
	ITJ747	lho na ngan zer na chu gtor //
	P.t.1045	lho na ngan zer na chu gtor /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	lho na ngan zer na chu gtor / /
	P.c.3896	chur ba dang 'o mas gtor

258 漢語文書には布施供物欄の記載が無い。なお、P.c.3988の読みの確定にあたり、P.c.3479を参考とした。

I-5	ITJ746	lho nub na ngan zer na yungs kar gtor //
	ITJ747	lho nub na ngan zer na yungs kar gtor //
	P.t.1045	lho nub na ngan zer na yungs kar gtor //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	lho nub na ngan zer na yungs kar gtor /
	P.c.3896	yungs [kar] gyis gtor
I-6	ITJ746	nub na ngan zer na sha gtor //
	ITJ747	nub na ngan zer na sha gtor //
	P.t.1045	nub na ngan zer na sha gtor /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nub na ngan zer na sha gtor /
	P.c.3896	men tog gis gtor
I-7	ITJ746	nub byang na ngan zer na myan tog gtor //
	ITJ747	nub bayng na ngan zer na men tog gtor //
	P.t.1045	nub byang nas ngan zer na men tog gtor /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nub byang na ngan zer na myen tog gtor / /
	P.c.3896	chan ‘dan dang men tog gis gtord
I-8	ITJ746	byang na ngan zer na ga kul gtor //
	ITJ747	byang na ngan zer na gu kul gtor //
	P.t.1045	byang na ngan zer na gu kul gtor /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	byang na ngan zer na gu gul gtor /
	P.c.3896	gu gul gyis gto
I-9	ITJ746	byang shar na ngan zer na 'bras gtor //
	ITJ747	byang shar na ngan zer na 'bras gtor //
	P.t.1045	byang shar na ngan zer na ‘bras gtor /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	byang shar na ngan zer ‘na ‘bras gtor / /
	P.c.3896	<i>om</i>

I-10	ITJ746	nam lding zhing ngan zer na khre gtor //
	ITJ747	nam ka lding zhing ngan zer na khre gtor //
	P.t.1045	nam ka lding zhing ngan zer na khre gtor /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nam ka lding zhing ngan zer na khre gtor /
	P.c.3896	<i>om</i>

II-1 <sup>259</sup>	ITJ747	\$ / /
	P.t.1045	\$ / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	[\$ / ]
	P.c.3988	

II-2	ITJ747	shar /
	P.t.1045	shar /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	shar[d]
	P.c.3988	東方 <sup>260</sup>

II-3	ITJ747	lho shar /
	P.t.1045	lho shar /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	lho shar
	P.c.3988	東南方

II-4	ITJ747	lho/
	P.t.1045	lho /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	lho
	P.c.3988	南方

---

<sup>259</sup> ITJ 746とP.t.1049では、第三段目に方位が記されている。

<sup>260</sup> 文書の欠損によりP.c.3988のテキストが確認できないため、P.c.3479によって補った。

II-5	ITJ747	lho nub /
	P.t.1045	lho nub /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	lho nub
	P.c.3988	西南方
II-6	ITJ747	nub /
	P.t.1045	nub /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	nub
	P.c.3988	西方
II-7	ITJ747	nub byang /
	P.t.1045	nub byang /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	nub byang
	P.c.3988	西北方
II-8	ITJ747	byang /
	P.t.1045	byang /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	byang
	P.c.3988	北方
II-9	ITJ747	byang shar /
	P.t.1045	byang shar /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	byang shar
	P.c.3988	北東方
II-10	ITJ747	nam ka lding /
	P.t.1045	naM ka lding /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.c.3896	tshangs pa'
	P.c.3988	上方

III-1	ITJ746	\$ // nam ka phan phun /
	ITJ747	nam ka phan phun
	P.t.1045	nam ka phan phun /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[+-3] / [+-3] ka {+-3} phun /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	東方暑 <sup>261</sup>
III-2	ITJ746	shar lha btsun 'ong bar ston //
	ITJ747	lha btsun 'ong bar ston //
	P.t.1045	lha btsun 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	shar / lha btsun 'ong bar ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	神及家親来護
III-3	ITJ746	shar lho lam ring por 'gro dgos par ston /
	ITJ747	lam ring por 'gro dgos par ston /
	P.t.1045	laM ring por 'gro dgos par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	shar lho lam ring por 'gro dgos par ston /
	P.c.3896	lam ring por 'gro bar ston
	P.c.3988	遠行事
III-4	ITJ746	lho / spyān 'drin 'ong bar stong /
	ITJ747	spyān 'dren 'ong bar ston /
	P.t.1045	spyān 'dren 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	lho / spyān 'dren 'ong bar ston /
	P.c.3896	sb[y]an 'dron 'ong bar ston
	P.c.3988	□屈来

---

<sup>261</sup> 文書の欠損によりP.c.3988のテキストが確認できないため、P.c.3479によって補った。

III-5	ITJ746	lho nub rkun po shig 'ong bar ston /
	ITJ747	rkun po zhlg 'ong bar ston /
	P.t.1045	rkun [po] zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	lho nub / rkun po zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	rg[u]n yod bar ston
	P.c.3988	去處營事不成
III-6	ITJ746	nub / song yang don myed par ston //
	ITJ747	song yang don myed par ston /
	P.t.1045	song yang don myed par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nub / song yang don myed par ston /
	P.c.3896	song na don myed par ston
	P.c.3988	被人謀
III-7	ITJ746	nub byang / zhal lce rkol ba zhig 'ong bar ston //
	ITJ747	zhal lce rgol ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	zha lce rgol ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nub byang / zhal lce rgyol ba zhig 'ong bar ston
	P.c.3896	zhal [+2] r[+1]o [+3] bar ston
	P.c.3988	所求皆得
III-8	ITJ746	byang / don yod par ston //
	ITJ747	don yod par ston /
	P.t.1045	don yod par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	byang don yod par ston /
	P.c.3896	[don] [yod] bar ston
	P.c.3988	出獵得

III-9	ITJ746	byang shar / g.yag sod par ston /
	ITJ747	g.yag sod par ston /
	P.t.1045	g.yag sod par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	byang shar g.yag sod par ston /
	P.c.3896	g.yag sod bar 'ong ston
	P.c.3988	賊發動
III-10	ITJ746	nam kha lding dgra' zhig g.yo bar ston /
	ITJ747	dgra' zhig g.yo bar ston /
	P.t.1045	dgra' zhig g.yo bar ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nam ka [ldi-] dgra zhig g.yo bar ston /
	P.c.3896	dgra g.yo bar ston
	P.c.3988	自身干榮
IV-1	ITJ746	nam nang /
	ITJ747	nam nangs
	P.t.1045	nam nangs /
	P.t.1048	nam nangs
	P.t.1049	[+-3] nangs
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	平旦時 <sup>262</sup>
IV-2	ITJ746	myi gcig chi bar ston /
	ITJ747	myi zhig shi bar ston /
	P.t.1045	myi zhig 'chi bar ston /
	P.t.1048	myI zhIg bong bar ston
	P.t.1049	myi cig chi bar ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	人死亡

<sup>262</sup> 文書の欠損によりP.c.3988のテキストが確認できないため、P.c.3479によって補った。



IV-3	ITJ746	myi zhig smra bar ston /
	ITJ747	myi zhig smra bar ston /
	P.t.1045	myi zhig smra bar ston /
	P.t.1048	myl cIḡ sbran bar ston
	P.t.1049	myi zhig smra bar ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	人被傷
IV-4	ITJ746	rta zhig rnyed par ston /
	ITJ747	rta zhig rnyed par ston /
	P.t.1045	rta zhig rnyed par ston /
	P.t.1048	nor cIḡ rnyed par ston
	P.t.1049	rta zhig rnyed par ston /
	P.c.3896	[---] bar ston
	P.c.3988	得畜馬
IV-5	ITJ746	ri dags zhig sod par ston /
	ITJ747	ri dags zhig sod par ston /
	P.t.1045	ri dags zhig sod par ston /
	P.t.1048	rI dags cIḡ sod par ston
	P.t.1049	ri dags zhig sod par ston /
	P.c.3896	[+-7] ston
	P.c.3988	遊獵獲
IV-6	ITJ746	zhang lon zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	zhang lon 'ong bar ston /
	P.t.1045	zhang lon 'ong bar ston /
	P.t.1048	zhang lon cIḡ 'ong bar ston
	P.t.1049	zhang lon zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	[---] kun [po] ngong <sup>263</sup> bar ston
	P.c.3988	官使来

---

<sup>263</sup> P.c.3896では'ong が ngong と記されている。

IV-7	ITJ746	pho nya zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	pho nya zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	pho nya zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	'gro na yang don yang grub par ston
	P.t.1049	pho nya zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	pho nya ngong bar ston
	P.c.3988	官使来 <sup>264</sup>
IV-8	ITJ746	la gor 'ong na rung bar ston /
	ITJ747	la gor 'ong na rung bar ston /
	P.t.1045	la gor 'ong na rung bar ston / /
	P.t.1048	pho nya cIḡ 'ong bar ston <sup>265</sup>
	P.t.1049	la gor 'ong na rung bar ston /
	P.c.3896	la gor 'ong na rung bar ston
	P.c.3988	急去吉
IV-9	ITJ746	phrin byang zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	phrin byang zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	phrin byang zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	phyIr yang 'gro bar ston
	P.t.1049	phrin byang zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	phrin byang 'ong bar ston
	P.c.3988	書信来
IV-10	ITJ746	brel ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	brel ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	brel ba 'ong bar ston / /
	P.t.1048	'chags [---] 'brel cIḡ 'ong bar ston
	P.t.1049	brel ba zhig 'ong bar ston
	P.c.3896	br[e]l ba 'ong bar 'ong ston
	P.c.3988	急忙事

<sup>264</sup> P.c.3479では「准上官使来」とある。

<sup>265</sup> 他文書のIV-7と一致。

V-1	ITJ746	nyi ma shar /
	ITJ747	nyi ma shar
	P.t.1045	nyi ma shar /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[+-3] shar
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	日出時 <sup>266</sup>
V-2	ITJ746	[+-3] pa zhig 'ong bar ston
	ITJ747	rings pa zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	rings pa zhig 'ong bar ston //
	P.t.1048	[---]Ing pa cIg [---]
	P.t.1049	rings pa zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	急事来
V-3	ITJ746	rgyal po dka' 'ong bar ston //
	ITJ747	rgyal po'i bka' 'ong bar ston /
	P.t.1045	rgyal po'i bka' 'ong bar ston //
	P.t.1048	rgyal po'i bka' cIg [
	P.t.1049	rgyal po'i bka' 'ong bar ston /
	P.c.3896	gyal po ['i] [bka'ong] bar ston
	P.c.3988	勅詔来
V-4	ITJ746	zhang lon gi mchid 'ong bar ston /
	ITJ747	zhang lon gi mchid 'ong bar ston /
	P.t.1045	zhang lon gi mchid 'ong bar ston //
	P.t.1048	blon po cIg 'ong bar ston
	P.t.1049	zhang lon gi mchid 'ong bar ston /
	P.c.3896	[zha]ng lon [gyi] mchi 'ong bar ston
	P.c.3988	官事来

<sup>266</sup> 文書の欠損によりP.c.3988のテキストが確認できないため、P.c.3479によって補った。

V-5	ITJ746	dgra bla dang dpal 'ong bar ston
	ITJ747	dgra' bla dang dpal 'ong bar ston /
	P.t.1045	dgra' [bla] dang dpal 'ong bar ston /
	P.t.1048	sgrab lha gshegs par ston
	P.t.1049	dgra bla dang dpal 'ong bar ston /
	P.c.3896	dgra bla dang d[p]al [gshe-] bar ston
	P.c.3988	神祇擁護
V-6	ITJ746	gcan zan 'ong bar ston /
	ITJ747	gcan zan zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	gcan zan 'ong bar ston /
	P.t.1048	shod ma cIḡ 'ong bar ston
	P.t.1049	gcan zan 'ong bar ston
	P.c.3896	gcang [-o-] [+3] ston
	P.c.3988	野獸来
V-7	ITJ746	phags par dga' ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	phags par dga' ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	'phags par dga' ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	rkun ma cIḡ 'ong bar ston <sup>267</sup>
	P.t.1049	phags par dga' ba zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	'phar ma 'ong bar ston
	P.c.3988	官有急書表至
V-8	ITJ746	rkun pa zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	rkun po zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	rkun po zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	myI rgod dang phrad par ston <sup>268</sup>
	P.t.1049	rkun po zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	rta rkun 'ong bar ston
	P.c.3988	盜賊来

<sup>267</sup> 他文書のV-8と一致。

<sup>268</sup> 他文書のV-9に類似。

V-9	ITJ746	myi dgod zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	myi rgod cig 'ong bar ston /
	Pt.1045	myi rgod cig 'ong bar ston /
	Pt.1048	lho phyogs nas gtam cĪg 'ong bar ston <sup>269</sup>
	Pt.1049	myi dgod zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	myi rgod phrad bar ston
	P.c.3988	逢劫賊
V-10	ITJ746	pho phyogs gi gtam 'ong bar ston /
	ITJ747	pho phyogs gi gtam 'ong bar ston /
	Pt.1045	pho phyogs kyi gtam 'ong bar ston / /
	Pt.1048	bag ma gcĪg khyer bar ston
	Pt.1049	pho phyogs gi gtam zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	pho phyogs na gtham 'ong par ston
	P.c.3988	邊烽消息至
VI-1	ITJ746	snga dro dang po
	ITJ747	snga dro dang po /
	Pt.1045	snga dro dang po /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	[+-3] dang [---]
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	食時 <sup>270</sup>
VI-2	ITJ746	'dod pa [+3] sum tshogs par ston
	ITJ747	'dod pa phun gsum tshogs par ston /
	Pt.1045	'dod pa phun suM tshogs par ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	'dod la phun suM tshogs par ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	所思得

<sup>269</sup> 他文書のV-10に類似。

<sup>270</sup> P.c.3479では「日食時」とある。

VI-3	ITJ746	dgra zhig g.yo 'ong bar ston /
	ITJ747	dgra' zhig g.yo bar ston /
	P.t.1045	dgra' zhig g.yo bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	dgra zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	dgra shig g[nyo] bar ston
	P.c.3988	賊發動
VI-4	ITJ746	gnyen lha skyes po la tshe ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	gnyen lha skyes po la tshe ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	gnyen lha skyes po la 'tshe ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	gnyen lha skyes po la tshe ba zhig 'ong bar ston
	P.c.3896	g[nye]n [l-a] skya bo la [-i-] bar ston
	P.c.3988	親[因]被攪擾
VI-5	ITJ746	rlung ldang bar ston /
	ITJ747	rlung zhig ldang bar ston /
	P.t.1045	rlung [ldang] bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	rlung ldang bar ston
	P.c.3896	[rlu?] ['ong] bar ston
	P.c.3988	暴風至
VI-6	ITJ746	kha char 'ong bar ston /
	ITJ747	kha char 'ong bar ston /
	P.t.1045	kha char 'ong bar ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	kha char 'ong bar ston /
	P.c.3896	char pa 'ong [bar] ston
	P.c.3988	雨及獵 [獲]

VI-7	ITJ746	'jigs pa zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	jigs pa zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	'jigs pa 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	'jigs pa zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	'jigs pa 'ong ston
	P.c.3988	□ 靜被傷
VI-8	ITJ746	thab mo ched po zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	thab mo ched po zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	thab mo 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	thab mo ched po zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	thab [mo na] 'ong bar ston
	P.c.3988	大靜覺事
VI-9	ITJ746	nad pa 'chi 'ong bar ston
	ITJ747	nad pa 'chi bar ston /
	P.t.1045	nad pa 'chi bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nad pa chi bar ston /
	P.c.3896	nad pa shi bar ston
	P.c.3988	病者亡
VI-10	ITJ746	sngon ma byung ba'i bram ze zhig 'ong bar ston
	ITJ747	sngon ma byung ba'i bram ze zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	sngon ma byung ba'i bram ze zhig 'ong bar ston //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	snga ma byung ba'i bram ze zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	[srün / sun / mun] ma mthod ba'i mdze mthod bar ston
	P.c.3988	善人相迎

VII-1	ITJ746	snga dro tha ma
	ITJ747	snga dro tha ma
	P.t.1045	snga dro tha ma /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[---] ma /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	隅中時
VII-2	ITJ746	[char] 'bab [+2] [ston]
	ITJ747	char pa bab par ston
	P.t.1045	char pa 'bab par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	char bab par ston /
	P.c.3896	[---][ston]
	P.c.3988	暴雨至
VII-3	ITJ746	ri dags zhig sod par ston /
	ITJ747	ri dags zhig sod par ston /
	P.t.1045	ri dags sod par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	ri dags zhig sod par ston /
	P.c.3896	[ri] dags shig sod par ston
	P.c.3988	遊獵得
VII-4	ITJ746	bud myed gi phyir thab mo zhig 'ong bar ston
	ITJ747	bud myed gi phyir thab mo zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	bud myed kyi phyir thab mo 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	bud myed gi phyir thab mo zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	rlung <interline/> dang </interline> char pa 'ong par ston
	P.c.3988	因女婦相爭



VII-5	ITJ746	gnyen zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	gnyen zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	gnyen zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	gnyen zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	gnyen 'ong [---]
	P.c.3988	親神来至
VII-6	ITJ746	rgyal po 'khor na 'tsher ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	rgyal po 'khor na 'tsher ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	rgyal po 'i 'khor nas 'tshe ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	rgyal po 'i 'khor tsher ba zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	[+5] [---]
	P.c.3988	被官嗔責事
VII-7	ITJ746	yul ngan zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	yul ngan zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	yul ngan 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	yul ngan zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	char pa dang [+2] ngan 'ong [+2] ston
	P.c.3988	暴風雨至
VII-8	ITJ746	mye ngan zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	mye ngan zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	mye ngan zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	myed ngan zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	mye ngan 'ong bar ston
	P.c.3988	弱人来至

VII-9	ITJ746	myi bags byed dgos par ston /
	ITJ747	myi bags byed dgos par ston /
	P.t.1045	myi bags bya dgos par ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	myi bags byed dgos par ston /
	P.c.3896	myl la bag bya bar ston
	P.c.3988	会人防慎
VII-10	ITJ746	rkangs la phyag byed pa zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	rgang pa la phyag byed pa zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	rkang pa la phyag byed pa zhig 'ong bar ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	rkang pa la phyag byed zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	rkang pa la [phyag] ['tsha] bar ston
	P.c.3988	足下拜謁
VIII-1	ITJ746	nyi ma gung
	ITJ747	nyi ma gung /
	P.t.1045	nyi ma gung /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[---]
	P.c.3896	nyi ma gung
	P.c.3988	日中時
VIII-2	ITJ746	bdag kyi nor [la?] [-od] ka zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	bdag gi nor la gyod ka 'ong bar ston /
	P.t.1045	bdag gi nor la god ka 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	bdag gi nor la gyod ka zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	bdag gi nor la god 'ong bar ston
	P.c.3988	自傷財

VIII-3	ITJ746	su la yang gtam myi bya bar ston /
	ITJ747	su la yang gtam myi bya bar ston /
	Pt.1045	su la yang gtam myi bya bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	su la yang gtam myi bya bar ston /
	P.c.3896	su dang yang ma smra shig bar ston <sup>271</sup>
	P.c.3988	無人相見
VIII-4	ITJ746	rlung dang char pa 'ong bar ston /
	ITJ747	rlung dang char pa 'ong bar ston /
	Pt.1045	rlung dang char pa 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	rlung dang char pa 'ong bar ston /
	P.c.3896	gnyen ['o-] [bar] ston
	P.c.3988	暴風雨至
VIII-5	ITJ746	rkun po dang bu yug 'ong bar ston /
	ITJ747	rkun po dang bu yug 'ong bar ston /
	Pt.1045	rkun po dang bu yug 'ong bar ston / /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	rkun po dang bu yug 'ong bar ston /
	P.c.3896	[---] [+3] ['ong] bar ston
	P.c.3988	賊及[雷]雹至
VIII-6	ITJ746	bud myed gi phyi bde ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	bud myed kyi phyir bde ba zhig 'ong bar ston /
	Pt.1045	bud myed kyi phyir bde ba zhig 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	bud myed gi phyir bde ba zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	[---] [+2] na bde [par] ston
	P.c.3988	因女婦吉慶

---

<sup>271</sup> P.c.3896 IX-3に類似した記述。

VIII-7	ITJ746	btsun ba'i gnyen 'ong bar ston /
	ITJ747	btsun ba'i gnyen 'ong bar ston /
	Pt.1045	btsun ba'i gnyen 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	btsun ba'i gnyen 'ong bar ston /
	P.c.3896	btshun mo 'i mgon lo bar ston
	P.c.3988	貴客至
VIII-8	ITJ746	skye bo kun la gtam snyan pa zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	skye bo kun la gtam zhig 'ong bar ston /
	Pt.1045	skye bo kun la gtaM snyan pa zhig 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	skye bo kun la gtam snyan zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	skya bo kun gyi gtham snyan ba 'ong bar ston
	P.c.3988	善消息至
VIII-9	ITJ746	bud myed dkar mo zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	bud myed dkar mo zhig 'ong bar ston /
	Pt.1045	bud myed dkar mo zhig 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	bud myed dkar mo zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	bud myed ['ud / 'du] ma 'ong bar ston
	P.c.3988	女人依服至 <sup>272</sup>
VIII-10	ITJ746	myi dga' ba'i gtam zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	myi dga' ba'i gtam zhig 'ong bar ston /
	Pt.1045	myi dga' ba'i gtaM zhig thos par ston / /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	myi dga' ba'i gtam zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	mI dga ba zhig 'ong bar ston
	P.c.3988	不善消息至

---

<sup>272</sup> P.c.3479では「女人衣服至」とある。

IX-1	ITJ746	phyi dro dang po
	ITJ747	phyi dro dang po /
	P.t.1045	phyi dro dang po /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[---]
	P.c.3896	phya dro phyed [---]
	P.c.3988	日昃時
IX-2	ITJ746	rgyal po 'jigs par [ston]
	ITJ747	rgyal po 'jigs par ston /
	P.t.1045	rgyal po 'jig par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	rgyal po 'jigs par ston /
	P.c.3896	rgyal po 'i [gsa?] pa 'ong bar ston
	P.c.3988	王事恐懼
IX-3	ITJ746	shi ba'i gтам thos bar ston /
	ITJ747	shi ba'i gтам thos par ston /
	P.t.1045	shi ba'i gтаM thos par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	shi ba'i gтам thos par ston /
	P.c.3896	su dang ma smra shig bar ston <sup>273</sup>
	P.c.3988	恐懼消息至
IX-4	ITJ746	sngangs pa zhig 'ong bar ston //
	ITJ747	sngangs pa zhig 'ong bar ston /
	P.t.1045	sngangs pa zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	sngangs pa zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	rkun po dang gu yug 'ong bar ston
	P.c.3988	大恐懼事 <sup>274</sup>

<sup>273</sup> P.c.3896 VIII-3と類似の記述。

<sup>274</sup> P.c.3479では「大懼恐事」とある。

IX-5	ITJ746	kha ba ched po 'bab par ston /
	ITJ747	kha ba ched po 'bab par ston /
	Pt.1045	kha ba ched po 'bab par ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	kha ba ched po bab bar ston / /
	P.c.3896	kha char ngong ched po ngong bar ston
	P.c.3988	吉詳善事至
IX-6	ITJ746	g.yar gzigs khyer te 'ong bar ston //
	ITJ747	g.yar gzigs zhig khyer te 'ong bar ston /
	Pt.1045	g.yar zig khyer te 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	g.yar gzigs khyer te 'ong bar ston /
	P.c.3896	g.yar gzigs ngong bar ston
	P.c.3988	奉獻酒食事
IX-7	ITJ746	grog ched po dang phrad par ston /
	ITJ747	grog ched po dang 'phrad par ston /
	Pt.1045	grog ched po dang phrad par ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	grog ched po dang phrad par ston /
	P.c.3896	dgra ched po ngong bar ston
	P.c.3988	訴訟得理
IX-8	ITJ746	bdag ma tshor ba byed par ston /
	ITJ747	bdag ma tshor bar byed par ston /
	Pt.1045	bdag la ma tshor ba byed pa 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	bdag ma tshor bar byed par ston /
	P.c.3896	bdag gis ma m[-o-] ba m[-o]ng bar ston
	P.c.3988	有人求來 <sup>275</sup>

---

<sup>275</sup> P.c.3479では「有人来至」とある。

IX-9 ITJ746 bdag gi dgra' shi ste bdag dga' bar ston /  
 ITJ747 bdag gi dgra' shi ste bdag dga' bar ston /  
 Pt.1045 bdag gi dgra' shi ste dga' bar ston /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 bdag gi dgra shi ti bdag dga' bar ston /  
 P.c.3896 dgra bo shi bar ston  
 P.c.3988 賊人死亡死亡 <sup>276</sup>

IX-10 ITJ746 bza' bca'i sder rnyed par ston /  
 ITJ747 bza' bca'i sder rnyed par ston /  
 Pt.1045 bza' bca'i sder rnyed par ston / /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 bza' bca'i sder rnyed par ston /  
 P.c.3896 za ba ji bde ba rnyed bar ston <sup>277</sup>  
 P.c.3988 酒食來至

X-1 ITJ746 phyi dro tha ma  
 ITJ747 phyi dro tha ma /  
 Pt.1045 phyi dro tha ma /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 [---]  
 P.c.3896 [phy?] dro tha [---]  
 P.c.3988 晡時 <sup>278</sup>

X-2 ITJ746 'jigs pa 'ong bar ston /  
 ITJ747 'jigs pa zhig 'ong bar ston /  
 Pt.1045 'jigs pa 'ong bar ston /  
 Pt.1048 *lac*  
 Pt.1049 'jigs pa 'ong bar ston /  
 P.c.3896 'jigs [+4] [---]  
 P.c.3988 大驚恐事

<sup>276</sup> P.c.3479では「賊人死亡」とある。

<sup>277</sup> P.c.3896のX-6と同一卦辞。

<sup>278</sup> P.c.3479では「日晡時」とある。

X-3	ITJ746	nad pa sos par ston //
	ITJ747	nad pa sos par ston /
	P.t.1045	nad pa sos par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nad pa sos par ston
	P.c.3896	yul ring po nas gnyen [-ong] bar [ston] <sup>279</sup>
	P.c.3988	遠行事
X-4	ITJ746	lam ring por 'gro dgos par ston /
	ITJ747	lam ring por 'gro dgos par ston /
	P.t.1045	laM ring por 'gro dgos par ston //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	lam ring por 'gro dgos par ston /
	P.c.3896	kha char ched po 'ong bar [ston]
	P.c.3988	東方人来
X-5	ITJ746	shar phyogs nas myi zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	shar phyogs nas myi zhig 'ong
	P.t.1045	shar phyogs nas myi zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	shar phyogs nas myi zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	bu myed khrid de [ngong] [+2] [ston] <sup>280</sup>
	P.c.3988	自身犯罪
X-6	ITJ746	myi zhig bud myed khrid de 'ong bar ston /
	ITJ747	myi zhig bud myed khrid te 'ong bar ston /
	P.t.1045	myi zhig bud myed khrid de 'ong bar ston //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	myi zhig bud myed khrid de 'ong bar ston /
	P.c.3896	za ba ji bde rnyed [bar] [ston] <sup>281</sup>
	P.c.3988	吉慶至

<sup>279</sup> 他文書のX-4に類似。

<sup>280</sup> 他文書のX-6に類似。

<sup>281</sup> 他文書のX-7に類似。



X-7	ITJ746	za ba rnyed par ston /
	ITJ747	za ba rnyed par ston /
	P.t.1045	za ba rnyed par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	za ba rnyed par ston /
	P.c.3896	phags par dga' ba ngong bar ston <sup>282</sup>
	P.c.3988	家有捉獲事
X-8	ITJ746	spags par dga' ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	[spags] par dga' bar ston
	P.t.1045	'phags par dga' ba zhig 'ong bar ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	spags par dga' ba zhig 'ong bar ston / /
	P.c.3896	thams chad dga' ba ngong bar ston
	P.c.3988	盡皆喜悅
X-9	ITJ746	thams cad dga' ba zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	thams cad dga' ba zhig 'ong
	P.t.1045	thams cad dga' ba zhig 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	thams cad dga' ba zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	nad pa sos par ston
	P.c.3988	病者[看]
X-10	ITJ746	thams cad dga' ba'i zan chang zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	thams cad dga' ba'i zan chang
	P.t.1045	thams cad dga' ba'i zan chang ston mo 'thung bar ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	thams cad dga' ba'i zan chang zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	thams chad chang thung bar ston
	P.c.3988	得酒食喜事

---

<sup>282</sup> 他文書のX-8と一致。

XI-1	ITJ746	nyi ma nub /
	ITJ747	nyi ma nub /
	P.t.1045	nyi ma nub /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[---]
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	日入時
XI-2	ITJ746	dre gdon 'ong bar ston //
	ITJ747	dre gdon 'ong bar ston /
	P.t.1045	‘dre gdon ‘ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	‘dre gdon ‘ong bar ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	鬼崇来
XI-3	ITJ746	nor rnyed de 'ong bar ston /
	ITJ747	nor dang grog 'ong bar ston / <sup>283</sup>
	P.t.1045	nor rnyed de ‘ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nor rnyed de ‘ong bar ston /
	P.c.3896	[+-1] khyer te ngong bar ston
	P.c.3988	人将賊来 <sup>284</sup>
XI-4	ITJ746	grog ched po dang phrad par ston /
	ITJ747	dmyig ma chung la chu la bag bya bar ston / <sup>285</sup>
	P.t.1045	grog ched po dang phrad par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	grog ched po dang phrad par ston /
	P.c.3896	[-u]d myid khrid ‘ong bar ston <sup>286</sup>
	P.c.3988	得爵禄

<sup>283</sup> 他文書のXI-4の内容も取り入れているのかもしれない。

<sup>284</sup> P.c.3479では「人将[財]来」とある。

<sup>285</sup> 他文書のXI-6に類似。あるいは、XI-5の内容も取り入れているのかもしれない。

<sup>286</sup> 他文書のX-6と一致するのかもしれない。

XI-5	ITJ746	ye myig cher bya dgos par ston /
	ITJ747	khyim tshol zhig 'ong bar ston / <sup>287</sup>
	P.t.1045	ye myig cher bya dgos par ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	ye myig cher bya [dgos] par ston /
	P.c.3896	ye mig [cher / ched] gi[s] shing bar ston
	P.c.3988	驚僞吉
XI-6	ITJ746	chu la bags ched po bya dgos par ston //
	ITJ747	phu nu pho dang bu tsha zhig 'ong bar ston / <sup>288</sup>
	P.t.1045	chu la bags bya dgos par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	chu la bags ched po bya dgos par ston /
	P.c.3896	chu la bag bya bar ston
	P.c.3988	慎水則吉
XI-7	ITJ746	khyim tshol du 'ong bar ston //
	ITJ747	dga' ba'I gtam 'ong bar ston / <sup>289</sup>
	P.t.1045	khyim tshol 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	khyim tshol du 'ong bar ston /
	P.c.3896	khyim tshol ba ngong bar ston
	P.c.3988	西方人來
XI-8	ITJ746	phu nu po dang bu 'ong bar ston //
	ITJ747	gtam zhig 'ong bar ston / <sup>290</sup>
	P.t.1045	phu nu po dang bu 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	phu nu po dang bu 'ong bar ston /
	P.c.3896	phu nu dang bran ngong bar ston
	P.c.3988	兄弟親因至

---

<sup>287</sup> 他文書のXI-7と一致。

<sup>288</sup> 他文書のXI-8と一致。

<sup>289</sup> 他文書のXI-9に類似。

<sup>290</sup> 他文書のXI-9に類似。

XI-9	ITJ746	dga' ba'i gтам thos par ston /
	ITJ747	phu nu dang phrad bar ston /
	P.t.1045	dga' ba'i gтаM thos par ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	dga' ba'i gтам thos par ston /
	P.c.3896	dga' ba / thos par ston
	P.c.3988	[聞] 喜事
XI-10	ITJ746	bzang por 'ong bar ston /
	ITJ747	dga' ba thos par ston / <sup>291</sup>
	P.t.1045	bzang por 'ong bar ston / /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	bzang por 'ong bar ston /
	P.c.3896	rgyon byad bar ston
	P.c.3988	得弓箭事
XII-1	ITJ746	nam sros /
	ITJ747	nam sros /
	P.t.1045	nam sros /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	[---]s
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	黄昏時
XII-2	ITJ746	bu sring dмаg pa 'ong bar ston /
	ITJ747	bu sring dмаg pa 'ong bar ston
	P.t.1045	bu sring dмаg pa 'ong bar ston
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	bu sring mag pa 'ong bar ston /
	P.c.3896	[---]
	P.c.3988	姉妹及婦至 <sup>292</sup>

<sup>291</sup> 他文書のXI-9に類似。

<sup>292</sup> P.c.3479では「姉妹及親至」とある。

XII-3	ITJ746	shar nas myi zhig 'ong bar ston //
	ITJ747	shar phyogs nas myi zhig 'ong bar ston /
	Pt.1045	shar nas myi zhig 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	shar nas myi zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	[byang] phyogs na myi [ngong] bar [---]
	P.c.3988	北方人来
XII-4	ITJ746	gcan zan gyis myi zhig gsod par ston /
	ITJ747	'tsham zhing dmyigs par ston /
	Pt.1045	gcan zan gis myi zhig gsod par ston / /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	gcan zan gyis myi zhig gsod bar ston /
	P.c.3896	ye myig ched gyis shig 'ong [+2] [sto]n lho phyogs [-]s myi 'ong [--] ston
	P.c.3988	[聞] 人死
XII-5	ITJ746	lho nas myi zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	lho phyogs nas myi zhig 'ong bar ston /
	Pt.1045	lho nas myi zhig 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	lho nas myi zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	lho phyogs nas myi ngong bar ston /
	P.c.3988	南方有人来 <sup>293</sup>
XII-6	ITJ746	bdag zhang lon du 'ong bar ston //
	ITJ747	nub phyogs nas bdag la zhang lon sko ba 'ong / <sup>294</sup>
	Pt.1045	bdag zhang lon du 'ong bar ston /
	Pt.1048	<i>lac</i>
	Pt.1049	bdag zhang long du 'ong bar ston /
	P.c.3896	bdag zhang lon du ngong bar ston /
	P.c.3988	自身干官事

<sup>293</sup> P.c.3479では「南方人来」とある。

<sup>294</sup> 他文書のXII-7の内容も取り入れているのかもしれない。

XII-7	ITJ746	nub nas myi zhig 'ong bar ston /
	ITJ747	bdag stag thob par ston /
	P.t.1045	nub nas myi 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	nub nas myi zhig 'ong bar ston /
	P.c.3896	nub phyogs nas myi ngong bar ston /
	P.c.3988	所心得
XII-8	ITJ746	bdag pha tsan thob par ston /
	ITJ747	char pa 'ong bar ston /
	P.t.1045	bdag pha tshan thob par ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	bdag pha tsan thob par ston /
	P.c.3896	bdag [---] ston /
	P.c.3988	身得武官
XII-9	ITJ746	phyis chad pa 'ong bar ston //
	ITJ747	phyis chad pa 'ong bar ston /
	P.t.1045	phyis chad pa 'ong bar ston /
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	phyis chad pa 'ong bar ston /
	P.c.3896	[ga?] phyis [ched] ngong bar ston /
	P.c.3988	犯後到罪
XII-10	ITJ746	bu lon ded pa 'ong bar ston //
	ITJ747	bdag stag thob par ston /
	P.t.1045	bu lon ded pa 'ong bar ston //
	P.t.1048	<i>lac</i>
	P.t.1049	bu lon ded pa 'ong bar ston /
	P.c.3896	bu lon ded pa ngong bar ston /
	P.c.3988	徵索債債負事

Handwritten text in a historical script, likely a form of Old Japanese or Korean, arranged in multiple columns. The text is written on aged, slightly damaged paper. The script is dense and appears to be a formal record or document. The text is organized into several horizontal sections, each containing multiple columns of writing. The characters are small and closely spaced, typical of traditional East Asian writing. The paper shows signs of wear, including some staining and small holes, suggesting its age.



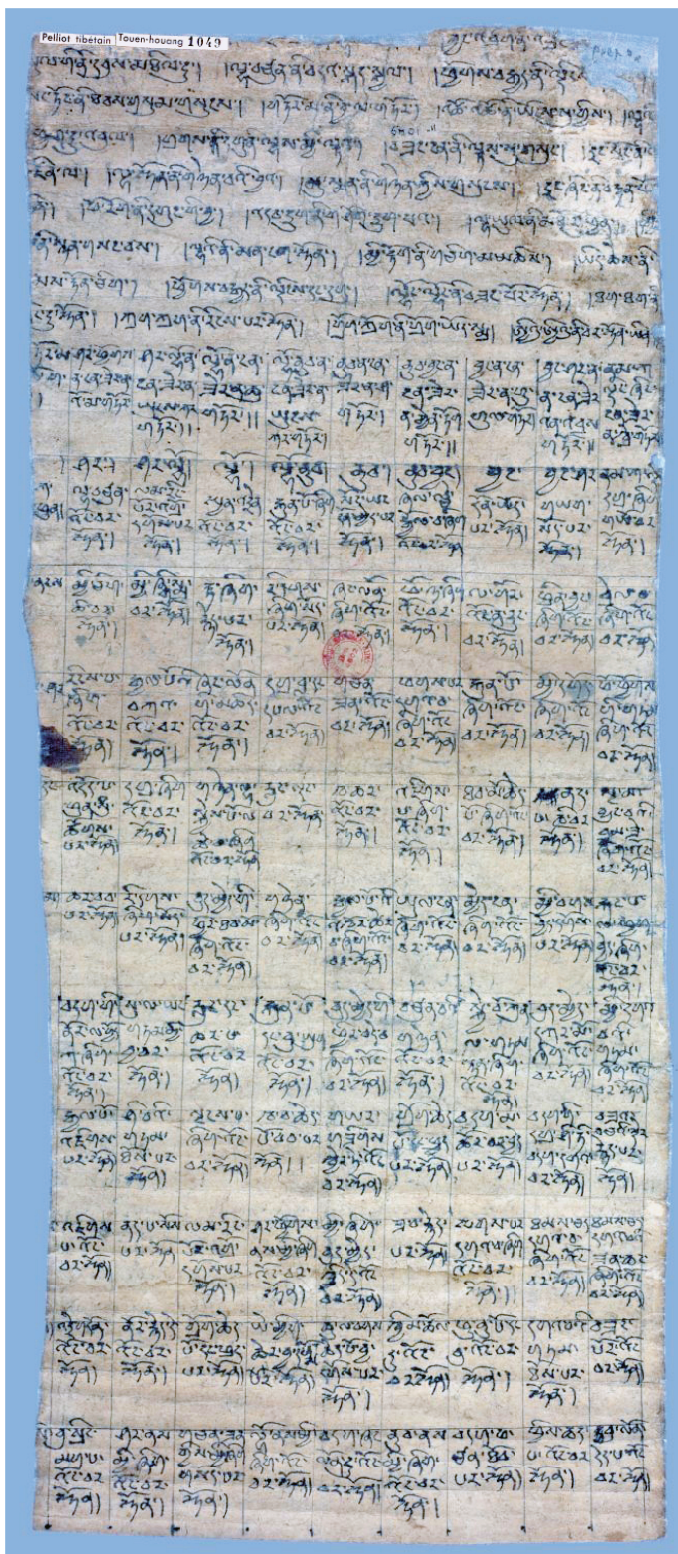
[illegible]



181

[illegible]





卷二 德冠四科 耶達聖門 寶錄靈輿 證以學華

萌應從祀 隆配神欽

取后稷以受仲春故作周禮蓋于禮神惟神即神即時發精養虎稟政九以崇祀司馬季春于謹以尊犇犇春法歲產子陳明荒作主配神伏惟

樽真查一第二整四字十不承子之布四尺素素小食而鑑于此

於林香齋常與吳昌碩書云我三物皆至而布衣父酒後輒聊以書重天下  
引筆常不復覺重蓋亦謝康樂行矣

卷之五 馬頰堂與墨子小疾立振一稿五 卷之四 錄余而登

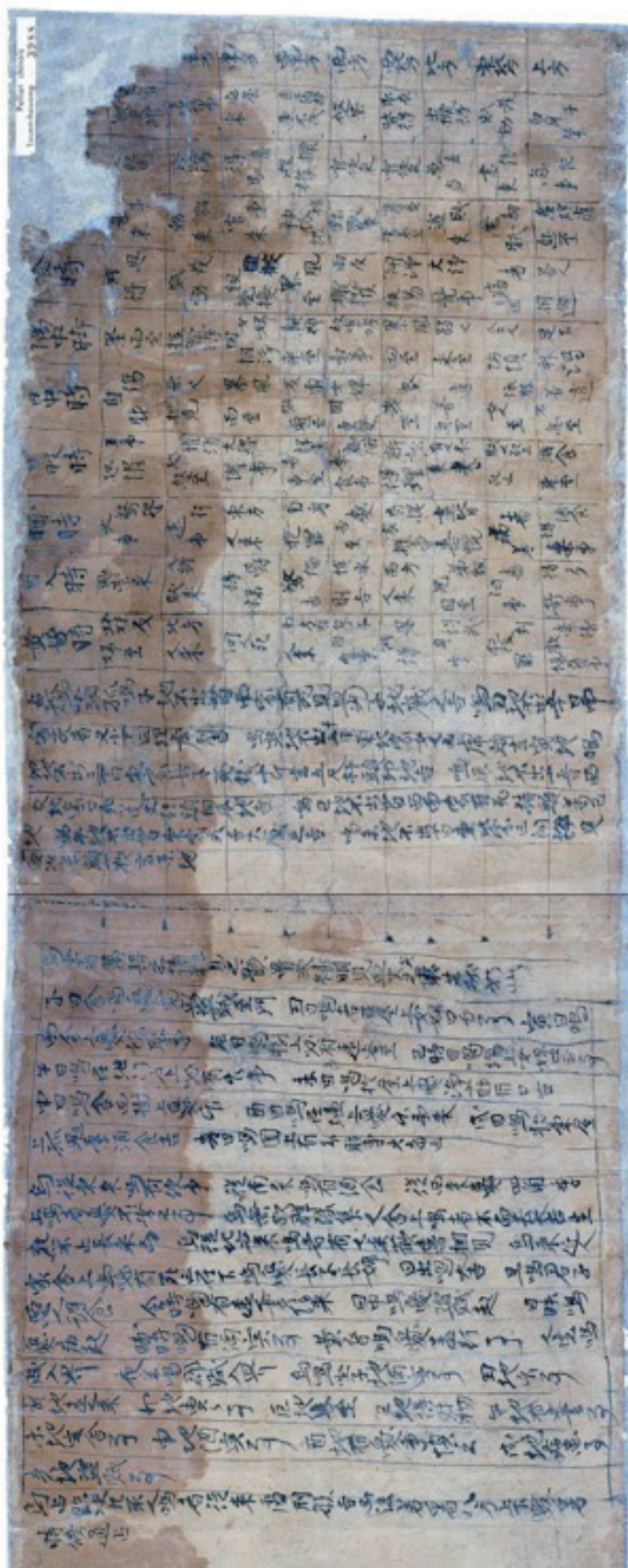
184

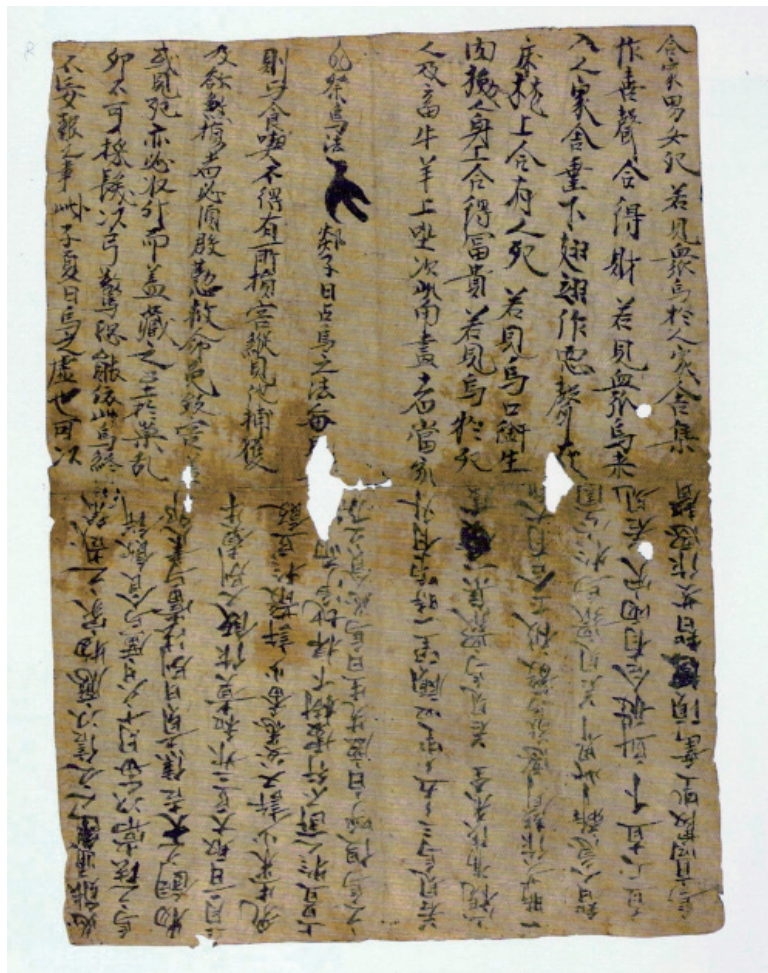












D	A
C	B

「もとのかたちを復元するには、先ず上下を折り畳んでから、左方向に畳み、右側を綴じる。右上から時計回りにページをA、B、C、Dとすると、復元後のテキストの順序は D+C→B+A となるが、C と B のあいだに欠落がある」

(以上『シルクロード』 p.135)



### 第3章：骰子占ト<sup>295</sup>

筆者がこれまでの調査で確認した骰子占ト文書は22点にのぼり、古チベット語占ト文書中で最多数を占める。また、出土地が敦煌だけに留まらないことが、先の銅銭占トや鴉鳴占ト文書と大きく異なる点である。筆者は、これまでにスタインコレクションとペリオコレクション中の全ての骰子占ト文書について実見調査を行い、それ以外のコレクション中の資料についてもカタログ等に掲載された写真等によって確認作業を実施し、テキストデータベースを作成した<sup>296</sup>。かくして、複数のコレクション、出土地に跨がる骰子占ト書を通観し、異同を検証することが可能となった。しかし、実際にこれらを比較検証した結果、先行研究では解決されていない様々な問題が顕在化してきた。そこで、第1節では、古チベット語骰子占ト文書の総合的研究の初段階として、文書間の相互関係について明らかにすることを第一の目的とする。そこから、古代チベット社会における骰子占トの位置づけについても考察したい。そして、第2節では、骰子占トを扱った他言語文書に関して、現在までに蒐集した資料と先行研究を整理し、今後の研究材料とする。

まずはじめに、22点の文書について文書番号ごとにサイズや残存行数を一覧で示したい。出土地や、所蔵先に関しては、本論文5頁の一覧表を参照されたい。

---

<sup>295</sup> 本章は、【西田 2008】に、大幅に加筆・修正を加えて作成したものである。

<sup>296</sup> スタインコレクション中の骰子占ト文書に関しては、ITJ 738.2のデジタルイメージのみがIDPで確認できる状況である。

# 骰子占ト文書リスト

文書番号	形状	サイズ (cm)	テキスト	残存行数 (行)	背面
ITJ 738	卷子	25.5 × 106 + 25.5 × 35.5 + 25.5 × 200	首尾欠	90 + 33 + 162	チベット語經典のroll (『十万頌般若經』)
ITJ 739	冊子	12.5 × 15 × 17葉	尾欠	374	表面の続き
ITJ 740	卷子	26.5 × 849	完本	237 + 122	漢語經典 (『金光明經』 卷一)
ITJ 743	卷子	28 × 36	首尾欠	32	漢文 (sūtraに関する問答)
ITJ 745	卷子	26 × 435	首尾有?	33	漢語經典 (『説一切有部俱舍論』 卷二十二)
Or.8210/S.155	卷子	23.4 × 228.6	(首)尾欠	188 + 8	漢語經典 (『妙法蓮華經』 卷十七) + チベット語占ト文の続き8行
Or.15000/67	断片	13.8 × 14.5	首尾欠	12	なし
Or.15000/76	断片	18.2 × 10	首尾欠	9	なし
P.t.1043	卷子	26 × 142	首欠	100	漢語經典
P.t.1046B	卷子	24 × 60	首尾欠	41	なし
P.t.1049_verso	卷子	27 × 65	首欠	8	チベット語鴉鳴占ト
P.t.1051	卷子	29 × 113	首尾欠	73	チベット文4行 (『般若經』 2行と仏教文献の冒頭 2行)
P.t.1052	卷子	14.7 × 150	首尾欠	261 + 11	表面の続き
Tu 8 (=Tu 12)	断片	13.3 × 13.9	首尾欠	9	8行の漢文
Tu 11	断片	15 × 18	首尾欠	11	12行の漢文
Tu 12 (=Tu 8)	断片	14.4 × 21.5	首尾欠	14	14行の漢文
Tu 55	断片	6.6 × 7	首尾欠	5	3行の漢文
Tu 56	断片	26 × 20.8	首尾欠	11	14行の漢文
SI O 145	断片		首尾欠	14	不明
SI P 56a	断片		首尾欠	7	不明
Otani 6004	断片		首尾欠	5?	なし
羽田	卷子	不明	首欠	87	不明

## 第1節：古チベット語骰子占ト文書読解

### 1.1. 概観と先行研究

古チベット語骰子占ト文書の形式は、ほとんど全てが卷子本及びその断片である。ただし、ITJ 739のみは、冊子本の形式をとっており、筆者の管見の限りでは、唯一の古チベット語冊子本占ト書である。冊子本は、形式と書体から判断して、10世紀に属する可能性が高いと考えられる<sup>297</sup>。

まず、文書に記述されている骰子の目が4を超えないことから、この占トには、1から4までの目しか有しない骰子が用いられていたことがわかる。実際に、東トルキスタンの桜蘭遺跡やトルファン盆地からはそのような骰子が出土している。これは長方形六面体の骰子で、面積の広い4面に1つから4つの小円が描かれているのである（下図参照）。



*Serindia Pl. XXXVI*

L. B. IV. v. 0034



*Ancient Khotan Pl. LXXIV*

N.004

また、目の配列には意味がある。たとえば、3/2/1と3/1/2、2/3/1には、各々に独自の卦辞と吉凶が記されている。従って、3つの骰子を同時に振ったのではなく、1つの骰子を3回振ったという占法が考えられ、この占いは、1つの骰子を3回振ったときに出了目の組み合わせによって吉凶を判断する占いであると定義できる。

<sup>297</sup> 10世紀に属するチベット語文書は、吐蕃支配期のそれと比較するとやや筆記体に近い（=semi-cursive style）書体的特徴をもつ。（Takeuchi 2006, p.39）。

さて、骰子占ト文書の内容構成をみると、序文と本文から構成されていることがわかる。しかし、序文は、ITJ 739という冊子本占ト書にしか発見できず、完本であるITJ 740には、序文は記されていないのである。

次に、本文の構成を概説する。本文は、数行からなる小段落に分かれており、各段落の間には、1つから4つを1組とした小円が横並びに3組描かれている。これは骰子の目を表し、以下にはそれに対応する卦辞が続く。目は、朱書きされる場合や、二重の円で描かれる場合などもあるが、それらに機能上の差異はないようだ。本論文の翻字テキスト中では、この小円を「@」という記号によって表すことにする。目の組み合わせは、1/1/1から4/4/4までの最大64通りが考えられるが、完本であるITJ 740であっても2つの卦を書き落としているために、62通りまでしか確認できない。各卦辞の配列は、概して4/4/4など目数の多い組み合わせから順に記述されていると言えるが、不規則的な配置も多々見える。従って、実際の占いの場面で手引書として用いるには、非常に参照しがたい。そもそも、1mを超えるような卷子本は、参照する目的を持って作成されたのではないと考えることもでき、このような問題を回避するために冊子本形式が採用されるに至ったのかもしれない。

さて、これらの古チベット語骰子占ト文書に関する重要な研究として以下の二点を挙げておきたい。第一は、A. F. Franckeによるベルリン所蔵文書に対する研究である<sup>298</sup>。Franckeは、6点の骰子占ト断片文書についての翻字テキストと独訳を発表し<sup>299</sup>、これに用いられたと考えられる骰子をスタインの図版中に発見した。さらに、これらがWeberによって発表されていたインドの骰子占ト書と同種の典籍であると同定した<sup>300</sup>。他にもいくつかの骰子占トに関する重要な資料が掲載されているので、本章の第2節で言及したい。第二は、F. W. Thomasによるもので、スタインコレクション中の骰子占ト文書を中心に扱った研究である<sup>301</sup>。ここでは、ITJ 738のテキストと英訳が示されている。当該文書は、残存状態が比較的良好であったため、Franckeが対象とした断片文書よりも多くの情報を提供した。また、難解な韻文の翻訳にも取り組んでいる点

---

<sup>298</sup> Francke 1924, 1928.

<sup>299</sup> Tu 11, Tu 12, Or.15000/67 (Francke 1924)、Tu 8, Tu 55, Tu 56 (Francke 1928)。

<sup>300</sup> Francke 1928, pp.113-116.

<sup>301</sup> AFL pp.113-150.

で、後続研究の礎となっている。Thomasは、ITJ 738と類似内容をもつテキストとしてITJ 739、740についても概説し、一部のテキストと英訳を提示した他、ITJ 743や、Or.8210/S.155、*IMT*に記載されている数点が骰子占ト文書であることを指摘した<sup>302</sup>。以降の研究としては、文書ごとの翻訳を中心とした研究や<sup>303</sup>、簡単な概説<sup>304</sup>がいくつかある。翻字テキストに関しては、ITJ 738、739、740、Pt.1043、1046、1051、1052が*OTDO*に収載されており、同ウェブサイトでも確認できる。

## 1.2. 文書概説

### 【ITJ 738】

ITJ 738文書は、現在738.1、738.2、738.3の3断片に分かれて保存されているが、表面の記述内容から、これらが元来一文書であり、738.2、738.1、738.3の順に並んでいたことがわかっている<sup>305</sup>。3断片は、一貫して小さく丁寧な文字で記されてることから、おそらく同一の書写人によって書かれたものであると考えられる。骰子の目は朱で縁取りされた一重の円で記され、それぞれがシェー (*shad*) で区切られている。目は独立した行には示されず、卦辞と卦辞の間にも改行がなされていない。小円が、上下二段組みにされて描かれている点は、本文書に特徴的

---

<sup>302</sup> Pt.1043、1046、1047、1049、1051、1052 (*AFL* p.140)

<sup>303</sup> 例えば、王・陳 1987 (154-161頁) にはPt.1046Bのテキストと中国語訳を、1988 (105-122頁) にはITJ 738.2と738.3の訳文を収録している。陳 2011bは、1046Bの内容とITJ 740の一部とが一致することを指摘し、改訳を提示した。また、格桑央京はITJ 740のテキストと中国語訳を発表している (格桑央京 2005)。

<sup>304</sup> Macdonald 1971, pp.285-286や、山口1985, 535頁、1987, 177-179頁 (Pt.1051の部分訳を含む) などがある。

<sup>305</sup> *OTDO* p.292。表面のチベット語十万頌般若経は北京版59品 (*le'u*) 268巻 (*bam po*) の以下の箇所に対応する。

738.2 : f.173a, 1.2 (冒頭) ~ f.173b (末尾)

738.1 : f.174a, 1.1 (冒頭) ~ f.176b, 1.3 (*dgra bcom pa*)

738.3 : f.176b, 1.3 (*[nyid] rnam par*) ~ f.182a, 1.7 (巻末)

この接合状況は、2004年2月19日に大谷大学 (京都) において財団法人東方研究会研究員の石川巖氏が口頭発表された『大英図書館調査報告 (8月31日~9月7日) 補訂 - IOL Tib J 738について -』の内容に基づいている。なお、筆者も2012年2月の実見調査にて上記の対応を確認した。

な点であると言える<sup>306</sup>。本書に収録されている卦は合計で59卦ある。このうち、目の判別が困難な卦が5つ存在する上、7つの卦辞は同じ目の組み合わせに対する異記述であるため、結果として47通りの目の組み合わせに対する卦辞が記されていることになる<sup>307</sup>。これらの卦辞に収録されている韻文は、ITJ 739、Or.15000/67、Pt.1051、Pt.1052中の韻文との間に一致や類似がみえる。また、AFLには、738.2の翻字テキストと、738.3のテキスト及び英訳が収録されている<sup>308</sup>。Thomasは、これを実際の占いの場面での回答集であると考え、中国の占トや仏教的な要素が全くみられず、ボン教との関わりがうかがえる内容であると述べている<sup>309</sup>。なお、王・陳の研究にも738.2と738.3の翻字テキストと中国語訳が確認できる<sup>310</sup>。

### 【ITJ 739】

冊子本形式をとる唯一の古チベット語占ト書であり、おそらく10世紀に属する文書であることが形式から想定できる。17葉34頁から構成され、上端には紐で綴じていた形跡と思われる小

---

<sup>306</sup> 2は「：」、3は「：・」4は「：：」と記されている。

<sup>307</sup> 複数の卦辞が寄せられた目の組み合わせと、その該当箇所は以下である。

4 / 3 / 3 : 2v24-29, 2v29-2v33

4 / 2 / 2 : 1v3-7, 1v68-73, 3v18-22

4 / 2 / 1 : 1v8-10, 3v22-27

4 / 1 / 4 : 1v11-14, 3v27-31

3 / 4 / 4 : 3v13-18, 3v79-85

3 / 4 / 3 : 1v17-21, 3v85-91

2 / 1 / 2 : 3v66-72, 3v72-79

これに加えて、第一番目の卦辞は、料紙の欠損により、目の組み合わせが記された卦辞前半部を失っている。また、3v 148の末尾から149冒頭にかけては、*mo 'di ci la btab kyang bzang* // 「この卦はについて占っても吉」という総合的吉凶の後に韻文が続いているが、韻文の前からは骰子の目の組み合わせが脱落していると考えられる。このような料紙の欠損、記述の脱落や不明瞭さによって合計17の目の組み合わせに対する記述が不足している（4/4/4、4/4/3、4/4/2、4/4/1、4/3/2、4/3/1、4/2/3、4/1/3、4/1/2、4/1/1、3/3/4、3/3/2、2/3/4、2/2/3、2/1/3、1/2/4、1/1/2）

<sup>308</sup> 738.2 : AFL pp.118-119、738.3 : AFL pp.120-139。Thomasは、738.1の存在にも気づいており、AFL p. 115 fn.2)で言及しているが、これが738.2に先行する断片であると想定している。なお、OTDOには全ての翻字テキストが収録されている。

<sup>309</sup> AFL pp.117-118.

<sup>310</sup> 王・陳 1988, 105-122頁, 200-232頁。謝 1982にも738.3の訳文が掲載されている。

さな穴が4つある。文書の6頁（3葉目の裏）半ばまでには、6音節の韻文118節によって構成された序文が記されている。序文の随所に朱書きがみられ、卦辞の一部や、骰子の目を表す小円のいくつかにも朱が用いられている。目は二重や、時には三重の円で描かれ、それぞれがシェーによって区切られているが、独立した行には記されず、卦辞と卦辞の間にも改行がなされていない。後半になるにつれ、大ぶりの荒い筆跡になるが、おそらく最後まで一人の書き手によって書されている。18葉目以降を失しているため、卦辞の総数は57卦であるが、このうちの2つは同じ目の組み合わせにあてられているので、56通りの目の組み合わせに対する卦辞が残存する<sup>311</sup>。AFLには序文の翻字テキストと解説が収録されている<sup>312</sup>。またThomasは、ITJ 739中の9つの韻文がITJ 738中の韻文と符合あるいは類似することを指摘し、両者を対照させている<sup>313</sup>。

#### 【ITJ 740】

本文書は、チベット語骰子占ト文書中唯一の完本である。26.5cm幅の料紙が数枚つなぎ合わされた卷子本であるが、第一枚目は保護紙として添付されたもので、チベット面は元来空白である。残存行数は合計359行であるが、骰子占トに関する記述は237行目までである。238～359行目は、様々な難事に関する原告、被告の言い分と、それを受けた役人の回答を留めたもので、訴訟文書の一種と見なせる内容である。しかしながら、それらの訴訟に対する判決を骰子に委ねる場合があったことが記されていることから、先行する骰子占ト書と無関係ではないと言える。本論文では、237行目までを骰子占ト文書、以降を第二部と呼ぶことにし、第二部につ

---

<sup>311</sup> II.12v4-10とII.14r6-14v1は、ともに2/2/3という目の組み合わせを掲げる大吉の卦であるが、卦辞内容は異なっている。当該文書では、頁の損失により2/3/1、1/3/4、1/2/4、1/2/2、1/2/1、1/1/4、1/1/3、1/1/2という8つの目の組み合わせが欠けている。

<sup>312</sup> AFL, pp.143-146.

<sup>313</sup> AFL, pp.146-150. また、本文書中の韻文には、Or.15000/67や、Pt.1051、Pt.1052との間にも符合がみられることを補足しておく。

いては後述したい。ただし、書体や、綴り字の特徴が一貫しているのも、骰子占ト書と第二部は同一の書写人によって書されたことが認められる<sup>314</sup>。

さて、本文書に収められた卦辞には重複は一つも見当たらないが、4/3/2、4/1/2という目の組み合わせに対する卦辞が脱落しているため、卦辞総数は62となる。卦辞内容の一部は、断片文書であるPt.1046Bの記述と一致する<sup>315</sup>。骰子の目は一重の円で示され、独立した行に横並びに記されている。卦辞に登場する神格のいくつかが仏教以前のチベットに由来する土着の神々であることや<sup>316</sup>、*bon po*という名称が数回明記されていることから<sup>317</sup>、この写本がボン教徒に属していた可能性が先行研究では指摘されている<sup>318</sup>。骰子占ト文書については、格桑央京による翻字テキストと中国語訳があるほか、Dotsonによる英訳も一部発表されている<sup>319</sup>。第二部のテキストと部分訳はDotsonの研究に収録されている<sup>320</sup>。

---

<sup>314</sup> 綴り字の特徴については先行研究でもいくつか指摘されているが（AFL p.140、Dotson 2007 pp. 18-20）、たとえば*pa'i*を*pe'i*、*te*を*the*と記している。また、二段組のツェク（double-tsheg）「:」が用いられている点は非常に特徴的である。一方で、文末であってもニシェー（*gnyis shad*）の使用頻度は低い。しかし、114-120行目に記された3/2/1、3/1/1に対する卦辞には、それらの特徴がみられない上、筆跡も他と異なることから、これら2卦辞は別人物によって書された可能性が高いと考えられる。

<sup>315</sup> 内容の一致は、Pt.1046に残された11卦辞の全てにおいて確認できる。これらは、吉凶が符合するのはもちろんのこと、目の組み合わせも概ね一致している。しかし、卦辞の配列順序には相違がみられる上、細かな記述の差異もあることから、これらが同一典籍、あるいは同一規範に基づいた異写本であると考えられる。

<sup>316</sup> たとえば、*lha thang la ya bzbur* (1.20) や *thang lha ya bzbur* (1.22) 、*yar lha sham pho* (1.163, 202) 、*'o de gung rgyal* (1.70) など（AFL pp.140-141、Dotson 2007 pp.22-25）。

<sup>317</sup> *nad pa la btab na bon po'I ngo* (1.14)

病人について占えばボンポの相

*ji dgur myl rung gIs phon mkhas pas bon ma byas na myi rung* (II.53-54)

全てが適当でないため、ボンポの熟練者がボンポをしないならば、適していない

*bon po la btab na gsas dragste 'dre dang gdon gIs 'jigste* (1.111)

ボンポについて占えば、[ボンポの] シャーマンは勇猛であるが、*'dre*と*gdon*によって脅かされる  
*bon po zhlga na 'dre gdon gyIs 'jigs* (1.206)

ボンポ一人が*'dre*と*gdon*によって脅かされる

<sup>318</sup> AFL pp.140-141、Dotson 2007, pp.25-26.

<sup>319</sup> 格桑央京 2005, Dotson 2007, pp.21-22.

<sup>320</sup> Dotson 2007, pp.32-68.



【ITJ 743】

残存状態が非常に悪く、内容が判読し難い文書である。骰子の目は全て一重の円によって独立した行に描かれており、それぞれの間はシェーによって区切られていない。残存する32行には7つの卦辞が確認できるが、判別できた目の組み合わせは4/1/2（または3/1/2）、4/4/3（または3/4/3）、4/4/2、4/3/1、4/2/4の5卦辞である。

【ITJ 745】

漢文經典背面の一部に記されたチベット語骰子占ト書である。卷子自体は435cmあるが、チベット語の記された箇所（75cm）以外は、修復時に裏打ちされており、元来白紙であったと考えられる。従って、本文書は骰子占トの手引き書として作成されたものではなく、練習書き、あるいは覚え書きの類いに属する記述であったのかもしれない。また、本書には骰子の目が記されておらず、その点でPt.1051と共通する。しかし、書式的特徴から骰子占ト書に属すると判断した。卦辞と卦辞の間には改行が挿入されており、12卦辞が確認できる。なお、25行目以降にみられる筆跡と句読記号の変化からは、複数の書写人によって作成された文書であると想定できる<sup>321</sup>。なお、後半の2つの記述内容にはOr.8210/S.155の記述との間に類似性がみられる<sup>322</sup>。

【Or.8210/S.155】

本文書は、スタイン蒐集敦煌出土漢語文書コレクション中に属する。チベット面は左右両端までびっしりと書き詰められており、8行が漢文面に回り込んでいる。料紙の状態が悪いため、全体的に記述の判読が非常に難しい<sup>323</sup>。

---

<sup>321</sup> 25行目以降には、文頭の日月点に続くニシェー（*gnyis shad*）の間に二重点が打たれず、文末のニシェーもチクシェー（*chig shad*）に交替している。

<sup>322</sup> ITJ 745 ll.25-28 : Or.8210/S.155 ll.107-108

ITJ 745 ll.29-31 : Or.8210/S.155 ll.90-94

<sup>323</sup> チベット面は全体に網掛けされている。また、料紙の接合箇所にあたる記述の一部は判読できない。これは、修復時に料紙ごと剥離したものを再度張り合わせたことが原因であるようだ。また、補強用パッチと共に、記述されていた文字も剥離された形跡がある。

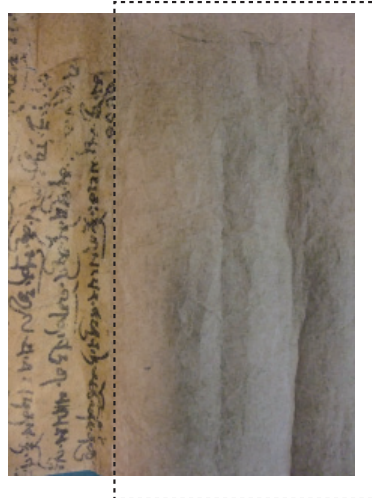
表面（漢文經典）の第一枚目は、梓罨のサイズや筆跡が二枚目以降とは明らかに異なっている<sup>324</sup>。卷子本の最も外側に当たる第1枚目が、使用により劣化し易いことを考慮すれば、傷んだ第一枚目のみを新しく書き直して差し替えたという状況が想定できる。この時、新たに貼付けられた第1枚目のチベット面は白紙であり、そのためチベット語骰子文書は冒頭部を失っている（図①参照）。したがって、漢文經典の第一枚目を貼替える時には、既にチベット面が作成されていたことになり、漢文經典の反古紙にチベット語骰子占卜が記された後に、再び漢文經典が使用されていたというユニークな使用状況がうかがえるのである。チベット面の数カ所に補強用パッチが貼られていることも、この使用状況の証左となろう。

第一枚目（貼替え箇所）



recto（漢文經典）

第一枚目（貼替え箇所）

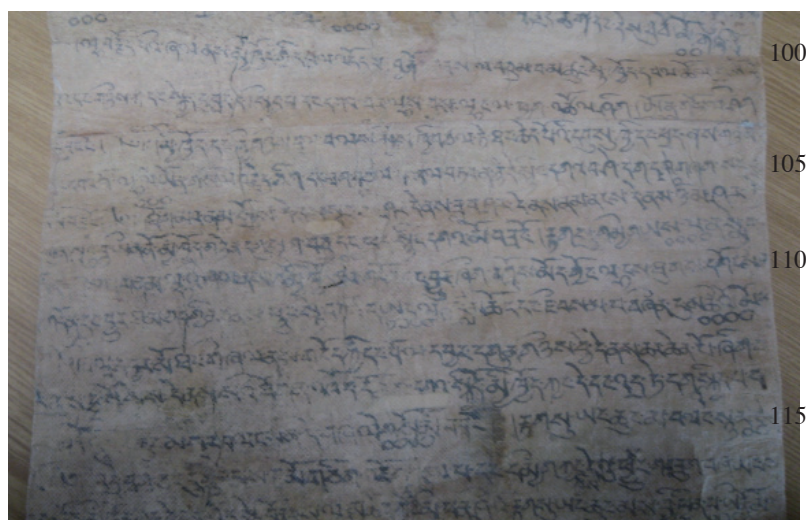


verso（チベット語骰子占卜書）

図①

<sup>324</sup> 本文書は、23.4cm幅の7枚の料紙（38.5cm、12.5cm、48cm、48cm、48cm、19.6cm、14cm）によって構成される卷子本である。

また、本文書では、骰子の目は、横並びの一重円で描かれており、シェーによって区切られていない。卦辞と卦辞の間には概ね改行がみられ、目の組み合わせは改行された余白に書き込まれているようである。しかし、改行がない場合や、改行後の余白がない場合には行間に目が書き込まれている。そのため、前の卦辞の途中に次の卦辞の目の組み合わせが挿入されているように見える箇所がいくつかある（図②参照）<sup>325</sup>。これは、写本が完成した後に目の組み合わせが書き加えられたことを傍証するものであろう。



図②

<sup>325</sup> 例えば、II.103-105には3/1/3（または3/1/4）という目の組み合わせに対する卦辞が以下のように記されている。

(102) [---] dang gnyIs ka dang skied du [blad/(brad)] de / skyId pa dang dga' bar lhas byas lha [jal?] phyag 'tshol shig / yon gsol shlg

(103) ○○○ ○ [○○○/○○○○]

(104) bzang ngo // \$:/ myI khyod dang khyI gnyIs b[r]al ba las myIs khyI btsal te thang ched po 'i dbusu khyi dang phyad nas gnyIs

(105)[---] [dang] [shar] [sho] lha la yon gsol brjed cig dang zlag gtsal pa'<ng> la btab na rnyede snying dga' ba she dag dang<g> gzhang sang [±1]

104行目の冒頭は明らかに102行目の続きである。同じ状況が、106-18行目、109-111行目、112-115行目、119-122行目、136-138行目にも認められる。

なお、95行目、101行目、148行目で筆跡の変化がみられることから、複数の書写人によって作成された文書である可能性がうかがえる。本文書は、判読不能な箇所が多く、目の組み合わせの重複も随所で認められるため、55卦辞のうち26通りの目の組み合わせに対する卦辞が確定できるのに留まっている。最近出版されたOr.8210中のチベット語文書に関するカタログ中には、翻字テキストが収録されている<sup>326</sup>。

【Or.15000/67】

OTMによれば、本断片は首尾は欠損しているものの、左右端は保持している。従って、元来約14cm程度の幅の写本であったことがわかる。骰子の目は独立した行に並列する一重の円によって描かれており、シェーによる区切りはない。卦辞と卦辞の間には改行が挿入されている。残存する12行のうち、目の組み合わせが判別できるのは一つだけである。また、確認できる二つの卦辞の文末には吉凶が記されていないが、記述内容には他文書との符合が認められる<sup>327</sup>。翻字テキストと写真がOTMに収録されている。

【Or.15000/76】

本所蔵番号には2断片が属している。OTMによれば、両者は同じ書き手によるものだが内容は異なる。一方には、6行のダラニか真言と思われる文が書かれており、他方に骰子占卜が保存されている。3行目、6行目には朱の二重円によって骰子の目が描かれており、それぞれがシェーによって区切られているが、卦辞間に改行はみられない。骰子占卜の記された断片は、左側を欠損しているため卦辞の全文を確認できないが、残存箇所に吉凶の記述は認められない。また、各行には予め罫線が引かれていたようである。

【Pt.1043】

本断片文書は、左右端と下端を保持しているものの、穴や破れがあるために、一部の記述が欠損している。非常に特徴的な筆跡からは、書写人がチベット文字に不慣れであったことが想

---

<sup>326</sup> Iwao, K., Van schaik, S. and Takeuchi, T. (ed) 2012, pp.12-24.

<sup>327</sup> Or.15000/67 ll.1-5 : Pt.1052 r.195-202、ITJ 739 16r9-16v-1

Or.15000/67 ll.6-10 : ITJ 738 1v8-1v10

像できる。随所に判別し難い文字が見受けられ、チベットの正書法から逸脱した*ryel*や*ryal*といった語彙が発現し、シェーがほとんど使用されていないなどの特徴も同じ理由によるだろう。残存する29卦辞のうち、目の組み合わせが確定できるものは27ある。そこから重複する目の組み合わせを除いた結果、26通りの目の組み合わせに対する卦辞が認められるが、吉凶が記されているのは2つの卦辞のみである<sup>328</sup>。また、最後の卦辞はおそらく別人によって書かれており<sup>329</sup>、他よりも記述が長くなっている。骰子の目は一重か二重の円によって独立した行に並列して描かれており、卦辞と卦辞の間には改行が挿入されている。

#### 【Pt.1046B】

本文書は右端の破れと、上方の2つの穴によって残存する記述の一部が損なわれている。記述が確認できる卦辞は11あり、それらの内容はITJ 740の一部と符合する。しかし、卦の配列には一致が見られないことから、一方が他方の写しであるとは考え難い<sup>330</sup>。Pt.1046Bの書体からは、これが10世紀に属する可能性がうかがえる。王・陳によって、テキストと中国語訳が出版されている<sup>331</sup>。

#### 【Pt.1049\_verso】

表面は、チベット語鵲鳴占ト文書である。背面には27行からなる密教に関するチベット文が記されており、天地を逆転させて8行の占ト文が記されている<sup>332</sup>。背面の2つの記述には、10世紀の書体的特徴がみられ<sup>333</sup>、それらがおそらく同じ書写人による記述であると想定できる。さて、8行の占ト文について内容を吟味してみたところ、書式と内容の特徴から骰子占ト文書

---

<sup>328</sup> 3 / 3 / 4 (II.87-90) と 4 / 1 / 4 (II.94-100) である。

<sup>329</sup> II.94-100

<sup>330</sup> ITJ 740の脚注参照。また、Pt.1046Bの記述には綴り字や文章にやや崩れがみられる。

<sup>331</sup> 王・陳 1987, 154-161頁。なお、陳は改訳も出版している(陳 2011b)。

<sup>332</sup> *IMT* 2 p.44. また、背面の記述は、罫線に沿って書されており、両記述の間には16cmほどの余白が確認できる。

<sup>333</sup> Takeuchi 2006, p.39.

の一部であることがわかった<sup>334</sup>。しかし、元来練習書きか覚え書きの類いであつたと思われる断片的な記述であることに加えて、記述の前半部を欠損しているため、骰子の目の有無は確認できない。また、他文書との記述内容に一致は発見できていない。

【Pt.1051】

背面には2行からなる2つのチベット文が記されている。一方は般若経に関するサンスクリット語とチベット語タイトルであり、他方は、仏教文献の冒頭部である<sup>335</sup>。両者の間には余白がとられているが、筆跡からみて同一人物による練習書きである。書体からは10世紀の記述と想定できる。表面の各行は、罫線に沿って丁寧に記されており、古チベット語骰子占ト文書の中でも、最も整った筆跡を呈している。本書には、全部で12の卦辞が収録されているが、料紙の欠損により、1番目の前半部と12番目の後半部は欠けている。卦辞ごとには改行が挿入されており、多くの場合は、1行分の余白が設けられている。本文書には骰子の目が記されていないが、書式や記述内容が他文書と符合するため、これが骰子占トを記した文書であることは間違いない。さらに、本文書に残された11種の韻文は、Pt.1052、ITJ 738、ITJ 739中に一致、あるいは類似するものを発見できる。なお、テキストと訳文が陳氏の研究に収録されている<sup>336</sup>。

---

<sup>334</sup> たとえば、*myi khyod*（汝は）という表現は骰子占ト文書にしかみられない表現である。参考までにテキストを提示しておく。改行は筆者によるものであり、原典での行数は（ ）内に示す。

(1) [+6] *la btab kyang* [+25]  
(2) [+4] *myi khyod lam du zhugs shing 'gro 'dod na //*  
*lhas lam bcad de 'gro* (3) [--] *lam ma byin no //*  
*myi gros nyan thub thub du bya ste song na //*  
*mtsho gting myed* (4) *dang / gangs gi [seng / ser] gar [lhun] nas //*  
*[thar] pa'i dus myed pa dang 'dra' te //*  
*myi* (5) *bsam ba'i dgra' nyen po che dang phrad par 'ong bas //*  
*tshong nagm gnyen* (6) *byed pa zhig yin na ma byed cig //*  
*nad pa la btab na myi sos //*  
*'dron* (7) *po la btab na myi 'ong //*  
*'dre gdon yod //*  
*gsol ba myi gnang //*  
*btson la* (8) *btab myi thar //*  
*mo 'di ci dgur ngan no //*

<sup>335</sup> *IMT* 2 p.45.

<sup>336</sup> 陳2011a.



【Pt.1052】

本文書は、左右端が概ね保持されていることから、Or.15000/67と同じく細幅の料紙を利用した文書であったことがわかる。文書の首尾は欠けており、左上部も大きく欠損している<sup>337</sup>。また、巻末の背面には、天地を逆にして11行の骰子占卦辞が続いている。したがって、料紙としては巻末を欠損しているが、記述の末尾は保存していることになる。文字が判別しにくいことや、複数の卦辞が重複して同じ目に当てられていることによって、確認できる目の組み合わせは31通りとなる<sup>338</sup>。このうち、第二番目と三番目の卦辞は<sup>339</sup>、他と比べて長く詳細な記述をもっている。また、卦辞ごとに文末で改行がなされており、目は独立した行に一重の円によって並記されている。卦辞に含まれる韻文には、ITJ 738、ITJ 739、Or.15000/67、Pt.1051に一致や類似がみられるものがある。しかし、本文書中の韻文には、随所に韻律数の乱れが発見できることを注記しておく。

【Tu 8】 + 【Tu 12】、【Tu 11】、【Tu 56】

筆跡と句読記号の特徴から<sup>340</sup>、Tu 8、Tu 11、Tu 12、Tu 56、の4文書は、同一文書の異断片であると想定できる<sup>341</sup>。また、他文書と記述内容を対照させてみたところ、Tu 8とTu12は元来

---

<sup>337</sup> 現存箇所に対応する分量の記述が、前半部から失われたことが、骰子の配列と脱落している目の組み合わせから想像できる。

<sup>338</sup> 複数の記述が寄せられた目の組み合わせと、その該当箇所は以下である。

2 / 2 / 2 : II.r50-56, II.r247-251

2 / 1 / 1 : II.r153-161, II.r162-170

しかし、目の組み合わせの配列と脱落箇所から察するに、II.r247-250は1 / 2 / 2、II.r162-170は2 / 2 / 1とあるのが正しいと思われる。

<sup>339</sup> II.r8-25とr26-42。

<sup>340</sup> これらの文書は共通して二段のツェク (= double *tsheg*) を使用している。また、*lha*や、*nya*、*ste*、*lta*、*du*などにおいて特徴的な筆跡を共有している。

<sup>341</sup> 4断片のオリジナル文献番号は、Tu 8 (TI α)、Tu 11 (TI TM 200)、Tu 12 (TI D 107)、Tu 56 (TI D μ) である。TIは、4度にわたるドイツのトルファン探検のうちの第1回目(1902年12月～1903年4月)の蒐集品であることを指し、TMは‘Turfan-Manuskript’を、Dは‘Dacianus = Kocho’を示している(*BTT* p.8)。α、μはそれぞれが異なる遺跡から発掘されたことを示しているが、ドイツ探検隊将来のトルファンチベット文書については、出土地の確度について問題が提唱されている(*BTT* 1987, pp.499-501、Moriyasu 1981, pp.204-205.)。

一文書を形成していたことが分かった。しかし、図版からは切断面が完全には合わないように見えるので、いくらかの記述が失われている可能性がある<sup>342</sup>。これらの4文書では、骰子の目が独立した行に一重の円によって並記されており、卦辞ごとに改行が挿入されていることが確認できる。しかし、残念ながら、ほとんどの文書が料紙の左または右半分を欠損しているため、確定できる目の組み合わせはないと言える<sup>343</sup>。

Tu 8は、文書の左半分を保存しており、失った右半分をTu 12によって補える。従って、全9行の記述はTu 12の1～9行目と接合できると考えられるが、詳細は後述する。

Tu 11は、文書の左半分を保存しており、3つの卦辞について行頭から半ばまで確認できる。

Tu 56は左端を保持しているほか、下辺では右端も認められる。従って、残存する4卦辞のうち、最後の一つに関しては卦辞内容の大部分を抽出できる。

#### 【Tu 55】

本文書は、ドイツ探検隊の将来したチベット語骰子占ト文書の中で、最も小さな断片であり、料紙の四方を欠損しているようである。オリジナルの文献番号であるT II T 16は、これが第2回目のトルファン探検（1904年11月～1905年12月）によってTuyokからもたらされたものであることを示しているようである<sup>344</sup>。本文書でも、上記4点と同じく、二段のツェク (= *double tshag*) が使用されているが、筆跡はそれらとは異なるように見える<sup>345</sup>。また、判読可能な記述が非常に少なく、骰子占ト文書に特徴的な書式が確認し難いと言える<sup>346</sup>。なお、全文書につい

---

<sup>342</sup> BTT Tafel XX-XXII.

<sup>343</sup> これらの文書に確認できる卦辞をまとめて記しておく。

Tu 8 + Tu 12 : 1/3?/3、1/3?/3、1?/4/1、?/?/1

Tu 11 : ?/2?/?、3/2?/?、3?/2?/?

Tu 56 : 3/4/?、3/2/?、3/4/2?

<sup>344</sup> BTT p.8.

<sup>345</sup> Tu 55は小断片であるため、比較可能な記述がすくない。それでも、たとえば、‘*greng-bu*のはじまりに丸みがあることは、他の4点にはみられない特徴であると言える。

<sup>346</sup> *mo myi mthong ngo* // 「卦は見えない」 (1.3) や、*khyod gyang* 「汝も」 (1.4) というフレーズがみられることから骰子占ト書として扱われていると考えられる (Francke 1928, pp.111-112)。



て図版と翻字テキスト、ドイツ語の訳文が発表されている<sup>347</sup>。本断片は、検証に十分な記述を保存していないため、以下では研究対照としないことにする。

【SI O 145】 【SI P 56a】<sup>348</sup>

これらの2文書は、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所サンクトペテルブルグ支部に所蔵される敦煌出土文書である。SI O 145は、オルデンプルグ (Sergei Fedorovich Oldenburg) によってもたらされた写本であり、SI P 56aは、ペトロフスキー (Nicolai Fyodorovich Petrovski) の将来品である<sup>349</sup>。

SI O 145は、左右端を概ね保持しており、4つの卦辞が残存する。目の組み合わせは、2/3/2、2/2/4、2/1/2の3通りが確認できる。各卦辞の間には改行がなされており、骰子の目は独立した行に横並びに記されている。また、目は二重の円で示されているが、外円は朱色で描かれ、内円は黒で縁取りされた上、朱色に塗りつぶされている。また、句読記号として二段のツェク (= double *tsheg*) が使用されていることを数カ所に発見できる。

一方、SI P 56aは、四方を欠損した断片文書である。骰子の目は独立した行に並記されており、卦辞ごとに改行されていたことも分かる。二重の円で描かれた骰子の目には朱は用いられていないが、二段のツェクが使用されている箇所が一つある。なお、両文書には筆跡上の符合は見当たらない。

---

<sup>347</sup> Francke 1924では、Tu 11とTu 12のテキストと訳文が図版とともに発表され (pp.8-10)、1928には、Tu 8、Tu 55、Tu 56に対する研究が収録されている (pp.110-112)。また、*BTT* にもテキストと翻訳、図版が開示されている (*BTT* pp.85-90)。

<sup>348</sup> ロシア所蔵の2文書については、指導教授である武内紹人先生がその存在をご教示下さった。さらに、所蔵機関において実見調査を行った際に得た写真も提供下さったおかげで、これらの資料を本論文に開示することができたのである。ここに、改めて感謝の意を表したい。

<sup>349</sup> SI P 56aには、Дх 7759という書き込みがあり、これがДуньхуан すなわち「敦煌」から将来した写本であることを示している。

【Otani 6004】

本文書は、大谷探検隊が将来したトルファン出土チベット語文献のうちの一点であり<sup>350</sup>、現在は龍谷大学に所蔵されている。6004という文献番号には、非常に小さな断片文書3点が属している。そのうちの断片に骰子の目と思われる小円が見えることから、骰子占文書であると比定されている<sup>351</sup>。段落ごとに改行がなされているようであるが、詳細は判読不能である。考察に十分な記述を保存していないため、以下では検証対照としない。

【羽田】

本文書について、筆者は、京都大学に所蔵される写真によって調査を行った。写真には李盛鐸印が見えることから、京都大学の教授で総長でもあった羽田亨氏による西域出土文献コレクション『敦煌秘笈』に属する文献である可能性が考えられる<sup>352</sup>。現在、同コレクションは、武田科学振興財団・杏雨書屋に所蔵されており、文献写真を掲載したカタログが順次出版されているが、現在までのところ本写本は発表されていない。

羽田文書は、前半部を失っているものの、同一の目の組み合わせに複数の卦辞が寄せられている箇所は見当たらず、合計24通りの卦辞を保存している。骰子の目は、横並びの一重円によって独立した行に描かれており<sup>353</sup>、卦辞ごとに改行されている。しかし、目の組み合わせの配列順序には規則性が見だし難く、非常に無作為に配されているようにみえる。

また、本文書は、左右端と下端を保持しており、巻末の最終行には、*gtsug lag gi mo rdzogso* という奥書が見える。これにより、古代チベットにおいて骰子占が、「ツクラクの占い」に属していたことが想像できる。しかし、一方で、*gtsug lag kyi mo la bab ste*（ツクラクの卦に落

---

<sup>350</sup> チベット語文献のうち、世俗文書と見なされるものは14点ある（6001～6014）。しかし、文書の入手状況の詳細が不明であるため、これらが実際にトルファンで発掘されたものかどうかは、確定し難いと言われている（武内 1987, 47頁）。

<sup>351</sup> Takeuchi 1988, pp.208, 214.

<sup>352</sup> 羽田コレクションの由来については、栄1997、高田2004、2007に詳しい。

<sup>353</sup> 58行目では、目が消された後、二重の円によって新たな目が記されている。本文書では二重円は使用されていないため、これが別人物によって後から訂正されたものである可能性が考えられる。

ちて) というフレーズがITJ 738 の卦辞の一つにも見つかる<sup>354</sup>。これは、後述するように当該卦辞の説明が述べられた箇所にあたる。従って、現段階では、骰子占ト全体が *gtsug lag gi (/kyI) mo* に属すか否かについては、結論を保留したい。

### 1.3 P.t.1046B・ITJ 740 翻字テキストと試訳

以下では、11の卦辞が収録されるP.t.1046Bの翻字テキストと試訳を提示したい。上述のように、P.t.1046Bの卦辞はITJ 740の一部と符合するので、後者のテキストも併記して、適宜参照しながら試訳に取り組む。その際、記述に異同がある場合には下線でマークするが、細かな綴り字の違いは考慮しないことにする。

---

<sup>354</sup> ITJ 738 1.2v22. ちなみに、この卦は4/2/4という目の組み合わせに当てられた大吉の卦である。

## P.t.1046B

- 翻字テキスト -

P.t.1046B

ITJ 740

① ll.1-4

ll.169-171

@@ @@ [---]@@@

@@ @@ @@@

\$ :/ smra myi mkhan gyi ma mos //

\$ :/ smra myI mkhan gyI ma mo

m[kh]o[-] [---] bgyis kyang

mkhos bgyIs gyIs gyang

myI 'bum la drin ma mchis te //

myI mkhon pu la drIn / ma chagste

my[i] khy[o]d gyang gzhan gyi leg[-] kyang //

myI khyod la sus legspa myI drante

drin myi chags ste

mo ngan to //

mo ngano /

② ll.5-8

ll. 180-183

@@ @@ @

@@ @@ @

\$ :/ srog lha nyam can gyi zhal nas /

\$ :/ srog lha stam chen gyI zhal nas

myI chungu kha ma che

myI chungu la kha ma che

rta du rta chungu kha ma drag

rta chungu la kha ma dag

myi la ngan dus ma che /

myi / la ngan dus ma che /

myi nus pa la kha ma drag /

myI nus pa la kha ma drag /

gnyen zhing sug pas legs par btams pa myi nyan te

gnyen cIng sdug pas legs par bstan gyang myI

nyante

mo ngan to //

mo ngano /

③ ll.9-14

@@ @@@@ [---]@

\$ :/ ^a ka de kha smra ba'i ngo /

rta mgyogs [---]

[---] la btab na kha snyan [---] ngo /

'ong myI 'ong ba' btab na 'ong /

rta bla rmas pos thugs dgongs mdzade [---]

rlag pa nI phyir rnyed /

grogs la khong dku myi byed de

mo bzang ngo

ll. 129-132

@@ @@@@ @@@@

\$ :/ / ha ga'de ga' smye'I ngo

rta bgyogs pe'I ngo

gsol ba' la btab na snyan pe'i ngo

'ong ngam myi 'ong ba la btab na myi 'ong /

rta bla rmang pos thugs dgong mdzade

nor ji rlag pa' phyIr rnyed /

rogs la khong dku ma che zhI g dang

mo bzango /

④ ll.13-16

@@ @@@@ @@@@

\$ :/ lha ryung ba 'i zhal nas /

nged mched ngag 'i zhal te /

rmang ba las phan bar 'ong ngo

dbul ba las phyug por 'ong ngo / /

nyon mos shing sdug bsngal ba las ni

skyid par 'ongste

mo bzang rab bo / /

ll.151-153

@@ @@@@ @@@@

\$ :/ / lha rgyung tsa'I zhal nas

rgyung tsa spun dgu'I ngoste /

rmang ba' las phan bar / 'ong

dbul ba' las phyug par 'ong /

nyong mongspa las skyId par 'ongste

mo bzango /

⑤ ll.17-20

@@ @@@@ @@

\$ :/ lum buste

rtsog ngan gyi mo

phyon ma shes dag byed byed de brtsog pas

lha 'o m[chog?] mnol te phang /

myi 'o mchog gi snying du mi sdugste /

phan ba las ni rmang du 'ong /

[-]u[-] pa las ni dbul bar 'ong /

chung mas phyi phyin te

lha kun phang / nolte

mo ngan to / /

⑥ ll.21-25

@@ @@@@ @

\$ :/ 'phyor pur te /

lha rang rong gi zhal nas /

lam du grong ba la bab na nor rnyed do /

don grubste

mo bzang ngo / /

khyim na 'dug pa la btab na

smyur du lam ring por [---] ba la lta ste

mo 'bring / /

ll.147-150

@@ @@@@ @@

\$ :/ / rtsog ngan gyI ngoste

snyIng la rgyo shag sem rtsog ngan byed

pa ma la mchog du mnol 'phangs

myI 'o chogI snyingdu myi stugste /

'phan pa las rmang bar 'ong /

phyug pa las dbul bar 'ong /

chung mas byI phyinte

gdon lancheste

mo ngano /

177-180

@@ @@@ @

\$ :/ / rtsod purte

ltang rIng gi zhal nas

lamdu 'gro ba' la btab na don grub /

nor nyed

khyIm na 'dug pa la btab na

khyIm na myI 'dugste lam rIng por 'groste /

mo gzhI'o /

⑦ ll.25-28

@@ @@@ @@@@

\$ :/ rma sha ba'i zhal nas /  
 nye ma shar pa'I yul na ni nye ma shar /  
 thang shing skyes pa'i yul na ni  
 thang shing skyes /  
 myI myed pa'i yulu ni myI 'phan /  
 phyugs myed pa'i yuldu phyugs phelste  
 mo bzang rab bo /

⑧ ll.29-33

@@ @@@ @@@

\$ :/ 'tshol rgyagste /  
 grib ma la ni nye ma shar  
 rta mgyogs pa la rgya sgas [b-] [---] zhon /  
bcal ba dang / gos gyis rgyan nas na  
 cu[n] bzang mo dang phrad de /  
kha ni [---] snying dga' ba 'i ngo ste /  
 gsol ba la btab na smyur du chad /  
 'ong ngam myi 'ong ba la btab na smyur du 'ong /  
 grog la btab na grog che /  
tshong rgyal te  
 mo bzang ngo /

ll.165-168

@@ @@@ @@@@

\$ :/ rma sha bo'i zhal nas  
nyI ma myI shar be'i yuldu nI nyI ma shar  
 thang shIng myi skye be'i yuldu nI  
 thang shIng skye  
 myI med pe'i yuldu nI myi phan  
 phyugs med pe'i yuldu nI phyugs phelte  
 mo bzango /

ll.142-146

@@ @@@ @@@

\$ :/ tshol ragste  
 grIb ma la nyI ma shar  
 rta bgyogs pa la rgya sgas bstade zhon / na  
 chung bzang mo dang phrade  
 snyIng dga'I ngoste  
 gsol ba' la btab na myurdu chad /  
tshong la btab na tshong rgyal  
 'ong 'am myI 'ong ba' la btab na 'ong /  
 grog la btab / <btab> na grogste cheste  
 mo bzango /

⑨ ll.34-36

@@ @@ @

\$ :/ yar lha sham po 'i zhal nas / /  
myI skyid yuldu bya khu byug zer na  
gdang snyan /  
myI khyo[d] [---] gtam snyan te  
mo bzang ngo / /

⑩ ll.36-39

@@ @@@ @ [---]

\$ :/ lhe'u rje zin dags gyi zhalnas /  
lha 'i sras mo mched bdun  
g.yung drung gi nye ma bzhin bzhugste /  
tha bzhir 'od snang ba dang 'dra /  
dro ni myi la dro /  
khyim ni phyugs la byamste  
kun dga' zhing skyid do  
mo bzang ngo / /

⑪ ll.39-41

@@ @ @@@

\$ :/ myI khyod chaste 'gro dang /  
lha la phyag 'tshol chig dang /  
lhas thugs dgongs mdzad de  
[---] [-]ng yang th[u?]b /  
g.yag la song yang sod /  
tshong gyed na yang rgyal bar 'ong gi [---]

ll.162-164

@@ @@@ @

\$ :/ yar lha sham pho'I zhal nas  
myI skyid yuldu bya phab zerte  
thandu legs /shIng skyId  
myI khyod gyang gtam snyan pa thoste  
mo bzango /

ll.154-157

@@ @@@@ @

\$ :/ lhe'u rje zin tags gyI zhal / nas  
lha'I sras mo mched bdun g.yung 'dunggyI  
g.yung 'dunggyI nyI ma bzhIn bzhugste /  
gnaM gyI 'og snang  
dro myi la [dro?]ste  
  
kun skyid dgraste  
mo bzango / /

158-162

@@ @ @@@

\$ :/ myI khyod chaste 'gro na  
lha la phyag 'tshol cIg dang  
lhas thugs dgongs /mdzade  
dgra dang g.yag la song na yang  
dgra thub g.yag sod /  
tshong bya na tshong rgyal /  
lha la phyag ma 'tshal na 'dI kun myI 'byor gyIs  
lha la phyag 'tshol cIg / dang  
mo bzango /



①

2 / 2 / 3 (/4)<sup>355</sup>

*smra myi mkhan* の天女が<sup>s</sup>

制度を定めても（？）、

10万の人に恩恵は無い<sup>356</sup>。

汝に対しては、誰も良いことをもたらさず<sup>357</sup>、

恩恵は生じず、

凶。

②

2 / 2 / 1

*srog lha nyam can*が仰るには、

小さい人は<sup>358</sup>大きな口をきかない (*lit.* 口が大きいくない)。

---

<sup>355</sup> 740 : 2 / 2 / 3

<sup>356</sup> 740 : 敵対するものには恩恵はない *mkhon* = 'khon と考えた

<sup>357</sup> 740を採用

<sup>358</sup> 740 : 小さい人に対しては

小さい馬は<sup>359</sup>傲慢ではない<sup>360</sup>。

人については、悪い時は長くはない (*lit.* 大きくはない)。

できる人は<sup>361</sup>傲慢にならない。

聞き心地の良い喜ばしい [ことば] <sup>362</sup>よって良い知らせに見せても<sup>363</sup>、 [人がそれを] 聞くことは無く

凶。

### ③

2 / 4 / ?<sup>364</sup>

*^a ka de kha smra ba* の相。

駿馬 [の相] 。

[願い事] について占えば、良いことば [を聞く] 相。

---

<sup>359</sup> 740 : 小さい馬に対しては

<sup>360</sup> *kha drag* : 1. mighty, 2. haughty (*Jäschke* p.35)

また、チベット年代記の中にもこれに類似する記述が見つかる。それは、タク (*bkrags*) 氏の子ラブ・ラルケー (*lha bu ru la skyes*) と母親の会話を留めた箇所である (Pt.1288 II.29-30)。ラルケーに自身の素性を教えてくれるように頼まれた母親が答えて次のように言った。

*ma 'I mchid nas /*  
*myI 'u chung kha ma che shig /*  
*rte 'u cung kha ma drag*  
*nga myI shes shes byas na /*

'A quoi sa mère répondit <Petit enfant, n'aie pas bouche trop grande ! Ne l'a pas si forte un poulain. Je ne sais pas.>' (Bacot et al. 1940-1946, p.125)、'母が答えて「小わっぱよ大きい口を聞くでない。小さい子馬は嘶かない [ものだ] 私は知らない」と言った。' (山口 1985, p.460)。

この後、ラルケーは「教えないなら死んでやる」と言って、母親から自分の素性を聞き出すことに成功する。母親の言葉は、子であるラルケーを嗜めるものである。従って、ここでも「凶」という結果が出たので、大きな口をきくことや傲慢になることを戒めているのかもしれない。

<sup>361</sup> *myi nus pa kha ma drag* として解釈した

<sup>362</sup> *kha snyan zhing sdug pas* として解釈した

<sup>363</sup> *legs par gtam bstan gyang* として解釈した

<sup>364</sup> 740 : 2 / 4 / 4

来るか来ないかについて占えば、来る<sup>365</sup>。

馬神<sup>366</sup>*rmas po* (／*rmas po*) が思し召し下さって、財はどんなに<sup>367</sup>失っても戻る。

友人については、*khong dku*をするな<sup>368</sup>、[そうすれば] 吉。

④

2 / 4 / 3

*lha rgyun ba*が<sup>369</sup>仰るには<sup>369</sup>、

*nged mched gnag*が<sup>370</sup>仰るには<sup>370</sup>、

茫々としていた状態<sup>371</sup>から蘇える<sup>372</sup>相。

貧しい状態から裕福になる相。

苦しく悲惨だった状態から<sup>373</sup>幸せになって、

---

<sup>365</sup> 740 : 来ない

<sup>366</sup> 740 : (*lha*) *rgyung tsa* 9人兄弟の相で

<sup>367</sup> 740を採用

<sup>368</sup> 740を採用

<sup>369</sup> 740 : *lha rgyung tsa*が<sup>369</sup>仰るには

<sup>370</sup> 740 : *rgyung tsa* 9人兄弟の相

<sup>371</sup> *rmang ba* : *rmang*、*rmong*に関して、*OTDO*には以下のような例がある。

*thugs rmang ma rmong zhing bzhugs bzhugs* (ITJ 734 1.6r221)

*bu mo zhlg thugs bsam ma mkhyen / kyls rmang ma rmong* (ITJ 734 1.6r236)

これをThomasは、次のように訳している (AFL p.89)。

Heart without gloom-glamour. (1.6r221)

Since her heart knew no thought, dreamed no dream. (1.6r236)

*rmong ba*はおぼろげな状態をさし (Jäschke p.425)、*rmang lam*は*rmi lam*と同義であるから (【蔵漢】2151)、*rmang ba* / *rmong ba*は、しっかりとした意識のない状態をさすのかもしれない。また、本書では、*rmang ba*は*phan ba*に対比させて用いられている。*phan ba*が次にみるように「蘇る」という意味であれば、*rmang ba*は、「死んだ」状態や「意識が無い」状態を指すと理解できる。

<sup>372</sup> *phan pa* : チベット古代の宗教儀礼の中では、動詞として「死人を蘇らせる」という意味をもつ (今枝 2006, 106-107頁)。ここでは、行為者は示されておらず、*rmang ba*との対比上にある*phan ba*という状態について述べていると思われる。従って「蘇らされた」状態 (= 蘇らせるという行為の結果) に着目しているので、「蘇る」と訳した。

<sup>373</sup> *nyon mos* : 740の*nyong mongs*を採用

大吉<sup>374</sup>。

⑤

2 / 4 / 2

*lum bu*であって<sup>375</sup>

*rtsog ngan* の相。

快樂を求めて<sup>376</sup>、[心が] 汚れたことで、

---

<sup>374</sup> 740 : 吉

<sup>375</sup> 740 : *om*

Pt.1046とITJ 740の卦辞冒頭には、このような意味を解せない語がいくつか登場する。たとえば、⑥‘*phyor pur* (／*rtsod pur*)、⑧‘*tshol rgyags* (／*tshol rags*) などこの類いである。これらが、骰子占ト卦辞の中でどのような機能を果たしているのかは不明である。しかし、興味深いことに、これらの語彙はPt.1047文書にもみられるのである。

Pt.1047はMacdonaldの研究に詳しいが(Macdonald 1971, pp.272-281.)、彼女はこれを占ト板を用いた骰子占トを記した文書であると考えている。その際、占ト板はおそらく占いの施主別に7～10種類あり、それぞれの卦辞を記したのがPt.1047であるという。占ト板に落とされた骰子の目に対しては、各々名称が与えられており、それが一回だけ落ちた場合や、2回、3回落ちた場合、あるいは、他の目に続いて落ちた場合などによって卦辞が異なっているのである。筆者はPt.1047文書の語る占ト法については、まだ十分な研究を行えていないため、本論文ではその他の占トに分類した。しかし、確かに、Pt.1047文書は*mo* (広義には「占い」や「卦」を指すのであろうが、狭義では主に骰子占トに用いられる名称であると考えられる)を記した文献であるし、卦辞の書式には、骰子占ト書との共通性も見いだせる。Pt.1047は骰子占トと密接な関係を持つのかかもしれない。

さて、上記の意味不明な語彙は、Pt.1047中のMacdonaldが占ト板(＝占いをたてる場所)とみている名称及びそこに落ちた骰子の目の組み合わせの名称の双方にみられる。章末に、それらを列挙した表を提示し、今後の研究材料としたい。その際、Pt.1047で占いをたてる場所に対して与えられている名称を「場所」、落ちた骰子の目の組み合わせの名称を「卦」と略記して、分類して記すことにする。

ところで、これらの「場所」「卦」を表す名称には、*rya*のような古チベット語には無い綴り字や、*gre gre*、*gram grum*といった音節の重複(reduplication)がみられる。これらはいずれも古シャンシュン語に特徴的な要素である(Takeuchi and Nishida 2009 pp.155-156, p.160)。本来のチベット語ではない語彙であったため、書写人によって*ryags*、*rags*、*rgyags*のような綴り字の差異があったのかかもしれない(章末「Pt.1047、Pt.1046B + ITJ 740名称表」参照)。

<sup>376</sup> *phyon ma byed* (‘*phyon ma byed*) : = to whore, fornicate (Jäschke p.359)

*shes dag byed* : *shes byed* = that which knows, the understanding (Jäschke p.562) とあるが、ここでの意味はわからない。

740の当該箇所には、*snylng la rgyo shag sem*とある。*rgyo* : to unite in sexual embrace (Jäschke p.359)、*shag* : joke, fun (Jäschke p.556) であることから、「心に性的な快樂を思つて」と訳せるだろう。従つて、両者とも、心が汚れた原因が性的な快樂を求めたことにありと述べていると解釈した。

全ての神が汚れて、〔神は〕見捨てる<sup>377</sup>

全ての人の心においては不愉快で

蘇る状態から茫々となる。

裕福であった状態から貧しくなる。

妻は出て行き<sup>378</sup>、全ての神は見捨て、汚れて<sup>379</sup>、

凶。

⑥

2 / 4 / 1<sup>380</sup>

‘*phyor pur*’であって

*lha rang rong* が仰るには<sup>381</sup>、

旅に出ることについて占えば、〔旅で〕財を得る。

事柄は成就して、

吉<sup>382</sup>。

家にいることについて占えば、

すぐに長旅に〔行く〕ようになると見えて、

中。

---

<sup>377</sup> 740：父母においては大変汚れて、〔父母は〕見捨てる。

<sup>378</sup> *phyi phyin te*： *phyir phyin te* として理解した

<sup>379</sup> 740： *gdon*（＝悪鬼）の祟りが大きくて

<sup>380</sup> 740： 2 / 3 / 1

<sup>381</sup> 740： *ltang rlng* が仰るには

<sup>382</sup> 740： *om*

⑦

2 / 3 / 4

*rma sha ba* が仰るには<sup>383</sup>、

太陽の昇らない国に太陽が昇る<sup>384</sup>。

草木の生じない国に

草木が生じる<sup>385</sup>。

人のいない国に人が蘇る。

家畜のいない国に家畜が増えて、

大吉<sup>386</sup>。

⑧

2 / 3 / 3

*'tshol rgyags* であって<sup>387</sup>、

日陰に太陽が差す (*lit.* 太陽が昇る)。

駿馬に鞍を置いて乗る<sup>388</sup>。

*bcal ba* と衣服で着飾れば<sup>389</sup>

良い女性 (／妻) と出会って、

喜ばしい相で<sup>390</sup>

願い事について占えば、すぐに決まる。

来るか来ないかに付いて占えば、すぐに来る。

---

<sup>383</sup> 740 : *rma sha bo* が仰るには

<sup>384</sup> 740 を採用

<sup>385</sup> 740 を採用

<sup>386</sup> 740 : 吉

<sup>387</sup> 740 : *tshol rag* であって

<sup>388</sup> 740 : 駿馬に鞍を置いて乗れば、良い女性 (／妻) と出会って

<sup>389</sup> 740 : *om*

<sup>390</sup> 740 を採用

友人について占えば、友人は偉大である（／友情は深い）。

商売は成功して、

吉。

⑨

2 / 3 / 2

*yal lha sham po* が仰るには、

幸せではない国にホトトギスが鳴けば<sup>391</sup>、

音楽 [を聞くようである] <sup>392</sup>。

汝も良い知らせを聞いて<sup>393</sup>、

吉。

⑩

2 / 3 / 2<sup>394</sup>

*lhe'u rje zin dags* が仰るには、

神の娘である 7 人姉妹が、

永久不変の太陽のように留まりなさって、

四方に光が照り輝くのと同じで<sup>395</sup>

暖かみについては人には暖かく、

家については家畜には恵みがある<sup>396</sup>。

全てが喜ばしく幸せであって、

吉。

---

<sup>391</sup> 740 : *bya phab* が鳴けば

<sup>392</sup> 740 : *thandu legs shIng skyId* （嬉しく幸せである）

<sup>393</sup> 740 を採用

<sup>394</sup> 740 : 2 / 4 / 1

<sup>395</sup> 740 : 天の光が照り輝く

<sup>396</sup> 740 : *om*

⑪

2 / 1 / 4

汝よ、出掛けるならば、

神を礼拝せよ。

〔そうすれば〕 神が思し召し下って、

〔敵のところへ行っ〕 ても〔敵を〕 倒し、

ヤクのところへ行っても〔ヤクを〕 仕留める。

商売をしても、商売は成功する<sup>397</sup>。

神を礼拝しなければ、これら全てが至らないので<sup>398</sup>、

神を礼拝せよ<sup>399</sup>。

〔そうすれば〕 吉<sup>400</sup>。

---

<sup>397</sup> 740を採用

<sup>398</sup> 740を採用

<sup>399</sup> 740を採用

<sup>400</sup> 740を採用



## 1.4 内容構成

上掲の骰子占ト文書リストに挙げた文書について、相互に比較をしてみると、同じ目の組み合わせであっても、文書によって全く異なる吉凶が示されていることに気づく。吉凶は、果たして目の組み合わせと無関係なのか、だとすればどのようにして吉凶は決定されるのだろうか。本項では、骰子占ト文書の構成に着目して、これを解明する手段としたい。

さて、文書の構成を精査してみたところ、卦辞内容に6音節の韻文を含むもの（Type-1）と、散文のみで構成されているもの（Type-2）、という2つのタイプが存在することがわかった。

Type-1（韻文あり）	A
	B（目の記述なし）
	C（吉凶の記述なし）
Type-2（韻文なし）	A
	B（目の記述なし）

どちらの場合も、卦辞冒頭に骰子の目の組み合わせが記され、末尾に総合的な吉凶が述べられている点は共通している。しかし、各タイプに属する文書の中には、骰子の目が欠落しているもの（Type-1B）（Type-2B）や、総合的な吉凶の記されていないもの（Type-1C）がある。

また、卦辞ごとの内容は、概ね次のように整理できる。

- (a) 骰子の目の組み合わせ
- (b) タイトル（韻文／尊格名）
- (c) 解説
- (d) 結果

各タイプのテキストの内容と照合させると以下のようなものである。

【Type-1】 ITJ 738.3 (27-31行目)

翻字テキスト

- (a) @@@@ / @ / @@@@
- (b) kye byang rI nI phang pung na //  
dngos gI nI phung rkorko //  
gser gI nI sbam dang mjal  
dga' yIs nI tvag kyIs blangs //  
snam phrag tu sur gis stsal //
- (c) mo 'dI nI khyIm phyā dang srog phyā la btab na //  
nor ched po zhig rnyed pa 'dra ba 'aM //  
grog ched po zhIḡ dang phrad par 'ong //  
de ma yIn na nye ba drung po zhig dang phrad pa 'ong //  
gsol shags zhig byas na gnang //  
'dron po la btab na 'ong //  
gnyen zhig byed na 'phrod //  
tshong zhig byed na khe phyIn //
- (d) mo 'dI cI la btab kyang bzang // //

試訳

- (a) 4 / 1 / 4

- (b)<sup>401</sup> ああ、北の山が堆くなくなっていれば

[その] 山を掘らなくてはならない<sup>402</sup> (lit. 必要によって堆積を掘る)。

---

<sup>401</sup> 後述のように、この韻文は他の骰子占卜文書にも発見できるので、それらを参考にしながら以下の試訳に取り組んだ。後掲の韻文対照表を参照されたい。

<sup>402</sup> *dngos* : 他文書の *dgos* を採用

金の獺と出会って<sup>403</sup>

喜びによって・・・受け取り

良い衣服を<sup>404</sup>・・・与えられる。

(c) この卦は、家運と命運について占えば

大金を得るのと同じであるか

偉大な友人（／深い友情）と出会うようになるだろう。

そうでなければ、正直な親族<sup>405</sup>と出会うだろう。

願い事、弁明をすれば<sup>406</sup>、叶う。

待ち人（／客）について占えば、現れる。

結婚をすれば、適している。

商売をすれば、儲かる。

(d) この卦は、何について占っても吉。

---

<sup>403</sup> *sbam* : 他文書では、*sbram* (unwrought gold)、*sbrang* (fly, bee) となっている。しかし、羽田には、*gser gi sram dang mjald* 金の獺と出会った (ll.43-44) という表現があるので、ここでは、*sram*を採用した。羽田からは金の獺と出会うことが瑞兆であることがわかる。また、*sbal dang mjald* 蛙と出会った (羽田 1.44) という表現もあることから、*sbram*は*sram*と*sbal*が混同されたものである可能性があるだろう。

<sup>404</sup> *snam phrag tu : snam phrug ni* = fine cloth (Jäschke p.318) として解釈した。また、Pt.1052には、*snam brag ni g.yasu stsald* (ll.v7-8) という類似の一節がある。

<sup>405</sup> *nye ba drung po* : *nye ba* = 親戚 (【藏漢】961頁)、*drung po* = sincere, candid (Jäschke p.263) から、正直な親族と約した。Thomasは 'There will soon be meeting with some official.' と訳す (AFL p.131)

<sup>406</sup> *shags zhig byas na* : *shags 'gyed pa* (【藏漢】2832 : 辯訴) として解釈した。

【Type-2】 ITJ 740 (5-9行目)

翻字テキスト

- (a) @@@@ / @ / @@@@
- (b) \$: // lam lha'I zhal nas
- (c) myI khyod lhas thugs rje gZlgste /  
zhal ces btab na yang / thar /  
tshong bya na yang tshong rgyal /  
snying la bdag 'dzangs snyam ma sem par  
lha la phyag 'tshol [dang]
- (d) snyIng la bsam ba' bzhIn 'ongste  
mo bzango /

試訳

- (a) 4 / 1 / 4
- (b) *lam lha* (=道の神、旅の神) が仰るには、
- (c) 人である汝よ、神が思し召し下って  
判決が下っても〔判決は良く〕、釈放される。  
商売をしても成功する。  
心では、自分を賢い<sup>407</sup>とは思わずに  
神を礼拝せよ。
- (d) 心に思うままになって  
吉。

---

<sup>407</sup> 'dzangs : mdzangsとして解釈した。

それでは、以下にタイプごとの構成と内容の特徴をまとめる。

## 【Type-1 文書の構成と内容】

Type-1に属する文書について、韻文を比較してみたところ、共通する韻文を多数見つけることができた。さらに、同じ韻文 (b) をもつ卦辞であれば、総合的な吉凶 (d) も概ね符号することがわかった。つまり、(b) と (d) は固定的な関係にあると言える。一方、これに対応する目の組み合わせ (a) に関しては、文書間に異同がみられる<sup>408</sup>。

以下に、韻文の対照例を示したい。テキスト間の対照から、記述が脱落していると思われる箇所には [om] を挿入した。イタリックは他文書と記述が符合しない箇所を示すが、綴り字の差異などは考慮しなかった。

古チベット語骰子占ト文書韻文対照表

P.t.1051 (目なし)	P.t.1052 (3 / 1 / 2)	ITJ 738 (4 / 1 / 4)	ITJ 739 (3 / 4 / 3)
byang rI nI phang bung la	byang ri ni phang pung la /	kye byang rI nI phang pung na //	kye bya rog ni phang phung la /
dgos kYIs nI khongs bskyos na /	gtos gyi ni sa bskor na /	dnogs gI nI phung rkorko	dgos kyis ni na rgo rko /
gser kyis nI sbram dang 'dzal ////	gser ri ni sbram dang mjal /	gser gI nI sbam dang mjal	g[s]er gi ni sbrang dang mjal
rom po ni rja ra na	rom po nI sja ra na /	[om]	[om]
gor la nI bcod btap na //	gor la nI gtsod 'debs 'debs	[om]	gor ma ni brtsed brtsed na /
nu myen ni 'phra zhi g rnyed //	[ru?] myen ni sbram zhi g rnyed /	[om]	mu men ni prag bzhi n ma /
gsar la ni g.yus spras zhi ng	gser sbram ni g.yu spras zhIng	[om]	[om]
bzang mtha' ni lho 'i dkor	rin chen nI brtsigs pa la	dga' yIs nI tvag kYIs blangs	[om]
myi spyad nI phang su bgyis //	'od bzangs nI lamse lams	snam phrag tu sur gis stsal //	'od bzangs ni lha me lham /
bzang ngo //	[om]	bzang //	bzang rab bo //

<sup>408</sup> 一度だけ、(a)、(c)、(d)が揃って一致する場合がある。それは、ITJ 739とP.t.1052の2/3/3にあてられた卦辞である。しかし、(b)、(d)がこれらと一致するITJ 738では、(a)は2/3/1となっているのである。

また、上掲の例には含まれていないが、(b) と (c) の間に *~gyi mo la bab te* 「～の卦に落ちて、～の卦にあたって」や、*~gyi ngo* 「～の相」という卦の名称を表す書式 (b-2) が挿入される場合や、卦の解説 (c-1) が補足されて、事象ごとの吉凶が示される場合がある。さらに、(d)の前に指示が示されることもあるので、Type-1に属する文書から例をあげてみたい。

Pt.1051 (3-10行目)

翻字テキスト

\$ / /: / / 409

(b)    mu sman nI zhal na re //  
      lha rI ni byang ri gnyis //  
      gnyI ga nI gzed gi ri //  
      sman ri nI gtsug sdings // las //  
      mgrin phran nI rtse 'jos shing //  
      gzed po nI stong sgo ru //  
      mu sman nI chab la gshegs //  
      gzod po nI gsol pa la //  
      sha 'bri nI gcig gnang na //  
      sman dag nI gang las gnang //  
      da dung nI lan ma thob //  
      ya rus nI lha mchod la //  
      mar du ni sri gnon cig //

(b-2)   'di nI je'u gnam sman myI dmyis pa'I mo la bab ste //

(c-1)   snga na sman chen po zhig gis srung srung ba las /  
      myi khyod la bdag gis ngan pa'I bgegs ched po zhig byas te //  
      sman dang lha myI dgyes ste //  
      'dri yul gdon nam yul gang yang ma shegs pa cig du zhugs te //  
      da dung khyer te thob pa nI ma yin //

(d-1)   mo phyas dag gdam cing bon byas ni [bgegs] brtsal te /  
      sman dang lha dpal mchod na bzang ngo //

---

<sup>409</sup> この文書はType-1Cに属する文書で、骰子の目の組み合わせの記述が欠落している。

de ltar ma byas na mo ngan no //

(d-2) mo 'dI gzhan la ngan //

(c-2) ri dags shor nab dang dor gnyer ba dang / gnyen bya ba la btab na grub ste bzang rab bo //

## 試訳

(b-1)<sup>410</sup> *mu sman* (=尊格) が仰るには、

神山と北山の二つは、

二つとも梯子<sup>411</sup>の山である。

---

<sup>410</sup> この韻文は、ITJ 739とPt.1052に類似のものを発見できる。

ITJ 739 ll.15v1-5

@ @ / @ / @ /

k ye lha re ni sman ri gnyis /

gnyis ka ni dpal gyi shari /

lho ri ni byang ri nyis /

gnyis ka ni sman gyi ri /

r tags tsan ni byang btsun nyis /

stong dang rkya li gyas /

mthar bzang por 'ong zhing bzang rab bo /

Pt.1052 ll.r86-94

@ @ @ @ @ @ @ @ @

[---] / / lho ri nI byang ri gnyis

gnyis ka nI sman gyi ri

[bsags (/bdags)] ri nI [srib?] ri gnyis

gnyis ka nI / gz ed gyi ri / /

sman ri ni gtsu[g?] sdings na /

[mgrin?] rtse 'jos zhing

mu sman ni 'phan bsrol te / /

mu sman nI chab la gshegs /

bsar gyis srong bskor [---] du /

sha 'bri nI snar la gnang /

mu sman nI 'ban la sla /

mo 'di gsol ba la btab dang gnang grog cheste /

jI la btab yang bzang ngo /

<sup>411</sup> *gz ed* : 梯子 (【藏漢】2509頁)

[*mu*] *sman* (=神格) は山 [の] 頂から

[山の] ふもと<sup>412</sup> [へやって来て、そこで] 遊ぶ。

梯子は空っぽの (／千の) 戸杵 [のようである] 。

*mu sman*は川へお出ましになる。

梯子 (=山) に [向かって] 嘆願すれば

雌ヤクの肉をお与え下さる。

*sman* (=神格) 達は何であれお与え下さる。

[しかし] まだ答えを得ていない<sup>413</sup>。

上では神を敬い、

下では*sri* (=悪鬼) を鎮めよ。

(b-2) これは、*je'u gnam sman myl dmyis pa*の卦にあたって

(c-1) 以前は、偉大な*sman*が [汝を] 見守っていたのに

人である汝は、自分自身によって邪悪な障害を作り出したので

*sman*と神はお喜びにならず

*dri* や *yul gdon* (=ともに悪鬼) たちで、どの国にも行かなかったものが

ひとつに留まって [いるところに]

さらにもっと [沢山の悪鬼が] 運ばれてきて、得るものがない。

(d-1) 占いの卦 [について] に従って、*bon*をすれば、障害が排除されて

*sman*と*lha dpal* (吉祥神) を敬えば、吉。

そうされなければ、凶。

(d-2) この卦は、他については凶 [だが] 、

(c-2) 狩りと、事柄 [の成就] を求めることと、結婚について占えば、成就して大吉。

---

<sup>412</sup> *mgrin* : 首や喉を指す語である。ここでは山との関連を考慮して、山を人の頭部に喩えて、山のふもとを首と呼んでいるものと解釈した。

<sup>413</sup> 韻文は全体的に良い内容をもっているが、(c-1) では、人の間違った行為によって神の加護を得られない様子が示されている。従って、ここでは、神を敬うまでは良い結果 (= 答え) を得られないことが述べられていると解釈した。



以上より、Type-1文書の構成は次のように整理できる。

- (a) 骰子の目の組み合わせ
- (b) タイトル
  - 1. 韻文
  - 2. 卦の名称 (～*gyi mo la bab te*)
- (c) 解説
  - 1. 卦の説明
  - 2. 事象ごとの吉凶
- (d) 結果
  - 1. 指示
  - 2. 総合的吉凶

上の例では、(c-2)事象ごとの吉凶と(d-2)総合的吉凶が、重なり合っており、配列も整然とはしていない。しかし、(c-1)の記述からは、様々な尊格や悪鬼に関する描写がみられ、古代チベットにおける民間信仰の一端がうかがえる。また、(d-1)で言われる*bon*とは、悪鬼を吐き出すための儀式、あるいは治療のようなものを指しているようで、大変興味深い。他にも、儀式(*cho ga*)や法要(*rim gro*)を行え、と指示されている場合もある。これらの指示を集めることで、当時の社会で災いの原因とされていた事象や、その解決法を探ることができるだろう。占ト文書中の用例を蒐集し、今後の研究課題としたい。

### 【Type-2文書の構成と内容】

一方、Type-2に属する文書には、韻文の代わりに尊格名が挿入されており、各卦辞は、～*gi zhal nas*「～が仰るには」という書式で導かれる尊格を抛り所としているようである。尊格は多種多様で、重複する尊格は減多にみられない。中には、明らかにチベット土着の土地神であろうと推定できるものや、インド系の神と思われる名称もみられる<sup>414</sup>。また、尊格に続いて説話や格言のような内容が記されている場合もある。

---

<sup>414</sup> これらの尊格名とType-1に現れる卦の名称 (b-2) との間に、一致する名称がみられない

さらに、Type-2文書では、卦の説明をしている箇所（c-1）に、*lhas thugs dgong mdzad de*、*lha ngas thugs dgongs mdzad de*、*lhas thugs rje gzig ste* 「神（／神である私）が思し召し下さって／慈しみ下さって」という特徴的なフレーズがみられる。この後には、*lha la phyag 'tshol zhig* 「神を礼拝せよ」、*lha mchod gyis* 「神を（供物を捧げて）敬え」という指示が挿入されることもあり、礼拝すれば良い結果が得られ、しなければ悪い結果に陥るようである。一方、同じ指示でも先ほどのType-1の(d-1)には「神を礼拝せよ」という書式はみられず、その代わりに、儀式や法要などの指示が示されている<sup>415</sup>。このような、指示の記述があれば、大抵の場合は凶兆となっている。

再び、Type-2の構成を整理すると下記ようになる。

- (a) 骰子の目の組み合わせ
- (b) タイトル
  - 3. 尊格
  - 4. 説話／格言
- (c) 解説
  - 1. 卦の説明
  - 2. 事象ごとの吉凶
- (d)
  - 1. 指示
  - 2. 総合的吉凶

Type-2文書から例をあげて示そう。

---

<sup>415</sup> *lha mchod cig*、*lha brjod cig*という指示は両タイプともに存在する。

翻字テキスト

(a) @@@@ @@@@ @@@

(b-3) \$ : / lha gangs po shon gangs gyI zhal nas

(b-4) gangs dkar po nI myI rnyil  
mtsho / sngon po nI myi skam /

(c-1) srog lhas thugs dgong mdzade tshe rIng bar 'ong  
dbyar gyI ldum bu dang mtshungste

(c-2) nor ma btsal bar gyI na rnyed /  
chung ma btsal bar bzang  
dgu gyI na' rnyede

(d-2) mo bzang'o /

試訳

(a) 4 / 4 / 3

(b-3) *lha gangs po shon gangs* が仰るには

(b-4) 白い雪は破壊せず  
青い湖は枯渇しない。

(c-1) *srog lha* (生命の神) が思し召し下さって、長寿となる。  
夏の作物と同じで

(c-2) 財は、求めない [間に] 手に入る。  
妻を求めれば<sup>416</sup>吉。  
多くのものを (?) を得て

(d-2) 吉。

---

<sup>416</sup> *chung ma btsal bar bzang* : 前行の記述から、*chung ma ma btsal bar ni bzang* 「妻は求めなくとも良い [妻を得る] 」と理解すべきかもしれない。

## 【書式の分類】

Type-1、Type-2の構成に着目して文書を分類してみると、以下の表のように整理される<sup>417</sup>。

古チベット語骰子占ト文書の書式

文書番号		(a)	(b)				(c)		(d)	
			タイトル				解説		結果	
			1	2	3	4	1	2	1	2
		目の 組 合 せ	韻 文	卦 の 名 称	尊 格	説 話 ・ 格 言	卦の 説明	事象ごとの吉 凶	指 示	総合的な吉凶
Type-1	ITJ 738	○	○	○			○	○	○	○
	ITJ 739	○	○				○	○	○	○
	ITJ 743	○		○			○	△	○	○
	Or.15000/67	○	○							
	Or.15000/76	○	○							
	Pt.1051		○	○			○	○	○	○
	Pt.1052	○	○	△			○	○	○	○
Type-2	ITJ 740	○			○	○	○	○	○	○
	ITJ 745				○	△	○		○	○
	Or.8210/S.155	○			○	○	○	○	○	○
	Pt.1043	○			○	○	○			△
	Pt.1046B	○			○	○	○	○	○	○
	Tu 8 + Tu 12	○			○	○	○	○	?	○
	Tu 11	○			○	○	○	?	?	?
	Tu 56	○			○	○	○	?	?	○
	SIO 145	○			○		○	○	?	○
	SIP 56a	○			○		○	△	?	○
	羽田	○			○	○	○	○	○	○

<sup>417</sup> 同一文書内にも、卦辞ごとに構成の相違がみられだが、より多数を占める要素をもって、その文書の構成とみなした。表中の○は、要素が確認できたことを示し、確認はできたが用例がごく少ないで場合には△で表示した。また残存記述が不足しているために判断できない場合は?を入れた。

以下では、各構成要素の書式を照査し、骰子占ト文書の構造について検証してみたい。

# 【タイトル】

## (b-1)：韻文

書式： □□ *ni* □□□

(6音節韻文の3音節目には音調を整えるための虚辞*ni*がおかれる)

韻文は、複数の文書に類似するものを発見できる。このうち、11の韻文を収録するP.t.1051を基準にすれば、全てについて他文書に類似する韻文を発見できる。符合箇所の子の目の組み合わせ (a) と総合的吉凶 (d-2) は次の表にまとめられる<sup>418</sup>。なお、吉凶が記されず、指示だけが述べられている箇所は、おそらく凶か大凶であると考えられる。従って、程度の差はあるにせよ、韻文が同一、或いは類似する場合は、吉凶も概ね一致することがわかった。しかし、1カ所を除いては目の組み合わせは異なっているのである<sup>419</sup>。

韻文・吉凶対照表

	P.t.1051	P.t.1052	ITJ 738	ITJ 739
①	吉?	2/4/3 吉		2/1/1 大吉
②	吉		4/3/4 大吉	2/2/2 大吉
③	指示のみ		3/4/4 凶	
④	大吉		4/2/2 吉	
⑤	大吉		4/2/1 吉	
⑥	吉	3/1/2 不明	4/1/4 吉	3/4/3 大吉
⑦	大吉	3?/1/3 吉		
⑧	良くない ( <i>myi bzang</i> )	2/3/2 凶	2/3/3 凶	2/1/3 大凶
⑨	指示のみ		2/3/2 凶	
⑩	吉	2/3/3 大吉	2/3/1 吉	2/3/3 大吉
⑪	<i>lac</i>			3/3/4 大吉

<sup>418</sup> 前述のように、P.t.1051には骰子の目が記されていない。

<sup>419</sup> P.t.1052の2/3/3とITJ 739の2/3/3に一致が見られる。しかし、この時、ITJ 738の目の組み合わせは2/3/1である。

(b-2)：卦の名称

書式： A gyi mo la bab ste (Aの卦にあたって)

Aに入る名称は非常にバリエーションが豊富で、チベット語として解釈できるものだけでなく、他言語の音写であろうと思われるものもある。このうち、共通する韻文を備えた卦辞の双方から (b-2) 取り出してみると、以下のように対照される<sup>420</sup>。上記の韻文・吉凶対照表中の番号を左に記した。

	P.t.1051	ITJ 738
③	'dre ma ha (1.20)	'dre ma ha (1.3v14)
④	theb la nyen (1.27)	then dbang nyId (1.3v20)
⑤	'das la yan 大吉 (1.34)	yul sa dga' la yan (1.3v23)
⑥	sman rgod da chen (1.61)	sman rgod shele (1.3v38)

これらは、おそらく、どれも当時の社会に流布していた土着的な神格であろう。彼らは、文献には記されない、口承文化に根付いた神々であったため、表記法が十分に定式化されていなかったと考えられる。これらの名称に、必ずしも文法的に解釈できないような文字列を含んでいるものが多いのはそのためであろう。従って、完全な一致が見られる③以外の3つの名称に関しても、同一神格に基づくか、そのバリエーションであると想定できるとすると、韻文 (b-1) と卦の名称 (b-2) は、固定的な関係にあり、(b-2) は、総合的吉凶 (d-2) にも深い関わりを持つ要素であると考えられる。

以下に、確認できた神格名と吉凶をアルファベット順に列挙しておく。

'bog ^a pa gnam gyi zhing	(P.t.1051)	大吉
'bog shIng bo de sa hva la	(ITJ 738)	吉
'das la yan	(P.t.1051)	大吉
'dre ma ha	(ITJ 738) (P.t.1051)	凶

<sup>420</sup> 韻文が共通する他の卦辞では (b-2) の記述が欠けているため、対照不可能であった。

<i>'pyi sha mun byang phyogs gyi gnam po spos gyi rgyal po</i>	(ITJ 743)	吉
<i>bsam dang bka' gnyan</i>	(ITJ 738)	吉
<i>ga'u [rhva?] tsang gya</i>	(ITJ 738)	凶
<i>ge'u shI tang sho tra</i>	(ITJ 738)	?
<i>gtsug lag</i>	(ITJ 738)	大吉
<i>ha chen bu nyen</i>	(ITJ 738)	吉
<i>je'u gnam sman myI dmyis pa</i>	(P.t.1051)	吉?
<i>ju dang shIng par</i>	(ITJ 738)	吉
<i>klu dang gnyan</i>	(ITJ 738)	大吉
<i>leng bu hva nyen</i>	(ITJ 738)	吉
<i>leng pu U nyen gnam gyi btsun mo</i>	(ITJ 743)	吉
<i>lha ba stang ma</i>	(P.t.1051)	吉
<i>lha shIng pad mo</i>	(ITJ 738)	吉
<i>mtsho dar la</i>	(ITJ 738)	凶
<i>nam cI than</i>	(ITJ 738)	良くない
<i>rang dbang ges pa</i>	(ITJ 738)	良くない
<i>rang dbang thob sa bo de sa dva</i>	(ITJ 743)	大吉
<i>rlung gI lha mo</i>	(ITJ 738)	吉
<i>rlung gI rgyal mo</i>	(ITJ 738)	凶
<i>se shing [rab] thugs chu[s?] pa</i>	(P.t.1052)	?
<i>sman 'du 'du</i>	(ITJ 738)	吉
<i>sman be kog</i>	(P.t.1051)	吉
<i>sman bkra gnyan</i>	(ITJ 738)	吉
<i>sman cung ngun</i>	(ITJ 738)	吉
<i>sman gsum bka' [bzhiñ?]</i>	(ITJ 738)	吉
<i>sman rgod da chen</i>	(P.t.1051)	指示のみ
<i>sman rgod shele</i>	(ITJ 738)	凶
<i>sman rgod spangs she le</i>	(ITJ 738)	大吉

(b-3)：尊格

書式： B gyi zhal nas / B gyi mchid nas (Bが仰るには)

B na re (Bが言うには)

Bには様々な名称がみえるが、同一尊格を戴く卦辞の総合的吉凶には、概ね符合が得られることがわかった。ただし、この場合も目の組み合わせは一致しない。以下に、いくつかの尊格とそれらから導きだされた吉凶をしるす。最後の尊格に関しては、結果の一つが異なっているが、これと同一文書中には他と一致する吉凶もみえる。

*lha mu tsa myed* : Or.8210/S.155 1.27 吉 / ITJ 740 1.119 吉 / Pt.1043 1.21 不明

*lha dbyar mo thang* : Or.8210/S.155 1.113 吉 / ITJ 740 1.86 吉 / 羽田 1.83 吉

*gnam lha (/gnam lha ched po)* : Or.8210/S.155 1.110 不明 / ITJ 745 1.1, 1.9 吉 / 羽田 1.1.19 吉

*lam lha* : ITJ 740 1. 41 吉 / ITJ 740 1.134 凶 / Pt.1043 1.53 不明 / 羽田 1.62 吉

Thomasは、尊格（／神格）は多くのフィクションを含むことが名称からうかがえる一方で、実在する地名や、よく知られている伝説上の王や神の名前などを認めることができると指摘している。さらに、これらが、いずれも仏教が定着する以前のチベットに属するものであるという事実は<sup>421</sup>、骰子占ト書がボン教に属していた可能性を指示する事実であると述べている。また、Dotsonは、馴染みのない神格名称の一部についても、チベット年代期や宗教儀礼を扱った古チベット語文献の中に発見できると指摘している<sup>422</sup>。

---

<sup>421</sup> Thomasは、ITJ 740中の尊格に言及している。たとえば、*'o de gung rgyal* (1.70) はチベットの伝説上の王であり、*dbyar mo thang* (1.86) はチベット北東部の地名であると述べている。また、*lha thang la ya bzhur* (1.20) と *yar lha sham po* (II.163, 202) はヤルルン地方の神であると指摘している (AFL pp. 140-141.)。

<sup>422</sup> Dotson の指摘によれば、*sha med gangs dkar* (ITJ 740 1. 209) と *lhe'u rje zin tags* (同 1.2, 104, 155) はPt. 1287に、*sla bo sla sras* (*bla bo bla sras*) はITJ 734に登場する (Dotson 2007, pp.24-25.)。



(b-4)：説話・格言

当該箇所には明確な書式は存在しないが、これらは、説話や短い格言の類いと思われるものを提示して、卦辞の具体像を心象風景に投影する機能を果たしていると考えられる。同じエピソードに基づくであろう説話を複数の文書に発見できたので、以下で紹介しよう。

羽田 (II.22-26)

翻字テキスト

rgyal po zhig mtso'I gling na bzhugs na  
rkyal yang myI shes /  
ji ltar byasna mtsho'i gling nas tar snyam sems shlng 'dug 'dug nas /  
bya ngang mo chu na 'dug pa bzung sthe rgyal / po'I zhal nas  
myI g.yung drung na 'dug gyang ta mar myi skyid cheste shI 'ang  
khor bar nyon myi mongs gyis nam sros gyang nyi ma myi shard myi srid ches gsung ste  
bya ngang mo la zhon de song na' / mtsho'i pa roldu pyinde /  
dga' ba dang skyid pa dang nor pyugs yul dang prade dga'o

試訳

ある王が湖の [中に浮かぶ] 島にいらっしやった。

[王は] 泳ぎも知らない [ので]、

どうすれば湖の [中に浮かぶ] 島から出れる (*lit.* 解放される) <sup>423</sup> だろうかと思

っていたところ <sup>424</sup>

水中にいるガチョウを捕まえて、王は仰った。

「人は永遠の中にいても、最後には不幸が大きくて死ぬが、

輪廻 [の中] で苦悩はなく、

太陽が沈んでも [再び] 昇るように (*lit.* 昇り)、

---

<sup>423</sup> *tar* : *thar* として解釈した。

<sup>424</sup> ここでは、*sems shlng 'dug* という普通形の動詞が用いられており、「思っていた」という行為が誰に属するのかという疑問が生ずる。しかし、次に挙げる Or.15000/67 では、*sem zhlng bzhug* と敬語形で表記され、動作主が王であることがわかる。

人は栄えるのである<sup>425</sup>」と仰って

ガチョウに乗って行き、湖の対岸へ到着して

喜びと幸せ [があり、] 豊かな国に出会って、喜ばしいのである。

Or.8210/S.155 (l.131)

#### 翻字テキスト

rgyal po zhig mtsho'i glang la bzhug ste  
nam zhig dang mtsho 'dI las thar ram myI thar sem zhIng bzhug pa la  
[lhas] thugs dgong mdzade  
mtsho'i nang nas gru [c]ig phyung nas rgyal po gru'i nang du zhug te  
cang ma nyes par mtsho'i pha [--- ] [phyin] te

#### 試訳

ある王が湖の [中に浮かぶ] 島<sup>426</sup>にいらっしゃて

いつ? この湖から出れる (lit. 解放される) だろうかと思っていらっしゃったところ

神が思し召し下さって<sup>427</sup>

湖の中から、一艘の船が現れたので、王は船の中にお座りになって

全てが悪くない湖の [対岸へ] 到着して

また、断片文書であるTu 8とTu 12がこれに似た説話をもっていることから、これらが、相互に接合できることを発見できたので、両者を統合したテキストを提示する。

---

<sup>425</sup> *nyi ma myi shard* : Or.8210/S.155の卦の説明箇所には、*re shig nam sros gyang phyIs naM nangs bzhlñ tu lan yod do* 「何事も太陽が沈んでも後で昇るのと同じで、答えがある」と解説されているので、ここでも、*nyi ma shard*として理解した。王の仰った内容が何を意味しているのか十分には理解できないが、この卦の結果部分では、「この話と同様に最後には良くなるので吉」と述べられているので、太陽が沈んでもまた昇るように、死んでもまた輪廻によって生まれ変わり、やがては栄える、と最後には良くなるという内容を述べていると考えた。

<sup>426</sup> *glang* : *gling*であると解釈した。

<sup>427</sup> *lhas thugs dgongs mdzad de* : このフレーズは次に挙げる卦の説明箇所 (c-1) によく登場するが、ここでは、説話の中盤に挿入されている。

Tu 8 (ll.6-8) + Tu 12 (ll.6-8)

## 翻字テキスト

Tu 8

rgyal po chen po [+2] mtsho'i gleng [---]  
zhing bzhugs pa // las [lhas?] thugs d[---]  
gshegs [+3]s bltams thugs

Tu 12

[na] bzhugste /mtsho' la nam thard zhes [myi] [+2]  
[-gongs] mdzade / rlug gyis mtsho 'i rked du [+5]  
[dgye] [gis]

大いなる王が、湖の〔中に浮かぶ〕島<sup>428</sup>にいらっしゃって、  
湖から (*lit.* で) いつ出れる (*lit.* 解放される) か、と・・・いらっしゃったところ  
神が思し召し下さって、羊? <sup>429</sup>によって湖の真ん中へ・・・お行きなさって  
ご誕生を? お喜びなさるので<sup>430</sup>、

この説話は、現状が悪くとも後で良くなることの例として採用されているようで、いずれも吉の結果に帰結している。従って、説話と総合的吉凶は密接に関連しており、これらは固定的関係にあると言える。このとき、上記の3文書中の2つは目の組み合わせが一致するものの、1つには異なる目の組み合わせが当てられているのである<sup>431</sup>。

## (c-1)：卦の説明

ここには様々な記述がみられるが、特徴的な書式を二つ紹介する。

書式： ① *lhas thugs dgongs mdzade* ～ (神が思し召し下さって～)

「～」には、多くの場合、悪い状況が良くなることが書かれている。

Or.8210/S.155 (l.57)

*lhas thugs dgongs mdzad de [bya'o] chog rgal lo chog rung thub ste snying dka'*

<sup>428</sup> *gleng* : *gling* として解釈した。

<sup>429</sup> *rlug* : *lug* として解釈した。この写本中の説話では、王は島から出ないのかもしれない。

<sup>430</sup> *dgye* : *dgyes* として解釈した。

<sup>431</sup> 羽田とOr.8210/S.155では2/2/1、Tu 8 + Tu 12では1/3?/3であった。

神が思し召し下さって、[為す事] 全てに勝利する。[為す事] 全てが適していて、[敵は]  
倒して、喜ばしい。

② *myi khyod kyang de dang 'dra ste* ～ / *myi khyod kyang de dang mtshungs te* ～

(人である汝もそれと同じで～)

*myi khyod kyang de dang 'dra ste / sngar nyon mongs pa las skyid cing dga' par 'ong*

(人である汝もそれと同じで、以前は苦しかったのが幸せで喜ばしくなる)

説話や格言の後や、卦の説明に続いてにこのようなタイプのフレーズが置かれ、  
以下に具体的な事象ごとの吉凶が続く場合が多い。

羽田 (I.118)

*myI khyod kyang de dang 'dra ste bon byas lha mchod [kyang] myI phan shI 'o*

人である汝もそれと同じで、ボンをして、神を称えても蘇らず (／無益で) 死ぬのである。

(c-2) : 事象ごとの吉凶

書式 : *C la btab na* ～ (Cについて占えば～)

*C phya la btab na* ～ (C運について占えば～)

Cには、願い事 (*gsol ba*) 病人 (*nad pa*)、友人 (*grogs po*)、獲物 (*ri dvags*)、結婚 (*gnyen byed*)、家運 (*khyim phya*)、命運 (*srog phya*)、戦運 (*dgra phya*) など様々な事象が入る。これに対応する帰結部には、吉凶以外の描写もみえる。病人に関する記述を例にみると、次のような吉凶が示されている。

<i>nad pa la btab na</i>	<i>ngan no</i>	(悪い)
	<i>bzang ngo</i>	(良い)
	<i>sos</i>	(治癒する)
	<i>myur du sos</i>	(すぐに治癒する)
	<i>gdon ched po yod</i>	(偉大な <i>gdon</i> がいる)
	<i>'dre che</i>	( <i>'dre</i> が大きい)
	<i>bon po'I ngo</i>	( <i>bon po</i> の相)

(d-1)：指示

当該箇所に定式化された書式は認められないが、次のような指示がよく見つかる。①②は Type-1、③～⑤は Type-2 にみられるが、⑥は両タイプに登場する指示である。

- |  |              |
|--|--------------|
| ① <i>cho ga dang rim gro byos shig</i> | (儀式と法要をせよ)   |
| ② <i>bag gyis shig</i>                 | (用心せよ)       |
| ③ <i>lha la phyag 'tshol cig</i>       | (神を礼拝せよ)     |
| ④ <i>lha la yon gsol brjed cig</i>     | (神に供物を捧げて敬え) |
| ⑤ <i>lha brjed nas bon gyis</i>        | (神を敬い、ボンをせよ) |
| ⑥ <i>lha legs par mchod cig</i>        | (神をきちんと祀れ)   |

(d-2)：総合的吉凶

書式： *mo D* / *mo 'di ci la btab kyang mo D*

他の占ト書と比較すると、骰子占ト文書中の D のバリエーションは非常に豊富である。例えば、次のような代表的な吉凶が挙げられる。

- |                            |         |
|----------------------------|---------|
| <i>mo bzang rab</i>        | (大吉)    |
| <i>mo bzang</i>            | (吉)     |
| <i>mo 'bring las bzang</i> | (中より良い) |
| <i>mo 'bring</i>           | (中)     |
| <i>mo 'bring tsam</i>      | (中程度)   |
| <i>mo 'bring smad</i>      | (中の下)   |

<i>mo gzhi</i>	(平 <sup>432</sup> )
<i>mo ngan</i>	(凶)
<i>mo ngan 'bring</i>	(凶の中)
<i>mo ngan rab</i>	(大凶)

以上をまとめると、古チベット語骰子占ト文書は、概ね、(a)骰子の目の組み合わせ、(b)タイトル（韻文・卦の名称／尊格・説話）、(c)解説（卦の説明・事象ごとの吉凶）、(d)結果（指示・総合的吉凶）という構成を持つ。また、(b)の各要素は、(d-2)総合的吉凶と固定的な関係にある。つまり、(b)のみが記されている場合でも(d)を予想することは可能である。しかし、ここで問題なのは、(a)と(d)の関係には決定的な法則が見いだせず、文書ごとに異なる結合をもつことである。依拠する文書によっては(a)が同じであるにもかかわらず、正反対の吉凶に至るほどの差異がみられるのである。では、(a)は、占トの核であるにも関わらず、(d)との間に何ら関係性を持たないのであろうか。この問題に取り組むために、次項では骰子占トの性格について考察したい。

---

<sup>432</sup> *gzhi*は、本来「土地」「地面」「基盤」などの意味を持つ語である。しかし、1.3項（卦辞⑥参照）でみたように、ITJ 740では*mo gzhi*と記されている吉凶が、Pt.1046Bでは*mo 'bring*（中）と書かれていることから、*gzhi*と*'bring*とは同等の吉凶を表す語であると考えられる。そこで本論文では、弁別的に*gzhi*を「平」と訳し、吉凶の度合いは*'bring*（中）と同等であると定義する。

## 1.5. 古代チベットにおける骰子占トの性格

### 【占ト法】

古代チベットの骰子占いは、1.1.で既に言及したように、1つの骰子を3回振って目の組み合わせを得るという方法に基づいていた。しかしながら、実際には、3回骰子を振るという行為を3度繰り返すことで、最終的な吉凶を判断していたようである。この様子が、ITJ 739の序文に記録されているので、ここに引用したい。

ITJ 739 (3v1-3v5行目)

### 翻字テキスト

cho lo ni {ni} bzang gsuM na /  
bzang gis ni bskyar mya 'tshal /  
bzang gnyis ni ngan gcig dang /  
'bring gis ni gzhi' la zhog //  
ngan gnyis ni bzang la gcig la /  
gcig tsham ni bskyar te btab  
cho lo ni ngan gsuM na /  
bskyar kyang ni don ma mchis /  
mo gdab pa ni

### 試訳

骰子〔の目の組み合わせ〕が吉3つであれば

良いので繰り返しを求めない。

吉2つ、凶1つであれば、

中であるので平とせよ。

凶2つ、吉1つには1度だけ繰り返して占う。

骰子3つが凶であれば、繰り返しても益は無い。

占えば、（以下本文へと続く）

ここで言う「吉3つ」とは、骰子を3回振って得た目の組み合わせから、吉という結果を獲得することが3回続いた場合を指していると考えられる。3回とも吉、あるいは1回だけ凶の場合は、これによって吉や平と判断されるが、凶を2回引いてしまった場合には、もう一度骰子を振るチャンスがもらえるようである。しかし、凶を3回も引くような場合は、もう一度行っても意味が無いほど悪いようである。

このように、骰子占トで吉凶を得るには、非常に入念な審査を経る必要があった。これは、当時のチベット社会において、骰子という道具が特別な道具であり、この占ト法自体が非常に神聖なものであったことに起因しているのかもしれない。

ところで、Thomasは、骰子占トには、図表の描かれた占ト板が必要とされていたと考えている。後代の骰子占トでは実際にそのような図表が使用されており、おそらくそこから着想を得たアイデアであると思われる<sup>433</sup>。Thomasは、ITJ 738の韻文や卦の名称に登場する神格<sup>434</sup>、動物、景色などが図表に描かれていたものであると想定している。そこへ骰子を振り落とせば、骰子の目の組み合わせに加えて、骰子の落ちた図表上の要素も導きだす事ができる。それゆえ、同じ目の組み合わせであっても、記述内容や吉凶に差がみられるのだと示唆している。しかし、Thomas自身も如何なる図表が使用されたのかを解明することは難しいと述べている。また、Macdonaldは、筆者がその他の占ト法に分類しているPt.1047を骰子占ト書であると考え<sup>435</sup>、Pt.1047を7枚～10枚の占ト板に骰子を振り落とした際に得られた結果を、占ト板の図柄ごとに峻別して記した文書であると述べている<sup>436</sup>。ちなみに、ITJ 745とOr.8210/S.155にはそれぞれ1度ずつ、*skyid pa'i ri mo la bab na*「幸せの絵の上に落ちれば」というフレーズが見える

---

<sup>433</sup> Waddel 1974, pp.467-473.

<sup>434</sup> Thomasはこれらを‘objects’と考えているようだ (AFL pp.116-117)。

<sup>435</sup> Thomasもこれを他の骰子占ト書とともに*Mo-mss.*と分類している。*Mo-mss.*には銅銭占ト書も含まれる (AFL pp.140, 150)。

<sup>436</sup> Macdonald 1971, pp.272-274.



437。これは、占ト板の存在を示すものであろうか。しかし、占ト板が介在したとしても、目の組み合わせと吉凶との間に明確な対応がみられないことや、目の記されない文書があることを説明するには、更なる検討を要するであろう。

### 【骰子の機能】

これまでみてきたように、骰子占トでは、病気や、家運、結婚といった生活に関わる様々な項目について占っていた。しかし、古代チベット社会において、骰子は我々が予想していた以上の役割を担っていたことが分かってきた。それは、ITJ 740の第二部に収められている記事から読み取れる。第2部は122行から構成されており、冒頭には以下のように記されている<sup>438</sup>。

「寅年の〔神の〕お言葉である骰子〔から〕出たところの骰子の勅令に関する問答。宮殿より出されたもの。」

( \$ : / / stagI lo'I bka' sho byung be'i sho tshlgs gyi zhus lan / pho brang nas mchIs pa / / )

第二部の内容は、妻が生家へ帰った場合の夫への賠償や、(借金)の貸し手と借り手の論争、借り手によって勝手に又貸しあるいは横流しされた貸し付けについて、妻が他人によって夫から盗まれた場合、寺・僧侶からの貸し付けなど11の項目に関して、問題の解決を骰子に委ねるか否かが争われている問答集である。

内容をみていると、骰子による裁きを受けることは、借り手にとって喜ばしいことであることがわかる。また、骰子で決定できることとそうでないことが、厳格に規定されていたようである。例えば、畑や人、家の所有権や負債といった契約の成立している件に関しては骰子で決

---

<sup>437</sup> Or.8210/S.155 (1.129)

*skyid pa'i ri mo la ba[b] gyIs lha rjed cIg dang mthar skyid par mchI'o mo bzang /*

幸せの絵の上に落ちたので、神を敬え。そうすれば幸せになる。吉。

ITJ 745 (1.11)

*skhyld pa'I ri mo la bab na mo bzang ///*

幸せの絵の上に落ちれば、吉。

<sup>438</sup> 第2部に関しては、【Dotson 2007】に詳しい。

めないとされている。一方、罪を犯したことに対する処罰は骰子で決めることができ、負債の返済遅延による利息についても、処罰であるから骰子で決定できる案件であると述べられている。第二部から得られる情報は、大変興味深く、古代チベットの社会状況を知ることができるという意味で重要である。しかし、この研究は本論文の目的とするところではないため、ここでは骰子占トとの関連性に焦点を絞って考察する。

ITJ 740の第二部から読み取れることとして、古代チベット社会では、骰子が様々な争議に裁きを与える道具として用いられていたことが挙げられる。このような強い決定力を持つがゆえに、ここで用いられる骰子 (*sho*) は、[神の] お言葉である骰子 (*bka'sho*) と呼ばれているのだろう。また、この第二部に含まれる内容が、寅年に宮殿から出されたということは、これらが中央政府 (=宮殿) から、一定の年ごとに出版されていたことがうかがえる。実際、第二部には寅年以外に、午年 (*rta'i lo*) の勅令についての言及もある。これらの、骰子を取り巻く特殊な社会状況下において、骰子占トが様々な占ト法の中で特別な存在であったことは想像に難くない。そして、第二部が一定の年ごとに中央政府によって作成されたように、骰子占トも中央政府の管理下にあったのかもしれない。では、骰子占トについても、第二部と同じく、一定の年ごとに、中央政府で規範が決定されていたと考えることはできるだろうか。次項では、再び書式に着目してこれを検証してみたい。

### 【骰子占トの性格】

さて、骰子占ト文書の構成には、Type-1とType-2が存在し、それぞれのタイプはさらにType-1A・Type-2A、Type-1B・Type-2B（目の記述なし）、Type-1C（吉凶の記述なし）に峻別ができた。このうち、Type-1Cでは、吉凶が述べられていないものの、韻文あるいは尊格が示されていれば、吉凶を想定できるのであった。しかし、Type-1BやType-2B文書では、骰子の目が記されておらず、占ト書の機能を果たしていない。それでも、構成を照査した結果、これらが骰子占ト文書であることは間違いない。それでは、Type-1B、Type-2B文書はどのように利用されていたのだろうか。以下にいくつかの仮説をたて、骰子占ト書の性格について考察してみたい。

例えば、一定の年ごとに、骰子の目の組み合わせに対する吉凶が中央政府によって決定され、地方へ配布されたと考えてみる。そうして、地方では、吉凶と固定的な関係を持つ韻文や尊格を挿入し、内容豊かな骰子占ト書、すなわちType-1AやType-2Aに仕上げたと想像できる。Type-1B、Type-2Bのような目の記されていない文書は、韻文や尊格を付け加える際の用例集であったのかもしれない。

また、中央政府では骰子の目の組み合わせとそれに対応する韻文や尊格だけが決定された、と考えることができるかもしれない。そして、地方では用例集（Type-1B）を参考に占ト文書として完成させた。従って、中央政府で決定された内容（骰子の目の組み合わせと韻文）だけを記した文書がType-1Cであると理解できる。あるいは、中央政府ではType-1AやType-2Aのような完成した占ト書が作られ、地方へ送られたと考えることもできる。この場合、その他のタイプに属する文書は未完成文書であると考えざるを得ないだろう。

ところで、1.2の文書概説で言及したように、Or.8210/S.155には、明らかに目の組み合わせが後から加筆された様子が留められている。この状況を参考にすれば、Type-1BやType-2Bについても、目の組み合わせが入れられる前の未完成な写本であると考えることができるのではないだろうか。実際、大半の写本において、骰子の目は独立した行に記されており、卦辞ごとに改行によって区切りが挿入されている。Type-1BやType-2Bなどでは、卦辞と卦辞の間に1行ほどのスペースが取られており、ここへ目の組み合わせを書き込む事は十分可能である。

以上より、骰子の目の組み合わせと吉凶の対応が一定の年ごとに中央政府で決定されたという第一の仮説が、最も訴求力の高い案であると考えられる。地方では、予め作成していた占ト書に中央政府の決定を適用させて、占ト書を完成させたのであろう。この場合、骰子の目の組み合わせと吉凶の関係には中央政府による定期的な変更が加えられたことになる。しかしながら、本案に対しても確証を得れる資料はみつかっておらず、仮説の域を出ない。それでも、書式のバリエーションが何らかの機能を持っていたと考えることには妥当性があると思われる。

## 第2節：他言語文書との比較研究

古チベット語骰子占トと同占法、すなわち四つ目の骰子を三度振って吉凶を判断する占いが、インドに由来することは早くから言及されている<sup>439</sup>。また、それを記した他言語による占ト書が複数存在することに着目し、古チベット語文献と比較する先駆的な試みがFranckeによってなされている。彼は、チベット語文書がインドの骰子占ト書の精神を継承していると指摘する一方で、最も近似性がうかがえるのは古代トルコ語の骰子占ト書であると結論づけた<sup>440</sup>。しかし、当時は各コレクションに散在するチベット語骰子占ト書を一括研究できるような状況ではなかったため、彼が研究材料となし得たチベット語文書は数点の断片文書だけであった。対象となる古チベット語骰子占ト文書が大幅に増えた現在の状況下で、改めて他言語文書との比較研究を行う価値は十分にあるだろう。そこで、本論文では、他言語骰子占ト文献について現在までに入手し得た情報をまとめる。以下に、サンスクリット語、古代トルコ語、漢語の順に関連する骰子占ト書を紹介する。

### 【サンスクリット語文献】

現存する骰子占トに関するサンスクリット語文献のうち、最古の資料と考えられるのは、Bower Manuscript（以下、BMs.）である。BMs.は、1890年にLieutenant H. BowerによってKucāの地元民から買い取られた文書である。これらは、白樺の樹皮にサンスクリット語（グプタ文字）で書かれた貝葉式の文献で、現在はオックスフォードのBodleian Libraryに所蔵されている。文献は、7つ（I-VII）の文書から構成されており、全部で51葉ある<sup>441</sup>。このうち、I-IIIは医学文書であり、VI-VIIには孔雀明王経の一部が収録されている。そして、IVとVに骰子占ト書の短い手引書が記されている。Hoernleによれば、これらは4世紀の第3四半期に属するもので

---

<sup>439</sup> Francke 1928, pp.114-115, *AFL* p.118.

<sup>440</sup> Francke 1928, pp.116, 118.

<sup>441</sup> Meulenbeldによれば、正確には7つからなるのではなく、大小2つの文献からなり、大きい方に6つの文書が含まれるということである（Meulenbeld 2000 Vol. IIA, p.3）。

あるという<sup>442</sup>。さらにHoernleは、文字の特徴からそれぞれの書写人についても考察しており、IVは東トルキスタン出身の人物によって、VはKucāに移住したインド人によって書かれたとみている<sup>443</sup>。全ての文書写真と、サンスクリット語のテキスト、翻字テキスト、英訳がHoernleによって出版されており<sup>444</sup>、Franckeの研究にも一部に対する訳文が掲載されている<sup>445</sup>。また、Hoernleは、古代インドに起源をもつPāśakakevalī（骰子占ト經典<sup>446</sup>、以降PK.）のテキストの内容をBMs.のVと比較し、そこに共通性が認められることから、BMs.もPK.の校訂本の一つであると結論づけている<sup>447</sup>。PK.はWeberの研究中に詳しく、全て（64通りの目の組み合わせ）に対する卦辞の翻字テキストが提示されている<sup>448</sup>。

ところで、BMs.のIVとVは、前者の序文を除いたすべてが韻文によって記されている。IVの序文には、複数の神々が列挙され讃えられている。ここでは、骰子が単数形で示されていることから、1つの骰子が3回振られた可能性が高いことが指摘されている<sup>449</sup>。IVには59通りの目の組み合わせが記され、Vには20通りが残存しているが、配列や記述内容は互いに一致しないようであり、チベット語文書とも明らかに異なる規則性を有している。また、PK.では、骰子の目は円によっては記されず、数字が用いられている上、総合的吉凶も記されていない点で古チベット語文書とは大きく異なる。Franckeは、WeberによるPK.中の卦辞と、それと一致する目の組み合わせをもつチベット語文書の卦辞とを比較し、両者の吉凶はおそらく符合すると述べて

---

<sup>442</sup> Hoernle 1891, pp.79-96.

しかし、年代については5世紀（Bühler 1891, p.309.）や6世紀の前半（Dani 1963, p.151.）、或いは6世紀半ば（Sander 1987, pp.320-321.）という意見や、4～6世紀の間である（Filliozat 1953, pp.157, 675-676.）という主張もある。

<sup>443</sup> いずれも仏教僧であると述べられている。

<sup>444</sup> Hoernle, 1893-1912.

<sup>445</sup> Francke 1928, p.118.

<sup>446</sup> ‘doctrine of divination by dice’（Hoernle 1893-1912, p.214.）

<sup>447</sup> Hoernle 1893-1912, p.215. pp.216-221には、7つのPāśakakevalī写本とBMs.について、翻字テキストを対照させている。これらのPK.は、17世紀～20世紀の著作である。

また、古代インドの骰子遊びについては、Lüdersの研究に詳しい。Lüdersの研究では、BMs.に関する考察も収録されている（Lüders 1907）。

<sup>448</sup> Weber 1859, pp.168-180.

<sup>449</sup> Francke 1928, p.115.

おり、チベットの卦辞内容にみえる精神がPK.に由来すると考えている<sup>450</sup>。Franckeが対照させることができた古チベット語文書は、ベルリンコレクション中の断片文書とスタインコレクション中の一片の断片文書（Or.15000/67）のみであり、十分な比較はなされていないと言える。一方で、PK.がチベット語文書にはみられない記述を有することもFranckeによって指摘されている。それは、夢でみる印についての描写である<sup>451</sup>。PK.では、夢によって骰子占卜の結果が妥当であったかどうかを確かめるのである。これについてFranckeは、夢での確認が必ずしも実現しなかったために、チベット文書では省略したのかもしれないと述べている<sup>452</sup>。

---

<sup>450</sup> Francke 1928, p.116.

<sup>451</sup> FranckeによるPK.の翻訳を和訳によって引用したい。

1 / 2 / 1

1、2、最後に1の骰子が落ちた。

お前には今までほとんど全くなかった様な荣誉が、  
年老いた者からさえももたらされる。

もし、お前が地位を得たり、お前の者（=家族）と会うならば、  
お前が、金を獲得しようとするならば、  
自身の一族が栄える事を考えるならば、  
この全ては、お前に喜びをもたらしつつ、障害もなく叶うだろう。  
お前にとっては、この場合の目印があるだろう。  
夢の中でお前は妖精と出会うだろう。

2 / 3 / 2

2、3、最後に2は、お前に悪い組み合わせが今起こったのである。

お前は難しい仕事について考える。  
見通しの中には何も良い事は無い。  
お前の仕事は、お前にとっては成功しないだろう。  
その際、幸運は全く訪れない。  
この場合、印として夢で水牛を見る。

<sup>452</sup> ところで、筆者はチベット語文書中に、次のような記述を見つけた。

*rtaḡ su A yin no / yod do*（印として～である／～がある）

この記述は、Or.8210/S.155の数カ所で発見でき、総合的な吉凶の直前か直後に置かれている。かろうじて読み取れるAの記述には、*chung ma blang*（妻を娶る 1.115）、*zhal lce ched po la thar pa*（大きな裁判では、〔収監されずに〕自由になる〔結果を得る〕 1.146）という内容が記されている。従って、PK.中の夢の印にみる妖精や水牛とは随分と異なる色調を帯びており、チベット語文書中の「印」が夢によってもたらされる可能性は低いだろう。しかし、「印」に関する記述そのものが、PK.に起因する要素だと考えられるかもしれない。

以上のように、骰子占トに関するサンスクリット語文献は、古代から現代へと継承されているため、非常に豊富な資料を有している。従って、これらの内容をつぶさに対照させて、相互関係や系譜を明らかにさせる必要があると言える。そうして、サンスクリット語骰子占ト文書のプロトタイプとなる書式を確定し、チベット語文書の研究に反映させることが必要である。

ところで、これらのPK文献は、チベット語にも翻訳され、大藏經カンギュル部に収録されている<sup>453</sup>。サンスクリット語では*Kevali*、チベット語では*mo rtsis*というタイトルをもつ文献である。そこでは、骰子の目が<sup>^</sup>*a*、*ya*、*ba*、*da*という文字で表記されていることに加えて、総合的吉凶が記されない<sup>454</sup>点でも、古チベット語文書との間に相違がみられる。従って、書式はもちろんのこと、卦辞内容にも古チベット語文書との一致を見いだせる可能性は低いと考えられる。しかし、このように仏教に同化された骰子占トが、どのように継承されているのかを検証することは、チベット文化の変遷を理解する上で大変興味深いと言える。今後の現代チベット文化圏における現地調査では、この点にも留意して調査を進めることにしたい。

#### 【古代トルコ語】

スタインが敦煌莫高窟より将来した紙文書の中に、*irq bitig*と称される突厥文字で書かれた古代トルコ語の占ト文書が存在する<sup>455</sup>。これは、13.1×8.1cmの大きさを持つ胡蝶装形式の冊子本であり、58葉の料紙が一括されている。冒頭の9頁と巻末の3頁は、元来白紙であったため、計104頁にわたって、トルコ語の占ト卦辞が記されている<sup>456</sup>。本文書はThomsenによって、はじ

---

<sup>453</sup> 北京版 5814, *bzo rig pa, go* 98a1-103b7、ナルタン版 *go* 116a1-122a5.

<sup>454</sup> 現代のチベットでも、文殊菩薩に由来する骰子占いでは、木製の正方形六面体の骰子に<sup>^</sup>*a*、*ra*、*pa*、*tsa*、*na*、*di*の文字が記された骰子を用いるそうである (Waddel 1974, p.470)。

<sup>455</sup> Or.8212/166.

<sup>456</sup> なお、元来白紙であった頁(1-9頁と105-107頁)に加えて、第102-104頁にはトルコ語の記述に重ねて、仏教に関する漢文の韻文が書されている。



めてその存在を知らしめられた文献である。Thomsenは、本文書の書写年代を9世紀の前半であろうと想定したが、これについては諸説ある<sup>457</sup>。

さて、*irq bitig*は、Clausonによっても明らかにされているように、四つ目の骰子を三投することによって吉凶を占う骰子占トを留めた文書である。ここには65種類の卦辞が収録されているが、脱落や重複がみられることにより、62通りの目の組み合わせに対する卦辞が確認できる<sup>458</sup>。内容は散文形式で記されているものの、parallelism（対句）やalliteration（頭韻法）を用いた詩のようなスタイルをとっている<sup>459</sup>。骰子の目は、各卦辞の冒頭に一重の円によって並記されている。これらは、独立した行に記されており、円の内側は、朱色で塗りつぶされている。103頁と104頁には、朱書きされた奥書がみえる<sup>460</sup>。Thomsenは、これが「熟練した書写人によるものである」と指摘し、Tekinも「トルコ語の文学的素養をもつ人物、すなわちトルコ語を母語とする人物によって記されたものである」と述べている<sup>461</sup>。

以上より、占法や骰子の目の記述方法において、古代トルコ語文書と古チベット語文書との間には一致がみられると言える。さらに、両文書は、各々の目の組み合わせに対して吉や凶という総合的吉凶を示す点でも共通性がみられる。一方で、複数の研究者によって、*irq bitig*の卦辞内容がトルコ族の生活と密接な関連を持っており、他言語からの翻訳本である可能性が低いことが指摘されている<sup>462</sup>。たしかに、*irq bitig*には、チベット文書のような事象ごとの吉凶や、卦の名称、神格名などの記述は一切発現せず、各卦辞は一貫して格言のような短い記述と吉凶から構成されている。卦辞の内容を対照してみても、チベット語文書の記述とは明らかに異な

---

<sup>457</sup> Thomsen 1912. なお、本文書の奥書には「寅の年の2月15日にマニ教寺院であるTaygüntanにおいて」に書かれたことが記されている（Thomsen 1912, pp.192-193, Tekin 1993, p.1）。これより、たとえば、Bazinは、書写年代を930年か942年であると提唱しているし、Clausonは9世紀の全ての寅年の可能性を論じている（Clauson 1961）。

<sup>458</sup> 1/1/3と4/2/1は脱落しており、1/4/3に対しては3度、3/1/3には2度記述がある。

<sup>459</sup> Thomsen 1912、池田 1984, p.84.

<sup>460</sup> 文書の書写には、筆が用いられている（Thomsen 1912.）。

<sup>461</sup> Tekin 1993, p.3.

なお、*irq bitig*には、Thomsen 1912、Clauson 1961、Hamilton 1973、Tekin 1993 など、複数の翻訳が出版されている。

<sup>462</sup> Thomsen 1912、Tekin 1993, p.3.



る概念に立脚している。たとえば、*irq bitig*に登場する動物を取り出してみれば、馬、牛、駱駝、虎、白鳥、鶴、鷺、鷹、熊、猪、羊、狐、兔、蛇、蟻、とチベット文書には見いだせない多種多様な動物が導入されていることがわかる。ほとんどの動物がチベット語文書には登場しないものであることから、チベット語文書が*irq bitig*の記述を模倣しているとも考えられない。従って、双方の記述内容に共通性がみられるというFranckeの説には従い難く、両者は、明らかに独自の生活文化や世界観を土台としたストーリーを持っていると言える。また、同一の目の組み合わせをもつ卦辞について、吉凶を照合させてみたところ、チベット語文書中には、古代トルコ語文書と吉凶が一致する文書を発見できなかった。従って、古代トルコ語文書とチベット語文書とは占法や内容構成に共通性があるものの、両者に直接的な関連性は見いだせないとと言える。

#### 【漢語】

スタイン蒐集敦煌出土漢語文書コレクションの中には、摩醯首羅トというタイトルが付された骰子占ト書が一点ある<sup>463</sup>。本文書は、21.5×30cmの大きさで、14葉28頁からなる胡蝶装形式の冊子本である。ここには、複数の医学文献や占ト文献が収録されており、当該の骰子占ト書は6頁から11頁までに記されている。冒頭に記された4行の序文には「骰子を三回投げて得た卦が良ければそれで良しとし、悪ければ3回まで行える」という占ト方法が記されている<sup>464</sup>。また、「摩醯首羅ト」というタイトルによって明示されているように、これは摩醯首羅(Maheśvara)、すなわち大自在天に由来する占ト書である<sup>465</sup>。本書には、1/3/2という目の組み合わせに対する卦辞が欠落しているため、63通りの組み合わせに対する卦辞が収録されている<sup>466</sup>。各卦辞の冒頭には数字によって示された骰子の目に続いて1～2行の卦辞内容がみえ

<sup>463</sup> Or.8210/S.5614.

<sup>464</sup> 序文の当該箇所には、以下のように記されている。

具説上事 由可擲頭投子三遍 然後補局 得一好卦便休 ト得凶局許看三局  
Kalinowskiによれば、「擲頭」の「頭」は「骰」を示すそうである (Kalinowski 1991, pp.141-142, 150.)。

<sup>465</sup> そのため、先行研究では、インド仏教の色彩を備えた占ト書であることが指摘されている (黄 2001, pp.31-32, *DSCM* p.352.)。

<sup>466</sup> 1/3/1と1/4/3が各二回登場する。

る。各々は、「此名〜局」（これは〜の卦）という見出しと、事象ごとの吉凶、総合的吉凶によって構成されている。「〜」にはインド仏教に起源をもつ尊格名称が目立つが<sup>467</sup>、「北神」や「雷公」「地神」という中国由来の神々も登場することが指摘されている<sup>468</sup>。

次に、同じ目の組み合わせをもつ卦について、本文書とチベット語文書の吉凶を対照させてみたところ、両者に一致はみられなかった<sup>469</sup>。従って、一方が他方の翻訳本である可能性は低く、双方に直接的な関連性は見いだせないと言える。

まとめると、骰子占トを記した最古の文献はインドのPāśakakevalīであった。古チベット語文書、古代トルコ語文書、漢語文書の三者間には、占法や内容構成にある程度の類似性がみられたが、直接的な相互の関連性は見いだせなかった。おそらく、インドに由来する占ト法が各民族の生活様式や民間信仰に融合し、これらの骰子占ト文書として記されるに至ったと考えられる。

章末に、古チベット語骰子占ト書と他言語のそれらとの吉凶を対応させた対照表を提示する。なお、Pāśakakevalīには総合的吉凶が記されていないが、Weberの研究で提示されている情報をもとに、凶と大凶のみを記した。

---

<sup>467</sup> 文献タイトルにみえる「摩醯首羅」も、最終卦の名称に現れている。

<sup>468</sup> *DSCM* p.352.

<sup>469</sup> 前掲の古代トルコ語文書とも合わないことが確認できる。

## まとめ

古代チベットの骰子占トは、1～4までの目を持つ骰子を3投するという行為を3度繰り返すことによって吉凶を導きだすものであった。スタイン蒐集敦煌出土文書中には、これと同種の古代トルコ語文書や漢語文書が発見できる。この占ト法が、おそらくヴェーダ時代に由来するインドのPāśakakevalīに基づいていると考えられる一方で、各占ト文書は、それぞれの民俗背景を十分に昇華させた卦辞内容をもっていた。

また、骰子占ト文書は、チベット帝国内の広い地域で必要とされた占ト書であり、敦煌では、チベット支配期以降も作成され続けていた。古代チベットでは、骰子が諸々の争議にまでも決定力をもつ程の重要な道具であり、おそらく骰子占トも特別な占ト法とされていたことが考えられる。そのため、骰子占ト文書には、他の占ト書にはみられない内容豊かな韻文や、様々な神格が描かれており、吉凶と強い結びつきを有する韻文や神格は、吉凶を導く、あるいはその具体像を心象風景に投影する機能を果たしていた。さらに、骰子が重要視された社会においては、骰子占トも中央政府の管理下に置かれ、その規範が一定の年ごとに出版されていたのかもしれない。

以上が、筆者の考える古チベット語骰子占ト文書の成立背景である。

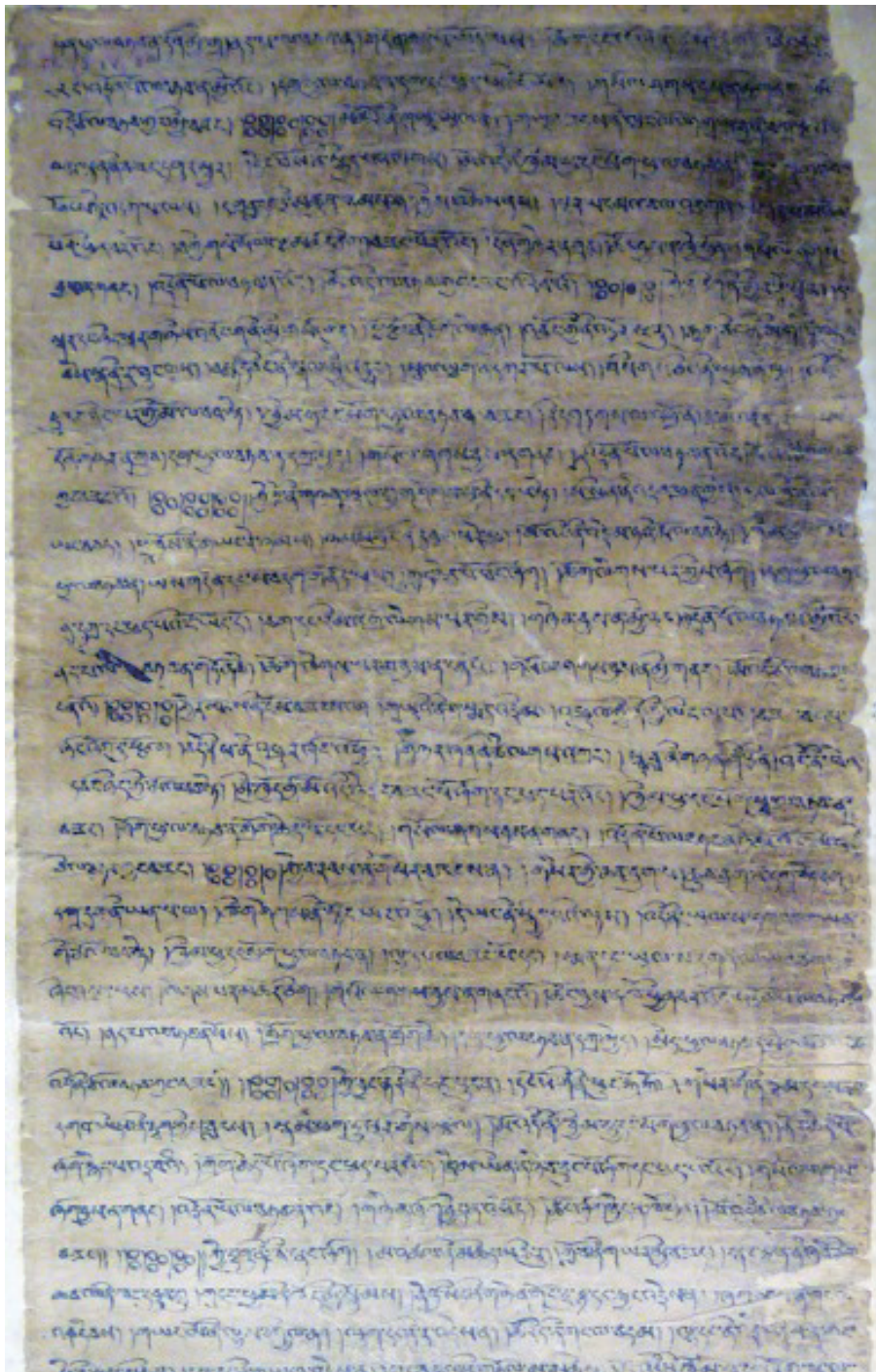
P.t.1047、P.t.1046B + ITJ740名称表

P.t.1047		P.t.1046B + ITJ 740
場所	卦	
pung par		pu par
skyer par		
skang pard		
rgyu phar thun		rgyu bar thun
te skyam		de skyam
rdI phurd		rdI phur
ru sod		ru sod
sbi nyon		spe nyun
sbe slod		spe slod
	tshol ryags	tshol rags / 'tshol rgyags
	lgyog ryags	
	ling ryags	lIng rgyags
	rdud ryags	ru rags
		tog rags
	snI chi	snI ci
	wing kug	
	lI byin	lI byin
	gre gre	gre gre
		gram grum
	phya purd	
		rtsod pur
	chi smyId	ji smyid
	pya rald	pya ral
	pa chI	
	bya myed	
	gram rungs	
	pya bun	pya bun
	lum sus	lum bu(s)
		kyung mu gal?
		ting ma gal
		spyI bar thun
		brag thun
		rIng snyad

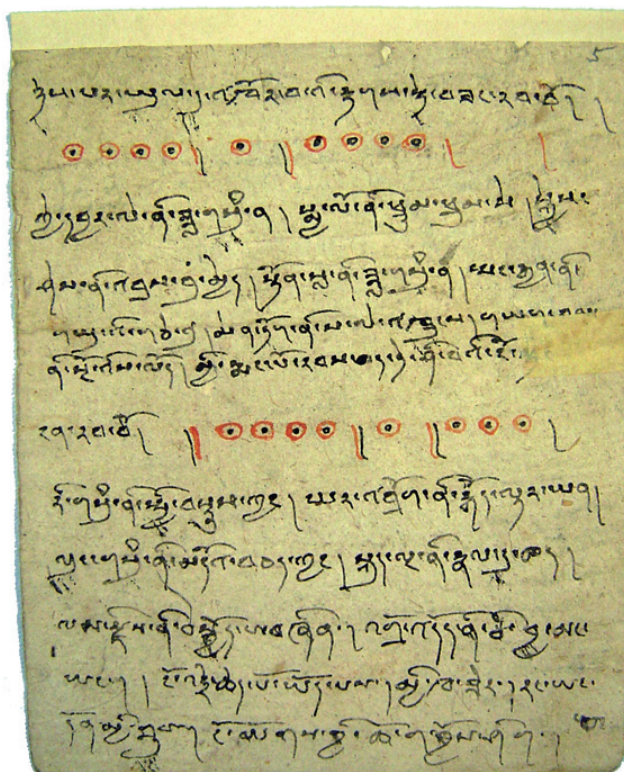
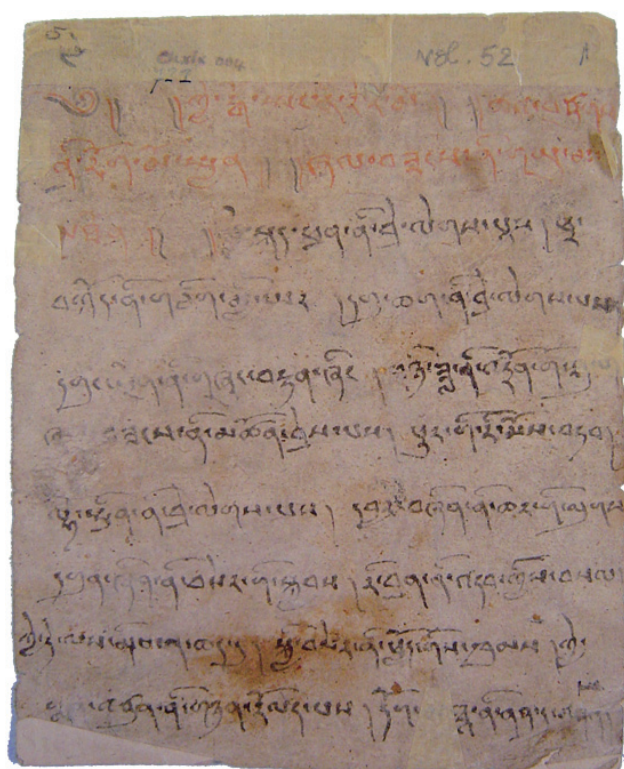
骰子占卜文書吉凶対照表

骰子の目	P.t.1046B	P.t.1052	ITJ 743	ITJ 738	ITJ 739	ITJ 740	羽田	Or.8210/S.155	Pasakakevali	irq bitig	S.5614
444						吉				吉	大吉二度也
443			大吉		大吉	吉			凶		吉
442			凶		吉	吉			大凶	吉	大吉
441					大凶	吉		吉	大凶	吉	凶?
434				大吉	中の下	吉	吉	?		吉	大吉
433				凶/吉	中	吉			凶	凶	大吉
432					大吉		吉	?		?	大吉
431			大吉		大吉	吉				凶	大吉
424			吉	大吉	凶	吉	吉	吉		凶	?
423					大吉	大吉	吉	凶		吉	吉
422				吉	凶	凶	吉	凶?	凶	凶	大吉
421				?	大吉	吉		?		×	先凶後吉
414				吉	大凶	吉		吉、吉		吉	?
413					(指示のみ)	大凶				吉	凶
412			?		大吉			吉	凶	凶	凶
411					大吉	大凶		凶	凶	吉	旦平
344				凶/不吉	大吉	大吉	吉			大凶	大吉慶
343				吉/凶	大吉	吉	中	吉	大凶	凶	?
342				凶	大凶	吉		吉		?	大吉
341				吉	大凶	凶	吉	吉?		凶	大吉
334					大吉	吉		?		?	大吉
333				凶	大吉	吉		吉?		吉	大吉
332					大吉	吉		吉	大凶	吉	旦平
331				大吉	大吉	吉	凶			凶	先憂後吉
324				遅延	大吉	吉			凶	吉	旦平
323				吉	大吉	吉				吉	旦平
322				吉	良くなる	吉			凶	吉	凶
321				吉	大吉	吉		吉/凶/大凶	大凶	凶	吉
314				?	大凶	吉		吉?		吉	旦平
313		吉		不吉	大吉	吉		指示のみ/吉	凶	凶	先凶後吉
312		?		吉	指示のみ	吉	中	平		吉	大吉
311				?	大凶	吉		吉/凶		吉	凶

骰子の目	P.t.1046B	P.t.1052	ITJ 743	ITJ 738	ITJ 739	ITJ 740	羽田	Or.8210/S.155	Pašakakevali	irq bitig	S.5614
244			不適		大吉	吉	吉	吉		吉	大吉
243	大吉	吉	大吉		大吉	吉				? / ?	大吉
242	凶	凶	吉		(指示のみ) 大吉	凶	大凶?	?		大吉	先凶後吉
241	中 / 吉	吉	吉		大吉	吉	中より良い	吉		凶	旦平
234	大吉	吉			大凶	吉			凶	吉	吉
233	吉	吉	凶		大吉	吉	中より良い	吉?	大凶	凶	吉
232	吉 / 吉	凶	凶		大吉	吉		吉	大凶	吉	?
231		大凶	吉		?	平		吉 / 凶?		凶	吉慶
224		大吉	凶		大吉	凶	吉	?	凶	吉	大吉
223	凶	大吉			大吉	凶	凶	?	大凶	吉	旦平
222		吉 / 大吉	吉		大吉	凶			大凶	吉	大吉
221	凶	凶	吉		大吉	凶	吉	吉	凶	凶	大吉?
214	?	大吉	大吉		中	吉	吉	吉		大吉	?
213		大吉			大凶	吉		吉		凶 / 吉	?
212		吉	凶 / 吉		大吉	凶		吉		吉	凶?
211		中の上 / 大吉	?		大吉	中		凶		大凶	吉
144		吉	大吉		?	吉				吉	大吉
143		大吉	吉		大吉	吉				吉 / 凶 / 大吉	大吉、大吉
142		大凶	吉		大吉	中				大吉	大吉
141		凶	吉		大吉	凶				吉	?
134		凶	吉			中		凶?		吉	?
133		吉	吉		大吉	吉	吉		大凶	?	大吉
132		吉	吉		?	吉				吉	
131		吉	不運		大凶	中				吉	大吉、大吉?
124		?				吉		凶?		吉	大吉
123		?	?		大吉	中	吉			凶	大吉
122			大吉			凶	凶			?	旦平
121		凶	吉			凶	吉			吉	大吉
114			大凶			吉	吉			大凶	?
113		凶	中程度			凶			凶		大吉
112		吉				中の下		吉?	大凶	吉	大吉
111		?	吉		大吉	凶				?	大吉

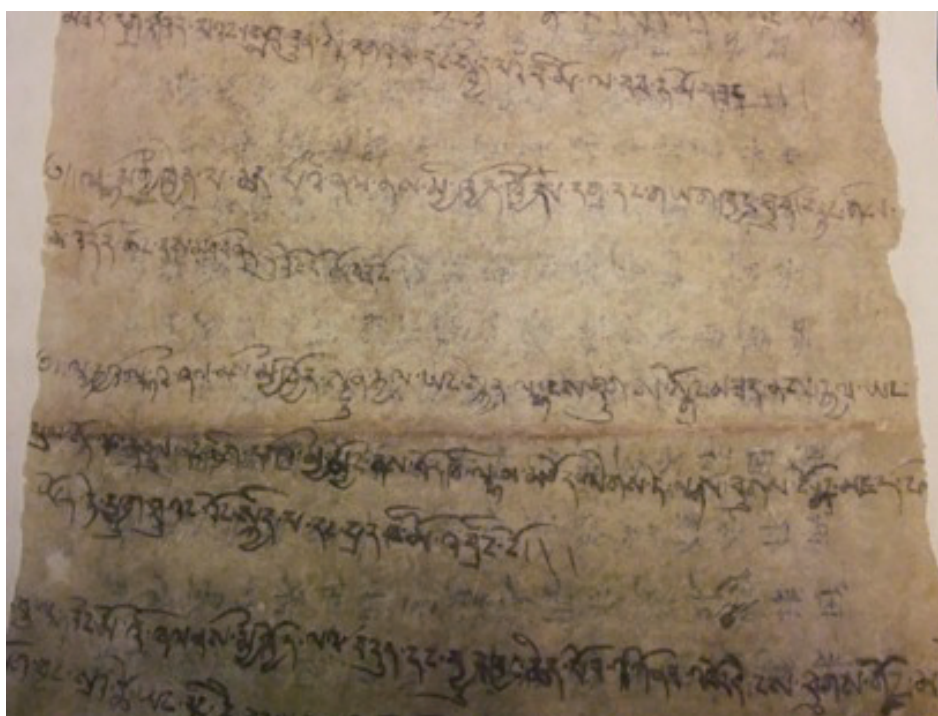
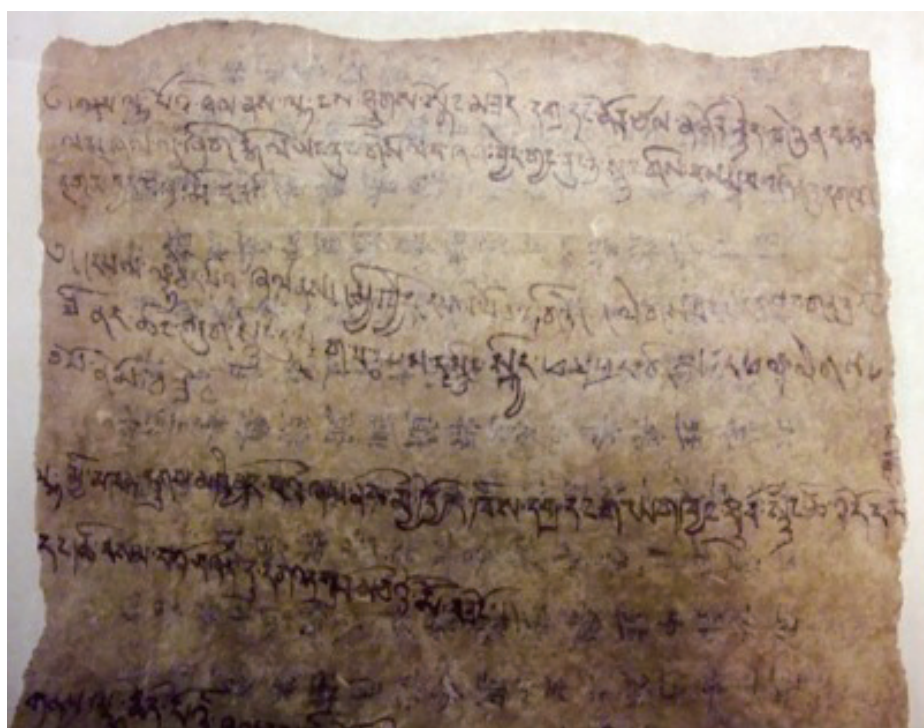




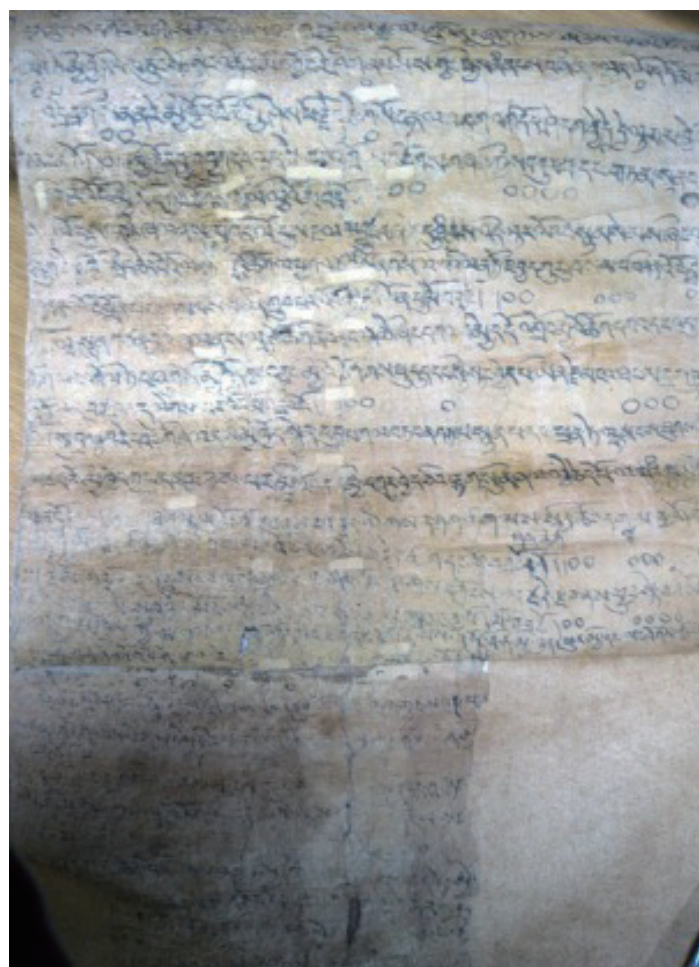
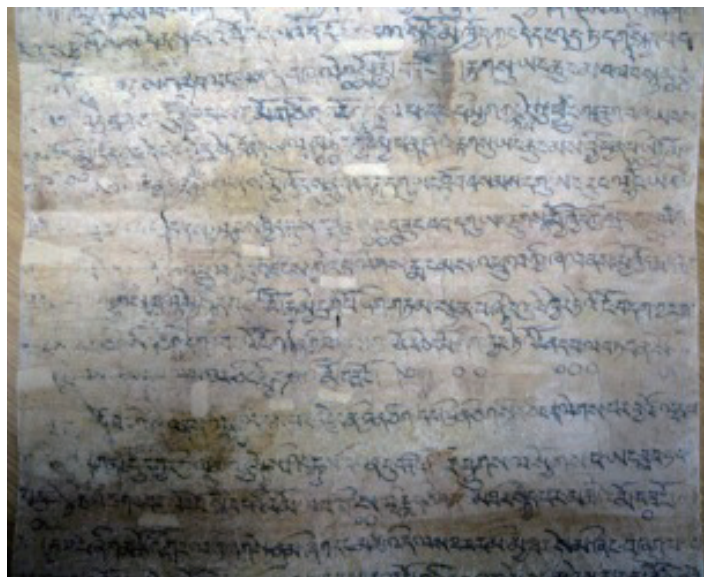




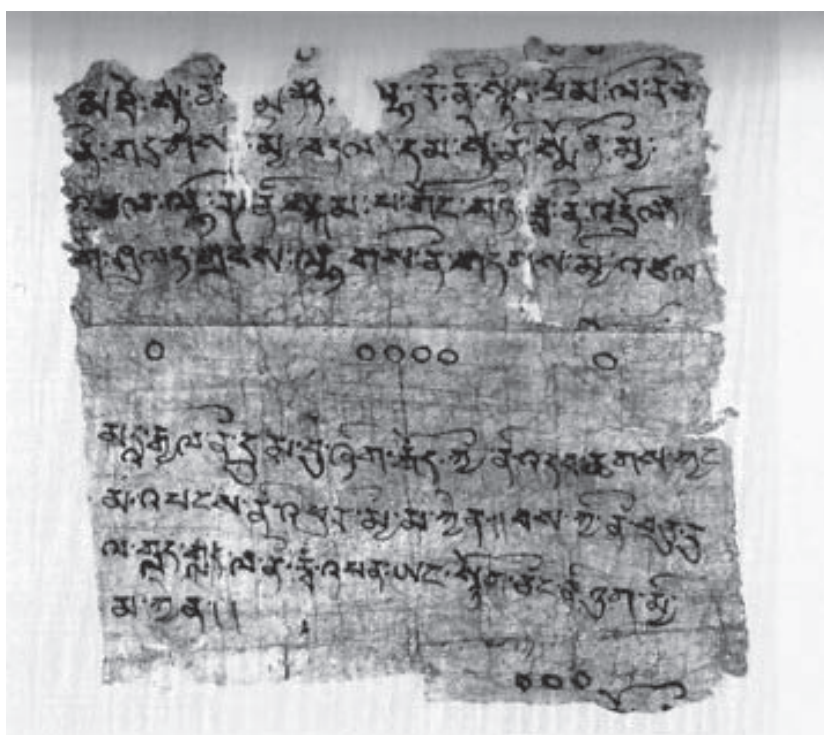




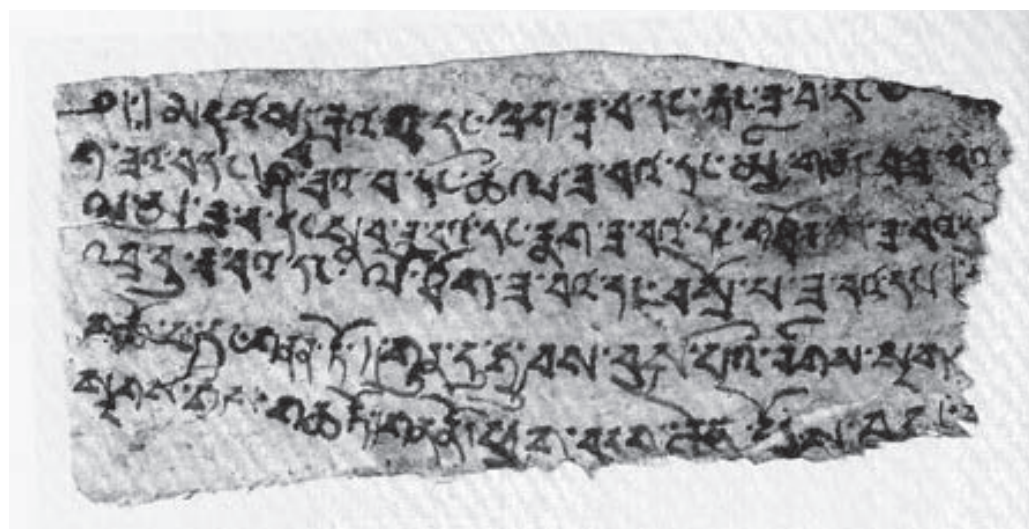




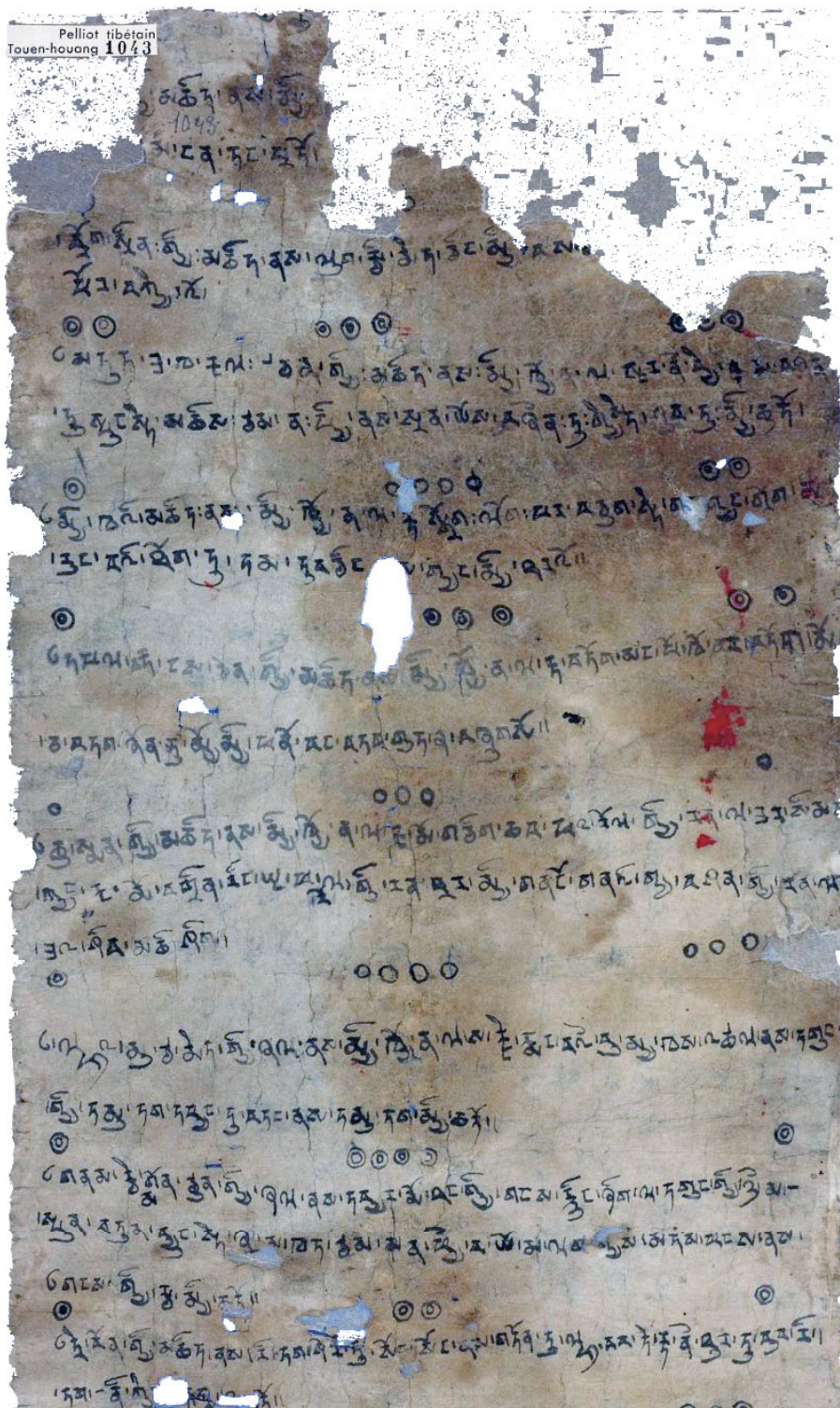
Or.15000/67



Or.15000/76









266



[illegible][illegible]



[illegible]



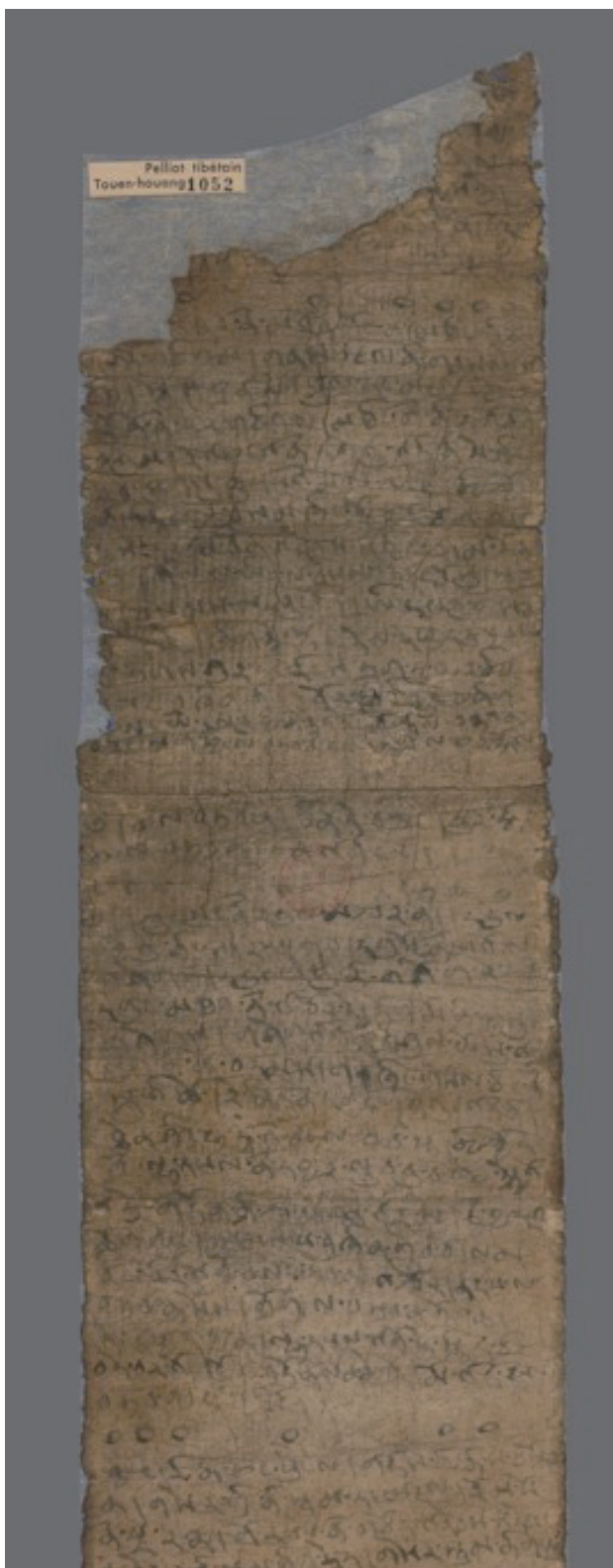
[illegible]



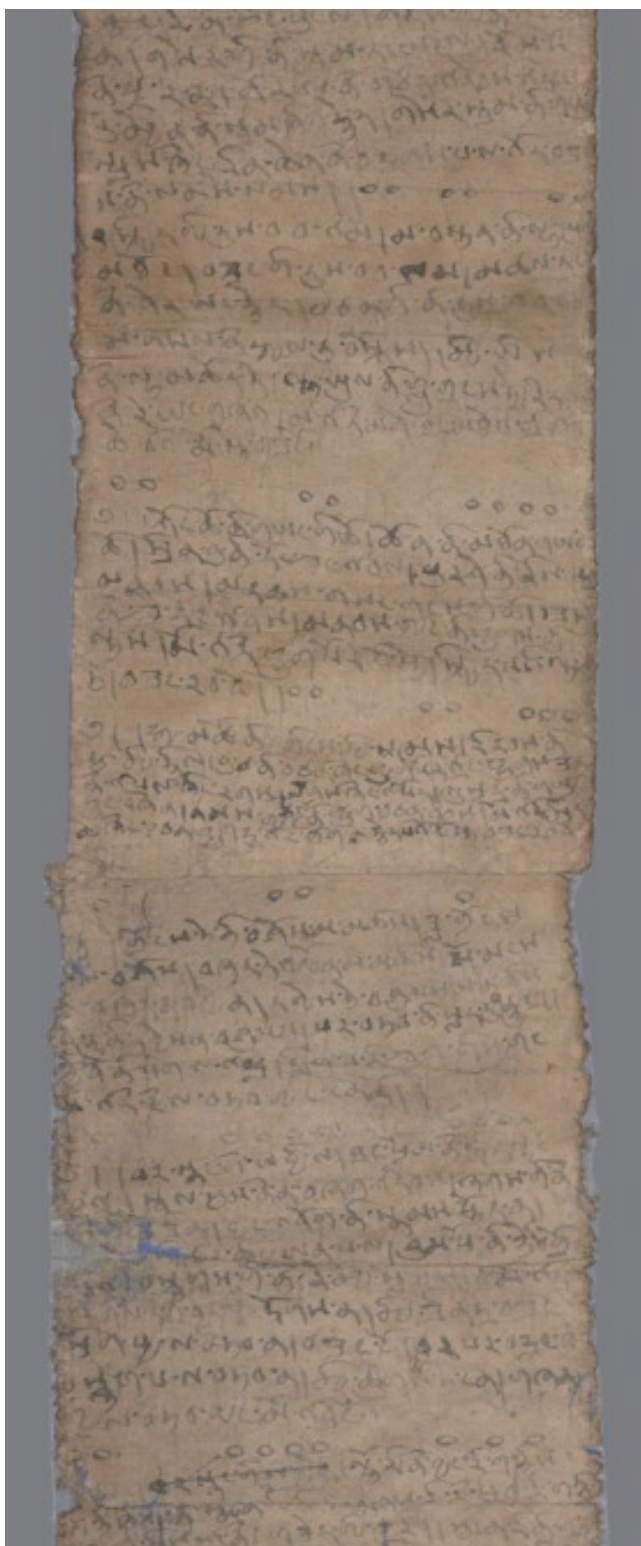
*(The following text is transcribed from the manuscript page shown in the image above)*

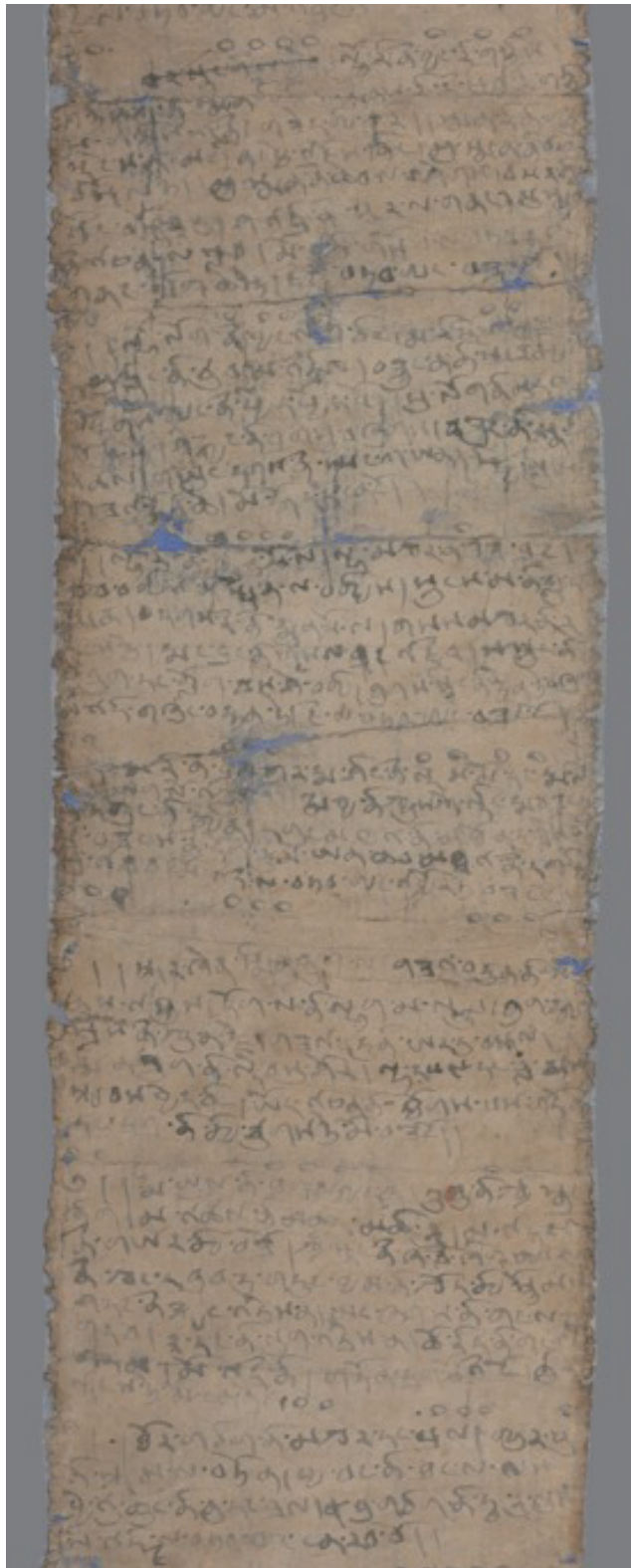


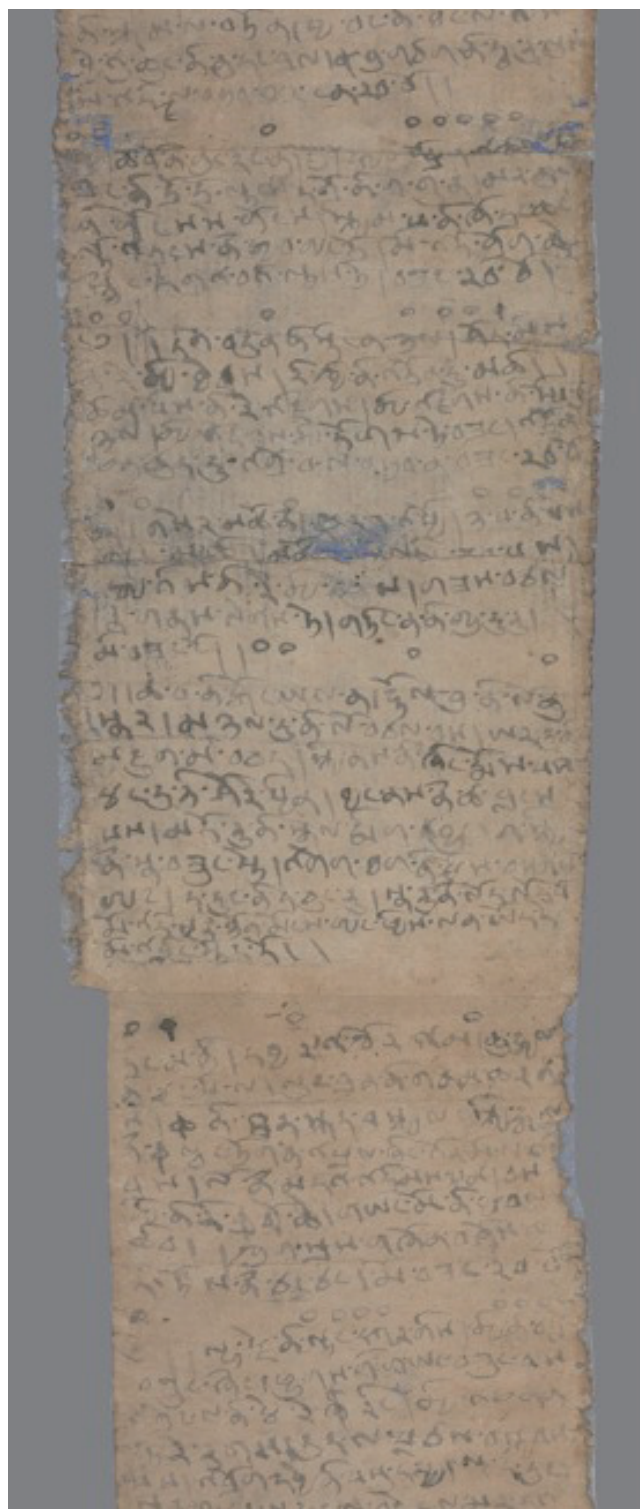
ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ १ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ २ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ३ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ४ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ५ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ६ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ७ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ८ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ ९ ॥  
 ॐ नमो भगवते वासुदेवाय । ॥ श्रीकृष्णाय नमः ॥ १० ॥

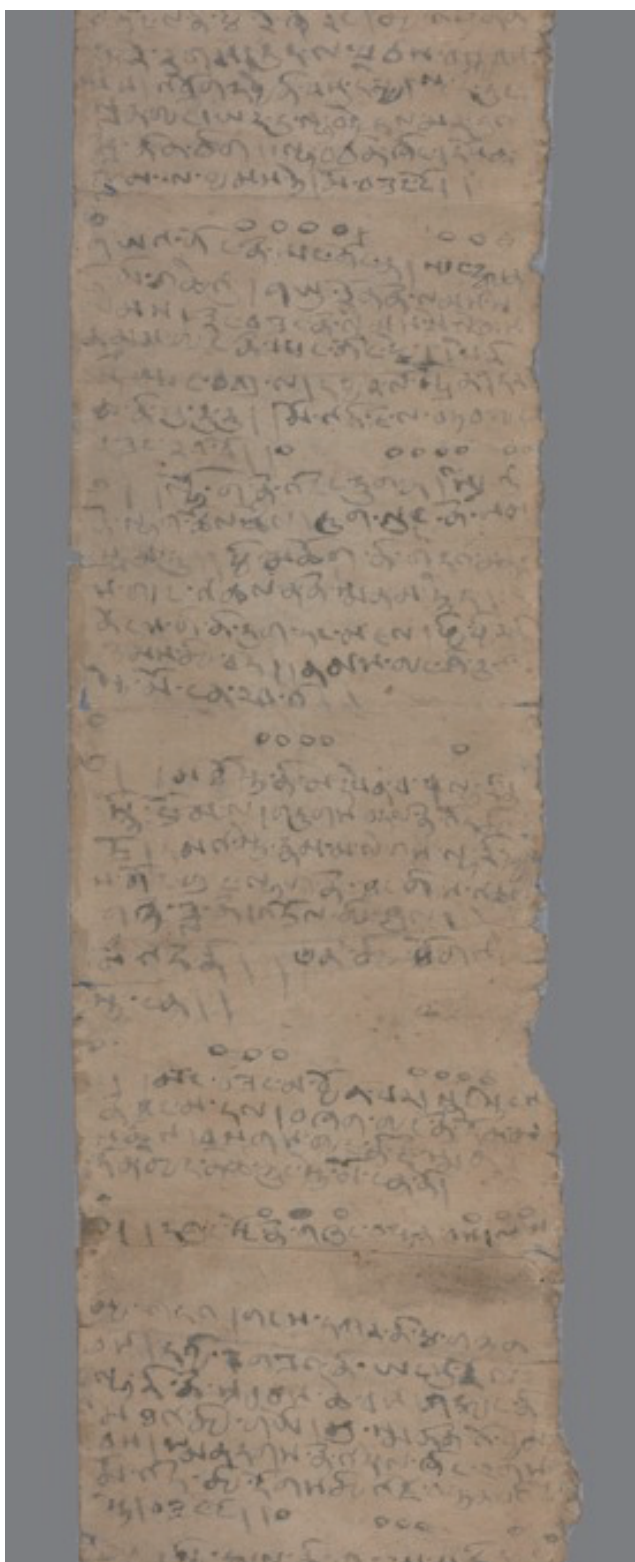




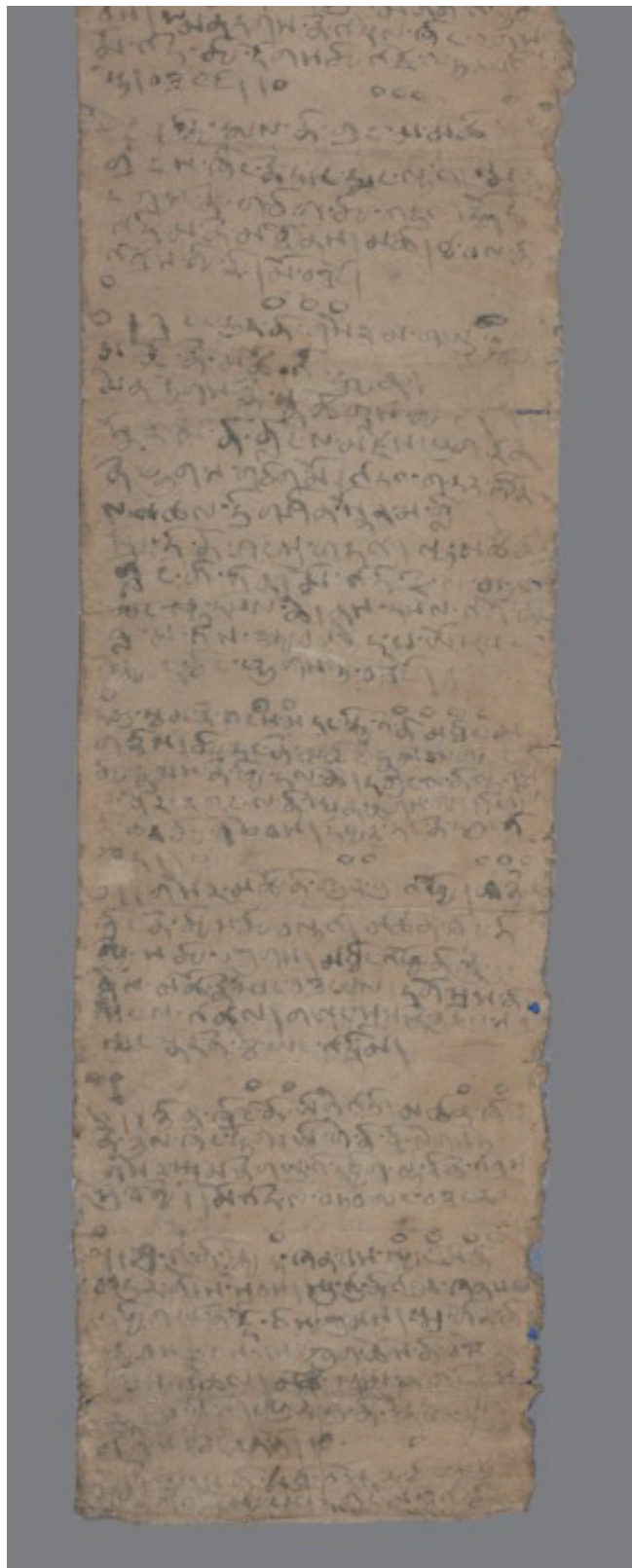


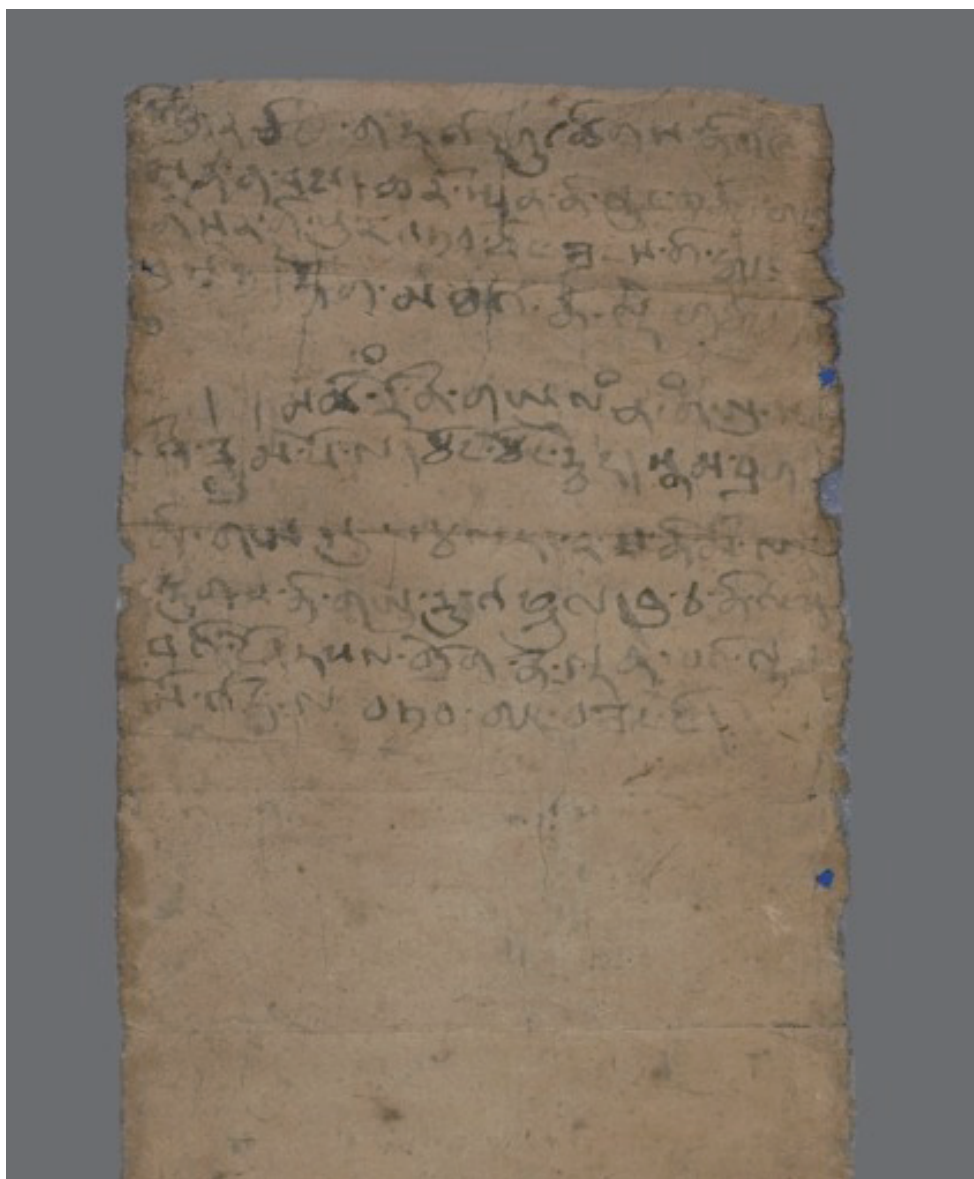




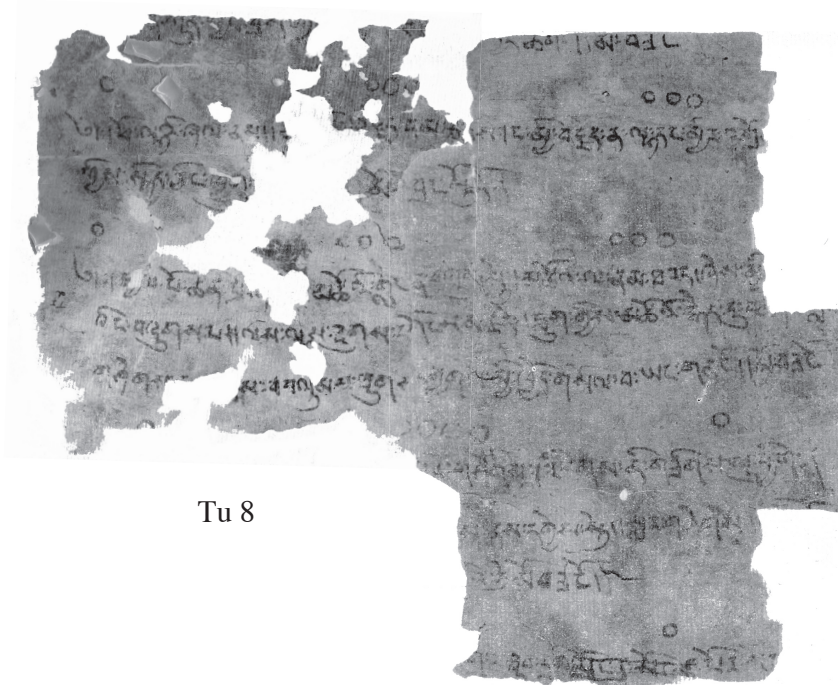








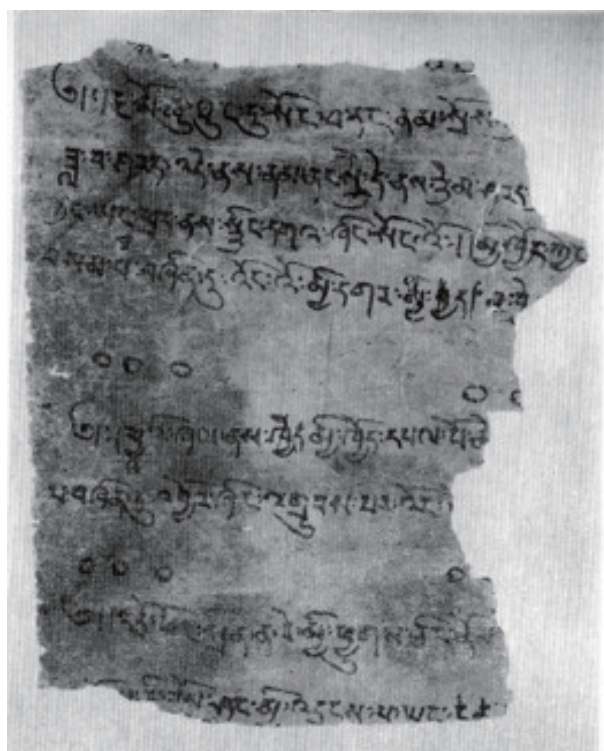
Tu 8 + Tu 12



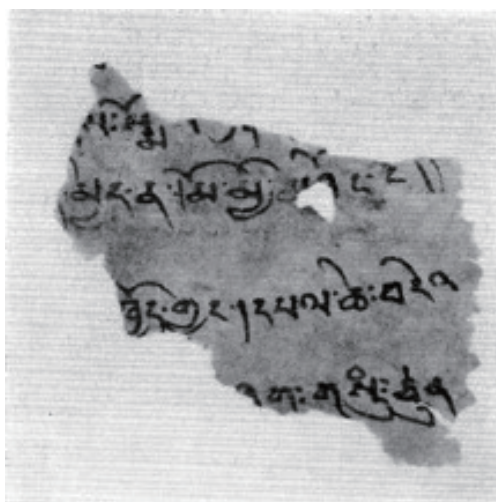
Tu 8

Tu 12

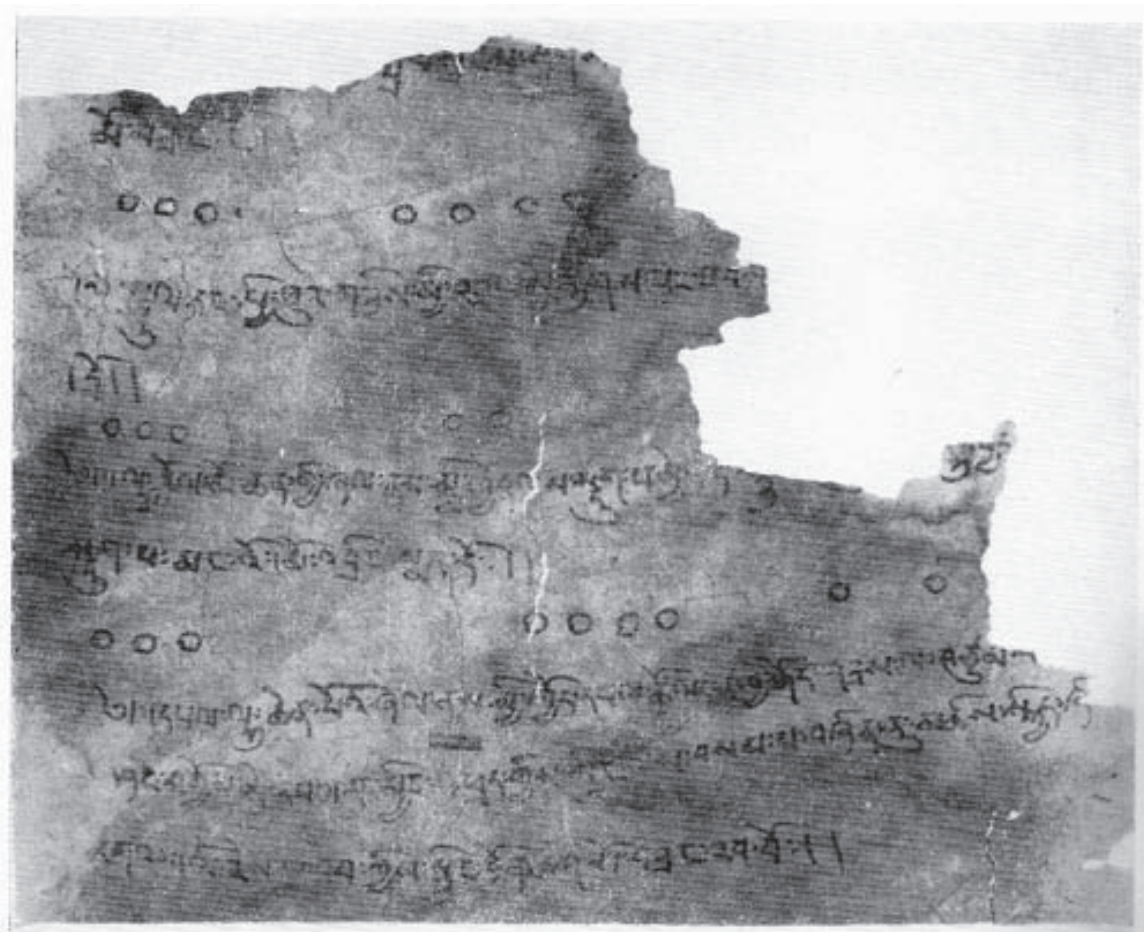
Tu 11



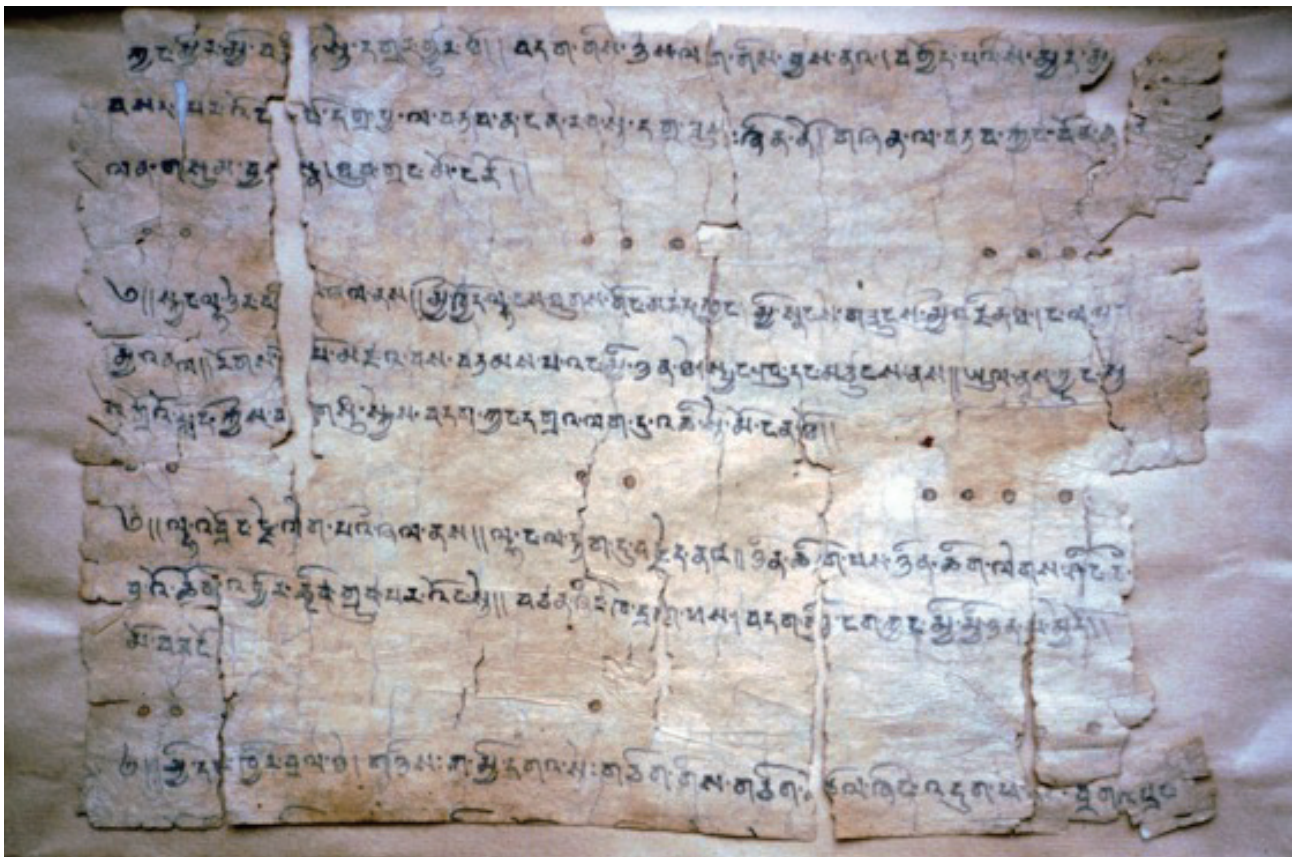
Tu 55



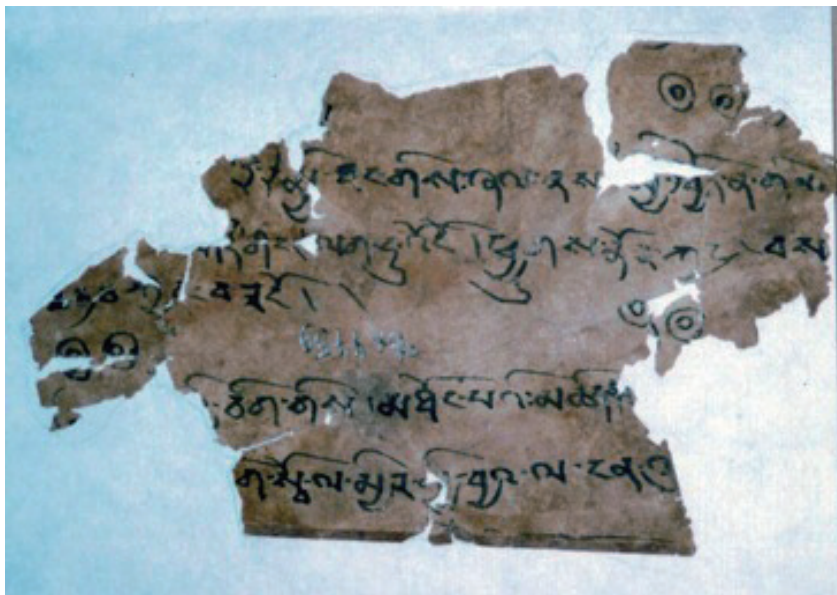




SI O 145

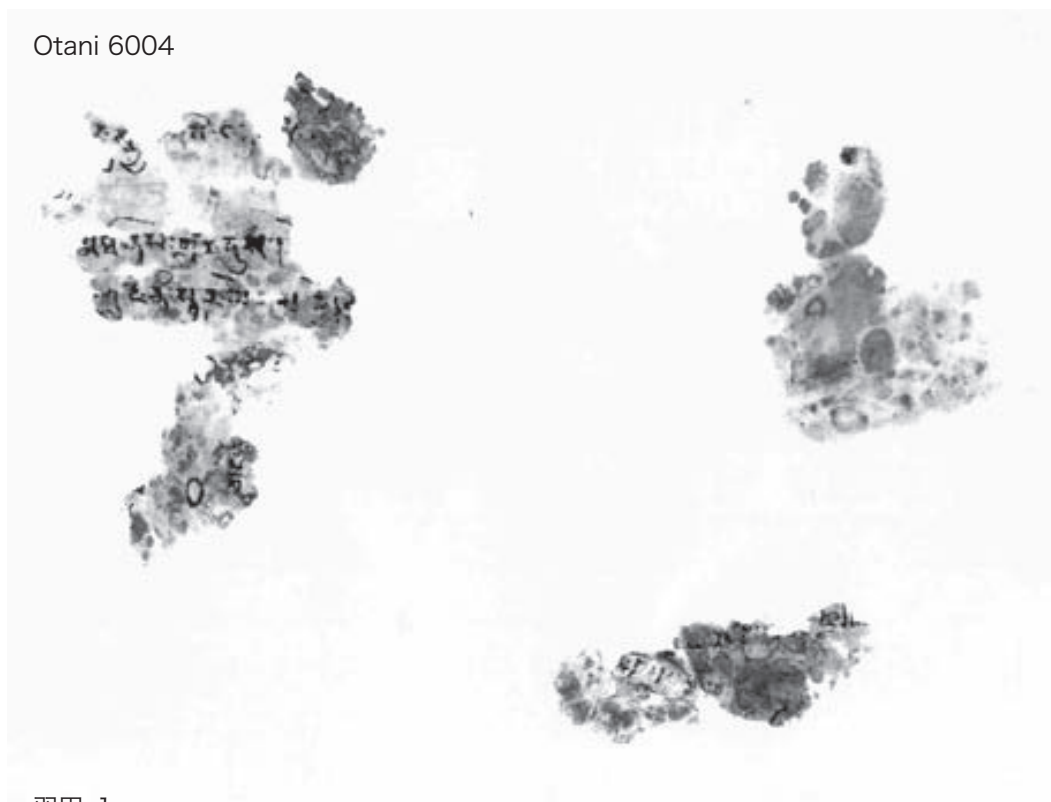


SI P 56a

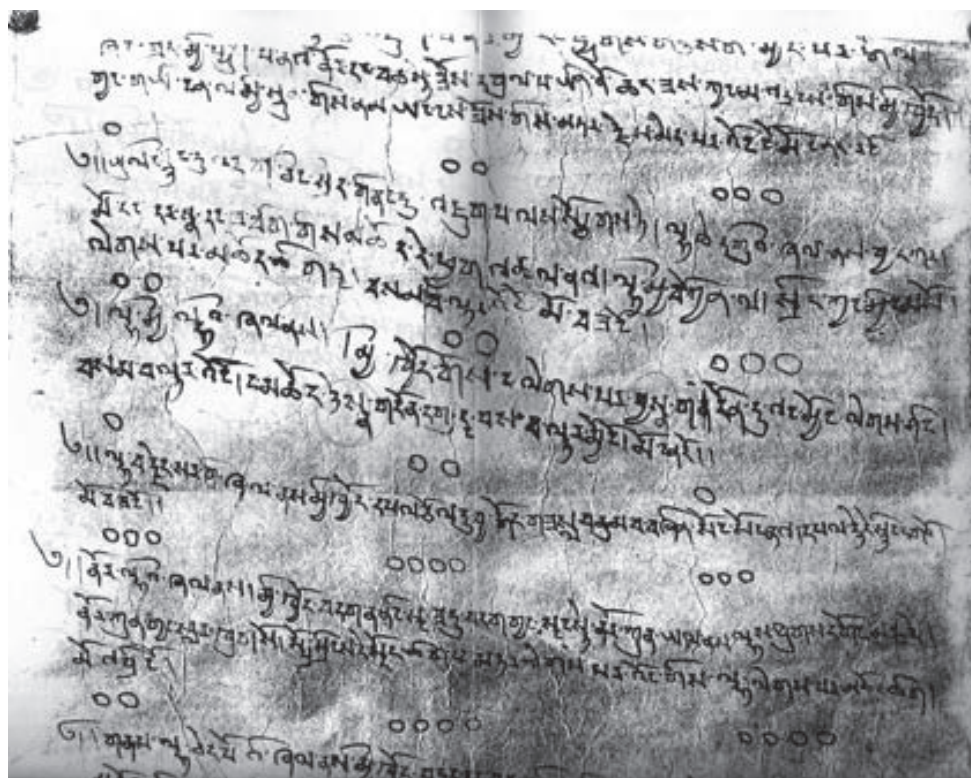


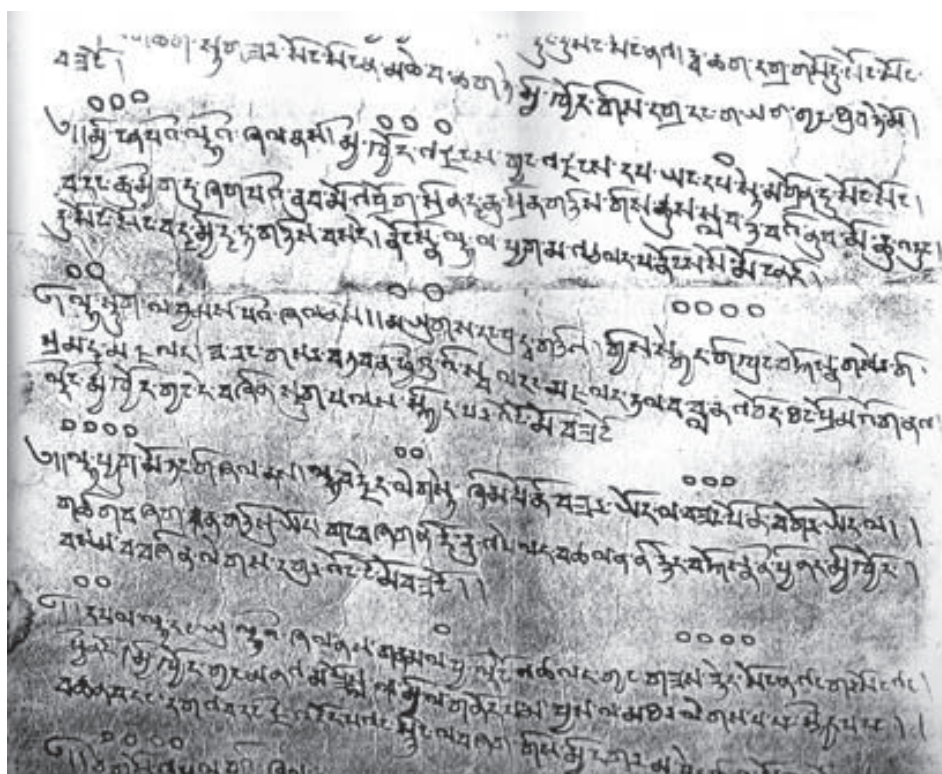
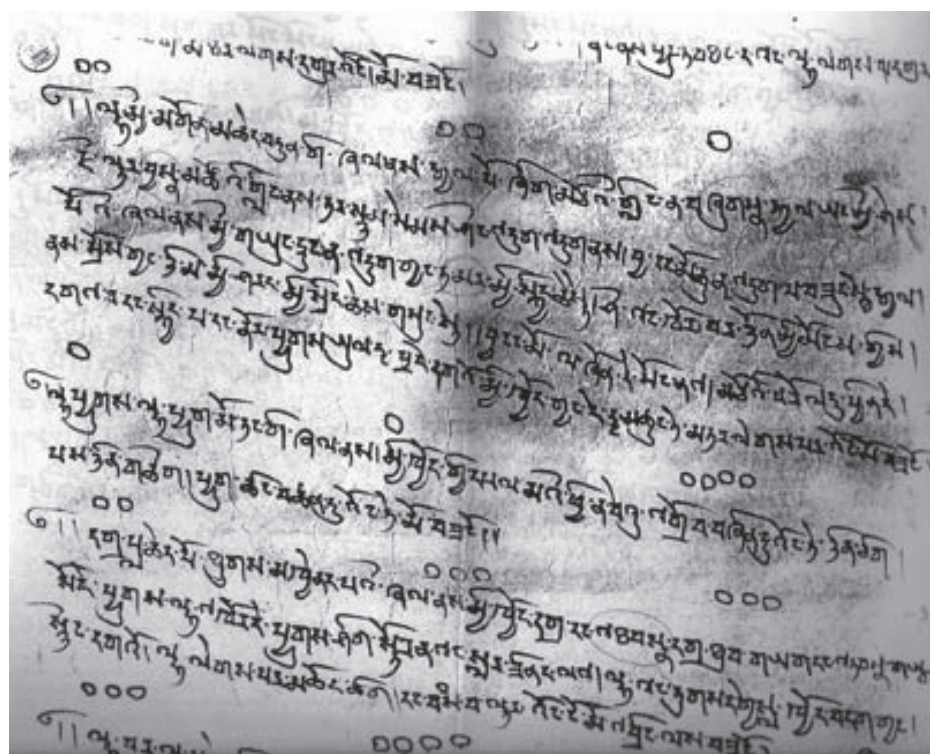


Otani 6004



羽田\_1



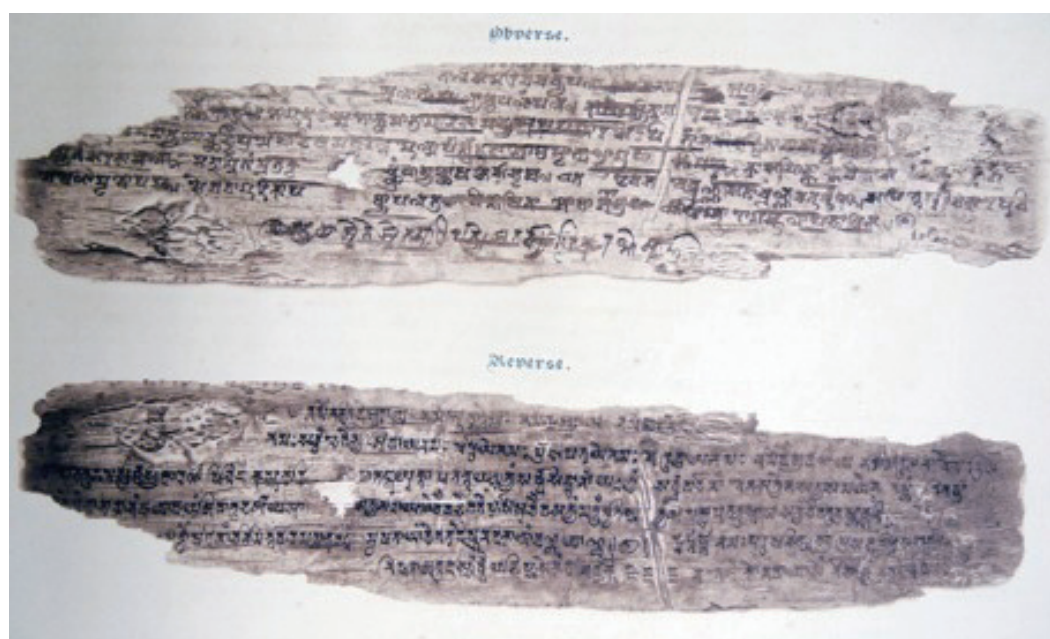








Bower Manuscript\_IV (一部のみ掲載)



Bower Manuscript\_V (一部のみ掲載)







此名摩羅首羅下擇凡四天王神諸云集政省之府而西坐稱名  
 多耳甲志心發願具說上事申之傍頭授子三遍然後補局若得好  
 卦原林上得身局許省三局信者省之不信者九下頂者如省細  
 月不失一此是隨求子至夢傳  
 二此是往主局決所有求事但知存心無不雜意時廣質自來家色亦  
 且得安卑小差行通達七占  
 三三此名天能天局如求事其天推讀所須即得來食自至思情未者並得信  
 號馬六畜燃星死損惟後七占  
 三三三此名五道神局求來計合走行通達有自自至若也信信如信信保始相發案  
 此作信成不吉  
 四四此名城威之局職行人年命至三三六十五其年命至五十五其官職如受  
 頂信然三寶重且月見事得貴條引事通達並平穩情不憂也  
 四四此是往主局決所有求事但知存心無不雜意時廣質自來家色亦  
 且得安卑小差行通達七占  
 二四此名地神局然其相傷如欲自至不須憂慮即來文相小思慮便往進  
 為重者三  
 四三此名生類局求事稍難不須求所作不成徒損功力此非愚不可為  
 四三此名自來主局決求事成即已証其將決受不用愁必自至至所慶勿重  
 省之大吉

三三此名摩羅首羅下擇凡四天王神諸云集政省之府而西坐稱名  
 多耳甲志心發願具說上事申之傍頭授子三遍然後補局若得好  
 卦原林上得身局許省三局信者省之不信者九下頂者如省細  
 月不失一此是隨求子至夢傳  
 二此是往主局決所有求事但知存心無不雜意時廣質自來家色亦  
 且得安卑小差行通達七占  
 三三此名天能天局如求事其天推讀所須即得來食自至思情未者並得信  
 號馬六畜燃星死損惟後七占  
 三三三此名五道神局求來計合走行通達有自自至若也信信如信信保始相發案  
 此作信成不吉  
 四四此名城威之局職行人年命至三三六十五其年命至五十五其官職如受  
 頂信然三寶重且月見事得貴條引事通達並平穩情不憂也  
 四四此是往主局決所有求事但知存心無不雜意時廣質自來家色亦  
 且得安卑小差行通達七占  
 二四此名地神局然其相傷如欲自至不須憂慮即來文相小思慮便往進  
 為重者三  
 四三此名生類局求事稍難不須求所作不成徒損功力此非愚不可為  
 四三此名自來主局決求事成即已証其將決受不用愁必自至至所慶勿重  
 省之大吉  
 三三此名摩羅首羅下擇凡四天王神諸云集政省之府而西坐稱名  
 多耳甲志心發願具說上事申之傍頭授子三遍然後補局若得好  
 卦原林上得身局許省三局信者省之不信者九下頂者如省細  
 月不失一此是隨求子至夢傳  
 二此是往主局決所有求事但知存心無不雜意時廣質自來家色亦  
 且得安卑小差行通達七占  
 三三此名天能天局如求事其天推讀所須即得來食自至思情未者並得信  
 號馬六畜燃星死損惟後七占  
 三三三此名五道神局求來計合走行通達有自自至若也信信如信信保始相發案  
 此作信成不吉  
 四四此名城威之局職行人年命至三三六十五其年命至五十五其官職如受  
 頂信然三寶重且月見事得貴條引事通達並平穩情不憂也  
 四四此是往主局決所有求事但知存心無不雜意時廣質自來家色亦  
 且得安卑小差行通達七占  
 二四此名地神局然其相傷如欲自至不須憂慮即來文相小思慮便往進  
 為重者三  
 四三此名生類局求事稍難不須求所作不成徒損功力此非愚不可為  
 四三此名自來主局決求事成即已証其將決受不用愁必自至至所慶勿重  
 省之大吉

## おわりに

本論文では、銅銭、鴉鳴、骰子という3種の占ト文書について考察を行った。これらの記述内容を占法ごとに照査し、書式を解明することを通して、同一占ト法に関する諸文書の相互関係を整理できたと言える。また、他言語文献のと比較によって、文書の成立背景についても分析を進めることができた。そこで、最後にこれらの共通性や独自性について俯瞰し、古チベット語占ト文書の全体像について思索してみたい。

銅銭、鴉鳴、骰子、それぞれの文書内で言及されている卦の総数には限りがある。銅銭では13卦、鴉鳴では90卦、骰子では64卦である。このうち、鴉鳴は卦辞が一覧表という形式で記され、それぞれには単一の事象に対する吉凶だけが短く示されている。つまり、この占法に対しては、問いをたてることは難しく、その意味で、占いというよりはむしろ予兆と位置づけるのがふさわしいだろう。一方、銅銭、骰子の両占ト文書には内容構成上の共通性がみられた。ここに露呈された構成や構成要素を、筆者は、古チベット語占ト文書に特有の、換言すれば、伝統的なチベット占ト文書のスタイルであると定義している。各文書は、(a)銅銭の表枚数／骰子の目の組み合わせ、(b)卦の名称、(c)事象ごとの吉凶、(d)総合的な吉凶という項目から成り立っている。しかし、(b)卦の名称には占ト法によって大きな違いがみられた。銅銭占ト文書中の(b)には、漢語文書や中国文化に由来する名称、チベット語の叙事的な名称が用いられている。一方、骰子占ト文書の場合には韻文や尊格が挿入されている。つまり、骰子占ト文書には、古代チベットの独自の世界観や伝統がより濃く反映されているみることができる。また、構成や書式を解明することによって、どの占法に属する文書であるかを見分けることが可能となった。断片文書や、未完成な記述の多い占ト文書の内容を判断するためには、これらの作業が必須であったと言える。

このような書式の共通性や内容の符合がみられるにも関わらず、文書の成立背景は単一ではなかった。鴉鳴、銅銭の両占ト文書は、出土地が敦煌に限られている上、類似内容をもつ漢語占ト文書が複数存在していた。これらとの内容や書式の比較から、チベット語銅銭占ト文書は、10世紀の敦煌漢人社会の中で、作成され流行していたものであることがわかった。しか

し、文書の作成にあたっては、チベット語占ト文書の書式が踏襲されていたのである。チベット支配期以降も、手紙や通達文書と同じく、占いというジャンルにおいてもチベットの書式が生き続け、チベット語文書が作り続けられていたことが傍証されたとと言える。

鴉鳴占ト文書からは、また別の背景がよみとれた。鳥の鳴き声や仕草などから前兆を導きだす方法は、各地で古い伝統をもち、時代的・地域的な普遍性をもっていると言える。そのため、鳥や鳥にまつわる予兆占トを記した文献は、インドや中国でも最古層の文化に属すると言える。一方、古代チベットでは、集積したこれらの予兆知識を、非常に便宜性の高い予兆一覧表に仕立て上げたのである。ここには、ジャンルごとに厳密に書式を制定する古代チベットの特徴がよく表れていると言えるだろう。そして、この一覧表は漢語占ト文書内にも吸収され、それらとの融合を果たして、漢語鴉鳴占ト文書へと改編されるのである。しかし、チベットの文化的伝統を反映した序文や、不吉を払う布施供物は、漢語文書へ導入されることはなかった。また、他の多くの文書と同じく、この一覧表は現代へは継承されていない。大藏經に収録される鴉鳴観察のみが命脈を保つことに成功したのである。

骰子占ト文書の成立背景は、残念ながら本論文では証明しきれなかった。しかし、構成の多様性や書式のバリエーション、そして韻文や尊格名といった内容の豊富さからは、この占法が特別な位置を占めていたことがうかがえた。骰子自体が、古代チベット社会では非常に大きな価値を持っていたことも、この占法が重要視されていたことを傍証する材料であろう。その状況に鑑みて、筆者は、骰子占トがチベット中央政府の管理下にあったのではないかという論を提示した。これについては、今後さらなる検討が必要だろう。しかし、文書点数と出土地の広範さからは、古チベット語占ト文書の中で最も普及していたのは、この骰子占ト文書であったと考えられる。現代チベット社会においても、骰子占トが必要とされ続けていることもそれを傍証していると言えるかもしれない。

また、銅銭占ト文書では「周易」や「孔子」という中国の要素に占トの来歴を求めて、その正当性や効果を高める由緒としていた。これと同じ技巧が、チベット大藏經に収められた Kakajariti にも認められる。こちらは、仏教の影響力によって鳥の声による占いを現代にまで伝えることに成功したのである。一方で、古チベット語の鴉鳴占ト書や骰子占ト書では、八百万の神々がその役割を担っていた。しかし、古代の（仏教国となる前の）チベットに帰属する



神々の効力は、現代にまで及ぶことはなく、各要素は仏教的に読み替えられて、現代へと継承されているのである。それは、現代社会で行われている骰子占トからも証明されるだろう。

チベット仏教を国教とするブータン王国の寺院では、1～6までの目を持つ立方体の骰子を利用した占いが現在でも行われている。占いを求める者は、願い事を心に念じて3つの骰子を振り、その合計数（3から18まで）によって吉凶が知らされるが、出た目が凶であった場合には、3回まで振り直すことが許されている。方法や道具には、古代チベットのものと隔たりがみられるにせよ、現代人の日常にも骰子占トが息づいていることは大変興味深い。また、それぞれに独自の内容をもった骰子占ト文書が各寺院には所有されているが、これらの多くは、吉上天女（*dpal ldan lha mo*）に占トの来歴をもとめているようである。従って、現代の骰子占トは、仏教に吸収され、仏教的な由縁を冠されているとみることができる。一方で、最も良い骰子の目の組み合わせは、各地域の土地神に由来すると考えられていることがわかった。つまり、仏教的な外観に改編されながらも、古代に通ずる要素が継承されている可能性が認められるのである。これらの寺院に残存する骰子占ト文書を照査し、その系譜を明らかにすることで、ブータンにおける骰子占トの体系が明らかにできるだろう。また、現代社会でのフィールドワークを通して、古文書には記されない占いの実施状況や社会的位置づけなどを理解することも期待できる。これを、今後の研究課題の一つとするとともに、本論文巻末に現在までに筆者が調査を実施した4つの寺院の骰子占ト書の翻字テキストを提示したい。

## 略号

- AFL* : Thomas, F. W., *Ancient folk-literature from north-eastern Tibet*, Akademie-Verlag, Berlin, 1957.
- BTT* : Taube, M., *Die Tibetica der Berliner Turfansammlung*, Akademie-Verlag, Berlin, 1980.
- Choix 2* : A. Spanien and Y. Imaeda (eds.), *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque nationale*, Tome 2, Paris, 1979.
- Das* : Das, Sarat Chandra, *A Tibetan-English dictionary*, The Bengal Secretariat Book Depot, Calcutta, 1902.
- DSCM* : Kalinowski, Marc (ed.), *Divination et société dans la Chine médiévale*, Bibliothèque nationale de France, Paris, 2003.
- Giles* : Giles, L., *Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the british Museum*, The Trustees of British Museum, London, 1957.
- IDP* : International Dunhuang Project (<http://idp.bl.uk/>)
- IMT* : Lalou, Marcelle, *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la bibliothèque nationale (Fonds Pelliot tibétain)*, 3 vols., Libr. d'Amérique et d'Orient, A. Maisonneuve, Paris, 1939-61.
- Jäschke* : Jäschke, Heinrich August, *A Tibetan-English dictionary*, The Charge of the Secretary of State for India in Council, London, 1881.
- Or.8210* : Iwao, K., Van schaik, S. and Takeuchi, T., *Old Tibetan texts in the Stein collection Or. 8210*, *Studies in Old Tibetan texts from central Asia*, vol.1, The Toyo Bunko, Tokyo.
- OTDO* : Imaeda, Y., Takeuchi, T. et al. (eds.), *Tibetan Documents from Dunhuang Kept at the Bibliothèque nationale de France and the British Library: Old Tibetan Monograph Series vol.1*, ILCAA, Tokyo, 2007. (ウェブサイト : <http://otdo.aa.tufs.ac.jp/>)
- OTC* : Takeuchi Thsuguhito, *Old Tibetan Contracts from Central Asia*, Daizo shuppan, Tokyo, 1995.
- OTM* : Takeuchi, Tsuguhito, *Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection of British Library*, Vol. I - II. The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko and The British Library, 1998.



Poussin : De la Vallée Poussin, Louis, *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-Huang in the India Office Library*, Oxford University Press, London, 1962.

TLTD 2 : Thomas, F. W. *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*, Part II, Royal Asiatic Society, London, 1951.

TLTD 3 : Thomas, F. W. *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*, Part III, Royal Asiatic Society, London, 1955.

【藏漢】：張怡孫（主編）『藏漢大辭典』民族出版社，北京，1985.

【翻訳】：柳亮三郎『梵藏漢和四譯翻訳名義大集』鈴木學術財団，東京，1916.

## 参考文献

### 【日本語文献】

池田末利

- 1976 『尚書』集英社, 東京.

池田哲郎

- 1984 「古代トルコ語の古い文書 (İrq Bitig) に就いて」『京都産業大学国際言語科学  
研究所報』第6巻-1

今枝由郎

- 1985 「中国・インド古典」山口瑞鳳編『講座敦煌6 敦煌胡語文献』大東出版社: pp.  
557-573.  
2006 『敦煌出土チベット文「生死法物語」の研究』大東出版社, 東京.

岩本篤志

- 2011 「敦煌占怪書「百恠圖」考 杏雨書屋敦煌秘笈本とフランス国立図書館所蔵本の  
関係を中心に」『敦煌寫本研究年報』第五號: pp.65-80.

越智淳仁

- 1994 「三人のDānaśīla説」について『日本西藏学会々報 第40号』: pp.27-34.

君島久子 訳

- 1977 『チベットのものいう鳥』岩波書店, 東京.

榊亮三郎

- 1916 『梵藏漢和四譯翻訳名義大集』鈴木学術財団, 東京.

鈴木一州

- 1978 『ローマ人の国家と国家思想』岩波書店, 東京.

R. A. スタン著 山口瑞鳳・定方晟訳

- 1993 『チベットの文化 決定版』岩波書店, 東京.

善波周

- 1952 「摩頭伽經の天文曆数について」『東洋学論叢 小西・高島・前田三教授頌壽記念』平樂寺書店, 京都.

高田時雄

- 2004 「明治四十三年（1911）京都文科大學清國派遣員訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第7巻：pp.13-27.
- 2007 「李滂と白堅 一李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景一」『敦煌寫本研究年報』創刊號：pp.1-26.

武内紹人

- 1987 「龍谷大学蔵チベット語文献の研究（Ⅲ）一大谷探検隊蒐集チベット語文書の研究（1）一」仏教文化研究所紀要第26集：pp.37-51.
- 2002 「帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方学』第104輯：pp.106-124（逆頁）.

月本昭男

- 1981 「古代メソポタミアにおける鳥ト占（auspiciu）について」『オリエント』第24巻第1号：pp.34-48.

辻直四郎

- 1970 『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫, 東京.

西田愛

- 2008 「古チベット語サイコロ占い文書の研究」『日本西藏学会々報 第54号』：pp. 63-77.

平田隆一

- 2001 「エトルリア・ローマ 政治をも左右した方位占トの世界」山田安彦編『方位読み解き事典』, 柏書房, 東京：pp.282-292.

森安孝夫

- 1980 「イスラム化以前の中央アジア史研究の現状について」『史学雑誌』第89編 第10号, 山川出版社：pp.50-71.

- 1985 「敦煌藏經洞出土の古代トルコ語（ウイグル語）文書」山口瑞鳳編『講座敦煌6 敦煌胡語文獻』大東出版社：pp.15-36.

矢野道雄・杉田瑞枝 訳注

- 1995a 『占術大集成 1』平凡社, 東京.  
1995b 『占術大集成 2』平凡社, 東京.

山口瑞鳳

- 1985 「占い手引書」山口瑞鳳編『講座敦煌6 敦煌胡語文獻』大東出版社：pp.533-540.  
1987 『チベット 上』東京大学出版社, 東京：pp.176-177.

### 【中国語文獻】

陳踐

- 2007 「敦煌藏文Ch. 9. II. 68号“金錢神課判詞”解説」『蘭州大学学報』, 第3期.  
2008 「敦煌藏文P.T.127号（正面）十二生肖命相文書解説」『記念柳陞祺先生百年誕辰 暨藏族歷史文化論集』, 中国藏学出版社  
2011a 「P.T.1051骰卜」『敦煌吐蕃文獻選輯 文化卷』, 民族出版社, 北京：pp.90-96.  
2011b 「P.T.1046 骰卜」『敦煌吐蕃文獻選輯 文化卷』, 民族出版社, 北京：pp.108-111.  
2011c 「P.T.127（背面）時日宜忌」『敦煌吐蕃文獻選輯 文化卷』, 民族出版社, 北京：pp.161-164.

陳楠

- 2007 「敦煌藏漢烏卜文書比較研究－P.T.1045號、P.3988號與P.3479號文書解析」『敦煌吐魯番研究』第10卷：pp.345-369.

陳于柱

- 2009 「敦煌藏文本祿命書P.T.127《推十二時人命相屬法》的再研究」『中国藏学』2009-1：pp.157-160.

格桑央京

- 1998 「敦煌藏文写卷P.T.55号譯釋」『藏学研究』第九輯：pp.248-271.  
2005 「敦煌藏文写卷Ch.9.II.19号初探」『中国藏学』, 第2期.

- 2006 「敦煌藏文P.T.351占卜文書解讀」『敦煌學輯刊』,第1期.
- 郝春文、金滢坤 (主編)
- 2006 『敦煌社會歷史文獻釋錄 第一編 英藏敦煌社會歷史文獻釋錄 第四卷』社會科學文獻出版社,北京.
- 郝春文、趙貞 (主編)
- 2010 『敦煌社會歷史文獻釋錄 第一編 英藏敦煌社會歷史文獻釋錄 第七卷』社會科學文獻出版社,北京.
- 黃維忠
- 1998 「P.T.55号<十二支緣生相>初探」『賢者新宴』第2輯, : pp.211-215.
- 黃正建
- 2001 「敦煌占卜文書与唐五代占卜研究」學苑出版社,北京.
- 羅秉芬・劉英華
- 2006 「敦煌本十二生肖命相文書藏漢文比較研究」『安多研究』,民族出版社,北京 : pp.1-27.
- 恰白・次旦平措 主編
- 1991 『龍朵阿洛桑全集 下冊』 (*klong rdol ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum / glegs bam gnyis pa*), 西藏藏文古籍出版社.
- 榮新江
- 1997 「李盛鐸写卷的真与偽」『敦煌學輯刊』第二期.
- 王堯・陳踐
- 1986 『吐蕃簡牘目錄』文物出版社,北京.
- 1987 『吐蕃時期的占卜研究—敦煌藏文寫卷譯釋』,香港中分大学出版社,香港,
- 1988 『敦煌吐蕃文書論文集』四川民族出版社.
- 謝后芳
- 1982 「古代藏族卜辞」『西藏研究』1982-第3期 : pp.147-156.
- 張娜麗
- 2006 「羽田亨博士収集「西域出土文獻写真」について」『お茶の水史学』第50卷 : pp.1-64.

張怡孫（主編）

1985 『藏漢大辭典』民族出版社，北京。

趙貞

2010 「試論Pt.1045《烏鳴占》的來源及其影響」『敦煌學輯刊』2010-4：pp.71-80.

鄭炳林，黃維忠（主編）

2011 『敦煌吐蕃文獻選輯 文化編』民族出版社，北京。

### 【歐米語文獻】

Bacot, Jaque

1913 “La table de présages signifiés par l’éclair, texte tibétain publié et traduit.” *Journal Asiatique* : pp.445-449.

Bacot, Jaque, Thomas, Fredrick William, Toussaint, Gustave-Charles.

1940-1946

*Documents de Touen-houang relatifs à l’histoire du Tibet*, Librairie orientaliste Paul Geuthner, Paris.

Bühler, Johann Georg

1891 “A further note on the Mingai or Bower Ms.” In *Wiener zeitschrift für die kunde des morgenlandes* 5 : pp.302-310.

Clauson, Gerard

1961 “Notes on the Irk Bitig.” *Ural-Altäische Jahrbücher* 33 : pp.218-225.

Coblin, W. South

1991 “A study of the old Tibetan Shangshu paraphrase, part I.” *Journal of the American Oriental Society*, vol. 111-No. 2 : pp.303-322.

Cordier, P.

1909-1915

*Catalogue du fonds Tibétain de la bibliothèque nationale troisième* 3vol., Imprimerie nationale, Paris.

Crescenzi, Antonella and Torricelli, Fabrizio

1995 “A Tun-huang text on dreams: Ms Pelliot tibétain 55-IX.” *The Tibet Journal* vol.XX, No.2 : pp.3-17.

Dani, A. H.

1963 *Indian Palaeography*. Oxford.

Dalton, Jacob and van Schaik, Sam

2006 *Catalogue of the Tibetan Tantric Manuscripts from Dunhuang in the Stein Collection*, Brill, Leiden, 2006.

Das, Sarat Chandra

1902 *A tibetan-English Dictionary*, The Bengal Secretariat Book Depôt, Calcutta, 1902.

Dotson, Brandon

2007 "Divination and law in the Tibetan empire: The Role of Dice in the Legislation of Loans, Interest, Marital Law and Troop Conscription." In Kapstein, M and Dotson, B. (eds.) *Contribution to the Cultural History of Early Tibet*, Brill, Leiden : pp.3-77.

Filliozat, Jean

1953 "Les science." In Louis Renou et Jean Filliozat, *L'Inde classique. Manuel des études indienne*. Tome II, Bibliothèque de École Française d'Etrême Orient, Imprimerie Nationale, Paris. : pp.138-194.

Francke, A. H.

1924 "Tibetische Hundschriftenfunde aus Turfan." *Sitzungsberichet der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, III : pp.4-20.

1928 "Drei weitere Blätter des tibetischen Lousbuches von Turfan." *Sitzungsberichet der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, VIII : pp.110-118

Hamilton, James

1975 "Le colophone de l'Irq Bitiq." In *Turcica VII* : pp.7-19.

Hoernle, A. F. Rudolf

1891 "A note on the date of the Bower Manuscript." *Journal of the asiatic society of Bengal* 60 : pp.79-96.

1893-1912

*The bower manuscript; facsimile leaves, Nagari transcript, romanised transliteration and English translation with notes, Archaeological survey of India, Calcutta.*

Iwao, Kazushi., Van schaik, Sam. and Takeuchi, Tsuguhito. (ed)

2012 *Old Tibetan texts in the Stein collection Or.8210 (Studies in Old Tibetan texts from central Asia, vol.1)*, The Toyo Bunko, Tokyo.



Jäschke, Heinrich August

- 1881 *A Tibetan-English Dictionary*, The Charge of the Secretary of State for India in Council, London.

Kalinowski, Marc

- 1991 「敦煌數占小考」 山田慶兒・田中淡 編『中國古代科學史論』續編, 京都大學人文科學研究所: pp.131-156.

Kalinowski, Marc ed.

- 2003 *Divination et société dans la Chine médiévale*, Bibliothèque Nationale de France, Paris.

Lalou, Marcell

1939-61

*Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang: conservés à bibliothèque nationale (Fonds Pelliot tibétain)*, 3 vols., Libr. d'Amérique et d'Orient, A. Maisonneuve, Paris.

- 1952 "Rituel bon-po des funérailles royales." *Journal Asiatique*, 240, pp.339-361.

Laufer, Berthold

- 1914 "Bird divination among the Tibetans." *T'oung Pao* 15: pp.1-166.

Lin, Shen-yu

- 2007 "The Tibetan Image of Confucius." In *Revue d'Etudes Tibétaines*, Paris.

Loewe, Michael & Blacker, Carmen

- 1981 *Divination and oracles*, George Allen & Unwin, London: pp.3-37.

Lüders, Heinrich

- 1907 *Das Würfelspiel im alten Indien*, In *Abhandlungen der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaften*, Göttingen

Macdonald, Ariane Spanien

- 1971 "Une lecture des Pelliot Tibétain 1286, 1287, 1038, 1047, et 1290." In A. Macdonald (ed.), *Études Tibétaines dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*, Librairie d'Amérique et d'Orient, A. Maisonneuve, Paris, : pp.190-391.

Meulenbeld, G. Jan

- 2000 *A history of Indian medical literature* Vol. IIA and Vol. IIB, Egbert forsten, Groningen.

Morgan, Carole

- 1987 "La divination d'après les croassements des corbeaux dans les manuscrits de Dunhuang." *Cahiers d'Extrême-Asia* 3: pp.55-76.

Moriyasu, Takao

- 1981 “Qui des ouigours ou des tibétains ont gagné en 789-792 à Bes-baliq?” *Journal Asiatique*  
Tome CCCLXIX : pp.193-205.

Mortensen, Eric David

- 2003 Raven augury in Tibet, northwest Yunnan, inner asia, and circumpolar regions; A  
study in comparative folklore and religion, Harvard University, Ph.D. thesis.

Nebesky-Wojkowits, R. D.

- 1957 *Oracles and demons of Tibet*, The Hague; repr. Book Faith India, New Delhi, 1993.

Nishida, Ai

- 2011 “An old Tibetan divination with coins: IOL Tib J 742.” In Y. Imaeda, M. T. Kapstein  
and T. Takeuchi (eds.), *New Studies of the Old Tibetan Documents: Philology, History  
and Religion: Old Tibetan Documents Online Monograph Series*, vol.3, ILCAA, Tokyo :  
pp.315-327.

Norbu Chopel

- 1983 *Folk culture of Tibet*, Library of Tibetan Works & Archives, New Delhi : pp.65-71.

Roy, Satindra Narayan

- 1929 “The Indian crow.” *Anthropological Society of Bombay* vol. 14 : pp.525-535.

Ruegg, David Seyfort

- 1981 *The literature of Madhyamaka School of Philosophy in India*, O. Harrassowitz,  
Wiesbaden.

Sander, L.

- 1987 “Origine and date of the Bower Manuscript, a new approach.” In *Investigating Indian  
art : Proceedings of a symposium on the development of early Buddhist and Hindu  
iconography held at the meseum of Indian art Berlin in May 1986*, Museum für indische  
kunst, Berlin.

Sharma, Sharmishta

- 1992 *Astrological lore in the buddhist Śārdūlakarṇāvadāna*, Eastern book linkers, Delhi.

Stein, Aurel M.

- 1907 *Ancient Khotan*, vol. 2, 3, Clarendon Press, Oxford.  
1921 *Serindia* vol. IV, Clarendon Press, Oxford.

Stein, Rolf Alfred

- 1992 “Tibetica antiqua VI. Maximes confucianistes dans deux manuscrits de Touen-houang.”  
*BEFEO*, LXXIX : pp.9-17.

Taube, Manfred

- 1978 “Eine Namen und Title in tibetischen Briefen der Berliner Turfan-Sammlung.” In L. Ligeti (ed.) *Proceedings of the Csoma de Körös Memorial Symposium* : pp.487-502.
- 1980 *Die Tibetica der Berliner Turfansammlung*, Akademie-Verlag, Berlin.

Takeuchi, Tshuguhito

- 1990a “A group of Old Tibetan letters written under Kuei-Chün: a preliminary study for the classification of Old Tibetan letters.” *Acta Orientalia Scientiarum Hungaricae* 44(1-2) : pp.175-190.
- 1990b “On the Tibetan texts in the Otani collections.” In Haneda, A. (ed.) *Documents et Archives provenant de L'asie centrale*, Dohosha, Kyoto : pp.205-216.
- 1995 *Old Tibetan contracts from central Asia*. Tokyo: Daizo shuppan, Tokyo.
- 1998 *Old Tibetan manuscripts from east Turkestan in the Stein collection of the British library*. Volume I- III., The centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko and The British Library, Tokyo.
- 2006 “Old Tibetan buddhist texts from the post-Tibetan imperial period (md-9c. to late 10c.). In *Higashi Turkestan shutudo “Kokan monjo” no sōgō tyōsa* 東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査 (A report for Grant-in-Aid for Scientific Research (B), headed by Masaharu Arakawa, 2003-2005). : pp.39-47.

Tsuguhito Takeuchi and Ai Nishida

- 2009 “The present stage of deciphering Old Zhangzhung.” In *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics, Senri ethnological studies* 75 Yasuhiko Nagano ed. : pp.151-165.

Tekin, Talat

- 1993 *Irk bitig -The book of omens-*. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.

Thomas, Fredrick William.

- 1951 *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*, Part II, Royal Asiatic Society, London.
- 1955 *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*, Part III, Royal Asiatic Society, London.
- 1957 *Ancient folk-literature form north-eastern Tibet*, Akademie-Verlag, Berlin.

Thomsen, Vilhelm

- 1912 “Dr. M. A. Stein’s manuscripts in Turkish “Runic” script from Miran and Tun-huang.” In *Journal of Royal Asiatic Society* : pp.190-214.

Uray, Geza

- 1983 “Tibet’s connections with Nestorianism and Manicheism in the 8th-10th centuries.” In Steinkellner, E. and Tauscher, H. (eds.) *Contributions on Tibetan language, history and culture*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien : pp.399-429.

De la Vallée Poussin, Louis

- 1962 *Catalogue of the Tibetan manuscripts from Tun-Huang in the India office library*, Oxford University Press, London.

Waddell, Austine

- 1974 *Bhuddism & Lamaism of Tibet*, heritage Publishers, New Delhi.  
First published in London, 1895.

Weber, Albrecht

- 1859 “Über ein indisches Würfel-Orakel.” In *Monatsberichte der Königlichen Akademie der Wissenschaften*, Berlin : PP.158-180.

White, David Gordon

- 1995 “Predicting the future with dogs.” In *Religions of India in practice*, Donald S. Lopez Jr. ed., Princeton University Press, Princeton : pp.288-330.

Wylie, Turrell V.

- 1959 “A standard system of Tibetan transcription.” In *Harvard Journal of Asiatic Studies* 22 : pp.261-267.

【カタログ等】

『影印 北京版 西藏大藏經 丹殊爾 經疏 修身部 雜部一 144』 西藏大藏經研究會, 東京・京都,

1957.

『影印 北京版 西藏大藏經 總目錄・索引』 財団法人 鈴木学術財団, 東京, 1962.

『特別展覧会 シルクロード 文字を辿って ロシア探検隊収集の文物』 京都国立博物館, 京都,

2009.

『敦煌秘笈 影片冊一』 杏雨書屋, 2009.

『敦煌叢刊初集 十五 敦煌掇瑣』 黃永武 主編, 新文豐出版公司, 臺北, 1985.

『敦煌寶藏』 黃永武 主編, 新文豐出版, 臺北, 1986.

【巻末付録】

## ブータン王国における骰子占ト文書

翻字テキスト

## 【Khyi med lha khang】

### Page 1

001 mthong ba chos kyis ma'i sho mo bzhugs so //

### Page 2

001 \$\$ // shog mig gsum pa babs na / lar mo 'bring tsam yin //  
002 nam phug ngan zhing nyi zla 'gribs ngan pas / pha ma gyi bsrung ma'i bskang sogs 'bul /  
003 khyim phyva ni / bud med la ngan / god kha rgyal mdos bya / gzhi grogs phyva ni phyin chad  
004 na tsha dang god kha yongs pas gs/ god srid mnan / nor phyva ni / g.yang 'gugs rgyal na

### Page 3

001 \$\$ // dpung rgyan lhag / don phyva ni / bsam pa 'gru pa dka' / myur du  
002 'grub mi yong bas / nad yun ring ba 'am / sman byed rim sgro bya / ljon shing rlan  
003 dang phrad pa skyon med / srid phyva ni / dgra [po dmar] chen dbang zhu / chung srid mnan /  
rlung  
004 dar phyar / tshong phyva ni / khe mi che bas / gus yong pas / lam phyva ni / rgyal po'i gnod

### Page 4

001 pa'i ngo / gcan gzigs zar ba'i sha ma za / bkris brtsegs pa lhag / shar + dang + lho phyogsu  
[rnyed] [ngo] [che]  
002 sho mig bzhi pa babs na / lar mo 'di ngan pas / rim gror bka' 'gyur lhag sbyin sreg  
003 btang / mchod rten sku dkar gsol / khyim phyva ni / na tsha res rgyun med chad / pho lha  
004 gsol / lan chags gtor ma thong / sa bdag klu btsan gnod pas / grogs phyva ni / [grogs] shin  
005 tu ngan pas / nor phyva ni / nor lha sde lnga lhag / don phyva ni / sgrol ma [mNaDI] bzhi pa btang

### Page 5

001 \$\$ // nad phyva ni / nad gzi che / sning rlung bad kan dang phrag rlung grangs shes  
002 che [flower? mark] bcas thabs gangs mang byed / don phyva ni / ma mo dang the'u rang 'dre mo  
yul lha thab  
003 zhob sogs gi gnod pas / sa tsatsha 'debs / lha bsangs btang / srid phyva ni / phung srid mnan  
004 gtor bzlog bya / tshong phyva ni / phrad du khe mi yong phugs bzang / laM phyva ni / byang  
phyogs  
005 la 'gro na / pha ma'i bsten pa'i chos skyong bshags pa phul / 'bring rtsam yin // //



Page 6

- 001 sho mig lnga pa babs na / lar mo 'di bzang ngo che / rgya mtsho dkyil nas gser [gas?]  
002 rnyed [flower mark?] 'phrad phug gang la bzang zhing / khyad par du bla chen dang mi dpon  
bzang  
003 khyim phyva ni / tshe ring bde zhing skyid / dbang thang rlung rta dar / grogs phyva ni / dgra  
dpung  
004 dkyil nas nor bu lon / rta lug mi nor [brgyal l brgya la] 'phal ba'i ngo / nor gzungs rta  
005 gzungs gang mang lhag / don phyva ni / ci bsam grub cing yong ba'i ngo / nad phyva ni /

Page 7

- 001 \$\$ // khon grib dang gshin grib yong bas / mi gtsang ba la 'dzem /  
002 nmam 'joms gang mang thon / srog phyva ni / srog gi ka ba brtan pas bzang / don phyva ni  
003 nub kyi phyogs nas rgyal po kor dang btsan gyi gnod pas / klu buM nyaMs / sa bdag nod  
004 pas [flower mark?] sa bdag don 'grol ba sgrubs / srid phyva ni / dge slong bzhi bzlog bya / srid  
005 bzlog gang drag btang / dgra phyva ni / hor 'dra thang la rgyug pa yis / dgra srog

Page 8

- 001 gcod cing dgra las rgyal / zhes shin tu bzang / tshong phyva ni / bsam pa bsgrub  
002 cing dngos grub yong / lam phyva ni / dgra lha dpang bstod bya / laM du bzhugs na  
003 bde bar skyes // sho mig drug pa babs na / lar mo 'di ngan pa yin /  
004 pha spun nang 'khrug zhugs / [gtsugtor] dkar mo bzlog rgyur lhag / sgrol ma g.yul  
005 mdos btang / khyim phyva ni / glo bur rkyen dang 'thab 'dzing 'ong / bza' tshang bya

Page 9

- 001 \$\$ // bral ngo yong pas / bu tsha shi chad byung / buM thang klog rgyab  
002 grogs phyva ni / grogs ngan pa rgya mtsho [lbu l wu] ba dang 'dra / nor phyva ni / dzambhala  
dang nmam  
003 sras nor lha gser 'od 'grub / bya spu rlung gis khyer ba 'dra / tshe dbang zhu /  
004 ma nyes pa'i kha g.yo phobs / kham chu nag po gang drag ton / nad phyva ni / shi  
005 chad ma byung na / nad yun ring ba'i / mdo mang dang brgyad stong pa gtor gzugs

Page 10

- 001 mdo rgya chen rol pa lhag / don phyva ni / nub nas rgyal po dang pho shin kor [byi l gyi]  
002 nod pas / dgra phyva ni / dmar la 'gro na bzang / dgra srid mnan / gser  
003 phar gtod nang ha cang mi che / lam phyva ni / 'gro dka' tsam gyi sdug bsngal byung

- 004 thag mi ring ba nub byang phyogs su tsam pa bzang // sho mig bdun pa bab  
 005 na [flower mark?] lar mo 'di bzang ba yin / lha khang bzhi la rgyal mtshan 'dzug / [dud?]

Page 11

- 001 \$\$ // dkar 'bud cing gNeD brdungs / chos kyi gdan sa thob pa  
 002 dang [flower mark?] gdon pa gsuM gyi bdag po byed / mi skya yin na rgyal po dang / dmag dang  
 003 'bangs kyi bdag po byed / khyim phyva ni / dga' ba'i glu gar rtse ste bzang ngo / bde  
 004 skyid kyi nyi ma dgung la shar / mi nor dar zhing rgyas pa bzang / grogs phyva ni / kha grogs  
 005 mi cha 'dra yang gting grogs che bar 'dugo / nor phyva ni / bsod nams [kyir ba l kyi ra ba] g.yang

Page 12

- 001 gi nor bu len pa 'ong / nad phyva ni / nad pa shin tu lceb pa'i 'brug 'brug [lo pa?]  
 002 sbrul lo pa ngan / bde mchog zhi ba'i sbyin sreg bsgrub / srog phyva ni / lcags  
 003 srog ga ba brtan pas bzang / nad pa yin na du 'tshor bas dka' / rigs  
 004 gang che ba phugs bzang yang phrad du lam du rgyug / mi sna tshogs yong ba dang / na tsha  
 rgyun  
 005 mi chad pa yong / rgyal mdos dang kor mdos btang / don phyvag ni / rgyal [po]

Page 13

- 001 \$\$ // btsan mo 'dre sogs / shar phyogs nas gnod / brgyad stong klog [-?]  
 002 brgya bzhi bya / khyim phyva ni 'on kynag bsrung ma 'phrug / rkyen nad 'jigs phran tsho  
 003 zhis yong nyen 'du / bsrung ma'i dus mchod ma chag pa bgyis / grogs phyva ni /  
 004 grogs ngo yod kyang dbang du 'gro dog che'o / nor phyva ni / zas nor long spyod '[y?][e-]  
 005 ba [flower mark?] pha ma'i gong rims cung zad cig yong ba gda' / gser 'od g.yang [skung]

Page 14

- 001 lhag [flower mark?] phyva 'gugs g.yang 'gugs gang drag rgyab / don phyva ni / ji ltar  
 002 bzhin 'phral ngan phugs 'grub pa che / nad phyva ni / rta mgrin dbang brgya rtza zhu /  
 003 [seMan l sen naM] srog bsLu / phyi'i glud skyur / lus bsgyur ming srog / don phyva ni /  
 004 shar phyags nas btsan dang mo 'dre rgyal po gnod ngo che / brgya bzhi btang /  
 005 cha gsuM btang / tshong phyva ni / gser dngul kyi tshong yin na bzang / rta

Page 15

- 001 \$\$ // nor yod kyang [pha ma l pham] pa'i ngo che / lam phyva ni / lam  
 002 shul grog kyang skyid pa mchis / srung ba'i lha bsangs btang / byang gi phyogs

- 003 nas rim bzhin rtsad chod do ci rigs kyi ngo yod do // sho mig brgyad par babs  
 004 na [flower mark?] lar mo 'bring stod yin / bzang ngan gnyis dbye byed nad gzhi [bad l bda] kan  
 phrag  
 005 rlung shed che / zas bcod bsrung / rlung dar 'phyar / don phyva ni / yul lha

Page 16

- 001 'phrod pas rgyal po dang bdud btsan gyi gnod pas / srid phyva ni / mi [la?] [dga']  
 002 bya [flower mark?] mal sar spo / lam phyva ni / lha bsang <'>khrus gsol bya / phyogs  
 003 bcu mun sel ma lhag / tshong phyva ni / re zhig tshong kha sra zhing gzhan gyis  
 004 gcol ba 'ong ngo / nub byang gi phyogsu rnyed ngo che // sho mig dgu par  
 005 [th]abs na / lar mo bzang bar che / khams gsuM [thaMd] dbang du 'dus / stong

Page 17

- 001 \$\$ // gsuM [thaMd] zil gyis gnon / sengeg gang ri 'dzin pa la / [srog l spog]  
 002 chags gzhan las skrag mi dgos / chos pa gang du 'gro ba la / gsung gis dam  
 003 chos 'phel bar mchis phrad phugs gnyis ka kun la bzang / bsod nams ljon shing  
 004 mgo la g.yu me tog 'khor / khyim phyva ni / khang khyim bzang shing thab gzhobs  
 005 'dzems / grogs phyva ni / grogs ngo shin tu che / bang mdzod nor gyis khengs / nor [bu] ni

Page 18

- 001 gtam snyan ngo so dang bcas myur du 'grub / mkha'gro sengeg gdong ma'i [bzlog] [--yu]  
 002 gyis / don phyva ni / dkaug rtsegs pa dang 'phags ma 'od zer can ma lhag / nad phyva ni /  
 003 rta dang lug lo pa 'tshub / grib ngo yong / rnam 'joms khrus bya / sa rko rdo glog  
 004 mi bya / sa bdag gnod pa 'du / srog phyva ni / cho dbang zhu / klu'i gdon  
 005 'grol bya / klu 'bum lhag / srid phyva ni / mtshon cha phobs pa'i pho shin dang

Page 19

- 001 \$\$ // srog cad dgra lha dang btsan gyis gnod pa'i sbyin sreg gang  
 002 mang tang / tshong phyva ni / phar gtsong nang khe che / tshur nyor na shin tu legs pa bzang /  
 003 lam phyva ni / rta dang nor la jag pa rku ma 'ong / btsan sku rkyang btang / nor brgyun  
 004 ma lhag rkun ma'i lag tu ma tshud pa gda' bas btsal na myur du rnyed do //  
 005 sho mig bcu pa babs na / + lar mo 'di 'bring [-am] yin + rang gis bstan pa'i bla ma dang / mi dpon  
 chen po

Page 20

001 bsten pa'i dgon pa mchog 'bul / lhaM mgon tshogs rgyab phul / khyim phyva ni /  
 002 rtsod pa dang 'gyod pa dang 'thab sar mi 'gro / grogs phyva ni / grogs bu med ngan pa  
 003 zhig 'ong / don phyva ni / rgyal po'i byed kha 'ong / byed kha bzlog / nad phyva ni  
 004 bya sprel stag ngan pa gda' / rim gror rgyas 'bring bsdu gsuM bya / rlung dar  
 005 'phyar / tsha tsha 'debs / lan chags gtor ma brgya rtsa btang / srog gi mu

Page 21

001 \$\$ // thag mi chad cing / srog cha bzang / gdom chags 'dre  
 002 dang dpe har btsan gyi rang gi gnyen phyogs nas gnod ngo che / tshong phyva ni / thag ring  
 003 du 'gro na khe spo tsams / gud phobs pa 'ong / nam sras g.yang 'gugs bya / lam  
 004 phyva ni / mi kha dang shi chad yod / dkaug la skyabs 'tshol / bkra shis brtsegs pa  
 005 lhag [flower mark?] slar ngor stor gyi ngo yong // sho mig [bcu cig] pa la babs na / lar

Page 22

001 mo 'di bzang / dung gi skad ltar gtam snyan thos / ljon shing g.yu [yi] '[-]angs  
 002 pa las / khu byug sngon ma'i gsung snyan sgrog / 'phral phugs gnyis ka bzang  
 003 mchu sde lnga lhag / srog phyva ni / tshe srog lcags kyi sdong po la sta mgrin tub na  
 004 mi chod pa'i bzang ngo / don phyva ni / nyi ma lho nub phyogs nas mi 'grus rjes  
 005 nas rgyal po dang kor pho shig mo shig gso na 'dre gyis gnod pas / srid phyva ni /

Page 23

001 \$\$ // chu mig 'ong sar smon btsan dang klu don sa bdag gi gnod pas [-u?]  
 002 byad grol byabs khros zhu / dgra phyva ni / dgra med cing mgon skyabs shin tu bzang [-u?]  
 003 tshong phyva ni / khe che zhing gtam ngan kha smas cung zad gcig 'ong bar gda' /  
 004 dge slong bzhi bzlog rgyab / lam phyva ni / rta nor gos kha ngo cung zad gcig 'ong  
 005 bar mthong ngo / god kha rgyal mdos dang gos srid mnan / shar phyogs su

Page 24

001 btsal na rnyed ngo che // sho mig [bcu gnyis pa babs na / lar me 'di [shen?] [du?]  
 002 ngan [flower mark?] sprel 'ug shing rtser nas lung ba 'am / stas ngan mthong ngam myur  
 003 du byung / khas len byed kyang lha ma dga' / nam phug lha ma dga' bli  
 004 rkyen gyis shi chad stong ngo / rim gror dka' rgyur dang bla ma dkaug gsol ba  
 005 'debs / khyim phyva ni / ngan pas / khang khyim nang srog / lam phrangs gas

Page 25

001    \$\$ // zam pa 'dzugs / nor phyva ni / gang tor byung / nor  
 002    rgyun ma'i gzungs / nor bu bzang po'i gzungs / dzambha la'i gzungs / gnod  
 003    sbyin rta rgyad gzungs gang 'dra ton / nad phyva ni / sprelo dang bya lo gnyis la ngan /  
 004    nad kha 'di sha dmar zas gyi len / rkyen 'di grib zas dug gi rigs zos pa reg  
 005    pa'i [flower mark?] pa'i mgo dang ro stod na ba kha nas khrag byung ba num phyin na ba rlung gi  
 nad byung ba'i

#### Page 26

001    ngo [flower mark?] srog phyva ni / nad pa yin na shin tu nyen pa'i / ltong gnag [mig] gsuM  
 002    'phangs / thse dbang brgya rtza zhu / klu gtor dang chab gtor btang / dgra  
 003    phyva ni / blo gtad pa la blo phug ma sid snying rku ba'i dgra ldang che ngo / dgra  
 004    srid mnan / tshong phyva ni / gud pa rgya mtsho [lbu l wu] ba dang ba'o / lam phyva ni / lam  
 005    shul ngan pas / rta 'chi sga chags pa 'byung ngo / slar yang log na ngo che //

#### Page 27

001    \$\$ // sho mig bcu gsum pa la babs na / lar mo bzang bar  
 002    che [flower mark?] dpaldan lha mo'i lte ba la / lha rnam kun gyi dzong bcas bsgrub / chos pa yin  
 003    na bka' bsrung bzang ngo che / dge sbyor 'phel bar dga' / khyim phyva ni / bsod  
 004    nams kyi ljon par nor rdzas lo 'dab rgyas shing rigs brgyud mi tog bkra bar shar  
 005    lhaM mgon tshogs + bskor + brgya chen po phul / grogs phyva ni / ha cang rngams mi che yang  
 grogs

#### Page 28

001    ma 'ong [ba dag l bdag] 'ong / nor phyva ni / zas nor 'phel bas bzang / g.yang 'gug[s]  
 002    bcas bsgrub na bzang / don phyva ni / don rnam bsgrub pa 'dod dgu'i dbang du bas  
 003    bzang ngo / khyim phyva ni / bde skyid kyi nyi ma dgung la shar / bkra shis [lhu] [rgyis]  
 004    grub pa zhes bzang ngo / grogs phyva ni / rgya mtsho gting nas nor bu lon pa dang 'dra  
 005    nor phyva ni / sa gzhi nor dang mi yis khengs / thig pas sags + na + rgya mtsho khyil /

#### Page 29

001    \$\$ // khyad par 'bru dang gser dngul 'phel / rta nor gri gzung  
 002    thon [flower mark?] nad phyva ni / ljon shing brlon dang 'phrad pa lo 'dab rgyas pa 'dra / srog  
 003    phyva ni / tshe buM la dpal gyi nyi ma zla mdzes shin tu bzang ngo / ton phyva ni / mkhris  
 004    pa [bad l bda] kan tshad rim 'ong / byang shar phyogs nas rgyal po dang pha ma gyis bstan  
 005    pa'i btsan gyis gnod pas / srid phyva ni / byad kha cung + zad + yod pas / brgya bzhi [rgyal]

## 【Lcang sngan kha lha khang】

### Page 1

- 001 \$ / / sras nyi ma'i gdan sa lcang sgang kha gnas  
002 po'i gdom thsang gi mo bzhugs so // //

### Page 2

- 001 \$\$ / / 'brug sgom bzhi po'i zhabs la phyag 'tshal  
002 lo // be ros mdzod pa'i sho mo gsal ba'i me long bzhugs so //  
003 \$ / gsum byung na / srog cha dgra cha don cha lam cha srid cha  
004 kun la bzang / chug stor na brnyed / nad pa yin na nad

### Page 3

- 001 \$\$ / / gzhi chung bas bzang / gdon pho shi dang rgyal po  
002 bdud btsan byang nas gnod / \$ / bzhi byung na / srog cha dgra cha don cha  
003 lam cha srid cha kun la ngan / rgyal po'i mdo lnga dang rgal mtshan rtse mo sgrogs  
004 rkang 'gro stor na mi rnyed / nad pa yin na nad gzhi che gdon mo shi dang  
005 klu bdud gnod chos skyong la bshags pa phul na phan tsam mo / sri zlog  
006 gtong / phyva khug rgyab // \$ // lnga byung na / srog cha dgra cha don cha

### Page 4

- 001 lam cha sri cha kun la bzang / na tsha dang shi chad med pas bsam pa grub  
002 pas bzang / nad pa yin na mi gtsang yin pas khrus dang sngags chu gtong //  
003 gdon klu dang bdud gson 'dre gnod do // \$ // drug byung na / srog  
004 cha dgra cha lam cha sri cha kun la ngan / 'on kyang [dam | dma] / rkyab na bzang//  
005 rkang 'gro stor na mi rnyed / nad pa yin na gdon klu btsan gnod / rims  
006 nad dang zer nad yong bas zab / bsam lhun dang cho bsgrub sgrogs na ^e

### Page 5

- 001 \$\$ / / phan tsam mo // \$ / bdun byung na / srog cha dgra  
002 don cha lam cha sri cha kun la dge // 'on kyang dgra lha mchod tshong la 'gro na  
003 tshong rgyal lo / nad pa yin na shar nas rgyal po dang klu mo shi dkor bcas gnod /  
004 dkor mdos gtong / zer nas yin pas / bcas thabs bya'o // \$ /  
005 brgyad byung na / srog cha dgra cha don cha lam cha sri cha kun la bzang / 'on  
006 kyang chos pa yin na bskang gso bya / mi nag pa yin na pho lha mchod //

Page 6

001 bsam don grub / nad pa yin na pho shi gnod / snying mi dga' ba 'ong //  
002 g.yang 'gugs bya'o // \$ // dgu byung na / srog cha dgra cha don cha lam cha  
003 sri cha kun la bzang / phyugs stor mi gcig gis gtom snyan thos myed 'ong /  
004 nad pa yin na cong nad [gam l gma] klu zer gyis na bar 'dug / chos skyong la bshags  
005 pa phur / mdon po rmying pa'i sho rgyal yin no // \$ // bcu thams  
006 byung na / srog cha dgra cha don cha lam cha sri cha kun la ngan / cho khug slar bslu

Page 7

001 \$\$ // bya / dgra cha dmar ngo khrag ngo yong / don cha [bsam l baM sam] don mi  
002 bsgrub / lam cha dgra dang 'phrad / sri cha bu tsha mi gsos / nad pa yin na dgra'i  
003 'og 'chi ba'i pho shi dang dkor rgyal pos gnod / tshe khug gang drag dang tshe lha  
004 gdugs dkar bsgrub na phen tsam mo // \$ // bcu gcig byung na / srog cha  
005 don cha dgra cha lam cha sri cha kun la bzang / rta dang nyo tsho rnams bzang / ci  
006 lab rang rgyal / nad pa yin na byas kha gnod / rgyal mdos bya / lam cha grogs

Page 8

001 dang bzang po 'phrad / sri cha bu tsha rgyun mi chad kun la bzang / gnas pa'i sho  
002 rgyal yin no // \$ // [bcuis] byung na / srog cha dgra cha don cha lam cha +sri cha+ kun la ngan //  
003 bye la 'gro na / bar chad 'ong / tshong la 'gro na brlag stor byung / bka'  
004 'gyur dang 'bum gang rung klog dgos / nad pa yin na tshubs cha che cho chog  
005 slar bslu dang sri bzlog gang drag bya'o // \$ // bcu gsum byung na //  
006 srog cha dgra cha don cha lam cha sri cha kun la bzang / phyi nas nor rnyed bas<m>

Page 9

001 \$\$ // dgu bsgrub / nad pa yin na mi gtsang tshud 'dug sngags  
002 chu gtong pho lha chod do // \$ // bcu bzhi byung na / srog cha dgra cha don cha lam  
003 cha sri cha kun la gang yang 'bring / don cha bsam + don + mi grub / stor ba mi rnyed sgrol  
004 ma 'bum bton / nad pa yin na gdon bca' chas dang lho nas rgyal po dang mnyaM  
005 gson 'dre pho shi gnod / de'i cos thabs bya'o // \$ // bco lnga byung na //  
006 srog cha dgra cha don cha lam cha sri cha kun la bzang / kha [mcu l mchu] rtsod na pha rol  
pham //

Page 10

001 don cha 'phral phug gnyis kar grub / nad pa la klu btsan mo sh[i] gnod [pha]m[s]



002 thabs myur du bya bzang ngo // \$ / bcu drug byung na / srog cha dgra cha don cha lam  
 003 cha sri cha kun la ngan / dmag byed na bzang / nad pa la rgyal pos byad kha dang  
 004 dkor bcas gnod rgyal mdos gtong / chos gzungs bsdu klog / sher rnying  
 005 bdud bzlog bya'o // \$ // bcu bdun byung na / srog cha dgra cha don cha lam cha  
 006 sri cha kun la gang yang bzang / gang du phyin kyang bsam don grub snyan grags 'ong //

Page 11

001 \$\$ // nad pa la klu bdud mo shi bcas gnod / zhags pa dgu grol bya /  
 002 zer nad gnod pa 'ong 'dzam bzhi bzlog bya'o // \$ / bco brgyad byung na / srog  
 003 cha dgra cha don cha lam cha sri cha kun la ngan / 'bum sde lnga klog brgya bzhi gtong  
 004 gtugs dkar dang seng gtong ma'i bzlog bsgyur sri bzlog bya / nad pa la khon sgrib  
 005 tshud 'dug mkha' 'gro'i grib bsal bya / gdon shar nas rgyal po dang pho shi gnod /  
 006 'tshubs cha che tsam / rim gror myur du bya dgos so // sho mo gsal ba'i me long

Page 12

001 rdzogs so // // bkra shis bde legs zhugs // //

## 【Sri mo dro kha rdzong】

mgon [p]o'i sho mo [gsal ba'i me long bzhugs so //]

### Page 1

001    \$\$ / na mo gu ru / dkon mchog gsuM la phyag 'tshal lo // slob dbon be ro tsa na rgya gar nas  
002    bod la byon pa'i dus su / mu stegs nag bo dang gcan phrang pa rnams kyis bar chad brtsams par  
003    bsam pas / slob dpon gyis sho mo drug gsum ma 'di btab pas mngon shes su byung bas bod la  
004    byon pa'i dus su yang sho mo 'di mdzad pas rgya gar du byung ba bzhin gsal bas / dus da lta'i bar  
du  
005    yang gsal bar the tshom med par lo tsa' bas gsungs so // de nas mo bya ba'i [tshe tshe / tsho tsho]  
long gsuM

### Page 2

001    la [sngags / sdags] 'di nyi shu rtsa gcig bzlas la btab bo // ^oM tsa sha de wa h'uM h'i tha' : bla  
ma dang dkon mchog  
002    gsuM yi dam lha tshogs dpa' bo mkha' 'gro [dma / dam] pa chos skyong ba'i srung ma yul lha  
gzhi bdag rnams  
003    kyis bdag dang yon bdag gis zhu ba'i mo 'di bzang na bzang gsum dang ngan na ngan gsum ston  
004    cig / bzang na 'dres na 'chad mi shes / char chu 'dres par ston ces dmod pa btsugs nas btab bo //  
005    / gsum byung na khyim phyva srog phyva grogs phyva spyir la bzang ngo // byes su 'gro na rang  
dga'

### Page 3

001    ba dang 'phrad pas bzang ngo // / bzhi byung na don mi 'grub nad pa 'byung nad che / stor ba  
002    mi rnyed / yong ngam mi yong gdon phyva ma mos rgyab byas sa bdag dang 'dre'us gdong nas  
gnod /  
003    ma mo mdos bya / sa bdag mo ngan // lnga byung na khyim phyva srog phyva bzang / byes su  
'gro na dgra  
004    dang / phrad / stor brlag phran re 'ong // drug byung na khyim phyva srog phyva bzang / gzhan ci  
la  
005    btab kyang ngan no // dmag 'dren pa dang / ri dvags shor ba sogs ngan thabs bzang /

### Page 4

001    / bdun byung na ci la btab kyang 'bring / nad pa la bskangs gso dang klog 'don byas na bzang /

- 002 byes su 'gro na grogs dang 'phrad // brgyad byung na khyim phyva srog phyva dgra phyva sogs  
lha dang
- 003 srung mas ngon skyabs byas pas bzang / lhag par lho phyogs su 'gro na bzang ngo // dgu byung
- 004 na khyim phyva srog phyva srid phyva ci la btab kyang bzang / don 'grub stor ba myed / grogs  
phyva laM
- 005 ring po nas khyir ba'i ngo yin pas / 'ong mi 'ong myur du 'ong ba'i ngo yin pas bzang rab bo //

Page 5

- 001 / bcu tham byung na khyim phyva srog phyva spyi la ngano // byes su 'gro na btson du bzung  
ba'o //
- 002 dgra dang khrag ngo 'ong ba sa zon bya'o // bcu gcig byung na skyes pa dar ma la bzang / bud  
med
- 003 la srid myur du 'ong / khyim cha srid cha shintu bzang / god kha phran tsaM 'ong bas mchod  
phan thog che bas
- 004 bzang ngo // bcu gnyis byung na khyim phyva srog phyva dgra phyva kun la ngan / byes su 'gro  
na rta shi ba dang
- 005 sga chag par 'ong bas don mi 'grub / ci la btab kyang ngan no // bcu gsum byung na lha gsol

Page 6

- 001 chen po byas / nad pa la yin na phyir nas 'grul phyir 'dre 'ong / gzhan la khyim phyva srog phyva  
spyir la
- 002 bzang ngo // bcu bzhi byung na spyir gang la btab kyang phyi thar che / gdon du ma mo the'u  
rang
- 003 rgyal pos gnod / ngar mi gnyis byas la mchod / gdan 'og tu gnon par bya'o // bco lnga byung na
- 004 khyim phyva srog phyva kun la bzango // byes su 'gro na grogs dang phrad pa'i ngo // bcu drug  
byung na
- 005 dmag drang ba bzang / gzhan ci la btab kyang ngan no lags // bcu bdun byung na

Page 7

- 001 khyim phyva srog phyva sogs kun la ngan / khyad par nad pa'i mo la nad gzhi che bas ngan no // /  
bco brgyad byung na
- 002 ci la btab kyang nang la lhag par nad pa'i mo la ngan no //
- 003 [srba?] mngag laM // dge'o // bkris shog /

Page 1

001    \$\$ // sho yig kun gsal me long zhes bya ba be ro tsa nas mdzad pa bzhugs so / /

Page 2

001    \$\$ // na mo gu ru / dkon mchog gsum la phyag ‘tshal lo // slob dpon be ro tsa

002    na rgya gar nas bod la byon pa’i dus su / mu stegs nag po dang gcan phrang pa rnams kyis

003    bar chad brtsams pa las / slob dpon gyis sho mo drug gsum ma ‘di btab pas mngon shes

004    su byung bas / bod la byon nas kyang sho mo ‘di mdzad pas rgya gar na gyung ba bzhin gsal bas /

Page 3

001    \$\$ // dus da lta’i bar yang gsal bar the tshom med par lo tsa bas gsungs so //

002    de nas mo bya ba’i tshe che long med par sngags ‘di ci nus bzlas la btab bo // ^oM tsa sha de ba  
h’uM /

003    bla ma dang dkon mchog gsum yid dam lha tshogs dpa’ bo mkha’ ‘gro dam pa chos skyong pa’i

004    bsrung ma yul lha gzhi bdag rnams kyis bdag dang yon bdag gis zhu ba’i mo ‘di bzang na

Page 4

001    bzang gsum ngan na ngan gsum ston cig / bzang ngan ‘dres na ‘chad mi shes / char chu ‘dres par  
ston ces smon

002    pa ntsugs nas btab bo // <mark> sho mig gsum byung na / khyim cha srog cha grogs cha spyi la  
bzang / byes la ‘gro na

003    rang ‘dra ba dang phrad pas bzang ngo // <mark> bzhi byung na / don mi ‘grub / nad pa la nad  
gzhi che / stor ba mi

004    rnyed / yong ngam mi yong gdon cha ma mos rgyab byas sa bdag dri’u gdong nas gnod / ma mo’i  
mdos bya / mo ngano //

005    <mark> lnga byung na / khyim cha srog cha bzang / byes la ‘gro na dgra dang phrad / stor brlag  
phran re yang ‘ong // <mark> drug byung

006    na / khyim cha srog cha bzang / gzhan ci la btab kyang ngan no // dmag ‘dren pa dang ri dvags  
shor ba sogs ngan thabs

---

<sup>470</sup> Dbang ‘dus pho brang rdzongには、2つの骰子占ト書が存在する。1つは3階に保存されるシャブドゥンに由来する占ト書（text 1）であり、もう一方は4階にあるマハーカラ由来の占ト書である(text 2）。残念ながらDbang ‘dus pho brang rdzongは2012年に全焼してしまい、おそらくこれらの写本も焼失しているだろう。

Page 5

- 001    \$\$ // bzang ngo // <mark> bdun byung na / ci la btab kyang 'bring / nad pa la bskangs gso dang  
klog 'don byas
- 002    na bzang / byes su 'gro na grogs dang phrad // <mark> brgyad byung na / khyim cha srog cha  
dgra cha sogs lha dang bsrung mas
- 003    mgon skyabs byas pas bzang / lhag par lho phyogs su 'gro na bzang ngo // <mark> dgu byung  
na / khyim cha srog cha
- 004    dgra cha sri cha ci la btab kyang bzang / don 'grub / stor ba rnyed / grogs cha lam ring por khyer  
ba'i ngo yin / 'ong
- 005    mi 'ong myur du 'ong ba'i ngo yin pas bzang rab bo // <mark> bcu thams byung na / dpal ldan  
bla ma'i sho skal yin pas
- 006    bzang ba yin no // <mark> bcu gcig byung na / skyes pa dar ma la bzang / bud med la sri myur  
du 'ong / khyim cha

Page 6

- 001    srog cha shin tu bzang / god kha phran tsam 'ong yang chos kyis phan thogs che bas bzang ngo //  
<mark> bcu gnyis
- 002    byung na / khyim cha srog cha dgra cha kun la ngan / byes su 'gro na rta shi ba dang sga chag pa  
'ong bas don mi 'grub
- 003    pas ci la btab kyang ngan no // <mark> bcu gsum byung na / lha gsol chen po byas / nad pa yin  
na phyis nas 'grul
- 004    phyir 'dre 'ong / gzhan khyim cha srog cha spyi la bzang ngo // <mark> bcu bzhi byung na /  
spyir gang la btab kyang phyi
- 005    thal che / gdon du ma mo the'u rang rgyal pos gnod / ngar mi gnyis byas la mchod rten gyi 'og tu  
mnan par byung
- 006    ngo // <mark> bco lnga byung na / khyim cha srog cha spyi la bzang ngo // byes su 'gro na  
grogs dang phrad do // <mark> bcu drug

Page 7

- 001    \$\$ // byung na dmag drang ba bzang ngo // gzhan ci la btab kyang ngan no // <mark> bcu bdun  
byung na /
- 002    khyim cha srog cha sogs kun la ngan / khyad par nad pa'i mo la nad gzhi che bas ngan no //  
<mark> bco brgyad
- 003    byung na / ci la btab kyang ngan / lhag par nad pa'i mo la ngan no // // sarba mangag laM /  
dge'o //

## 【Dbang ‘due pho brang rdzong】 text 2

Page 1

\$\$\$ // dpal ye shes kyi ngon po'i sho mo bzhugs so // //

Page 2

001    \$\$ // dus gsum rgyal ba'i mthu stobs gnam lcags me // s[h]ing [rni]'i shugs kyis bdud dang bdud phyogs la /

002    sman ljongs 'gro la dge legs kun stsol shig / lhar bcas 'gro ba'i skyabs ngon mthu chen chos [kyi] rgyal po dag dbang nam par rgyal ba'i gdan sa 'brug khams gsuM

003    dbang 'dus chos kyi pho brang d[b]us las rbam par rgyal ba'i ngon khang chen po'i nang gi dam can dkar mchog rnams kyi dngos shes gsal ba'i me lo gyi don chad pa la //

004    ^oM gsum byung na'ang dgra cha srog cha khyim cha grogs cha bzang yongs mo cig la btab kyang bzango // grogs cha la grogs yod stor ba rnyed / nad pa ltas na nas

005    nad gzhi chulte / ci la btab kyang bzang ngo // ^a [mark] gzhir byung na'ang / bsam don mi sgrub [stor] ba mang sked / dgra phyogs la 'gro nang[=na'ang?] bzang ngo / nad pa yin

006    na / stor ba mi rnyed nad gzhi che / klu bdud dang dri mo gnod pa'i mo 'di 'bring tsam lags // h'uM // lnga byung nang[=na'ang] la // dgra cha srog cha gdon cha kun la bzang ngo //

007    [bye]s su 'gro na dgra cha khyim cha gang yang bzang ngo / stor ba sked de mthun 'phren yong gzhan rnams la btab kyang bzang ngo / ba' [mark] drug byung nang[=na'ang?] srog cha khyim

Page 3

001    \$\$ // cha gdon cha ngan / dmag las bzang / stor brlag ci la btab kyang ngan / zla ba nag po babs te ngan no // dz[ra] [mark] bdun byung nang[=na'ang?] / srog cha don cha

002    khyim cha kun la dges / tshongs byes nang[=na'ang?] bzang ngo / nad pa yin na bla lug bya / 'dre shar phyogs nas rgyal po dang klu dri mo gnod / byes su 'gro nang[=na'ang?] grogs yod

003    grogs la grogs yod pa'i bzang ngo // gu [mark] brgyad byung nang[=na'ang?] / dgra cha don cha khyim cha kun la bzang / don gang bsam pa 'grub / nyes pa mi yong / lha mgo bas

004    sngags pa yin nang[=na'ang?] bskang srong bya / mi kyang yin na pho lha mchod / nad pa yin dpe dkar gnod / lhabs bsangs dang g.yang khu bya / dpal skyed nyi ma shar [bas]

005    shintur bzang ngo // ru [mark] dgu byung nang[=na'ang] khyim cha srog don cha kun la bzang ngo / stor ba mi sked / bsam don thams cad bsgrub / dgra las thams cad [pa / ?]

006 'babs pa'i bzang ngo / mgron po lam ring nas nor skyal mi [long l 'ong] / bsam don cig btab  
 kyang ye rnams thos bu dang 'dra ba'i shintu bzang ngo // padma [mark] bcu thaMs  
 007 byung nang[=na'ang?] / srog cha khyim cha grogs cha ngan / byed su 'gro nang[=na'ang] dmar  
 ngo dang btsan ngo yong ngo / gud byam khyim mu sting la babs ste / nor la god kha yong / /

Page 4

001 mi la kha smras gling [bzhing l ba ning] yong / tshe 'gu g.yangs lor bya / mo 'di shintu ngan // si  
 [mark] bcuig byung nang[=na'ang] / skyes pa dar ma'i sa ras lha mgo bas bzang /  
 002 rang kyang bsam don 'grub / nor la gos kha mi yong / grogs cha la grogs yod / dur sa khang sa  
 kun la bzang / bud med bu skeg la nor nyo tshongs byas  
 003 nang[=na'ang?] bzang nad pa yin na klu dang btsan gyi gnod nga glud bya'o / klu btsan gsol ba'i  
 sho mo shin tu bzang ngo // dhi [mark] bcuis byung nang[=na'ang?] srog cha don cha khyim  
 004 cha kun la ngan / dmag 'gro na mi dang rta 'chi ngo dang / tshongs la byas na nad ngo dang dgra  
 rkun ngo / nad pa nad tshub che rim 'gro myur du bya / mi glud dang chi glud  
 005 btang / lha gsol bya srog blug tshe chog bya / mo 'di ngan no / rim 'gro bya'o // h'uM [mark] bcu  
 gsum byung nang[=na'ang?] / khyim cha srog cha kun la bzang / phyi rol nas  
 006 nor chen po rnyed de'i phyir 'dre yong / phyi ru pho glud btang / / khang sa zhing sa grogs cha  
 bzang / bcu gsum rdo rje 'dzin pa'i sa thob shog / mo 'di btab  
 007 pa'i shintu bzang ngo // ^oM [mark] bcu bzhi byung nang[=na'ang] / don mi 'grub phyi thal che /  
 nad pa yin nang[=na'ang?] nad lho nas rgyal po dang theg rang shing 'dre gnod /

Page 5

001 \$\$ // nges sul dang mchod rten la chags pa'i 'dres gnod // khyim cha srog <interline/> cha </  
 interline> grogs cha khang sa ci la btab kyang shintu ngan no // h'uM [mark] bco lnga  
 002 byung nang[=na'ang?] / khyim cha srog cha grogs cha dgra cha kun la bzang / 'od kyi nyi ma la  
 babs te shintu gnas te bzang ngo // troM [mark] bcu drug byung nang[=na'ang?] / /  
 003 dmag 'gro ba dang ngan / [byed] thams cad byas nang[=na'ang?] bzang / gzhan rnams ci la btab  
 kyang ngan / nad pa la dpe dkar gnod / /  
 004 mchog gzung 'dus pa klog / gzhan la ngan no // hr'i [mark] bcu bdun byung nang[=na'ang?] /  
 khyim cha dgra cha srog cha grogs cha rnams par [y]un sum  
 005 tshogs pa'i bzang so // ^a' [mark] bco brgyad byung nang[=na'ang] / nad pa yin chags mgo che /  
 khyim cha srog cha dgra cha gang la yang ngan no / /



006 klu bsangs thor / lha gsol / khrus sol bya'o / dge slong bzhin sdo bya'o / de ltar byas na bde legs  
thams cad 'byung ba'i bzango //

007 da len dpal ldan 'brug pa'i gdan sa rin po che'i 'brug dbang dud 'phrong chen pa'i nang[=na'ang]  
gnas pa'i dgon khang chen po lags //

Page 6

001 dkar brgyud bla ma rnams dang yid dam 'khor lo sdom pa [mark] chos skyong ye se dgon po /  
bstan bsrung bya rog gdong can // dpal

002 ldan dud gsol lha mo / nor lha bka' bsrung sde brgyad rnams dang // gnas chen rva brag sgang  
'jug la sogs pa //

003 mi nor 'khor dang bcas pa rnams kyis rkyen cha dog cha bzang ngan 'bring gsum la gang la gang  
'dul gyi shor mo zhu ba'i cha [dang?]

004 dge'o // dge'o // dge legs su gyur cig //